

新・水滸伝「一」（吉川英治）

一 序曲、百八の星、人間界に宿命すること

頃は、今から九百年前。——中華の黄土大陸は大宋国とい
つて、首都を河南省の開封東京にさだめ、宋朝歴代の王業は、
四代の仁宗皇帝につがれていた。

その嘉祐三年の三月三日のことである。

天子は、紫宸殿に出御して、この日、公卿百官の朝賀を嘉
せられた。そしてはや、楽府の仙楽と満庭の万歳のうちに式
を終つて、今しも袞龍錦衣のお人影が、侍座の玉簪や、侍
従の花冠と共に珠の椅子をお立ちあらんと見えたときであ
つた。

「あ、陛下。しばしのほど」

列を離れて出た宰相の趙哲、参議の文彦博のふたりが、
帝座に伏して奏上した。

「お願いにござりまする。——いにしえから、今日の上巳ノ
祝節（節句）には、桃花の流れにみそぎして、官民のわかちな
く、和楽を共に、大いに愉しみ遊ぶ日とされております。ね
がわくば、この佳き日にあたって、下々へも、ご仁政の実を
おしめしたまわらば、宋朝の栄えは、万代だろうとおもわれ
ますが」

仁宗皇帝は、ふと、ふしんなお顔をされた。

「なに。こんなよい日和なのに、人民は、何も愉しめずにい
るといふのか」

「さればで——」と、兩名はさらに九拝して。「ここ数年、五穀
のみのりも思わしくありません。加うるに、この春は、天下
に悪疫が流行し、江南江北も、東西二京も、病臭に埋まっ
ております。家々は飢えにみち、病屍は道に捨てられてかえ
りみられず、夜は群盗のおののきに明かすという有様でござ
いますから」

「ふうん。そんなにひどいのか」

「そこで、検非違使の包待制のごときは、施薬院の医吏をは
げまし、また、自分の俸給まで投げだして、必死な救済にあ
たつておりますが、いかんせん、疫癘の猖獗にはかてません。
このぶんでは、地上の人間の半分は、死ぬだろうと恐れられ
ております」

「それは、ゆゆしい事ではないか。さつそく、天下の諸寺院
に令して大祈祷をさせねばならん」

国土の患いでも、一身の乱れでも、なにか大事にたちいたる
と、すぐ、加持祈祷へ頼むところは、わが朝の藤原時代の権
門とも、まったく同じ風習だった。いや、それが文明社会に
近づきつつまだ文明にほど遠かった当時の人智だったとい
うしかない。

江西への旅は遥かだった。しかし、旅にはよい仲、春の季
節でもある。禁門の大將軍洪信は、おびただしい部下の車騎
をしたがえて、都門東京を立ち、日をかさねて、江西信州の
県城へ行きついた。

「勅使のおくだりだぞ。粗略あるな」

と、州の長官以下、大小の諸役人から土軍はもちろん、土地

の男女僧俗まで、みな道に堵列して、洪大将を出迎えた。

その夜のさかんな饗宴はいうまでもなかった。地方の吏が中央の大賓に媚びることは、今も昔もかわりがない。わけて、丹紙の詔書を奉じて来た勅使であるから、県をあげて、庁の役人は、そのもてなしに心をくだいた。

が、洪信は、さすが軍人である。豪放で、らいらくだ。かつ、朝廷の賜餐には馴れ、街の銀盤玉杯にも飽いているから、どんな歓待とて、彼の舌や眼を驚かすには足らない。

「まあ、まあ。杯は下におけ。そう酒ばかりすすめんでもよい。このたびの下向は儂にとつても、重大な勅の勤め。さきに飛脚しておいた下し令状も見たであろうが」

「しかと、拝見しております」と、州の長官は、急に、畏みを見せて、——「聖旨のおもむきは、さつそく、この地の奥、龍虎山上清宮につたえおきましたから、万端をととのえご参籠をお待ち申しあげておるはずで」

「そうか。では今夜は、不浄をつつしみ、明朝は沐浴して、上清宮へ登って行くでしょう。貴様たちも、はやく退がれ」
つぎの日、洪は暁天に旅館を立ち、州門から八十支里（六町一里）もある西南の大岳を望んで行った。案内の州役人らの次に、彼は山輿にゆられ、部下百騎は勅使旗をささげていた。

龍虎山一帯は、古来、全国の信仰をあつめてきた道教の大本山だ。

唐代このかた、歴朝の帰依ふかく、その勅額は、朱の楼閣にも仰がれる。溪谷の空には、苔さびた石橋が望まれ、山

また山の重なる奥までも、十三層塔が霞んで見えた。また、道士たちの住む墻院、仙館は、峰谷々にわたり、松柏をつづる黄や白い花は猿や鶴の遊ぶ苑といつてもよいであろうか。

ところで、この仙境は、その日とつぜん、眼をさましたように、一山の鐘台から鐘の音をゆり起した。木々は香露をふりこぼし、園の仙鶴は羽バタき、全山の禽獣も、一せいに驚き啼いた。——見れば、三清宮から大石橋へかけて、院主の大師以下、道士、稚児、力士（侍）などの群列が、彩霞のごとく、香を煙らし、金鈴や小鼓を鳴らしながら今し勅使の洪將軍を仙院へ迎える礼をとっているものだった。

「大儀である」

洪は、大きく目礼をほどこしながら、仙館へ入った。
えならぬ仙味の献茶一ぶくを、すずやかに服み終ると、彼はただちに、勅の主旨を、院主につたえた。

「——過ぐる日の上巳の祝節。わが仁宗皇帝におかれては、打ちつづく世の悪疫を聞こしめされ、いたく宸襟をなやませ給うた。そこで即日、大赦の令を発せられ、施薬や施粥の小屋を辻々におき、なおまた、かくは、臣洪信を遠くにおつかわしあつて、当山の虚靖天師に、病魔調伏の祈りを、おん頼みあつた次第である。その儀は、すでに心得おろうがな」
「うけたまわっております」

「勅願の詔書は、すなわち、これなる錦のふくろに入れ、臣洪信の胸にかけて奉じてまいった。——さつそく、龍虎山の大仙、虚靖天師にお会いして、おわたし申しあげねばならんが、天師はいずこにおらるるか」

「大仙は、ここにはおいでございませぬ。こここの俗塵すら嫌

って、これよりさらに山ふかく、龍虎山のいただきも尽きる
ところに、一字の草院を結び、つねに仙道ご修行のほか、他
念もなくおわせられます」

「では、そこまで登らねば、天師にお会いできぬのか」

「それも、お使者ご一名のみ。……齋戒沐浴をとげた上なら
では」

「はて、不便なことだなあ。勅命なのに」

「いかに、ご勅使たりと、靈山の法規はまげられませぬ。ま
こと、仁宗皇帝が、万民の苦患を救わんため、万民に代って、
大仙のご祈禱をおたのみまいらすなれば、ご代参の殿が、そ
れしきの精進をつとめるなどは、何ほどのことでもあります
まい」

「いな、たれが億劫だといった。ただ不便と感じただけの
こと。よしよし、あす一日潔斎して、われ一人、天師の仙家
へまかるであろう」

彼の意気たるや旺であった。その朝は、星の下に、水垢離
をとり、白木綿の浄衣を着て、黄布のつつみを背中へ斜にか
けて結んだ。内に宸筆の勅願をおさめたのだ。そして、銀の
柄香炉を片手に、折々、香を焚いては、「六根清浄」を口に
となえ、身に寸鉄を帯びるでもなく、白木の山杖一ツを力に、
あまたの道士に見送られて、上清宮を出立した。

——が、禁門軍の雄、洪大将ほどな男も、そこから奥の山
ではまったくへばつた。第一夜は、樹海の底の谷川を枕とし
て寝ね、第二夜は、斧の刃のような天空の峰で身を横たえた。
しかも、ゆくての千峰は、まだまだ険しい。

やがて、降ればまた深い溪音水声、昼か夜かも、わからな

くなっていた。猿になぶられ、狼に踵を嗅がれ、ただ鶯かす
らの中の道標を捜しては、それをたよって行くしかない。や
っと、太古の森林を出たと思うと、あ——と仰がれる絶壁だ
し、めぐれば、瀑布のしぶきに吹きとばされ、攀じれば、磊々
の奇岩巨石に覗き下ろされる。

それのみか、彼は、牝雄二足の大きな虎に出会って、あや
うく、虎の餌食にされかけたり、この世にはありえぬような
大蛇の鱗光に胆を消したりして、そのつど、無我夢中で逃げ
まろんだ。いつか、杖も柄香炉も、手になかった。生命一つ
を大事に、よろ這い歩くのが、やっとであった。

「……おや、鉄笛の音がする？」

幾日目かの、途中である。

彼は、はじめて、人間の香に吹かれた。

「おじさん、どこへ行くんだね」

童子の方から、声をかけた。

童子は、牛の背へ、横乗りに乗っている。手には、さつき
から聞えていた鉄笛が持たれていた。

「や、小僧、おまえこそ、どこから来た」

「この先の、中院からさ」

「中院」

「おじさんの泊った三清宮が麓院、この峰が中院、もつとも
ツと天上にあるのが奥院だよ。……だけど、おじさん、そん
なに苦労して登って行っても、ムダだらうぜ」

「どうして」

「天師さまは、お留守だもの」

「えっ、いない? ……。そ、そんなはずはあるまいが」

「いないよ。うそじゃないよ。十日も前に、鶴に乗って、都へお出ましになってしまったんだ。なんでも、天下に悪い病が大ばやりなので、皇帝から、道教大本山の老大仙へ、ご加持のお頼みがあったんだとき。きつと、面倒だから、天師さまの方から、鶴に乗って、ちよつくら、開封東京の空へ、飛んで行かれたんだろう」

「はて。どうして、きさまは、そんなことを知っておるのか」

「知ってるさ。こう見えても、人里の草刈り小僧とはわけが違う。老大仙に仕えている侍童だもの」

「さてはそうか。では、そこへ案内してくれい。たのむ、たのむ」

「疑いぶかいなあ。いないっていつてるのに。——ぼやぼやしてると、虎が大蛇の餌食にされちまうぜ。はやくお帰りよ、おじさん」

童子は、憐れむような一笑をくれて、あとも見ずに行つてしまつた。

洪は、半信半疑の思いで、なお行くと、なるほど、ここはまだ龍虎山の七、八合目あたりだったのか、巍然として、古塔の聳えを中心に、一郭の堂廟伽藍が、望まれたした。

足をひきずつて、辿りつくくと、

「洪大将でおわすか」

と、羅漢のごとき道衆と、仙骨そのもののような老真人(道士の師)が、門に出迎え、礼をあつく、いたわってくれた。

それはよいが、彼の蘇生の思いも、すぐ打ち消された。この老真人もいふのであつた。

「まことに、あいにくでしたの。われらも、今知つたのでござりますわ。——山上の虚靖天師がはやお留守ということを」

「そりや、まいったか」

「嘘か、ほんとかよりも、おん大将ご自身、なにか途中で、お気づきになりませんでしたかの」

「牛に乗つた童子に出会つたが」

「やや。それは惜しいことをされましたな」

「え。可惜とは、また何で?」

「その童子こそ、天師のご化身だつたにちがひありません」

「げっ、あれがが」

「お勅使にムダぼね折らせても、おきのどくと思われ、一瞬に、都から翔け来たつて、はや立ち帰れと、おさとしなされたものでしょう」

「ああ……。そうとは、知らなかつた」

「が、まあ。ご安心なさるがよい。そういう示頭のあるからには、おん大将がご帰京ある頃には、もう天師の神妙方にて、かならず、ご勅願はかなえられているに相違ございませぬ」

なぐさめられて、その晩は、霧深い一古殿で昏々と眠つた。

「この上は、ぜひもない、勅願の詔を、上清宮の本殿に納め奉つて、一日もはやく、都へ帰ろう」

臍を決めて、こう告げると、真人は、十人の道衆に命じて、

「お勅使を、元の上清宮まで、お送りしてあげよ」

と、いった。

洪は、十道士にかこまれて、石門を出た。歩むことやや半日。だが、これはどうしたことだ。あんなにも、幾昼夜の難所、虎や毒蛇にも襲われて登つて来たものが、降りとはいえ、

坦々と平地を歩むような愉しさである。そして、またたくまに、宝塔仙館の藁が霞む、以前の三清宮へついてしまった。

あくる日、詔は、上清宮の神扉深きところの、宸翰箱に祠り封ぜられ、式を終って、夜は一山の大饗宴に移った。精進料理ばかりのお山振舞である。——これで、つつがなく下山となれば、まずは無難だったのだが、軍官僚のつねで、酒がはいると、もちまへの肌が出はじめた。何か、このまま下山しては、こけんにかかわる気でもしたのだろうか。いやに威儀ぶっていたが、ふと、まわりの雑談に、小耳をはさみ、

「なに、なに。いま申した魔耶殿とは、いったい、どこの閣か」

「は。お耳にさわりましたか。やはり三清宮の深殿の一でございませう」

「ふうむ。靈域の広さは、なかなか一眸には出来んのだな。またと、かかる山へ参ることもあるまい。ひとつ明朝は、この全堂閣を、遊覧させてもらおうぞ」

「かしこまりました。ぜひ、ご巡拝のほどを」

宮司、真人たちは、あくる日、彼の先導に立った。そして、上清觀の唐代、五代、宋代にわたる名刹の建造物を見せてまわり、さいごに九天殿、紫微殿、北極殿の奥ふかい社廊をすすみ、

「右が、太乙殿、左が、昨夜申した魔耶殿にござります」

と、たたずんだ。

幽寂な陽の翳りも淡い四辺には、どこやら窸する小鳥の声があるだけで、何かぞくと、薄ら寒く肌に刺してくるものがある。

「ははあ、ここはもう、上清觀中の奥処だな」

「さようで。いちばん奥の古刹でござりまする」

「あれなる石壁に、鉄鎖をもって、物々しい錠前をかけてある門が見えるが、あれは何だ？」

「開かずの祠と申しつたえております」

「開かずの門か」と、洪はすかずか歩き出した。なにか、抵抗を感じたらしく見える。仰げば大絶壁。その裾をくりぬいた石窟なのだ。近づいてみると、かたわらの石柱には、伏魔之殿

と、四文字が彫られてある。

「おうつ、宮司。——開けて見せてくれい、この内を」

洪は、伏魔と読み、また、不開の門と聞いて、たちまちその傲上慢を、むらむらと、胸に煽りたてられたらしい。

「め、滅相もない仰せを」

宮司や道衆は、青くなつた。

彼らが、口をそろえていうには、

「——そもそも、ここに祠られて、咒封となつてゐる魔ものは、ことごとく、世界の妖霊どものみで、ござりまする。仔細を申せば、大唐の開山洞玄国師このかた、代々の老祖大仙が、魔ものを捕りおさえては、この石窟へ封じ込めおかれたもので、みだりに開くことはなりません」

「はははは。ばかなことを」

「いやいや、お笑い沙汰ではございませぬ。もし、過ちにせよここを開けば、窟中の魔王は、時をえたりと、人界へ躍りでて、世路のみだれは申すもおろか、人間の智恵、内臓のうちにも潜んで、長く取り返しもつくまいぞ、といわれてお

りまする。……されば、道法九代の間、また私も、住山三十年にもなりますが、かつてただの一度も、ここの鉄錠に手をかけたためしなど、見たことはありません」

「だからこそだ。そう聞けば、なお内部へ入ってみたい」

「そ、それは、余りにも、ご無態と申すもので」

「なにが、無態だ。なんじらの馬鹿げた迷妄を、儂の勇をもつて、醒ましてくるるのがなんで無態か。鍛冶を呼んで、鎖を切らせろ」

「どうか、その儀だけは、おゆるしを」

「ならん。いなやをいうなら、朝廷に奏聞して、魔霊を祠るものと、公にするぞ。なんじら、数珠つなぎとなつて、上饒江の河原に、さらし首を、ならべたいのか」

言い出しては、決して、言をひるがえす洪大将ではない。都城の衛府で、部下をが鳴っている通りな彼になつてはいる。

恐れわなない宮司や道衆は、ぜひなくおろおると、やがて秘門の扉へ、むらがり寄つた。鉄槌から火バナが散り、石斧からは、異様な響きと匂いが立つた。不気味な匂、キ、キ、キ……と腸をしぼるような何かの軋み。——じつと、見ていた洪は、そこが開くやいな、洞然たる暗やみの中へ、まっ先に躍り入つて、

「どうだ、それ見ろ、何事もないではないか。なにが厳秘の門か、なにが咒封か。わははは、みんな入れ」

と、両の手を、天井へ突ツぱり、愉快きわまるものの如くであつた。

——が、余りの暗さだ、歩いてみても何も見えない。彼は、また大声で、奥でどなった。その声は、空洞にひびき、ひと

つ言葉が、二つに聞えた。

「おういっ。松明をとぼせ。一同、松明を持って、儂のあとから進んで来いっ」

窟は、仏体の胎内にでも象つてあるのか、口はせまく、行くほどに広くなり、四壁には、諸仏、菩薩、十二神将などの像が、彫りつけられてある。

「や。あぶない」

洪は、一石碑に、つまずいた。

松明を呼んでよく見ると、ここばかりが円い広場となつてゐる。冥々昏々、幾百年もの間、太陽の寸光も知らない冷土なのだ。それに六尺ほどの板碑が、によつきと建ち、台石となつてゐる石彫りの大亀は、碑を背に載せて、千古、眠りより醒めず、といったふうである。

「こりや読めん。石碑の表に、何やら細々と彫つてあるが、全文、神代文字らしい。なに、裏には、ただの楷書があると。どれどれ」

彼は、赤い火にいぶされながら、なにげなく、碑の裏へ廻つて、顔を寄せた。

四つの大きな文字。それは、
遇洪而開

と、読まれた。

「や。洪二遇ッテ開クだと？ ……。はてな、洪とはおれ、おれに遇つて開くとは」

なに思ったか、彼は、全身に瘤をこさえて、大きく唸つた。そして、碑を仆せ、石亀をのぞいて、その下を掘り起せと、狂気じみた声を発した。

もちろん、人々は極力、その暴を諫めぬいた。哀号泣訴、
「恐ろしや、恐ろしや。そのような、大それた儀は、ど、ど
うぞ、お見あわせ下さいませ」

と、地へ、へばったまま、起ちもしない。

「だまれっ」と、洪は大喝した。「——なにが空恐ろしいのだ。
見ろ、碑の文字を。……洪二遇ッテ開ク、とあるではないか。
すでに古の神仙は、今日、儂がこれへ参るのを、予言いた
しておったのだ。いやだと申す者は、素首をぶった斬るぞ」
剣把をたたくと、人々は、もう顫えあがって、唯々諾々と、
彼の命のままうごくしかなかった。

大勢の力で、碑は仆され、石亀は数百年の眠りから揺り起
された。そして、一転二転、腹を見せた石亀のまろぶ地響き
と同時に、人々の足の裏から、ごうツと、大釜の湯でも沸る
ような音が聞えた。

「わッ、こりや深いっ」

亀を除いたあとに、大穴があいた。穴は深さ万丈、奈落へ
通じるかと思われた。いやいや、伏して覗いてもいられない。
とたんに、地軸の底で、ぐわらぐわら、百雷に似た物音なの
だ。洪大将も、人々も、
「あ——」と、耳をふさいで、のけぞった。そも、なんであ
ろう。すべて一瞬のことである。醒々冷々たる墨のごとき濛気
が、ぶっ仆れた面々の上をかすめた。

無色無臭、濛気は見えない。が、穴の底から、噴き出して
いるのはたしかだ。魔の蹙音、魔の笑い声、魔のどよめき、
そういつても、まちがいではない。ごうごうの地鳴りは鳴り
やまず、一震四壁を裂き、また、山を震ッて、このため、龍

虎山の全峰は吠え、信江上 饒の水は、あふれ捲いて、麓を
呑むかと思われるほどだった。

「……ああ、これはまた、ど、どうしたことだ」

洪は、無我夢中で、石窟の外へ、逃げだしていた。いや、
なにかに匆ねとばされて、魔耶殿の橋廊の下まで抛り出され
たといった方が真実に近い。

とにかく、やや気がついたときでも、なお石窟は揺れ鳴っ
ている。そして一とすじの尾を曳いた黒雲が、中天に昇って
ゆくのを仰いでいると、一閃の赫光が眼を射、とたんに、無
数の妖星と砕け散って、世間の空へ八方飛んでわかれてゆく
のが見えた。

洪は、ただ、啞々啞々と、腑抜けみたいに、手を振って、
よろめき歩いた。一山の騒動はいうまでもない。だが、下手
人が勅使では、罰することもならず、三清宮の院主は、いと
も嘆かわしげに、うつろな洪大将の顔へ、こう言いわたした。
「はやはや、ご下山くださいましょう。ぜひもなし、あとは虚靖
天師のお帰りを待つのみです。したが、あの祠の窟には、三
十六員の天罡星、七十二性の地煞星、あわせて百八の魔が封
じられていたものを、あなたさまはまあ、恐ろしいことをな
されたものでございましたな。物好きにも、護符の禁を破っ
て、人の世の地上へ、百八の魔をばら撒いたからには、行く
末、どんな世態を見ることやら、いまから身も縮む思いがさ
れます。——せめて、以後は生涯、ご信心にでも身をお捧げ
なされませい」

道教では、この宇宙を、魔界と仙界の二元からなるものと観

て、北斗、太極、二十八宿などの星座を崇め、それは人の世の治乱吉凶禍福の運行とも、密接なつながりがあるものとして

いる。だから、天体中の徳星は、これを崇め、邪星妖星は、仙術の咒をもつて、封じこめておく。——古来、龍虎山上清宮の道祖代々が、そうして、せっかく人界平和のために、道行を積んできたのに、ついに今日、百八の魔星を歓呼させて、もとの世間へかえしてしまった。

「これが恐れられずにいられましょうか」

洪大將が、すごすごと下山する日も、院主は、未来を予言して、くり返しくり返し、哀嘆してやまなかつた。

「——百八の悪星とは、つまり熒惑星のことです。この宇宙幾万年、太陽の周りには、億兆の星が、行儀よくめぐつていて、かりそめにもその法則をみだすことはありません。——熒惑星という奴は、例外です。常軌を行かず、申しわけに、太陽のまわりに、隠現明滅しているにすぎない。世間、人界の仕組みも、まったくその通りなのです。——それを、あなたさまには、好んで、もとの無軌道へ追ッ返しておしまいなすつた。なんとまあ、人間の業とは、尽きない宿命のものなのか……。思うてもごらんなされ。五代の戦乱に懲りて、あんなにも、世は平和平和と渴望していたのに、その平和も、宋朝数十年、少し長つづきしてくると、もう平和に飽いてい

ても、もう追いつきませぬ」

それを聞くと、洪もさすが、戦慄を禁じえず、いくたびも耳をふさぎたくなつた。勅使旗を巻いて逃ぐるがごとく帰路につき、やがて、首都開封の汴梁城へもどつて、仁宗帝のおん前に拝伏した。

帝は、彼をねぎらわれていった。

「洪信か。長途、大変であつたらう。しかし、龍虎山の虚靖大仙は、勅をかしこみ、すぐ鶴に乗つて都に見えた。そして、七日七夜の祈禱を行つてくれたため、民間の疫病は、たちまち熄み、都府の市色も明るくなった。げに、天師の功力のあらたかなこと、汝が帰るよりも早かつたぞ。洪よ、安心せい」

思いきや、この御説である。

洪は、ひや汗をかいたが、龍顔の麗しき、嘘とも思えない。もとより山で魔封を破つた過ちなどは、おくびにも復命せず、自邸に退がった後は、ひとり密かに恟々、身を慎んで、余生を終つた。

幸いに、彼が存生中には、たいした事件もなく、世間はよいよ泰平と無事に狎れ、この間に、宋朝の廟も、仁宗から、英宗、神宗、哲宗と御代四たびの世代りを見た。嘉祐三年以来、いつか三十余年を経たことになる。

……………。

——ここに、百八の熒惑星が、封を破つて地上に宿命し、やがてその一星一星が人間と化して、かの梁山泊を形成し、ついに宋朝の天下を危うくするといふ大陸的構想の中国水滸伝は、以上の話を発端として、じつに、この年代から物語られてゆくのである。

それを、日本の史に照らすと、わが朝では、鳥羽、崇徳天皇の下に、不遇な武者どもを代表していた平忠盛や清盛などが、やがての平家時代を招き興そうとしていた時代の晨にあつたっている。

東洋の風土、東洋の文物、東洋の人種、すでに遣唐使このかたは、東洋一環の交流もあつて、いわば一葦帯水の、遠からぬ大陸であつたものの、時運の暗合は、なにか偶然でないものを覚えしめるではないか。

哲宗皇帝の寿 隆五年であつた。

朝 廟のうちには、このところ、不穩なうごきが見えぬでもない。権臣の陰謀だの、皇后を廃して追うなど、咲き熟れた花の腐えが、そろそろ、自然の凋落を急ぐかに思われた。そんな爛熟末期の相は、汴梁東京の満都の子女の風俗にさえ目にあまつていた。

だが、庶民は依然、太平楽だつた。何が醸されていようと、宮廷の内事などは、隣家の夫婦喧嘩ほどな興味でもない。——それよりは、その日、彼らが踵を次いで馳け出して行つた先の方が、よほど大変な事件らしかつた。

「なんだ、なんだ？ 百叩きか」

「そうらしい。答を食つて、所払いにされる悪党が、いま、役人に曳かれて行つた」

街城の門は、人だかりで、まっ黒だつた。

見ると二十五、六歳の遊び人態の男が、刑吏に引きすえられ、一イニウ三イ……と数を読む青竹の下に、ビシビシ撲りつけられている。

「やあ、あれは高毬じゃないか」

「おお、ちげえねえ、高毬だ。かわいそうに、高も、とうとう年貢の納めどきに会いやがったぜ」

まだうら若い追放者だが、彼を知らぬ者はないらしい。

無職である。だが、この東京には、親代々からいた旧商家の息子で、姓を高、名を二郎という道楽者。——親に似て、家産は失つても、糸竹の道に長じ、歌えば美声だし、書道、槍術、棒、騎馬、雑芸、何でも器用だつた。わけて、賭け蹴毬は名人といわれている。

表向き、狭斜の巷で、幫間（たいこもち）めかした業をやつていたが、喧嘩出入りが好きで、一面、男だて肌な風もある。もちろん、悪事の数々もやって来たろう。その積悪がバレた末、ついに今日のお仕置きの破目となつたにちがいない。

——で、さつきから、青竹を振つて、

「八十つ、八十一つ。……九十つ、百ッ」

と、高の背なかへ、一打ちごとに、数を叫んでいた獄卒が、百をさいごに、ほつと身を退きかけると、

「こらっ、待て。まだ百打は打つていないぞ。なぜサバを読むか。さては、なんじら皆、追放人の高から、賄賂をもらつておるな」

と、あたりで黙認している刑吏までを、こう叱咤した人がある。それは、禁軍の兵に、棒術の師範をしている王昇という武士で、立会いのためこれへ臨んでいたものだつた。

収賄は、刑吏のつねで、その方こそ正しい実収入だとして、悪徳とは考えもせぬ彼らだが、こんな人なかで、白昼、面といわれては、いくら彼らでも立つ瀬はない。そこで、いくら

かの抗弁はこころみたものの、相手は、役職も上だし、禁門の王師範とあっては、役人面の権柄も齒が立たなかつた。

「じゃあ、王師範が、よしというまで、叩きましよう。お数えください」

結局、また四十幾つまで、青竹で高の五体を、打ちすえた。「よしつ、追ッ放せ」

王昇がいうと、初めて、高の縄が解かれた。高毬は、よろめき起つた。

街城の門から追われると、四県を所払いされ、再び都の土は踏めない。高は、あちこちミミズ腫れになつた肌を撫でながら、いまいましてに、王昇の姿を振りむいた。

「……覚えてろ。棒使いのでくの棒め。てめえの前身だつて、まんざら知らねえ高さんじゃねえんだぞ」

かくて彼は、身ひとつ、淮西の南市臨淮（安徽省）へ流れてゆき、土地の顔役の柳世権の部屋で、およそ三、四年ほど、ごろついていた。

そのうちに、天下大赦の令があつた。元々、軽罪なので、高毬も恩典に浴したが、そうになると、矢もたてもなく、東京へ帰りたくなつた。が、帰つても、さ

つそくの職はなし、さて、どうしたものか、柳に相談すると、「じゃあ、おれの親戚の董へ手紙を書いてやろう。それを持って帰んなさい」

と、いつてくれた。

四年ぶりで、高は古巣へ舞い戻つた。——さつそく、手紙を持って、城内金梁橋の近くという宛名の人をさがし歩いた。

「ははあ、この店だな、董将士の家は」

構えも立派な薬種問屋である。

主の董に会つて、柳の手紙をしめすと、董は彼の前身も問わず、ふたつ返事で、のみ込んだ。

「そうですかい。四年も臨淮においでなすつては、生れ故郷の王城でもご不案内におんなすつたはむりもない。てまえどもは、商売がら、諸方の官家へもお出入りしておりますから、そのうち、なんぞお勤め口でも心がけましよう。ま、ごゆつくりなすつて下さい」

高は、好意を謝して、半月ほど逗留していた。その間に、彼の多芸や才気煥発な質を見たものか、ある日、董が紹介状を書いて、

「どうです。いつまで、遊んでるのももつたいないでしょう。ひとつ、これを持って、てまえの極くお親しくしている学士さまの所へ行つてみませんか」

「いやありがとう。職につけるものなら、ぜいたくは申しませんよ」

高は、小蘇学士の門をたたいた。

だが、この学究は、ちよつと、眉をひそめた。学者暮らしは楽でない。わけて、話しこんでみると、自分とは肌合ひの違ふ人間でもある。——といつて、義理のある董の依頼では、断りもならず、といつた顔つきで、

「むむ。まあ今夜は、邸へお泊んなさい。そして何だな、明日、わしが紹介して進げるから、王晋卿さまのお館へでも一つ伺つてみるんだな。先ごろ、ご近習の気のきいたのが一人

欲しいようなことを仰っしゃっていったから、御辺の運がよければ、多分、採用になると思うがね」

すこぶる頼りない口吻だが、ともかく、次の日、高はその王晋卿を訪ねてみた。だが、その華麗な館門の前に立つと、さしも横着者の彼も、二の足をふんでしまった。

ここは宮家である。現天子の婿君で「王大将ノ宮」と、世間でいっているのが、すなわち当の晋卿らしい。

「はて、どうしよう。小蘇学士め、ていよく俺を追っ払うため、寄りつけもしないこんな王家へなど、紹介したのかもしれないぞ。……ええ、ままよ。物事は当って砕けるだ」

持ち前の度胸をすえて、高は、ずかずかと門内へ進み、わざと咎められるのを待った。そして番士に捕えられ、やがて出て来た公卿侍へ、蘇学士の書状を手渡して、ことばすずやかに、こう告げた。

「決して、怪しい者ではありません。職を求めに伺った者で、職能には自信があります。ご採否にかかわりなく、なにとぞご試験をたまわりますよう、よろしくお取次ぎを仰ぎます」

折ふし、大将ノ宮は、奥まった閣の内で、この春の日をしようざいもなく、生欠伸をもよおしていらっしやるときだった。これや、高毬の開運の目であったのである。取次の言を聞き、

また、小蘇学士が、心にもなく認めた一書を見ると、
「ふうん。そりや面白そうな書生じゃないか。なに、書生とも見えぬと。……ま、どちらでもよろしい。退屈しのぎじゃ、ひとつ会って、試験してやろう。まろ自身、その人物を見てくれる。これへ伴れてこい」

と、横たわっていた美しい榻(細長い床几)から身を起して、

冠の纓(ひも)を、ちよっと正した。

二 毬使いの幸運は九天に昇り、風流皇帝の徽宗に会うこと

世の才子肌にも、とかく鼻につく小才子風と、ことば少ない誠実型との、ふたつがある。

高毬ほどな男とて、そのへんの拳止はさだめし心得ていたことだろう。王大将ノ宮から直々の試問をうけても、彼は、自己の才をすぐ喋々とひけらかすようなまねはしなかった。あくまで初心で謹直な好青年のごとく、初対面の貴人へ印象づけた。

「なるほど、小蘇学士の吹挙だけあって、この書生なら、当家の近習に加えても恥しくはないな」

王大将ノ宮は、高を一見されるや、すっかり気に入ってしまったらしい。侍臣の列をかえりみては、

「どうだな。おまえたちはどう思う。この男、なかなかよい人相をしているではないか」

などと品評したりして、即座に、お召抱えと、事はきまつた。

こうして、市井の大放浪児にすぎない高毬は、はしなくも現天子の駙馬(天子の婿たる人の官名)王晋卿の館に仕える身とはなった。

まことに「犬も歩けば棒にあたる」みたいな幸運というほかはない。しかし、幸運に会しても、よくその幸運を生涯に活かさない者はいくらかもある。その点、彼は以後、水をえた

魚のようなものだった。つつんでいた才気は徐々に鋭鋒をあらわし、その多芸な技能は、やがて王大将のおそばには、なくてはならない寵臣の一名となっていた。

そしてこの頃から、名も、高俵とあらためた。毬の毛偏をとって、イ偏の俵に代えたのである。

そのうち、ある年のこと。——当主、王駙馬の誕生祝いとあって、この亭館には、華麗な車駕が門に市をなした。花の楼台には、楽手や歌姫がならび、玻璃銀盤の卓には、珍味が盛り飾られて、朝野の貴紳があらゆる盛装を競っていた。中でも、一きわ目につく貴公子は、どういう身分のお人なのか、

「九ノ宮、九ノ宮」

と、宴の上座にあげられた。そして王大将の家族や来賓の男女から、下へもおかぬ侍きをうけつつ、琥珀のさかずきに紫府の名酒が注がれるたび、しきりに、酔をすすめられている様子だった。

その上、この君の眉目の麗しさは、金瓶の花も、玉盤の仙桃の匂いも、色を失うほどであった。だから、やがてのと。教坊府の妓女たちが、演舞の余興をすまし終ると、たちまち、彼女らの紅裙翠袖は、この貴公子のまわりへ争って寄りたかり、

「ま、端王さま。いつになく、お澄ましでいらっしやいますこと」

「今日のご主客でしょうが、なにもそんなにまで、よそ行き顔をなさらないでも、およろしいでしょう。もすこし、お過ごしあそばしませな」

などと、牡丹をめぐる蝶のように、戯れかかった。

「ははは。そうかね。そんなに澄まして見えるかなあ」

九ノ宮の端王は、上品な苦笑のうちに、ほどよく群蝶の攻勢をあしらっておいでになる。だが、日頃の行状には、ずいぶん弱味がありとみえて、彼女らの口封じには、ひと骨折られたご容子だった。それをまた、陪席の来賓はみな、おかしげに眺め合って、しばしば、楽堂の胡弓や笙の音も、耳に忘れるばかりな歓声だった。

誕生祝賀の日から、まもない後のことである。

「高俵。——この贈り物をたずさえて、九ノ宮の御所へ、ちよつとお伺いしてまいれ」

王大将のいいつけで、彼はその日、端王の御所へ、使者として向けられた。

もとより、高俵は、何もかも、わきまえている。

過日の誕生祝いの折、端王が休息された書院で、ふとお目にとまった文房具がある。玉の龍刻の筆筒と、獅子の文鎮とであった。

「——そんなにお気に召したのなら、後日、お届けさせましょう」と、王大将がそのさい端王へお約束していたのを、高俵は側で聞いていたのである。

贈り物とは、その二た品に違いない。高俵は、この日の使いに、何か、会いがたき機会にめぐまれた思いと、晴れがましさを抱いて行った。

なにしろ、端王と申しあげる君は、先帝の第十一皇子で、今上哲宗皇帝の弟君にあたられ、東宮（皇太子）のご待遇を

も受けておられるお方なのだ。いや、高俵が内々、この君へ傾倒していたわけは、教坊の妓女たちが、あんなに騒いだのを見てわかる通り、たいへん粋な貴公子だと、かねがね聞いていたからでもあった。

琴棋書画の雅びは、もちろん、管絃の遊び、蹴鞠、舞踊、さては儒仏の学問も、つまびらかなうえ、市井の人情にもつうじている風流子であるとは、この開封東京の都で、たれ知らぬ者もない評判なので、彼は、

「なんとか、いちど、とっくりお話をしてみたいものだ。その道にかけての極道百般を、この高俵から聞こえあげたら、かならず又なき者と、お目をかけてくださるに違いないが」と、こころひそかに、久しいこと、野望していたものだった。

東宮御所は、汴梁城の一郭。つつしんで府門へさしかかると、衛兵が、

「いづれから？」

と、威厳もなかなか他とはちがう。

「王大将のお使いとして、九ノ宮へ奉るおん贈り物をたずさえてまいった者です」

と聞いて、衛兵はすぐ門をひらいてくれた。で、彼は悠々と内へ進んでいったが、さらに中門の侍郎へむかって、訪れを再びした。

中門の役人は、ていちょうように、

「それはご苦労でした。したが唯今、殿下には、おん鞠場へ出て、公卿輩を相手に、蹴まりに興じておられますゆえ、しばらく、その辺でお待ちくださいさらぬか」

と、いう。

「あ。鞠場でいらせられますか」

鞠とあつては、彼の特技、聞き捨てにならない。

高はついで、つばを呑むような顔して言った。

「蹴鞠は、それがしも、好む道でございませうが、よそながらでも、御所のおん鞠場の景を、拝見できぬものでしょうか」

「おやすいこと。ならば、ご案内いたしましょう」

林苑を縫って行き、やがて、明るい広場へ出ると、はや快い鞠の音が耳につく。

いづれも鞠好きな、上流の貴紳や姫君や公達ばらに相違ない。広やかな鞠の坪をかこんで、ある一組は、榻や椅子に寄り、ある一群れは芝生に脚を伸ばしたりして、競技を観ているところであった。

高も、そつと、それらの薫袖のなかに立ちまじって、よそながら見物していた。

すると今、一と競技終つたらしく、次のどよめきの後から、端王の姿が“懸ノ木”の下に立つのが見えた。——見るからに軽快な鞠装束である。薄紗の唐巾で髪をとどめ、袍(上着)は白地きんらんに紫の練の華文、袂に飛龍をえがかせ、鳳凰靴(くつ)を足にはいておられる。そして、相手方の備えを見て、

「よいか」

と、いったと思うと、いま、懸りの中央へ、侍者が据えた鞠へむかって、つかつかと進み出られた。

位階に従って、まず高貴な人から、第一を蹴り、以下順々に、二座三座四座と、八本の“懸ノ木”に備えている敵手へ蹴渡してゆくのである。さすが、端王の技は、皇族らしくき

れいで、しかも、受けにも渡しにもそつがなかった。

ところが、どうした過あやまちか、一人の靴先から外それた鞆たもとが、いきなり見物の方へ飛んできた。

「ア。あぶない」

頭上に見舞われた人々は、群れを割って、こけ転まろんだ。しかし、ちょうど近くにいた高こう俵たゆうは、得たりとばかり跳はび寄よって、ぽーんと、その鞆をはるか端王の方へ、蹴くわした。

「おつ、見事」

彼方かたで銜こたのように声がした。

つづいて、おなじ声のぬしが、高俵の姿に、すぐ目をつけたとみえて、こう呼んでいた。

「いまの鞆を蹴くった者。これへまいれ」

「はい」——と、高俵は進み出た。

「なんじか」

「おゆるし下さいませ。日頃、好める技わざとて、つい場所からのわきまえも失うって」

「いやいや。とがめるのではない。そちが蹴くったいまの手は、毬ま法ほう十じゅう踢てきの秘術のうちでも、もっとも難えんかしい鴛う鴦おう拐かいの一いっ手てと見たが」

「さすが、お目が高くていらせられます」

「いったい、そちはどこの何者か」

「王おう駙ふ馬まさまの近習、高こう俵たゆうにござります。じつは、主人の御命ごよめいにて」

と、さっそく、筥はこの二品を、そこへ供えて、使しいのおもむきを申しのべた。——が、端王は、贈り物のそれよりは、むしろ高俵の鞆たもとの妙技まうぎに魅ませられてしまった様子で、

「よしよし、委細は、後で聞きこう。それよりは、そちの技わざを、もう一ト渡りこいで見せい」

と、たつて望んだ。

求められるまでもない。高は、千載一遇のときと、思おもわず類るいにのぼる紅こうを制せいしきれなかった。けれど、どこまでも謙けん讓じやうを装まつて、再々辞退しじたいしたが、端王のおゆるしがないので、

「では、ほんの素人技しゅうじんぎの嗜たしなみに過ぎませぬが」

と、中央へすすみ出て、毬ま十じゅう法ほう、ひと通りの型かたを演まじてみせた。

肩かた技わざ、背せ技わざ、膝ひざ技わざから、尖せん飛び、搭とう舞ぶノ法ほうなどと呼よぶ五ご体たい十じゅう部ぶの基本きほんの上に、八十八法の細こかい型かたがあつて、飛ひ燕えん、花か車しゃ、龍りゅう鬣えい、搏はく浪ろう、吞とん吐とせ星せい、などさまざまな秘術もある。——もと

より高俵は、その道の達人であるばかりでなく、市井かんかんの間漢かん（定職ていしやくのない遊あそび人）だったころは、のべつ賭かけ毬まりに憂うれき身みをやつして、高二こうじ郎らうと人は呼よばず、高こう毬まりというあだ名なで通とつて

来たきたほどな男おとこなのだ。いわゆる堂上どうじやう遊あそびの、甘あまい芸げいとは、鍛きたえがちがう。

端王初はつめめ、人々が、

「あな、みごと。神技かみわざよ、神技かみわざよ」

と、ただただ嘆声たんせいのほかなかつたのは、当然たうぜんすぎる当然たうぜんなことだった。

毬まりの庭にわもいつか黄た昏せれた。やがて、閣かく廊ろうの灯あかりおぼろなころである。高は、あらためて、端王の御前ごまへに召よされていた。

奉呈ほうせいの文房具ぶんぼうぐに、端王が、よろこびを見せたのはいうまでもない。だが、言葉はすぐ、べつなほうへ移うつってゆく。

またしても、毬の話なのだった。そして、とつぜん、こうも仰せられた。

「高俵。これからは朝夕に、まろの師となって、そちの妙技を教えてくれい」

「おそれいりまする。貴尊のお方に、師などと仰がれる身ではございませぬが」

「そして、今日以後は、この東宮にいるがよい。もう王駙馬の館へは帰るに及ばん」

「や、それは困ります。私にとっては、大事なご主君。二君には仕えたくございませぬ」

「いや、すでに先刻、王駙馬のおん許へ使いをつかわし、高俵をわが家の臣にゆずつてたまえと、ご諒解を願うてある。

駙馬はまろが義兄、いわば一門と申すもの。そちの義心は尊いが、決して、義が欠けるわけではない」

「では、それほど」

高俵は、感泣にふるえるがとき姿をした。

かくて彼は、東宮付きの一員となりおわせ、日がたつほど、端王の重用いよいよ深かった。

元来、俗才に富み、諸芸百般通ぜざるなし、という道楽者上がりの高俵が、風流公子とはいえ、世間知らずのお若い東宮に侍いたのであるから、これはいつてみれば、彼が得意とする毬を掌の上に乗せたようなものだった。

ところが。

この幸運の毬は、まだまだ、どこまで彼の掌にその幸をも

たらしてくることか。

——それから僅か半年後。現皇帝の哲宗が崩御られた。し

かるに、じつの皇太子がおわさぬまま、文武百官の廟議は紛々をかさねたすえ、ついに端王を冊立して、天子と仰ぐことになりました。

じつに人の運はわからぬもの。これぞ、玉清教主微妙道君、宋朝八代の徽宗皇帝とも世の申し奉った君だった。

徽宗は、東宮時代から、すでに風流公子たるの素行が見えていたように、帝位に即いてからも政治には関心が薄かった。

しかし、絵画、音楽、建築、服飾など一面の文化は、このとき一倍の絢爛を咲かせた。徽宗自身も、絵筆をもてば、一流の画家であり、宮中の宣和画院には、当代の名匠が集められた。

また、印刷の術が進み、書籍の版行も普及され、街には、まだ雑劇の揺籃期だが、演劇も現われ、すべて宋朝の特長とする文治政治はこの前後に或る頂点を示したといつてよい。

けれど、文治のなかには、王安石一派の急進的な改革論をもつ者と、保守旧法にたてこもる朝臣とが、たえず廟に争っていたので、徽宗の代には、もうその内面に分裂と自解の、ただならぬ危機を孕んでいたのである。——にもかかわらず、徽宗は依然、風流皇帝であった。

道教をもって、国教とし、自分も教主となつて、保護にとめた。全国から木石禽獸の珍奇をあつめ、宮殿の工には、民の塗炭もかえりみもしない。当然、苛税、悪役人の横行、そして貧富の差は、いよいよひどく、苦民の怨嗟は、四方にみちてくる。——時運は徐々におだやかでなく、遼を亡ぼした金(満州族)は、やがて太原、燕京を席捲して、ついに開封汴城の都にせまり、徽宗皇帝から妃や太子や皇族までを捕虜とし

て北満の荒野に拉し去った。そして、徽宗はそこで、囚人同様な農耕を強いられ、ついに帝王生活の悲惨な生涯を終えるにいたるのである。

徹夜ノ西風ハ破扉ヲ撼シ

蕭条タル孤屋、一燈微カス

家山、首ヲ回ラセバ三千里

月ハ天南ヲ断チテ、雁ノ飛ブ無シ

これは、北満の配所で、徽宗自身が、皇帝たる自身の末路を詠じた一詩だ。

いや、おもわず、これは余りに、先の先をちと語りすぎた。

徽宗の終り、北宋の崩壊などは、ここでは、まだまだ二十年も後のことである。水滸伝は一名を北宋水滸伝ともいわれるように、徽宗皇帝治下のそうした庶民世間の胎動をえがいた物語なので、前提として、時勢の大河がどんな時点を流れていたか、それだけを知ればよい。

さて。話を元へ返すでしょう。

——新皇帝の即位とともに、高俅もまた、朝に入つて、帝の侍座となつたのはいうまでもない。毬はついに九天にまで昇つたわけだ。

そして、帝の重用はいよいよ厚く、彼の上には榮進が待つばかりで、やがて幾年ともたたないうちに、殿帥府ノ大尉（近衛の大將）とまでなりすましてしまった。

ときに、その叙任を見てから早々のことだった。

高俅は、禁門八十万軍の軍簿を検して、部班の諸大將から、旗幟や騎歩兵を点呼するため、これを汗城の大練兵場にあつめたが、その日、彼は、

「はてな」

と、巡閲中の駒をふと止めて、鉄甲燦然と整列している諸將の面々を見つづ、何かいぶかしげな顔をした。

「軍書記」

「はっ」

「おかしいな。もういちど、その花簿（職階の名簿）を読みあげてみい」

「はっ」

随身の一名が、軍奉行から簿を取つて、列將の姓氏をふたび点呼してゆくと、簿名にはありながら、ここには見えないう一將があつた。

「それみい、一名欠けておるではないか。今日の閲軍に、あるまじき不届きな沙汰」

「何とも恐れいりまする」

「かかる軍紀の弛みが見ゆればこそ、皇帝も特にこの高俅へ重任を命ぜられたものではある。しかるに、出頭の簿へ名をのぼせながら、今日の馬揃えに、姿を見せぬやつがおるとは奇ッ怪千万。そも何者だ、そやつは」

「禁林軍の教頭王進にござりまする」

「兵の師範たる職とあつては、なおゆるし難い。ただちにその者を召捕つてこい」

「いや、王師範は、日頃とて、決して懶惰ではございません。数日前から、何か病中にあるよしで」

「だまれっ。武將たる身が、いささかの病などに、大事な一日を欠くことがあるうか。もしこれが、まことの出陣だったらどうする。察するに、この高俅の就任をよろこばぬものか、

あるいは軍命をかるんじておるものに相違ない。——すぐ行けつ。折りもよし、軍紀振肅の要もある」

高球は、こう激語して、馬蹄を蹴らせた。そしてすぐ副官や隨身将校の騎馬をしたがえて、次の巡閲に移っていた。

三 教頭の王進、追捕をのがれ、母と千里の旅に落ちゆく事

棒鎗術の名人として、王進の名は遠近に高い。

父王昇の代から都軍に仕官し、兵へ武芸を教え、家は城下の一隅にあつて、ただ一人の母とともに、何事もなく暮していた。

が、その日、病で寝ていた彼の室へ、

「即座に出頭せよ」

という高球の厳命が、つたえられた。

迎えに来た兵は、みな日頃の弟子である。否めば、彼らの立場がなからう。王進は、病床を出て身じたくした。

「母上、ご心配くださいませぬ。こう起きてしまえば、さほどでもありません。新任の近衛將軍のお怒りはごもつとも、よくおわびいたして戻りますれば」

兵に囲まれて出て行く子を、彼の老母は、憂れわしげに、門の外へ出て見送っていた。

近衛府では、閲軍式も終わって、そのあと、高新將軍の就任祝いの酒が下賜され、営門や幕舎は沸いていた。

「申しわけがございませぬ」

王進は、高球の前に伏して、こう詫びた。

「ほかならぬ日、病軀を押ししても出仕をと存じましたが、何ぶん一人の母が余りにも案じますので、つい親心にほだされて、参列を怠りました。どうぞいかようにもご処分のほどを」

「いうまでもない。この高球が禁門軍の上に臨むからは、昨のごとき、軍の弛緩は断じてゆるさん。まずもって、汝のよな軍を紊す似而非武士から糺すのだ」

「あいや、似而非武士とは、ご過言でしょう。また、軍を紊せりとは、何をもつて」

「だまれつ。呼び出せば、こうして、歩いてもこられる体ではないか。それが仮病の証拠でなくてなんだ。また、かかる軍廷において、親の母のと、すぐ泣き落しの口実を構えおるが、そもそも、汝の父親が、前身何者かぐらいなこと、百も承知せぬ高球ではないのだぞ」

「似而非武士とは、それ故のご放言ですか」

「おおさ。汝の父王昇は、後には、棒術をもって、禁門兵の師範へお取り立てにあずかったが、それ以前は、都の路傍に立って、棒振り技を見物に見せながら薬を売っていた者ではないか。その頃の汝は、薬売りの父のそばで、貧しい銭をかせていた小せがれだったわ。……こらつ、王進つ、面を上げろ。いつのまにか、旧きを忘れて、近頃、思ひ上がっておったな」

「……………」

「はははは。二言とないさまは笑止千万だ。やよ、幕僚たち、諸人の見せしめに、こやつをすぐしはり首にしてしまえ」

猛る高球の前に、人々は王進をかばって、こもごもに、なだめたり、詫びたりした。

「まあ、お待ちください。せっかくのお慶びに、しばらく首を見るのも、不吉ではございませぬか」

「罰は罰として、後日、きびしいお沙汰あればよいでしょう。ひとまず、今日のところは、ご猶豫ねがわしゅう存じます。満庭の兵も、あのようにな、みな酔歌して、ご就任を慶しておる時でもありますれば」

「うむ。それも一理はある……」

高俣は、ちよつと、うめいた。自分の慶事である。その就任日に、やはり不吉は見たくなかつたらしい。

王進は、一時解かれて、帰ることをゆるされた。

もちろん、家の出入りには、番兵がつき、邸は「沙汰ある日まで」の圜圍だった。

墨のような夜気の真夜半。——王進はそつと室を這い出して、母の枕をゆり起した。

「……母上、ちよつと、お眼をおさまし下さい」

「才せがれ。そなたも、夜ごと眠れないとみえますね」

「なんの、王進は元来の暢気者ですよ。決して、これしきのこと腐りはしませぬ。けれど、母上のお悩みが察しられまですの」

「わたしはいい。わたしのことよりは、どうかおまえ一身の助かる道を考えておくれ」

「ところが、どうもいけません。どう考えても、こんどは高俣に命を召し上げられそうです」

「そなたが死んだら、わたしも生きてはいません。けれど、たくさんな門人衆が、助命の嘆願をして下さるでしょうし、

それに何も、死に値するほどな大罪でもないんだから」

「いやいや。ふつうなら、そういえもしましょう。ところが、絶体絶命。この胸へ、どきんと来たことが一つあるのです」

「お、おまえは、まさか、反軍の陰謀などを企らんでいたんじゃないだろうね」

「とんでもない。そんな仔細ではございません。じつは、新しい近衛ノ大將軍高俣とは、どんな人物かと思つていましたら、なんと、彼の口から、私の父王昇のことが言いだされたのです。……はて、堂上人のくせに、父王昇が巷で零落していた時代の姿を知っているのはいぶかしいと……拙者もじつと彼の面体を見てやりました」

「えつ、おまえのお父さんの前身を知つていたのかえ」

「知つてるはずですよ。拙者はまだ子供の頃でしたが、この開封の都で、名うてな道楽者がおりました。そいつは蹴毬の達人で、名も高毬といわれていた野翫間の遊び人。……どうでしょう母上、それが今日の禁林八十万軍の新大將軍高俣だったのです」

「まあ。そんな、ならず者がかえ」

「……しまったと、拙者はそのとき観念しました。というのには、当時のならず者高毬が、四郎追放となつて、街門の人中で百叩きになつた折、父の王昇は、もう仕官の身でありましたから、刑吏について、立ち会つておりました。すると、街の噂では、そのときの父の処置に、高毬がたいそう父へ怨みをふくみ、いつかはこの仕返しをするぞと、捨て科白を吐いていったとか。もう……十何年も昔のことですが、その記憶がハツと戸胸へきましたので、ああこれはいけないと、即座

に、自分の死が見える気がしたのです」

「せがれよ、どうしようぞ。わたしも亡き良人から、むかし聞いていた覚えはあるが」

「あいや、うろたえ遊ばすな。幸い、一時家に帰されて、母上のお顔を見たので、拙者も、死んでたまるか、心を持ち直して、一策を案じました。さ、さ……すぐお身支度にかかって下さい。父上からの思い出多い家ですが、邸を捨てて、遠くへ落ちのびましょう」

「だ、だっておまえ、邸の前後には、番兵もいるし、天下のお尋ね者になつたら」

「番兵の頭、張と李の二人は、拙者の日頃の門下です。罪の軽くすむように、母上と共に、郊外の御岳の廟へ、祈願をこめに行つて、夜明けぬうちに戻るから頼めば、彼らもきつと、見ぬふりをしてくれるにちがいありません」

老母の分別としても、今は、いちかばちかを賭すしかない。目立つ物は何一つ身につけず、息子の背に負われて、裏門から忍びでた。

番兵頭の李と張は、知らぬ顔して、見のがしてくれた。

——王進は、深夜の底を走つて、西華門へかかった。ここにも彼の弟子がいる。わけを偽つて、通してもらい、そのうえ一頭の馬を借りて母を乗せて、自分もその鞍尻に跨がった。

「ああうまくいった。母上、もう大丈夫です。まだ、追手も見えません」

「けれど、おまえ、これから何処をさして？」

「延安ノ府（陝西省）へまいりましょう」

「え、陝西の延安へ」

「そうです。あそこの府境の城に、経略（城代の官名）として国防の任に当っているお人は、老種と申されますが、その部下には、都で拙者が棒鎗を教えた者がたくさんおります。

それに種その人とも、よく文通などもしている仲ですから」

「さぞ、遠くであろうの。延安の空は」

「黄河の西、長安の古都の北、なにせい、旅はやさしくはありませぬ。ご辛抱くださいませ」

「おお、どんな難儀とて、わが子と二人なら、忍べぬことはない」

「この王進も、母上を抱えているのが、百人力のここちです」

逃亡の旅は、風に追わるる如く、野に伏し山に伏して、かさねられてゆく。

まだ、駅路も都から遠くないうちは、その後、高俵の激怒が、官布となつて、諸道国々の守護へたいし、罪人王進の逮捕を督すこと頻りであるとも聞えていた。しかし、やがて大陸の渺々たる野路山路は、いつか、旅の母子に、後ろの不安も、思い出せぬほどな遠くにしていた。

「……さて、日も暮れたが、ここは何という村か」

王進は、トボトボと疲れを見せてきた馬をあやして、あちこち、宿をさがし求めた。

「どうも、旅籠はないようすな、母上。あそこの柳圍の奥に、四方築土の門が見えますが、ひとつ、あそこへでも宿をたのんでみましょうか」

「村の大庄屋さまらしいが」

「かまいませんよ。私におまかせ下さい」

柳の一樹に、母の駒をあずけ、王進は門へ入つて、一夜の

宿をたのんだ。

「お。……えらい莊院（御大家）だな」

よほど、由緒ある旧家とみえる。

背後の岡には、草堂風な一宇が見え、道は楊柳を縫うて隠れ、溪水は落ちて、莊院の庭に一碧の鏡をたたえている。

水に臨んでは、母屋の亭館が建ちならび、山に倚つては、主の書楼が、窓を放つて、いしましたが、灯を挑げたらしく、新鮮なまたたきを見せていた。

——取次の童は、奥へ入ったまま、なかなか出てこない。

遠くに、たくさんな牛の鳴き声がするし、釜屋や下男の長屋には、炊の煙がさかんで、何百人もの傭人が、がやがやいつているようでもある。いわゆる、負傭鶏犬も食に飽き、富戸は子孫に足り、書庫には万巻の書を蔵す、といったような趣があった。

「……旅のお人。お待たせしました。さあ、どうぞ」

出てきた小僕の姿に。

「や。お泊め下さるとか」

「はい。おあるじへ、老母をつれて行き暮れた旅人ですと、申しあげたら、それはさぞかしお困りであろうと」

「かたじけない。では、ご好意にあまえて」

王進は、外へ馳け出して、すぐ母の手をひいてきた。小僕は、親切に、

「馬は、そのままにしておかっしゃれ。おらが、飼糧をやっておくから」

家の者、みな、その小僕のように、あたたかであった。湯浴み、食事なども、終つてから、王進は、莊主の太公に

会った。折れ頭巾をかぶり、白髯は膝にたれ、道服に似たものを着、柔かそうな革靴をはいている。

「延安へ行かっしゃるお商人と聞いたが、ご老母づれではたいへんじやな」

「いや、都ではすっかり資本を失いましたので」

「ははは。宿賃がないというご心配じゃ。それくらいなら泊めはせん」

「あつかましゅうございしますが、どうも年よりを連れては、野宿もなりかねまして」

「遠慮はない。家も広い。こよいはご老母にも、ゆっくり手足を伸ばさせてあげるがよい」

しばらく、さりげない話に過ぎした。しかし、やがて退きさがつてゆく王進の物腰を、あるじの太公は、雪の眉から、何やらじつと、見送っていた。

翌朝。——太公は好きな茶を煮て、王進を待っていた。が、いつまでも、起き出てこないの、自身、房へ行ってみると、王進の母が、ゆうべ夜半から持病をおこして、今朝もまだ、子の介抱にうめきを泳いでいる様子だった。

「なんじゃ、はやく告げて来ればよいに」

太公は、すぐ薬囊をとりよせて、自身、煎薬を調じてくれた。のみならず、幾日でもここで養生するように——ともいってくる。

「ご恩は、忘れませぬ」

七日ほどたった。持病もおさまり、母の顔いろもよくなった。で、今朝は早くここを立とうと、王進は、自分の馬を、厩のほうへ見に行つた。

すると、まだ早曉の靄、みどりの露、肺の中まで青々と染まりそうな柳ばやしのうちで、えいッ、おうッと、誰やらさかなな気合いを発している者がある。

王進は、ふと耳を打たれて、振り向いた。そして肉づきのよい真白な壮者の肉体らしい影を、青い靄の中に見た。

年ごろはまだ十八、九か。とにかく、筋骨隆々たる美丈夫である。

もろ肌をぬぎ、顔から半裸身まで、流れる汗にうるおされ、その汗までが美しい。

さらに、王進が眼をみはったのは、その真白な半裸に画か
れている刺青だった。九ツの龍が汗に光って肌から浮くばかりに見える。そして、その若者の手には、長やかな櫂の棒が持たれていた。棒はぶんぶん鳴って、彼自体の前後を、まるで車のように旋回して舞う。

「……ははあ、棒術をやっておるな」

わが道なので、王進は、しおらしさよと、思わずこなたで微笑していた。

すると、気がついたとみえ、ふと棒の手をやめた若者は、

「おい、人の芸を見て、なにを笑うんだ」

「いや、あざけりはしない。なかなかやるものだと、感心して眺めていたばかり……」

「なに。なかなかやるもんだって。きいた風な口をきくじゃねえか」

「ま、怒んなさるな。お若いからむりもない。もすこし見物しようじゃありませんか」

「ふざけるな。おれの棒術は見せ物じゃない。おつなことをいうからには、てめえも多少の心得はあるんだろう。さ、叩きのめすから、受けてみる。受け損じたら、命はねえぞ」

「これは迷惑。お気にさわったのなら、平に平に」

「いけねえ、いけねえ。その頬ゲタか肋骨の二、三本も、ぶち碎かねえうちには、おれの虫がおさまるものか」

ところへ、あるじの太公の声がした。

「これっ、史進っ。お客人に何をする」

「あ。親父さまか」

「ひかえろ」と、太公は息子を叱って——「客人。……どうも忝めが、とんだご無礼をいたしましたがこのとおりな田舎育ちじゃ、ま、堪忍してやってくだされい」

「いやご主人、こちらが悪かったですよ。若いお人が一心不乱に、気を研いでいるものを、思わずニヤニヤしたりしたものですから」

「これも、何かのご縁というものじゃろう。ひとつ、この忝への置き土産に、棒術の一手など、お教えして下さらんかの」
「めっそうもない。てまえは、しがない落魄れ商人、棒術などは」

「いやいや、わしにはあなたの五体のうちに、何かご一芸があるものと見える」

「よしなよ、父さん。買いかぶるのは」

史進とよばれた若者は、父の前から、いきなり王進の胸をつき飛ばして罵った。

「おやじは今、おかしなことをいったが、おれは、てめえみたいな旅鳥にご教授をねがうの、ご一芸があたりでなんてこ

とは、おくびにもいわねえぞ。さ、そんな土性骨か、食わせ者か、試してやるから受けてみる」

跳び退いたのは、構えを作るためだった。いきなり彼の棒は、右手と一本のものとなって、ぶんつと、王進の首のつけ根へ落ちてきた。

どう取ったのか、王進は彼の棒の一端を、左の腋の下にしつかと挟み込んで、

「おあるじ。よろしいですか」

と、太公の顔を見て笑った。

「よろしいとも。うんと、こらしてくだされい。烏なき里の蝙蝠とかで、自分以上な者はないと、何ともかとも、手のつけられん小倅じゃ。ひとつその増上慢の鼻を、折ッぴしょッてくだされば、いっそ、当人には倅せというもんじやろ」

「承知しました。親御のお頼みとあれば」

聞くと、史進は、

「なにをっ」

と、全身九ツの龍に、ぱつと血を与えたような色を、みなぎらせた。

が、もとより田舎仕込みの武技だ。たとえこの若者の肉体と血気に、どんな精根があろうと、王進の眼には、兎戯にひとしいものだったのは、いうまでもない。

一振一撥、また、眼もとまらぬ一撃一突、すべて見事な肉体の空演舞だった。史進は、声を嚙らして、その喉から臟腑を吐かんとするほどに身も疲れてしまった。それでも、まいったとはいわなかったが、あ——と感じるまに、大空が自分の脚の上に見えた。でんと、投げとばされていたのである。

「ち、ちくしようッ」

起とうとするや、また投げとばされ、すでに手裡になかった棒は、王進の手に移っていた。そして、その棒の先に、九ツの龍の肌は、まるで竹箒に弄ばれる蜘蛛のように、離されては伏せられ、逃げかけては絡みつけられ、果ては、死に絶えたかのごとく、へたばってしまった。

「どなたか、ご子息へ、水を持って来てあげてください」

言いながら、王進は、史進のそばへ寄って、その体を膝に抱えた。そして親の太公を振り仰ぎながら、気のどくそうな顔をした。

「……どうも、ちと凶にのッて、お懲らしが過ぎましたなあ。

しかし、どこもお怪我はしておりませんから、ご安心を」

「いやなんの。倅めには、よい薬でしたわい」

そうはいうものの、やはり親心か。太公は、われ知らず、額に滲ませていた冷たい汗を、道服の袖でそつと拭いた。そして、

「お客人。あらためて、とくとお話し申したいことがおさる。

茶など煮て、わしの房でお待ちしておりますぞ。おそれいるが、倅めを連れて、あとよりお越しくださらぬか」

と、杖を曳いて、画中の人のように、彼方の書楼へ向って立ち去った。

四 緑林の徒の涙を見て、史進、彼らを再び野へ放つ

こと

この山村は華陰県の梔嶺で史家村とよばれている。

戸数三、四百軒すべてが「史」という氏だった。

莊院（庄屋）の太公は、先祖代々、村のたばね役をしていたが、しかし自分もすでに老齡である。一日も早く息子の史進に跡目をゆずって、隠居したいものと考えている。

そこで、彼はその日、客の教頭王進へ、こんな希望をうちあけた。——かりそめの旅人に過ぎない王進母子へだが、ひとつ伴史進のために、未長く師となつて、村に永住してもらえまいかという相談なのだ。

「さあ？ ご好意はまことにかたじけないが」

王進は、答えに窮して。

「今は正直に申しますが、じつは拙者は、ただの旅商人などではありません。つい先頃まで、禁軍八十万の師範役をしていたのですが、新任大將軍高俣と折合いのつかぬことがあつて、無断で都門を逃亡し、いわば天下のお尋ね者の身の上です。……せっかくですが、ここにとどまれば、お世話になつたご当家へどんな禍いがかからぬ限りもない。それゆえ仰せなれど、その儀は、何ともおひきうけいたしかねる」

「なんのお客人。この年までたくさん人間を見てきた老人の眼じゃ。はて凡人ではないぐらいなことは、とく感づいておりましたよ。今さら驚きはいたしません。ただただあなた様の人物に傾倒してのお願いなのじゃ。どうぞおきき届けくだされい」

老父の乞いにつれて、そばにいた息子の史進も、いまはまったく自分の独りよがりな捧術の未熟さを覚つたものか、ともども、すぎるような眼ざしで引きとめた。

「いや、それほどまでの仰せなれば」

と、ついに王進も、父子の懇請を容れて、その日の出立を見合せ、あらためて、師弟の約を、ここに結んだ。

「この上は不肖ですが、武芸十八般、知るかぎりの技は、ご子息にお授けいたそう。ご子息の名は、史進といわるるか」

「はい。背に九ツの龍の刺青をしているので、人は綽名して、九紋龍史進と私をよんでおります」

「捧術は誰からお習いかの」

「少年の頃、うちの食客（居候）に打虎将李忠という浪人者がおりました。面白半分な稽古が病みつきで、以後、村を通る旅の武芸者や浪人と見れば、片っぱしから当つて試合してきましたが、ただの一度だつて負けたことなどありません。それが、どうも今日ばかりは」

「はははは、ちと勝手が違つたか。まあよいわさ、まだ十九か二十歳のお身で倅せ、初心に返れば、どうにでも撓め直しはきく」

かくて教頭王進の母子は、そのまま史家村に居着いてしまつた。そして史家の嫡男九紋龍一人のために、かつての禁軍八十万の師範王進が、日々手をとつて武芸十八般にわたる秘技を指南した。

武技十八というのは。

一に弓、二に弩、三に鎗、四に刀、五に劍、六に鍵矛、七に楯、八に斧、九に鉞、十に戟、十一に鉄鞭、十二に陣筒、十三に棒、十四に分銅鎌、十五に熊手、十六に刺叉、十七に捕縄、十八に白打。

——それからというもの、史家の裏手の柳圍では、必死に教えをうける龍児と師範との「えいっ」「おうっ」の喚きが

聞えない日はなかった。雨の日は、莊院の広床で行われ、夜は夜で、燈火をはさんで兵書を講じる声がある。

若き史進は、めきめき上達をしめし、また何よりは王師範の人柄にも感化された。いや師範の都ばなしだの雑談の端にすら、ただならぬ興味をもって、元来、山家育ちの矇は、よいうやく、自分の居るところの程度の低さを知ってきた。そして広い大きな世上へと、自然、その若さは疼きを擡げだしていた。

いつか、一年余の歲月はここに流れた。

王進は、この頃になって、つらつら思う。

「……これはいかん。九紋龍は稀に見る天才児で、わしの武芸十八般の秘奥までよく会得してきたが、しかし親の太公の望みは、史進に名主役の跡目をつがせて、早く老後の安心をえたいとするにあらう。生半可、彼が世上慾に目をひらいて、先祖代々からの庄屋づとめや百姓仕事を嫌いだしたら、かえって、わしの仕込んだ道も、史家にとつてはあだになる」

そう思いついたので、ある日のこと。

「長々お世話に相成ったが」——と、彼は急に、身の都合を言いたてて、あるじの太公へ、暇乞いを告げた。

「母が申すには、脚腰の達者なうち、どうしても先にこころざした延安府へ行って暮りたいと望んでやみません。ご子息へはもう不肖の武芸はのこりなくご教授申しあげた。……どうぞご一家にはこの先ともごきげんよく」

ふいの別れを述べられて、太公はおどろき、子の史進も悲しんだ。けれど、いかに引きとめても無駄だと知ると、さて

惜別の宴には、銀子や饒別の品々を盛って、王進母子に捧げ、かつ出立の日となると、馬や供人をも添えて、関西路へ向う隣県まで、ねんごろに送らせた。

——だが、そのあと。

残された史進は、ぽかんと虚脱に落ちてしまった。たまらない寂寥が彼をして毎日酒にひたらせて行つた。いや、さらに大きな空虚は重ねて彼の一身を襲つた。その秋、父の太公が、とつぜん病死したのである。

これも手つだつてか、彼の放縦は自暴の相を帯びだした。元々、百姓は性に合わないといっている彼なのだ。家事はいよいよかえりみもしない。その莊院には、つねに百姓らしくらぬ無頼のみを寄せ集め、ただ武勇を誇つては、遠近に喧嘩の相手と機会を求めてばかりいた。されば史家村の九紋龍史進といえ、この頃、泣く子も黙る名となつていた。

山波の影は遠く望まれるが、人里からはどの辺かよく見当もつかない彼方だ。ここに、華陰県の山また山の奥、少華山とよぶ一峰がある。

天地は人間のもの、その人間は生きものだ。おれたちがここに山寨をむすんで、こう生きていくのに、何の不思議があるか、と誇りでもしているように近づけば、その少華山の山腹にも、さかんな人煙人語があるのであった。

「おい楊春。どうもこの頃は、さつぱりじゃねえか。……陳達はまだ岩窟の中で寝こけているのか」

「そうらしい。なんでも奴あ三日ほど前から、蒲城県の方へ降りていって、何かうまい仕事はねえかと、狼のように嗅

ぎ歩いたつていうんだが、ゆうべおそく手ぶらで帰ってきやがった。よくよく下界も飢饉年らしい」

「そうじゃあるめえ。おれたち山寨の六、七百人もが、ついこの春までは、下界の貢ぎで悠々と王者みてえに食ッてられた世間じゃねえか。それが昨日今日、急に酒や肉にも干あがるてえなあ、ふしぎだよ」

「陳達もぼやいていたが、どう考えても、こいつあ、やっぱり華陰県の皇城で、布令を廻しやあがったせいだろうぜ。なんでも、おれたち三人の頭目の首に、錢三千貫の賞を懸けて、諸所の街道に高札を立て、旅人の夜歩きを禁じたり、土民の自警隊を奨めたりしているそうだから」

「ばかにしてやがら。そんな金が役署にあるならその金をこつちへそのままよこすがいい。半年ぐらいは山を出ずに、大人しくしてやるものをよ。はははは」

夏ながら山は不断の霧が冷たい。巨大な寨の柵門の内には、怪異な男どもの屯やら焚火が諸所にけむっている。中にも岩戸の階、岩穴の一大殿堂をうしろに、酒を酌みあっている一トかたまりがあった。それぞ少華山の山賊七百人の頭目、神機軍師朱武や白花蛇楊春らの車座だった。

するとなお、岩窟の口から、また一人、

「なんの評議かとおもえば、また芸もなく飲んでいるのか」
大きな伸びをしつつ、のっそりと石階を降りて来た者があ
る。たった今、二人が噂していた跳澗虎陳達だ。これも三頭
目の一人なのはいうまでもない。

「おう陳達か。——芸もなくといわれちゃあ面目ねえなあ。
したが、三日も山寨を留守にしたおめえにしろ、やはりなん

の土産もなかったじゃねえか」

「ちげえねえ。だが、ちよっと耳よりな土産はあるんだ」

「なんだい、耳よりなあ」

「帰る途中で、兎捕りの李吉っていう獵人を捕つかまえて
聞いたことだが」

「はははは、かあいそうに、兎の皮はぎを捕まえて、そいつ
の皮をまたはいだのか」

「ばかいえ。この陳達が、そんなしがねえ獵人や百姓いじめ
をするものか。お互い三人が義の盃を交わしたとき、第一に
誓ったのは、盗賊はしても弱い者泣かせはしまいぞというこ
とだった。李吉の手引きで、おれが目ボシをつけたのは、そ
んなケチな相手じゃねえ」

「ふうむ。獵師の李吉に手引きさせて、どこへ押込みに入る
うというのか」

「史家村の大莊院よ。あの旧家は見かけ以上な物持ちだそう
だ」

「兄弟。そいつアよしねえ。史家村ときちやあ鬼門だろうぜ」
「どうして」

「その名主といやあ、九紋龍の家だろう。とんでもねえ話
だ。あいつに当って行けるものか。しかも県城の役署からお
れたちの首に三千貫の賞金が懸っていることも承知だろうし、
手具脛ひいているものと覚悟もせざアなるめえが」

「ところが、李吉のいうにやあ、なるほど九紋龍の腕前は、
四県無敵ツてえ評判だが、なんたって、旧家のお坊ツちゃん
だ。誰でも負けてやりさえすれば客にして、幾日でも泊めて
おき、酒を飲ませたり饞別をくれたりだから、つまりは浪人

者のいい食いもの。おそらく、ほんとうのとは旦那芸ぐらいな腕だろうというんだが」

「あてにはなるめえ。李吉が試してみたわけじゃあるめえし」
「うんにゃ、そんなことアべつにしても、この陳達には自信がある。生れ故郷の鄴城では、長鎗の跳澗虎といわれたおれだ。二十歳そこそこの青二才に、おれたち少華山の三頭目が、恐れをなしているといわれるのも我慢がならねえ。まして金持ちの莊院じゃねえか。なんで指を啞えていられるものか」

陳達は豪語してやまなかった。朱武と楊春が、止めれば止めるほど、意地にもなつて、

「よし、それじゃあ、おれ一人でもやつてみせる。おめえたち兄弟は、酒でもくらつていいが」

とばかり、即刻、二百ほどの手下に、出触れを廻し、自分も戦陣へでも臨むような身支度にとりかかった。

そのいでたちを見るに、緋房のついた鉢兜、鍔物綴りの鍍金の甲、下には古物ながら蜀江の袖をちらつかせ、半月形の革靴をはいた。そして、組系の腰帯に、刃幅の広い大剣を横たえ、山路に馴れた白馬のくらにりゅうとして乗りそびえた姿は、さすが少華山の賊将、われから豪語したほどなものはある。

手にかいこんだ長鎗を、一振り横に振って、西の麓を穂先で指し、

「さあ、山を降りるまに、日が暮れよう。男と思う奴らは、おれにつづけ」

二百ぢかい手下が、銅鑼や太鼓を鳴らし、柵門で一度、わ

あつと氣勢をあげた。そしてたちまち、一列の黒蛇となつて麓の方へ沈んでいった。

「あぶねえもんだな。どうも近頃、陳達は少しあせり気味だぜ」

「三人の中では一番の年上だ。自分でも頭目ちゅうの頭目と任じているんで、ここんところの山寨のさびれを見ちゃあ、じつとしていられねえような気なんだろうよ」

「そうだとしたら、イヤなんとも、足も心も進まねえ相手だが、おれたち二人も、こうしちやいられまいぜ」

朱武は元、定遠州の生れ、戦う場合は、よく両刀を使うが、得意はむしろ兵法と謀略にあるとは、彼自身がいうところだった。

また白花蛇楊春は、蒲州解良の人、大桿刀の達人だった。腰は細く、臂は長く、綽名のごとき妖蛇の感じのする白面青気の男である。

さきの陳達といいこの二者といい、いずれも元は江湖の処士や良民だった者だろう。しかし宋朝の治、徽宗帝の奢り、ようやくその紊れやら腐敗を世路の辻々にまでただらしてきたので、いずれも正業に生きる馬鹿らしさを思つて、野性の自由をほしいままに、この少華山などへ緑林(盗賊)の巢を構えたものにちがいない。

一刻おいて、この二頭目もまた、大勢の手下をつれて、史家村へ降って行った。行くほどに夜は更けてゆき、やがて黒い夜霧の底に、ぼやっと赤い火光が見えだした。史家村の角に間違いない。楊春は馬をとめ、後ろの朱武の影へよびか

けた。

「やってるぞ。あの火を見る。陳達はもう九紋龍の家へ乗りつけている。兄貴の難を見捨ててはおけまい。急ごうぜ」
ところが、まだ麓へも出ないうちに、陳達の小頭や手下どもが、さんざんな態で逃げ走ってきた。

「——どうした？」と訊けば、村には備えがあり、警板や銅鑼を合図に、たちまち、九紋龍の家には小作人や庄戸（村人）の若者輩が、まるでよく訓練された兵隊のように集まってきて、たちまち守りを固めてしまったという。

しかし陳達の指揮下にある賊も、「なんの百姓輩が」と、門へ向って馬群をおめかせ、また脅しの早鉦だの銅鑼を打ち鳴らした。ところが、どうして相手は手強い。矢かぜや投げ火の下で、やがて大乱戦となっていた。そのうち九紋龍自身も打って出てきた。そして味方の陳達と一騎打ちになったので、互いに火を降らすことかと思っていると、呆ッ気なく、陳達は長鎗を叩き落され、苦もなく九紋龍のために手捕りにされてしまったというのである。

「ふうむ。強さのほどは察していたが、そんなにも強い九紋龍なのか」

「てんで、おはなしにも何もありません」

と、手下どもはまったく闘志を失っている。

けれど、朱武と楊春は、まさかここから逃げ戻れもしない。それこそ山寨七百人の手下の信望は地に墜ちてしまう。といって、最初から九紋龍史進に立ち向えるうぬ惚れもなかったのだ。楊春はその白面を一そう蒼白にして。

「どうする。兄貴」

「こうなっては、どうもこうもない。おれにまかせろ」

朱武が得意とする智略が、何かひらめいたものだろうか。朱武は、たちどころに、手下のすべてに足止めを命じ、自分と楊春の二人だけで、史家村の内へ近づいていった。

すぐ見つけた庄戸の土兵は、二人を取り囲んで門内へしよッ曳いた。——見ると、邸内の広い柳園では、諸所に篝火を焚き、まん中の一樹に生け捕った陳達を縛りつけて、今しも、それを着に大ざかもりの最中だった。

「なに、朱武と楊春の二頭目が自分から縄目を望んでこれへ来た。はてなあ。そいつはどうも眉ツバものだが」

史進は、陶の酒樽に腰かけていた。

鱗革に朱紅の漆やら摺り金箔をかけた甲を着、青錦の戦襖に黄色の深靴をはいていた。そして側には一張りの弓を立て、腰には両刃三尖の八環刀を佩いて、久しぶりな闘争の発汗に会ったためか酒の色か、いかにも快げな眉宇に見える。

「よし。とにかく二人を曳ッ張ってこい。たぶん偽者だろうが、どんな嘘をいうか、聞いてみるのも一興だ。もっと篝火を明るくして、おれの前に引きすえろ」

朱武、楊春の二名をまだ見ぬうちから、彼は充分に疑っていた。もし本ものだったら、これ幸い、三頭目を一ト束ねに首斬って、さらにもう一杯の酒のさかなにするつもりだった。

しかるに彼は、やがて朱武と楊春がこもこも述べたてるのを聞くうち、次第に酒の面をさまし、果ては、涙すらこぼすのだった。——朱武はひとしお言葉に憐れをこめて。

「どうぞ、われわれ両名も、兄貴の陳達とともに縄目として、

県城の役署へつき出してください。聞くならく三名の首には、三千貫の賞がある由。その金をば近郷の窮民へお頒ちくださればなおのこと本望です。……もともと、陳、楊、朱のわれら三名は、賊となるとも義賊たらんと誓い、死ぬ時も一つにと、血をすすって義兄弟の約束をした仲でした。いま兄貴の陳達が捕われた以上は、あとの兩名も生きてはいられませぬ。またお手むかいをしてみたところで敵わぬあなた。いざ、どうなりとご処分を」

史進の純情はすっかりそれに打たれたらしい。山賊にもこんな義心があるかと思ひ、彼らが貧民の味方だというのも、大いに気に入った。かつは太ッ腹な史進なので、その寛度を大勢の庄戸の者の前で示すことも愉快でないことはなかつたろう。

「おい、陳達の縄を解いてやれ。そしてこの三人へも杯をやるがいい」

史進は瞬間、声も出ずにいる三人へ、大容にまたいった。「盗ッ人にも三分の理、仲間同士では義理固いとも聞いたが、そこまで義に厚いのは感心だ。安心しろ。おれは腐れ役人の手先になんぞなるのは生れつき大嫌いだ。賞金なぞは手にもしたくない。さあ一杯飲んで、足もとの明るいうちに少華山へでも何処へでも、とっとと消え失せろ。その代り、この近郷三県で百姓いじめをするやうに聞いたら、いつなんどき九紋龍が行って、その首をお貰い申すかしねえぞ」

三人は地に這って、九紋龍を百拜した。あげくに酒と涙を一しよに呑んだ。たとえば恩を知る動物が人の手から放たれでもしたようである。やがて振り返り振り返り、暁まだき

史家村から元の少華山へ立ち去った。

五 史進、家郷をすてて渭水へ奔り、魯提轄と街に会うこと

彼らの仲間うちでも、虎は平伏した餌食は食わぬ」という諺を知っている。「——九紋龍の度量はそれなんだ」と、楊春も陳達も、朱武も以来すっかり史進に心服してしまった。

史進の方では、そんなことなど、いつか忘れてしまっている。すると或る夜の宵の口、一荷の贈り物を担いだ山賊の手下が、こっそり、史進の屋敷へやってきて、

「ご恩返しというほどな物でもござんせんが、てまえもの志だけを、どうかお納めなすっておくんない。いや申し忘れましたが、山の三頭目からも、くれぐれよろしく申しました」

と置き捨てるように、おいて帰った。

あとで開けてみると、獣皮やら山の物の種々、それに三十両ほどな金ののべ棒も入っている。

史進は笑った。

「なんだか、余り貰い心地がよくねえな。だが、奴らにすれば、精いッばいな善意だろう。まあいいや。金はまた何かいい折につかてやろう。取ッておけ取ッておけ」

ところがその後も何くれとなく、ちょいちょい山から贈り物が届けられる。時には見事な宝石などもよこした。

史進もまた、こう貰ってばかりいてはと思つて、家に伝わる紅錦織を三領の袍に仕立てさせ、脂ののツた美味い羊の

焼肉を大きな盒へいれて、日頃の礼にと、山寨へ届けさせた。

史家の奉公人頭に王四という男がいる。使者にはこの男に作男一人をつけてやった。二人が麓まで行くと、山賊の見張りに捕まった。しかし、

「九紋龍さまのお使いで」

と聞くや、彼らが先に立って、山寨へ案内した。なおまた、朱武たち三頭目も、王四の労をねぎらって、下へもおかない。酒や馳走を出して、

「一日も史進どのご恩は忘れていない」

といったりした。そして、使いの二人へ、帰りがけには十両の銀子をくれた。

史進は、王四の復命をきいて、

「そんなに飲んだか。また、そんなにも、おれのことをいつてたのか」

と、これも悪い気はしなかった。

こうして、彼らとのつきあいが深まるにつれ、史進は相手が山賊であるなどという念もなくなっていた。ただ男と男の交わりとしていた。

そのうちに、秋もなかばの頃、史進は月見の宴を思い立った。ひとつ仲秋の名月に酒壺を開いて、あの朱武、楊春、陳達らの三人と、思うさま飲んだり話してみたいものだと考えた。そこでまた、いつもの王四に、招待状を持たせて少華山へやった。

朱武たちが飲んだのはいうまでもない。

「——必ずまいる」

と返書をしたため、それに四、五両の使い賃をのせて、王四へ渡した。そのうえ十碗あまりも酒を飲ませて帰したので、王四もすっかりごきげんになってしまった。

ひよろり、ひよろり、山路を千鳥足で降りてくると、日頃、顔見知りの山賊の手下に出会った。

「……よう、大将」と王四が抱えこむと、その男も酔っついて、

「やあ、王サマか」と、ヒゲ面をこすってきた。そして漁樵問答ならぬベロンベロン問答の果てである。頭と頭とを絡み合った四本の脚が、またぞろ、麓の居酒屋へよろけ込んだ。

——だいぶ飲んだに違いない。

その晩、相手の男と別れてから、王四は途中の芒原で寝てしまった。事これだけなら、その一睡は無上天国そのものだった。ところが折ふし通りかかった獵人がある。これなん兔捕りの李吉で、さきに陳達を手引きして史進を襲わせたのもこの男だ。そのことでは思うつぽも外れてしまい、以来、村人からは白眼視されていたが、もともと狐狸以上の狡さを持つ李吉だった。今も今とて、蹴つまずいたとたんに、

「おやおや、こいつあ、史進の家の王四だぞ。はてな？」

酒臭い正体なしの体へ寄って、親切ごかしに胴巻を撫で探っていた。すると銀子と手紙が手に触れたらしい。李吉は狐のような眼をくばった。

——翌朝。李吉がその手紙を持って、県城の役署へ密訴に馳けこんでいたところ、一方の王四は、ひどく冴えない顔つきで、主人史進の前で、復命していた。

「行ってまいりました。——ご芳志にあまえて、ぜひ参上い

たします、という三頭目のご返辞でございました」

「いま帰ったのか王四。たいそう遅かったじゃないか」

「どうもその、つい山寨でご馳走になっちまいましたので」

「酒を出されると目がねえんだろう。まあいいや、それよりも早く調理場へ行つて、あしたの料理の支度やら倉の中の器物などを出させておけ」

次の日は仲秋節。——史家の小作や奉公人は、昼から筵席の支度に忙しかった。羊を屠り鷺や鶏をつぶすこと、何十羽かわからない。前日から煮きこめた百珍の料理は銀盤に盛り、酒も家蔵の吟醸を幾壺となく持ち出して、客の前において封を切るばかりに用意していた。

——ほどなく、朱武、陳達、楊春の三人は、かねて史進から贈られた紅錦の袍を具足の下に着て、時刻たがえずやってきた。

接待は土地の壮者や村娘たちである。史進は、上座に三名をすえて、

「おお、よくぞお越しくだすった。昔から好漢は好漢を知るといふ。月もよし、桂の花影、ひとつ今夜は、心ゆくまで語ろうじやありませんか。さあどうぞ、おくつろぎなすつて」と、盞をあげ合った。更けるほどに、月は冴えを増し、

露は珠を桂にちりばめ、主客の飲は尽きるところがない。談笑また談笑の沸くごとに、一壺の酒は空になるやと思われた。

そのうちに、ふと、史進も客の三頭目も、何かへギョツとしたらしく口をつぐんだ。広い土塀の外を囲んで、潮のような人馬の気配がひしひしとする。耳をすますと、こう聞えた。「やあ史進、門を開ける。開けねば蹴破るぞ。この莊院内に、

こよい少華山の賊どもが会合しておると、訴人あつて明白なのだ。四隣八隅、遁れんとて、遁るる道はない。賊を渡すか、踏み込もうか。いかにいかに」

「さては、訴人があつて、県城の捕手が、襲せてきやがったか、花にあらし月に雲だが、こいつアちっと早過ぎる」

史進は、舌打ちして。

「お客人。なにも慌てることはない。しばらく、そのまま飲んでおいでなさい」

彼は酒席から走り出していった。

梯子をかけ、梯子の上から、門外の人馬へ何かどなった。

おびただしい松明のいぶりである。十文字鎗、五ツ又の戈、袖搦みなどの捕物道具、見るからにもものものしい。

「おうつ、主の史進か。このほうは県城の県尉であるぞ。汝

の手で、賊をからめて突き出せばよし、さもなければ」

「まあまあ、お静かに願おう。せっかく、賊の三頭目を招いて、うまく酔いつぶさせようとしているところへ」

「では、賊と汝とは、同腹ではないと申すか」

「笑わしちやあいけません。大口を叩くようだが史家村一の旧家、親代々からの大名主だ。山賊ばらとぐるになって、なんの徳があらう。それよりは、三千貫の賞金は下さるでしよな」

「もとよりそれは公布にあること。ただし即座にここで突き出せばだが」

「だからよ、少し鳴りをひそめて、ここを遠巻きにして待つていておくんなさい。酒を飲ませて奴らを数珠つなぎに引縛

り、そのうえで、ここの門を開けますから」

史進は、もとの宴へ帰ってくると、家人若者に命じて、にわかには、家蔵にある金銀財宝の目ぼしい物をまとめさせ、女子供からそれらの荷物までを、数十人の屈強に担わせた。そして屋後の藁ぶき小屋へ、火をかけるといいつけた。

驚いた三頭目は、

「な、なんでこのお屋敷を焼き払うので？ ……まさか、われらを庇うためではごさいますまいな」

「いや、身の潔白をしめすためだ。こよいの出来事は、まるで貴公たちを罠にかけたようなものだから」

「ご冗談ではない。何が起ろうと、九紋龍どのが罠に陥したなどと思うわれらではありません。おうつ、待ってください、火をかけるのは」

一方へは絶叫しながら、彼らはみずから後ろへ両手を廻し、覚悟のほどを見せて言った。

「かばかり、潔いあなたに、山賊渡世のわれらが、おつきあいを願って、こんなご迷惑をかけたかと思えば、手前どもこそ申しわけがない。さあ、年貢の納めどき、われわれに縄打って、県城の役人へ突き出しておくんなさい」

「ばかをいえ。そんなことをしたら、史進一生の男がすたる。おれにそんな真似をしろというのは、おれに乞食をしろというのもおなじだ。……おお火の手があがった。ともかく、ここは斬りひらいて、一時、おめえたちの山寨へ落ちのびようぜ」

邸内の火を見て、門外の喊声もまたあがった。すでに、史進が鎗を小脇に門の門を外して躍り出したので、朱武、楊

春、陳達らともに斬って出ざるをえなかった。

黒けむりはたちまち疾風雲の翔けるに似、名月は血の色そのまま、剣光の雨と叫喚を下に見ていた。——まもなく掃かふる風葉のごとく、県尉の馬や捕手の群れは逃げ散った。

また一方。少華山へさしてヒタ走りに走った人影の列もある。そして、すべてが去った史家村の寂たる暁を、なおまだ、旧家百年の大棟木だの土倉だの四隣の木々は、ひとりバチバチと火をハゼつつ旺な炎を狂わせていた。

おもえばおれも愚かしい。——と史進は自嘲して呟いた。

——先祖はさだめし嘆くだろう。だが持って生れた性分ではしかたもない。あのとき、あの身代よりも、三人の賊に対する一片の義の方が重い気がしたのだから、こんな子を生んだ罪はやっぱり先祖にあるんだ、と。

「……だが、この山寨に、いつまで、なすこともなくいたところで始まらない。そうだ、今は家蔵もない身まま気ままの体、先年お別れした王ご師範を尋ねて、延安府へ行ってみよう」

少華山へ隠れてから約一ト月ほど後のこと。

九紋龍史進は、思い立った胸を三頭目に打ち明けて、「すまないが、ここへ避難した奉公人や若者は、時をみて正業に返してくれ。持ってきた金銀は、その折り、皆で分けるがいい。おれは、師匠の王進先生を尋ねてこれから関西の旅につく」

もちろん、朱武、陳達らの賊頭も、村の人々も彼との離別を悲しんで、極力とめた。けれど、この流離たるや、そもそ

も史進その人が、生れながらにして百八星中の一星たる宿命だったことによるものだろう。——やがては、芦花散る江頭の船べりに霜の戈をならべ、葭の葉かげに戦艇をしのばすなどの水滸の寨に、かの天罡地煞の諸星を会するにいたる先駆の第一星こそ、まさにこの人だったのである。

——さて、少華山を去って。

飄としてここに旅へ吹かれ出た史進の姿は、いかにも宋朝時代の若人好みな粹づくりに富んだ。

白羊羅紗の角を折った范陽帽子には、薔薇色の纓をひらめかせ、髪締めとしている紺の兜巾にも卵黄の帯飾りをつけている。

あくどい原色は嫌いなのだろう、服地も白麻の裾みじかな戦袍で、紅梅織の打紐を腰带とし、美しい長剣をつるし、青と白との縞の脚絆という軽快さ。もちろん足拵えは長旅に耐えうる八ツ乳の麻沓だった。

だが、身なりは粹に好んでみても、旅の宿とか食い物は選べもしない。野に伏し山に寝ねだった。それも二十日余りの旅路。ほどなく渭州という一市街についた。

「ははあ、ここにも経略府（外夷の防寨関）の一城があるのだな。ひよっとしたら、王ご師範の消息がわかるかもしれない」

歩いてみると、城内も六街三市といった賑やかさだ。雑閑の角に、茶舗が出ている。ずっと入って、床几から、

「おい、おやじ。泡茶でも一杯くれ」

「はい、はい。……お客さまは、旅の衆でいらっしやいますか」

「そうだ。おやじは知らんか。もと開封東京のお方で、王進

師範と仰っしやる人を尋ねてきたのだが」

「さあ、この経略府にも、王氏と名のるお方は幾人もおいでなでな。どの王さんやら、それだけでは、どうも」

すると外から大股に、ぬっと入ってきた壮漢がある。かたぶとりな肉塊を濃緑の緞子の戦袍でくるみ、頭には黒紗の疋頭巾、それには金色の徽章がピカと光っている。

さらに眼の光もただならず、丸っこい赫ら顔を、もじゃもじゃした鬚が取り巻いている。また腰なるは、太原風の帯ヒモとそして金環の飾りある剣。——問うまでもなくこれは軍装である。しかも身長仰ぐばかりであり、腰まわりも普通人の倍にちかい。

「おおこれは、提轄（憲兵）さまで。……ちようどよい折へ。そこなお客さま。お尋ねのお人とやらのことは、こちらのお方へ訊いてごらんなされませ」

史進は、床几を立て、ていねいに、

「ぶしつけですが、ものをお訊ねいたしますが」

「なんだ。なにかわが輩に用か」

「いえ。私は華州華陰県の者で、史進と申しますが、もしや当地に、もと東京におられた禁軍の師範王進というお方がおいでではございませんか。或いはまた、なんぞそのお方のお噂でもご承知はありませんか」

「うんにや……」と、提轄はヒゲ面を横に振ったが、ぎよろっと見つめて、

「王師範は当所にはおられんが、しかし、あんたは、もしや史家村の史進じゃないのか」

「えっ、どうしてご存知なんで」

「なるほど、聞きしにまさる者だ。貴公のことは、もうかねがね聞いておる。また、お訊ねの王師範も知らんではない」

「失礼ながらご尊名は」

「経略府に勤務する提轄で、姓は魯、名は達」

「魯提轄と仰っしゃるか。いや初対面とも思われぬ。こりやどうも」

「そうだ、こんな縁を、かりそめごとにしてはすまん。どうだ、茶ではつまらん。どこぞで一献あげたいと思うが」

「ありがとうございます。しかし王師範は、いったいどこにおいでなので」

「この渭州の守護は、延安府の経略使種閣下のご子息が当たっておられる。貴公が会いたがっている王師範は、たしか、種閣下をたずねていったお方だろう。たぶん今でも延安に居るよ」

「そう伺って、ひと安心した。では、おことばに甘えて、お供いたしましょう」

「おやじ」と、魯提轄は、憲兵らしい顔をきかせて「——茶銭はおれにつけておけ」

二人は肩を並べて往来へ出た。

魯達の恰幅も、史進の姿も、行きかう市の群集の中では群を抜いてみえる。

行くこと数百歩、ちよつと齒の抜けたような町中の空地に、何やら真っ黒に見物人がたかっていた。

気まぐれに、二人が人の肩ごしに覗きこんで見ると、どうやら香具師が口上を述べたてているものらしい。

香具師もいろいろだが、ここの空地でシャ嘎れ声を振りし

ぼつていたのは、三十がらみの痩せ浪人といった風な男。垢びかりした黒い袍に幅広な平帯の房を横に垂れ、反りの強い象牙柄の刀を佩いて、半月靴の足の先をやたらに右や左と交互に刎ね上げ、そして喋る間に水洩をすすったり、時にはチンと手洩を放って、その雄弁をふるっている。

しきりに、飛躍させているのは、足ばかりではない。左手にも右手にも一本ずつの杖を持ち、言に応じ、気合いに応え、二本の杖を、二本の傘のごとく旋して見せた。

——それから、めったに大道では公開しない秘術のかずかずを今日はごらんに入れよう——といっているような口上振れの最中だった。

「や、や。こいつあ奇遇だ」

とつぜん、史進が人中で呟いたので、魯提轄はその大きな眼を連れの顔へもどして。

「え、奇遇。あの香具師を、貴公はどこかで知っているのか」

「知ってるどころじゃありません。少年の頃、村で棒の手ほどきをうけた打虎将ノ李忠です」

そのとき、香具師の李忠の方でも、気がついてた。

「やあ、坊っちゃんじゃありませんか」

「やっぱり師匠だったね。何とこれは珍らしいところで」

「師匠なんて呼ばれちゃあ赤面します。お宅さまには長い間、居候していた厄介者の李忠に過ぎない」

魯達が、横から口をはさんだ。

「そんなことあ、どうだっていいや。これから飲みに行く途中だ。貴様もこいよ」

「待ってください。いま見物へ膏藥を配ったところだ。その銭

を集めてから、お供をする」

「なんだい、じれつたいな。効きもせぬ膏藥などを売りつけやがって。早くしろよ」

「まあ待ってくださいよ、こっちは商売、先はお客、そう手ツとり早くはいきません。なんなら、先へ行って下さい。坊っちゃんも、提轄さんも」

「こらっ、見物人ども」と、魯達は、たちどころに憲兵づらを作って。「——横着顔して、スツとぼけるな。はやく香具師へ銭を投げてやらんと、ぶん殴るぞ」

毛の生えている魯達の拳骨を見ては、もうおしまいだ。銭などはビタ一文も降らず、見物の男女は、クモの子みたいに一ぺんに逃げ散ってしまった。

六 晨に唄い女翠蓮を送って、晚霞に魯憲兵も逐電する
ること

渭州でも街なかの州橋橋畔に、潘飯店という酒楼がある。まず魯達から先に入った。

「こら。空いてるか、二階の卓は」

「才才これは提轄（憲兵）さまで。よくいらっしやいました。さ、どうぞ階上へ」

どこへいっても、魯提轄の職権と風貌とでは恐もてときまっている。帳場のあいそもソラ耳に、彼は史進と李忠のふたりを伴って二階へあがり、その一卓を繞って、三人鼎のごとき大腰をおろし合った。

「おい。酒を早く出せよ。それから前菜はいうまでもないが、

なんでも、美味い料理をどしどし持ってこい」

卓の賑わう間を、お互いに頼杖などして、四壁を見ると、金箔板の聯（柱懸け）に朱を沈めた文字で、

風ハ滞ル柳陰太平ノ酒旗

酒ハホドク佳人ノムネノ纏レ

杏花アマクシテ 志イマダシ

シバラク高歌シテ酔郷ニ入ラム

などある対句が読まれる。

世事の慷慨、他愛もない談笑、三人はすっかりいい機嫌になりいい仲になった。酒も四角（四合入りの酒瓶）を何度卓へ呼んだことやらわからない。——だが時折、魯提轄の神経を針で突ツつくような興醒めが洩れてきた。さつきから、どこかでシクシクいっている女の噁り泣きである。彼はついに持ち前の癩癩を起し、片足で床をどんと踏み鳴らしながら啾鳴った。

「やいこらっ。給仕人」

「へい。四角のお代りですか」

「ばか野郎、いくら飲んだって、そばからすぐ醒めてしまいわ。なんだい隣部屋（となり）の雨だれみたいなのソソは」

「どうもその……。あいすみません。お耳ざわりになりましたか」

「あたりまえだ。貴様にだって神経も耳もあるだろうによ。お連れしたわが輩のお客にだって相すまん。女だろ、あの泣き声は」

「酒楼あるきの歌唄いの親娘なんぞございませがね」

「ふうん。では貴様が弱い者いじめして泣かせやがったな」

「ご、ご冗談を。……それどころじゃなく、まだ夕方の灯にも間があるしと、隣の部屋で点心（菓子）などをやって宥（いた）っておいたんですよ。すぐ追ッ払ってまいりますから」

「待て待て。貴様でさえ可哀そうだと思ってるものを、追ッ払わせて、それでわが輩の酒が美味くなるもんか。連れてこいつ、ここへ」

「かまいませんか。親父付きの娘でございますぜ」
「たわけめ。色気などじゃない」

——油（あぶら）じみた境（とほり）の帳（とばり）を割（わ）って、やがて連れられてきた歌唄（うた）の父娘（おやこ）を見ると、もちろん夜の町（まち）でよく見る貧（ひん）しげな流（なが）シの芸人（げいじん）。おやじは四ツ竹（よつたけ）を持ち、娘（むすめ）は胡弓（こきゅう）を抱（かか）えている。

うす寒（さむ）げな白（しろ）の衫（わぎ）に、紅（あか）羅（ら）い裙子（はかま）の裳（も）を曳（ひ）き、白（しろ）粉（こな）瘦（し）せは、その頬（ほ）に見える（み）だけ（だけ）でなく、肩（かた）にも弱（よわ）々（々）しげな鬚（かげ）がある。だが、髪（かみ）にとめた安（やす）翡翠（ひすい）の釵（かんざし）一つ（ひとつ）が、さして美人（べいじん）でもないこの娘（むすめ）の可（かわ）憐（れ）さを、いとど秋（あき）の蝶（ちょう）のよう（よう）に眺（なが）めさせた。

「……やりきれんなあ、またここでも泣（な）かれちゃあ。頼（たの）むから、泣（な）くのだけはよせ。それよりは、何（なに）を悲（かな）しむのか、その理由（わけ）をひとつ訊（き）かせないか」

「はい……」と、娘（むすめ）はやつと、嗚咽（なげな）から袂（たもと）を離（はな）した。そして、さつきからただ、詫（わ）び入（い）るばかり（ばかり）だった老人（らうじん）とともに、

「わたくしたちは、もと開封（かいほう）東京（とうきょう）の者（もの）でございますが、重い税（ぜい）にくるしめられて、商（あ）売（ばい）もなりたらず、この渭州（いしゅう）へ流（なが）離（ら）うてまいりました。ところが、心（こゝろ）あての身（み）寄（よ）りも今（いま）はいず、

旅宿（たびしゆく）住居（ぢゆう）のうえに、母（はは）も長い病（わづら）患（い）で亡（な）くなる始（はじ）末（まつ）で、もう売（ばい）る物（もの）とて何（なに）一つ（ひとつ）ございませぬ。……で、つい人（ひと）様（さま）の口（くち）に乗り（のり）、さるお方（おなた）の世（よ）話（わ）にな（な）ったのが、そもそもこんな苛（か）責（せき）と因果（いんぐわ）に

しばられる間（ま）違（ちが）い（い）だ（だ）ったのでござい（い）ました」
と、「街（まち）のダニ」ともい（い）う（う）べき悪（あく）辣（らつ）な男（おとこ）の罫（わ）にか（か）った始（はじ）末（まつ）を、よう（よう）やく恟（おと）々（と）と打（うち）あ（あ）け（け）だ（だ）した。

よくある手（て）で。——途（と）方（か）に暮（く）れて（て）いた宿屋（しゆくまゐ）住居（ぢゆう）のこの父娘（おやこ）にも、まる（まる）で地獄（ぢごく）に仏（ぶつ）のよう（よう）な親切（おんせき）者（もの）があら（あら）わ（わ）れた。

世（よ）の中（なか）にはこん（こん）な親切（おんせき）なお方（おなた）もある（ある）もの（もの）か、と拝（わ）む（む）ば（ば）かりに信（ま）じ（じ）さ（さ）せてお（お）いた（いた）と（と）ころ（ころ）で、男（おとこ）は宿屋（しゆくまゐ）の亭主（ていしゆ）をつ（つ）か（か）つ（つ）て、妾（めかけ）にな（な）れ（れ）と、半（はん）ば脅（おど）迫（せ）じ（じ）み（み）た話（わ）をもち（もち）か（か）けた。ぜ（ぜ）ひ（ひ）なく身（み）をま（ま）か（か）せ（せ）ると、次（つぎ）には、家（いへ）に入（い）れて家具（かぐ）衣（い）装（さう）も揃（そろ）えて（て）や（や）ら（ら）う（う）が、それ（それ）にはお前（おまへ）とい（い）う（う）者（もの）の体（てい）に大（おほ）きな資（も）本（とて）を（を）か（か）ける（ける）こと（こと）だ。身代金（みしろがね）三（さん）千（せん）貫（貫）の証（しやう）文（ぶん）を（を）書（か）け（け）とい（い）う（う）。

と（と）ころ（ころ）が、身（み）は引（ひ）取（と）つ（つ）て（て）くれ（くれ）た（た）もの（もの）、本（ほん）妻（さい）とい（い）う（う）のは老（らう）虎（こ）のよう（よう）な強（か）い（い）女（に）で、三（み）月（つき）ともた（た）た（た）ない（ない）う（う）ち（ち）に、その家（いへ）からい（い）び（び）り出（で）さ（さ）れ（れ）て（て）し（し）ま（ま）つ（つ）た。それ（それ）のみ（み）か、衣（い）服（ふく）一（いっ）枚（まい）く（く）れ（れ）る（る）で（で）なし、も（も）ち（ち）ろ（ろ）ん、先（ま）に書（か）か（か）さ（さ）れた（た）証（しやう）文（ぶん）の金（かね）など、鏢（びた）一文（もん）も（も）くれ（くれ）は（は）し（し）ない（ない）。

あ（あ）ま（ま）つ（つ）さ（さ）え、その後（のち）と（と）な（な）ると、こん（こん）ど（ど）は男（おとこ）が空（そら）証（しやう）文（ぶん）を（を）た（た）て（て）と（と）つ（つ）て「——先（ま）に渡（わた）した（た）身代金（みしろがね）を（を）返（かへ）せ」とい（い）う強（こわ）談（だん）判（はん）だ。

宿（しゆく）の亭主（ていしゆ）も事（こと）が嘘（うそ）な（な）のは、百（ひゃく）も承（おし）知（ち）のく（く）せ（せ）に（に）し（し）て、ぐる（ぐる）にな（な）つ（つ）て（て）か、高（たか）利（り）の日（ひ）金（かね）貸（か）み（み）たい（たい）に日（ひ）々（ごと）々（ごと）、父（おや）娘（むすめ）を責（せ）め（め）た（た）て（て）る（る）。し（し）かも父（おや）娘（むすめ）はこ（こ）う（う）して夜（よ）な夜（よ）な渭州（いしゅう）の紅（べに）燈（とう）街（がい）に、儂（はかな）い（い）四（よ）ツ（つ）竹（たけ）と胡弓（こきゅう）を合（あ）奏（そう）せ（せ）て、露（つゆ）命（いのち）もほ（ほ）そ（そ）凌（しの）いで（いで）る（る）あり（あり）さま（さま）の（の）に、罫（わ）に帰（かへ）れば、稼（かせ）ぎ（ぎ）の七（しち）分（ぶん）は、ま（ま）ず鬼（おに）の手（て）に搾（さく）取（と）さ（さ）れ（れ）て（て）し（し）ま（ま）う始（はじ）末（まつ）。「……もう死（し）ぬ（ぬ）よ（よ）り（り）ほ（ほ）か（か）には」と、つ（つ）い（い）狭（せま）い（い）心（こゝろ）に（に）つ（つ）き（き）つ（つ）め（め）ら（ら）れ（れ）て（て）お（お）り（り）ま（ま）した（た）、と（と）語（かた）る（る）ので（ので）あ（あ）つ（つ）た（た）。

「……ふウム。ひでえやつがあるものだな。して、おやじさん、おまえの名は。また娘御はお幾ッだえ」

魯提轄は涙もろい。ぼつ然たる憤りの半面では、時々、臉をぱちぱちさせていた。

「はい、てまえの苗字は、金と申し、娘は翠蓮と云って、十九になりまする」

「泊っていないさる宿屋つてえのは」

「東門内の魯家という安旅籠でございますが」

「む。あの魯家か。いや、かんじんなのは、そいつよりも、親切ごかしに人の娘を弄んで、その上にもなお、おめえたちのしがねえ夜稼ぎの小銭まで搾り奪ろうとしている悪どい野郎のほうだった。いったい、そんな畜生は、どこのどいつだ？」

「そんなことを喋ると、あとでまた、どんな恐ろしい目に会わされるかしれません」

「ばかアいえ。わが輩は州の提轄（憲兵）で人も知る魯達だ。恐がらんでもいい。わが輩がついている」

「じつは、そのお方というのは、鄭の大旦那さまでございます」

「鄭の大旦那？」

「はい、状元橋の西詰め、大きな肉舗を構えていらつしやる関西きつてのお顔さきの……」

「えっ、あの鄭か」と魯提轄は、ベツと唾でもするように唇を鳴らして「——鄭の大旦那なんてご丁寧ないうから、どいつのことかと思つたら、あの豚殺しのデブ野郎だったのか。ようし、わが輩の耳に入った以上、ただではおかん」

魯達は、連れの史進と李忠へ向つて。

「お二人とも、ここで飲んでいくださらんか。一ト走り飛んでいって、その悪党めを一ツうんと懲らしてまいるから」

史進は、彼の短気なのに、呆れ顔だった。

「まあ、明日のことにでもなすつたらどうです。せつかく今日は三人邂逅の愉快な鼎座。酒も話もまだこれからなのに」

「なるほど。それもそうか——」魯達はやつと、思い直した態で。「……じゃあ、ここでわが輩が持ち合せの五両を出す。

すまないが貴公たちも、この不愾な酒樓芸人のために、一夕の歌でも唄わせたと思つて、餞別をやってくれんか。……それを路銀に故郷へ帰してやりたいと思うが」

「おお、よいところへお氣がついた」

史進はすぐ十両出した。だが、膏藥売りの李忠には、ちょっと辛い。しぶしぶ二両ほど卓の上へおくのを見て、魯達は爪の先で、それをぼんと弾き返した。

「何だ、吝つたれやがッて、二両ばかりとは。——まあいいや、爺さん、十五両もありゃあ、宿屋払いをして、あとを路銀に国へ帰れようが。……あれまた、シユクシユク始めやがったぜ。よせやい、湿っぽいのはわが輩、大の禁物だと断つているじゃないか。さあさあ、これを持って今夜は流シも休み、早く宿へ帰つて身始末の算段でもしておきねえ。なアに宿の亭主が何と吐かそうと、そんな心配は一切するな。わが輩がまた明朝、宿屋の魯家を覗いてやるからな」

これで、さっぱりしたのさう。金翠蓮父娘が何度も伏し拜んで立ち去つた後も、三人は灯ともる頃まで、快飲していた。そして蹠跟と夜の街へ歩き出ると、やがて四ツ辻で、

「——ではまた、いつか会おうぜ」

と史進、李忠、魯提轄、各々歸る先へ袂を別った。

翌朝のことである。——魯達はもう例の憲兵服を纏った偉軀を場末町にあらわして、安旅籠の魯家の入口に立っていた。

見ると、軒下の手押し車に、小さい荷柙や食器籠やボロを包んだ一世帯が、積んである。「さては翠蓮父娘が旅立ちの荷物だな」と、何か安心されたのもつかの間で、奥の方から亭主の喚き声につづいて、翠蓮父娘の詫び声やら悲鳴などがガタガタ聞え出した。

「おいっ、金の父娘、なにしとるか。早く出かけろ、出かけろ」

魯達の声を外に聞くと、宿屋の亭主が飛びだしてきて、こんどは彼に食ッてかかった。「翠蓮には貸金の証文がある。その取立てを鄭旦那から依頼されているのに、このまま旅立たれてたまるものか。それともお前さんが代ッて三千貫をここできれいに払うとでもいうんですかい」と、血相もえらい凄文句である。

「ふざけるなッ、きさまも吸血鬼の一匹だな。このヤブ蚊野郎」

靴を高く上げて、彼の胸いたを蹴るや、軽くやったつもりだったが、亭主の体は毬になってニツ四ツ転がった。

「……ち、畜生ッ」と起きあがってくるのを、二度目の靴先が、さらに一蹴を与えると、亭主の影の見失われた溝から黒い泥飛沫がたかくあがった。

「この提轄め、よくも家の旦那を溝に叩ッ込みやあがったな」

ここに飼われている若い者の一人とみえる。けなげにも薪を持って撲りかかってきた。魯達は身もかわさず、その男の

どこかをつかんだ。アツという声が宙をかすめたと思うと、男の体は廂の上に抛り上げられ、廂を破って、どたん大地へ回ってきた。

「さあ、翠蓮も爺さんも、早く手車を押してここを立て。何をぶるぶる慄えているのか。わが輩がここで見送ってやる。かまわんかまわん、旅へ急げ」

——あと振り返り振り返り、朝霧の中を、渭州の場末から立ち退いていく父娘の姿へ、魯達もちよつと大きな手を振って見せた。そして彼自身はまた、やがて場末の辻から繁華な大通りのほうへ鈍々として歩きだしていた。

「おうっ、大将。いつも繁昌だな。肉の上等なところを、十斤、賽の目に切つてくれんか」

状元橋の橋だもと。精肉卸売小売と見える大きな店のうちへ、ずつと入っていった魯達は、その椅子の一つへ、でんと腰をおろした。そして十人からの店員が立ち働いている肉切り台だの、その後ろに吊つてある沢山な丸裸の豚だの、またそれとよく似ている主人の鄭が何か筆を持って屈みこんでいた帳場の辺までを、ジロと大きな眼で睨めまわした。

「ようっ、これは提轄さまで」と、鄭は彼と見たので如才なく帳場を離れ——「おめずらしいじゃござんせんか。直々の御用なんてえのは」

「ベチャクチャいってくれんでもいい。今日はわが輩の主君、種経略使（種は名、経略は外夷防寨の城主）の若殿のおやしきで招待があるんだ。脂身などはちツとも交じらんとこを切れよ」

「かしこまりました。へい、賽の目にね。おいよ店の衆、十斤がとこ、極く上々を急いで」

「おっと待て。きさまあ肉屋の主人じゃないか。関西五路の顔役とか何とかいわれて、こんな羽振りと繁昌を見ているのも、当地のご守護神若殿のおひきたてによるものとは思わんか。自分で切れ」

「こいつアおそれ入りました。まったく、こんな時こそ、ひとつせいぜい……」と、鄭はさっそく、自身、肉切り台の前に立った。そして、さすが手練れた大きな肉切り包丁を鮮やかに使つて見せ、肉も吟味に吟味して、やつとのこと、

「どうも、お待たせ申しあげました」

と、大きな蓮の葉にくるんで差しだした。魯達は、うなずいて。

「そこへ置け。次には脂身ばかりのとこを、もう十斤」

「へえ。脂身ばかりなんて、何になさるんで」

「よけいな詮索するな。それも賽の目だぞ」

「むずかしいなあ。が、ようがす」

また小半刻もかかつて、鄭がこれをも、包んで出すと、今度は豚の軟骨ばかりを十斤、同様に切れと魯達が命じた。

これには鄭も、むっとした顔つきだったが、笑いに紛らして。

「旦那あ、人が悪いや。お勲なすっちゃいけやせんぞ」

「洒落たことをぬかすな。自体、きさまの面は勲りものにてきたるじゃないか」

「何をっ」と、鄭のこめかみに、太い青筋がムラツと燃えあがった。「——おい、もう一ぺんいってみな。州の提轄だと思

えばこそ、さつきから虫を泳えていたんだぞ」

「そうか。わが輩もきさまが本性をむきだすのを待っていたんだ。もう一皮むいてみせろ」

いうやいな魯達は、蓮の葉包みの二た包みの肉を、ぱつと鄭の顔へ投げつけた。肉の雨を浴びたとたん、鄭も鋭利な骨削り包丁を持って、肉切り台を躍りこえ、

「うぬ。やりやあがったな」

一閃、ずんぐり丸い巨体を低めて、魯達のふところへ体当たりしてきた。

ぴしゃツと、大きな響きがしたのは、魯達の平手が瞬前に彼の横顔をはたきつけたものらしい。よろつと、泳ぎかけるその弱腰へ、もひとつ、

「今日の相手は、ちと違うぞ。この豚めが」

蹴足をくれて、店先から街上へ吹ツ飛ばした。

鄭は火の玉になって起き上がる。だが、立つやいな魯達の鉄拳に眼じりを一つ見舞われて「げふっ」と奇妙な叫びをもらした。——ところは状元橋の目抜き通り、たちまちまっ黒な見物人の弥次声（やじこゑ）が周りをつつむ。関西五路の顔役としては、いまさら、逃げもできなからう。執念ぶかく魯達の大腰にしがみついて離れない。

「ええい街のダニめ。よくも憐れな歌唱いの父娘を、骨の髄までしゃぶりやがったな。この味はその利息だ」

振りほどいて突き上げた鉄拳は、鄭の顎を砕いたとみえ、仰向けにぶつたおれた顔は血を噴いて、完全に伸びてしまつたようである。

「ざまア見さらせ」と、魯達はなおも彼の胸いたを踏んづけ

て見得を切ったが、鄭の反抗はそれきりだった。ひよいと見ると、片眼は眼窩から流れ出し、齒は舌を噛んでいる。「……しまった、こいつはいけねえ、死んじまった」

魯達は、ちよつと後悔の色を見せた。そしてすぐ見物の群れを割って去りかけたが、一顧するや、わざと後ろへこんな捨て言葉を抛った。

「ち。口ほどもねえ空つかいめ。くたばった振りなどしやがって」

——状元橋を渡るやいな、彼の歩速はだんだん早くなっていた。「つい、大変なことをしてしまった。人民の安寧を守る提轄が、人民を撲り殺した。こいつは、ただですむはずはない」と、心中の自責に追ツかけられている風だ。

彼は、自分の下宿へ帰るやいな、そそくさと持ち物や小費銀をふところにし、その月の下宿代だけを部屋に残して、ぶいとどこへやら飛びだした。手には一振の棒をかいこみ、齊天大聖孫悟空が、雲を翔けるにさながらの態だった。

時もあらず同日の午後には、州の王觀察なる役人が、同心捕手あまたを連れてここの下宿屋へ殺到したが、すでに魯提轄は風を食らってしまったあと。

さはいえ五路の顔役、鄭の遺族や乾分には財力もある暴力もある。また旅籠の魯家からも、同時に大げさな訴えが州役署へ出されていた。当然、府尹もこれは捨ておけなかった。

——逃亡した提轄魯達にたいしては、天下の随所、いついかなる土地なりと、見つけ次第に逮捕処分構いなし、の令が出された。わけて特徴いちじるしい彼の風貌背丈などの詳細な人相書がともに諸県へわたって配付されたのはいうまでもな

い。

七 蘭花の臉は恩人に会って涙し、

五台山の剃刀は魯を坊主とすること

食う箸には腕力の要がない。豪傑も案外、職を失うと世間に弱い。逐電の後の魯達は、野に伏し山に寝ね、今は、空き腹も馴れツ子のような姿だった。

漂泊うことも幾月か。彼の姿はほどなくここの代州雁門県(山西省北部)の街中に見出される。街は周八支里の城壁にめぐらされ、雁門山に拠る雁門関は、つねに、北狄の侵略にそなえていた。しかも古来たびたび、匈奴の南下に侵された歴史の古い痕跡は、今とて、どこかここの繁華に哀しい陰翳を消していない。

「おや、ここでもまた、揭示に人だかりがしてやがる。この辺まで落ちてくれば、もう、よもやと思つていたのになあ」
辻の人混みにまじって、魯達は暢気そうに、逮捕告示と、自分の人相書を眺めていた。

——代州雁門県署、コレヲ告示ス。

渭州ニオケル殺人犯ノ軍籍者、提轄魯達ナル凶徒、コノ地方ニ立廻ラバ即刻、官へ速報スベシ。庇護行為ノ者ハ同罪タルベシ。モシ又、上告ノ善ヲ為スアラバ、即チ、賞一千貫文ヲ降サルル者也

魯達のすぐ耳のそばで、声を出して読んでいる男や、杖の上に白髯の顎を乗せている老翁や、心憶えに筆写している書生風なのや、女や労働者や物売りやら、なんとも雑多な陽溜

りの匂いにおが蒸むれ立たっている。

それを他人ひと事ことみたい顔かほで眺ながめていた魯ろ達は、

「……お、おい。なにをするんだ、なにを」

しきりに、自分の袂たもとを引ひッ張はる後あとろの老ろう爺じやを振り向むいて、眼まなこにかどを立てたが、

「おや、おぬしは翠すい蓮れんの」

「しっ。……ま、こちらへ」

老ろう爺じやは遮しや二む無む二、彼かれを人ひとなき所ところまで引ひッ張はっていった。そしてさて、大きな吐つ息いきを一つあらためてほっとついた。

「さつきから、よう似にたお方かたと見ていたら、やはり恩おん人にんの魯ろ達ださまでございましたな。てもまあ、なんたる大胆だたんな……」

「おや金きんの爺ぢやさんだったのか。こいつあ意外くわいだ。故郷こきやうへ帰かえったものとはかり思おもってたら」

「じつはあれからの旅路りょろで、この地方ちほうの趙ちやうと仰おほっしやる分限者ぶんげんしやに行いき会あい、その方かたのお情じやうけに困こまわれて、今いまでは娘むすめの翠すい蓮れんも、この土地ちで一ひと戸こを持もつておりますので」

「オイオイ。また口くちのうまい豚野郎とんやらうに、ころりといかれているんじゃないか」

「いえもう恩人おんにんさま。その人は鄭ていなどと違ちがって真面目まじめなお方かた。翠蓮すいれんもあなたのお蔭かげだと朝夕あさゆふ口癖くちくせのように申まをしております。

何なによりは今の暮くれしを見ていただくのが一番いちばん。さ、どうぞおいでくださいまし」

「ど、どこへ連れていくんだわが輩わがたがを。……なに妾宅めかけ。そいつア苦手くでだナ」

「ま、そう仰おほっしやらずに」と、金老きんろう爺じやは無理むりに娘むすめの家いへへ伴ともなって帰かえった。それと聞いて、奥おくから走りはしりてた金翠蓮きんすいれんが、

「まあ。……魯ろ達ださま」

と、蘭花らんかの臉まがたにすぐ涙なみだをうかべ、この零落れいらくの恩人おんにんを遇ぐするに、細こやかな心こころかぎりを見みせたのはいうまでもない。

「ともあれ、お湯浴ゆあみでも」

と風呂ふろをすすめ、その間に、下男女中したにやちゆうを督とくして、鮮魚せんぎょ、若鶏わかつゆ、酢すの物ものなどの手早てはやい料理りやうり、さて杯はやら銀ぎんの酒瓶しゆびんやら、盆果ぼんか、点心てんしん（菓子かし）なども取揃とぞろえて、席せきも卓たの上うへ席せきにあがめ。

「さ、どうぞお一杯ひとつ。そして心こころからおくつろぎくださいまして」

「眼まなこが眩くらみそうなご馳走ちしうだな。どうも近頃ちかごろのわが輩わがたがには、もつたいない」

「恩人おんにんさまに、こんな流浪りうらうのお苦くしみをかけたのも、思おもえば全く私わたしども父娘おやこのためで」

「よしてもらいたいな、いちいち恩人おんにんさま恩人おんにんさまといわれちゃあ、なんだか酒しゆも美味うまいくなくなるじゃないか」

「はいはい。もう申しませんが、もひとつだけ、いわせていただきます。あれ以来いらいは、紅紙べにがみのお牌ふだにお名前なをしるし、朝夕あさゆふお線香せんかうを上げて娘むすめと拝をがんでおりました。ですから今日けふのご縁ゆかりも、神仏かみぶつの巡めぐり合あわせと思おもわずにおられません。のう翠蓮すいれん、

おまえもこんな欣うれしいことはあるまい」

「なんといいっていいんでしょう。私はもう、何なにだか、泣なけて泣なけて……」

「こりゃあいかん。お志こころざしは万々まんなうれしいが、翠蓮すいれんのシユクシユクだけは、わが輩わがたが、ご馳走ちしうにいただきかねる」

「ま、ごめんさい。ほんに涙なみだはお嫌きらいでございましたのね。もう欣うれし泣なきもいたしませんから、陽気やうきにお過あまごしあそ

ばして」

ところが、やがて黄昏れ近い頃、戸外でがやがや人騒ぎが聞えだした。風の音にも心をおく身、魯達が窓から下をさし覗くと、手に手に棍棒などを持った若者二、三十人をひき連れて、馬に乗った長者風の一人物が、しきりと妾宅の内外を窺っている。

「来たな」と、でも直覚したのか、魯達が裏屋根へ躍りでようとしたので、金老爺はあわててその腰帯をつかまえた。

「魯達さま、お待ちください。外へ来たのは、翠蓮がお世話になってる趙家のお主でございます。趙の長者も、かねがね娘の話を聞いて、いたくあなたさまの義侠に感じておいでだったのに、なにか勘違いでもなすつたに違いございません。ま、ちょっとこの老爺がわけをお告げしてまいりますから」

あたふたと、金は階下へ馳け下りていった。ほどなく、事は氷解したものとみえ、若者たちは追い返され、趙の長者一名だけが、老爺に伴われて上がってきた。

「はははは。どうも変な気を廻して、とんだご無礼におよぶところでした。わしが翠蓮を世話しておる趙という者ですが、そこもとがかねて聞きおよぶ魯達どのか」

「いや、お互い危ないところだった。いかにもわが輩が提轄くずれの魯達です。どうもお留守ちゆうにうかがって」

「なんのなんの。事、さように分ったらこれも一つの奇縁。

翠蓮、こよいはお前の恩人を交じえて大いに楽しく飲もう。

酒肴もすっきり新たにかえるがいい」

長者の風というか、趙は五十年配だが頗る大容量な人柄に見

える。あるいは義心の人に報ゆるに義心をもって接しようと努めているのかもわからない。灯は闌けて酒興も酣に入る

と、
「どうです、魯達どの。こんな街中では気もゆるせません。ひとつ私の田舎へきて、ゆっくりご逗留なさいませぬか」

「かたじけない。して田舎のお屋敷というのは」

「わずか十里の郊外、七宝村と申す静かなところですが」

「なんらのあてもない身空。甘えるようだが、そいつは一つご厄介をねがおうか」

この話には、翠蓮父娘もわがことのようによるこんだ。かくて趙の長者と馬を並べて、魯達が山紫水明な七宝村へ入ったのは次の日のことだった。

長者の邸は富に飽かせたものである。魯達には窮屈なほど下へもおかない。彼の恐縮を、趙は笑って、

「なにもそうお固くなるにはおよびませんよ。四海みな兄弟という言葉がある」

げにもそうだが、世間はそうではない。余り長居も——と十日目ごろには暇乞いをと思っていると、その晩の酒宴で、趙がこんな相談の口をきりだした。

「へんなおすすめだが、これも宿世の約束ごとやらも知れぬ。

……とお考えなすって、ひとつ僧籍にお入りになってみるお気持はありませんか」

「えっ坊主に。……これは驚いた、わが輩に坊主になれと勧めたのは、ご主人、貴公が初めてだな。元来、みじんの仏性もないわが輩に」

「無理にともおすすめできませんが、じつは先日、あなたを

怪しんで、街の若者をかたらい、翠蓮の家の前へ押しかけさせたため、あれが噂の因になって、その後ちらちら油断のならぬ風説を巷で耳にいたします。万一があつてはと、私もひそかに自責を覚えておるものですから」

「いや、この上ご迷惑をかけては、魯達こそ申しわけない。すぐにも退散するでしょう」

「いやいや。その前に、いま申した僧侶に転化する生き方もあるということ、ここで一考なすってみては、どんなものかな。……もしお気があるなら万端の手続き費用、また五花ノ度牒（官印のある僧籍免許状）などもさっそく調えるが」

「いったい、寺入りするといえは、どこの寺へなので」

「ここより三十里彼方に、五台山という名山がある。一山の大道場は文殊院といつて、結構壮麗、七堂の伽藍と多宝塔の美は翠色に映え、七百の出家たちの上にある碩学は智真長老といつて、私とは兄弟分ともいえる仲でして」

「ほ。なんだか悪くない気もしてくるな」

「しかも、父祖代々からの大檀越でもあり、寺の造立や行事には、寄進はもちろん、なにごとにも座主の相談にあずかつておる次第。ただひとつ、願望として欠けているのは、わが家から有縁の一僧も寺籍に加わっていないことだけです。どうでしょうな、魯達どの」

「やってみるか、ひとつ」

「はははは。やってみるでは困りますがね」

「いや、発心しよう。この辺で魯達も大人しく人なみに返れという亡母亡父のおさとしかも知れん。お願い申すといいたしましよう」

彼にとつては一大転機にちがいない。ちよつと淋しげな顔もしたが、話はきまつた。

なにかの準備に、数日は要した。さて入寺登山の日となれば、二挺の山轎の荷持ちの男どもが五台山へさしていった。すでに一山の長老や僧衆とも、得度の式、贈物の施入、あとの祝いなど、諸事しめし合せはついている。

轎は山僧大列の中を通過して、方丈の前で降り、まず、喫茶一碗の施を拝し裏の井泉で垢穢を洗う。……ほどなく梵鐘いんいんと鳴る中を導師に引かれて、長い廊をうねり曲がり、三尊の灯華おごそかな本堂へ進む。

見ると、一つの禅椅（寺椅子）が空いていたので、魯達は澄ましこんでそれに腰かけた。すると趙の長者は、大いにまごついて、坐りかけた身を起し、禅椅に倚っている魯達のそばへきて、彼の耳へ口をよせてささやいた。

「あなたは、ここへきて出家を願う身、一山の長老と差し向つて腰かけたりしてはなりませんよ」

「あ。なるほど」

魯達は後へ退がって、長者の趙とともに、新入生のように立った。

正面には長老、首座、以下順に東西二列となつて、紫金紅金の袈裟光りもまばゆく立ち流れて見えたのは、維那、侍者、監寺、都寺、知客、書記らの役僧たちか。——いずれも大きく口を結び、眸を澄まし、見るがごとく、見ぬがごとく、新入りの魯達をひそかに凝視の態だったが、どの顔つきにも「……はてな？」と、いいかげんな怪訝りが甲乙なく漂っていた。そうした心のうちで、誰も彼もが密かに思うらく。「……ど

う眺めても、いかにもぶっそうな人相だな」「あれで出家発心とは?」「……趙檀越のご推薦だが、あの気味わるい居ずまいの不遜さといったらない」「……だが、長老もおひきうけとあれば」などと、声なきものも、自然、並いる姿の目鼻には妙な微風となつて現われずにいなかった。だが、どこ風吹くかの魯達は、この森厳さと山冷えに、噓でも覚えてきたか、しきりと鼻に皺をよせて、鼻をもぐもぐさせていた。

なにを感じ入ってしまったのか、まるで棒を呑んだように魯達は直立のままである。趙の長者はふと気づいて、また隣の袂をそつと引つ張つて注意をあたえた。

「合掌です……合掌作礼しなければいけませんよ。あなたのために、いよいよ上人さまが、お剃刀の式をとるのでから」「あ、そうなんです?」

魯達も慌てて掌を合せる。——見れば長老の上人は、扠子を払つて、やおら禅椅に倚つた様子。大香炉は薰々たる龍煙を吐き、この日長者が供えたお香料の銀子、織物、その他の目録にまずうやうやしく敬礼をほどこす。そこで咳一声、魯達が発心による出家得度の願文を高々と読む。

……終ると、香煙の渦の中にある上人の顔は、そのままいつのまにやら定に入つたすがただった。膝に印を結び、跏趺坐瞑目することしばらく、やがてのこと、何か憑り移つたようにこういった。

「——善哉、善哉。この漢はこれ、天の一星につらなる宿性。元の心は剛にして直なり。粗暴乱行はしばし軌道を得ざるがためのみ。ゆくゆくは悟りに会つて、非凡の往生、必ずや待

つあらん。……喝ツ」

とたんに、法鼓がとどろき、再びの梵鐘が鳴ると、二人の稚子僧が進んできて、魯達のかぶっている帽子をとらせ、彼の手をとつて上人の法座の下へ、ひざまずかせた。

役僧の維那が、お剃刀を持って立つ。侍者は耳盥を捧げ、都寺は櫛をとつて、魯達の髪の毛を九筋に梳いて束ね分ける。……剃刀はジャリジャリと、彼の横びんから頂天の方へお月さまでも描くように剃り上げてゆく。

「……?」

魯達はへんな気持ちである。自分の容貌がどんな珍しいものになつたらうかと気味わるかつた。が、頭が急に寒々と剃り終つて、その剃刀が髻のところへくると、彼は慌てた。

「あ。待つてくれい。ここらは、ちつとぐらい残しといっておくんないよ」

衆僧は、どつと笑う。——それを鎮めるように、法座の智真人が、大喝で偈をとへえた。

「——寸草留メズ、六根清淨ナリ。汝ノタメ剃ツテ除キ、争競ヲ免ガレ得セシム。……咄ツ、ミナ剃リ落セ」

魯達はもうベソもかけない。ここで首座は、長者に代つて九花の度牒を法座にささげ、新発意魯達のために、願わくば「法名」を与えたまへと請う。

上人は、おごそかにまた、次の一偈をくだして、度牒を書記にわたし、書記は筆を取つて「法名」をそれに書きこむ。偈にいわく。

靈光一点

価値千金

仏法广大

賜名智深

すなわち、新発意の僧名は「智深」と名づけられたのだ。

——書記からその度牒を手渡されると、これで彼も形だけは出家並の一人となったわけである。それから、長老は、彼の青いテラテラな頭上へ手をのせて「戒」を授けた。

「一に仏法に帰依、二に正法に帰奉、三に師友に帰敬。これを三帰という。……次の五戒とは、殺生、偷盗、邪淫、貪酒、妄語のことじゃ。守るか」

「はい。守ります」

魯智深が答えると、なぜかまわりでまた笑った。禪の宗門では、ただ「応」とか「否」とか一語で答えるのが作法だからで、智深はことごと顔を赤くするばかりだった。

晩には雲堂で大饗（斎の馳走）が行われた。趙の長者から祝いの品々や心づけが端から端まで配られた。——こうして長者は、翌日、下山にさいして、魯智深を一人、選仏場の木蔭へ呼んで、しんみりと言ひ残した。

「馴れぬ生活で、初めのほどはお辛いでしようが、どうかみツしり修行して下さいよ。長老にも、くれぐれお願いしてありますから」

「どうも、えらい厄介になりましたな。が、ご安心してください。もうこの頭では、生れ変わって大人しくなるしかありません」

と、彼は青い頭を叩いてみせた。

だが、趙の山轎を見送って、叢林の一房に帰ってくると、彼はもう長者の言も忘れ顔に、ごろりと仰向けに寝ころんでいた。

すると、禅床で修行中の二、三名が覗きにきて。

「おい、新発意。なぜ坐禅でもしないのか」

むくむくと身をもたげると、魯智深の方こそ、なんとも不審そうに、両手で頼杖したままいう。

「三帰のうちにも、五戒の中にも、寝ころんじやいけないという「戒」はなかったぜ」

修行僧は呆れて、首座に訴えたが、首座も手がつけられないとみたか。

「いや、あの方外人は、長老にいわせると、なんでも天の七星の宿性をうけた者とかであるそうな。当分はまあ放ツといってみるしかあるまい」

智深の起居は、まるでところを得た猛獣のようなものである。誰も干渉の仕手がないのをいい気にして、眠れば雷のごときいびき、醒むれば、仏殿の裏、浄林の蔭、ところ嫌わず放尿もするといった態たらく。

——かくて早くも五台山の夏から秋の四、五カ月も過ぎ、季は紅葉の燃ゆる晩秋の頃となった。

なんとなく里恋しく、魯智深は墨染の衣に紺の腰帯をむすび、僧鞋を新たに、ぶらと文殊院から麓道のほうへ降りていった。

「……はてな。こいつはたまらぬぞ。ぶウんと、久しく忘れていた香が、どこからともなく風にのってくるが?」

それは秋草の花の香ならぬ酒の匂いだった。

数歩のうちに、下のほうから一荷の酒桶をかついで登ってくる男が見えた。魯智深は、はからずも巡り会った恋人にでも引かれるように、

「おい、ちょっと待った」

と、男の担い棒へ手をかけて押しとどめた。

八 百花の刺青は紅の肌いれずみに燃え、

魯和尚の大酔ろに一山いっさんもゆるぐ事

荷担棒にないぼうの酒桶は、男の肩の両端でブランと揺れた。もちろんフタの隙からこぼれ出た少しの酒が男の膝や地へ沁みこんで芳醇な香をふんだんに放ったのはいうまでもない。

「あつ。も、もつたいねえ」

抑えていた棒先の片手をそのままに、魯智深ろちしんがこぼれた酒を鼻で追っていくような恰好を見せたので、酒屋男はなおぎよつとして怪しんだ。

「な、なんでござんすか、お坊さま。いったいなんの御用でてまえをお留めなすつたんで？」

「酒だろ桶の中は。どうも、たいした酒だな。どこへ持っていくんだ」

「山上の仁王門にご修理がございますので、そこに泊りこみで働いている塗師ぬし、瓦師かわうし、仏師ぶつしなどの職人方へ売りにいきますんで」

「ふうむ……」と、智深は絶えず鼻うごめかせながら「畜生。うまくやってやがるなあ」

——そこで彼はもう一言、おれにもそれを売ってくれい、と喉の辺までは出しかけたが、ぐつと唾をのむ音をさせて。

「どうも坊主はまことに不便だな。が、まあ……出家の身だ、死んだと思つてあきらめようかい。……やい酒屋」

「へい」

「こぼさずに担いでいけよ。石コロ坂に飲ませたって、坂道がいい色になって嬉しがりはせんぜ」

「どうもご親切さまに」

「ふざけるな、わが輩は泣きてえんだ。いまましい奴に出ツくわしたわえ。早く行ツちまえ」

眼をつむって、そこは大股に馳け去った。そしてやがてのこと。麓の明媚な風光が展かれてきたと思うと、また下のほうから、いとものどかな鼻唄調子が聞えてきた。

この辺は、漢の高祖が楚の大軍をやぶった古戦場である。またかの有名な項羽と虞美人が最期の悲涙を濡らして相擁した烏江の夜陣のあとに近い。だから附近の牧童や里人も今にそれを俚謡として歌う。

九里山の草木は知つてるとサ、戦場のあとだとサ

おらも拾つたよ、サビ刀、土になった槍

烏江の水は風に捲かれて、アレ見せる

虞姫と項羽の、別れともない身もだえを

「おや、また何か担いできやがったぞ。ほほう。やってくるのはまたぞろ酒屋男だわえ。どうも今日はよくよく運の悪い日とみえるな」

おそらく、うさん臭い大坊主と先に恐れたのだろう、酒屋男は鼻唄をぷつんとやめた。そつとスレ違おうとしたのである。だが、あいにくな山坂である。ばしヤツと桶のうちから少し揺りこぼしたからたまらない。魯智深はぐらつと目眩にくるまれて。

「おツと、と、と。……こら待て酒屋、どうも貴様は不量見なやつだな。なぜこぼす」

「ど、どうかご勘弁のほどを。……お法衣でも穢しましたか」
「うんにや、さに非ず。穢されたいのだ。その桶の酒をわが輩に売れい」

「めッそももない。沙門のお方に酒を売るのは御本山の法度なんで、そんなことしたら、てまえはこの土地に住めなくなります」

「かまわん。もう我慢ならぬ」

「かまわんたって、こつちには妻子もおりまする。お売りするわけにゆきません」

「えい、七面倒な」

「あ痛ッ」

軽くやっつたつもりだが、酒屋男は天秤棒から肩をはずして、もんどり打った。

一荷は倒れ、一荷は無事だった。——智深はあわてて倒れた桶から先に救いあげ、また一方も持って、軽いのと重い桶とを、両手に引ッ提げたまま彼方の見晴し台の亭へ走りこんだ。

「ほうれ、値はとらすぞ」

何を投げたのか、腰をさすッている酒屋男のほうへ、物代をほうるが早いか、彼はもう桶のフタをとっていた。そして湯いた巨獣が流れに鼻を沈めるような姿で、がぼ……がぼ……がぼ……

ぶるん、と時折、首を上げて舌なめずりをし、顔を横に顎の霰を振って切る。

「う、うっ。たまらぬ」

重いほうの桶は、まず片づけた。さすがに少し骨が折れる

らしい。

「てへへへ。まだ底に残っておるな。ようしッ」
墨染の法衣を刎ねて、諸肌ぬげば、ぱッと酒気に紅を染

めた智深が七尺のりゅうりゅうたる筋肉の背には、渭水の刺青師が百日かけて彫ったという百花鳥のいれずみが、春らんまんを、ここに集めたかのように燃えていた。

「……ううい。ああ、なんとよい眺めだ、絶景絶景。腹の虫も雀踊りしおるわ。……待て待て、まだまいるぞ」

軽いほうの桶の耳を両手でつかんだ。毛の生えている丹田（下腹）がぐうっとそっくり返ったと思うと、桶の中から滝を呑むように飲みだした。もちろん、その何分の一かは、あだかも岩肌を伝う小さい溪水みたいに彼の胸毛や法衣をビシヤビシヤにして地に吸われている。

「むむ、これで、まずご満足、ご満足——」と、智深はたちまち混沌たる愉快にくるまれてきたらしい。天地万物、すべて我れのためにあるかのような心地とみえる。ふと、ころがッている足もとの酒桶を、つくづくと見すえて、

「……はてさて、貴さまも空ッぽになってみるとつまらんやつだな。智深和尚の引導を、せめてこの世の冥加と思えや。喝ッ」

と、麓へ向って二つとも蹴放った。一個は空天に躍って森へ沈み、一個はすぐ下にいた牛の群れの中に落ちた。びっくりした牛が跳び別れて、やがて後から、のろまな啼き声が長く聞えた。智深は手をたたいてうち笑い、蹠々踉々、どろんこになって、ほどなく五台山へもどってきた。

「ちい、このなめくじ野郎め、な、な、なんでこの魯智深を、通さんとぬかすのか」

「とんでもない仏弟子だ。こら智深、ここは山門だぞ、山門だぞよ」

「なアるほど、文殊院五台山の山門らしい」

「葷酒山門二入ルヲ許サズ。とそこにそんな大きな制札も立ってある。もし破戒飲酒の僧あらば、青竹で四十打ッ叩いて寺域追放の掟だぞ」

「おもしれえ。ちようど按摩代りになる。おい番僧、いっちようやってくれい」

ところへ、騒ぎを聞きつけて、監寺、提点、藏主、浴主などの役僧などから、工場の諸職まで、まっ黒になって様子を見にきた。たちまち門の番僧らと一つになって、

「やあ言語道断。破戒墮落の外道など、一步も不浄者を入れることはならんぞ、水でも浴びせろ」

とばかり智深を拒んで、その大きな凶ウ体を突きもどし、さらに山門前の石段へ突きこころがした。

さあたまらない。「——やったな」と智深は四つん這いになつて上を睨めあげた。一段一段、大象のようにゆっくり登ってくる。恐ろしさに役僧どもも職人もタジタジと後退さりした。智深はいよいよおもしろくなつた。まるで彼の遊戯のお相手のために大勢そこへ出揃ってきたようなものだった。

「そうれつ。片っ端から摘んで捨てるぞ」

躍り立つやいな、事実、彼の左右の腕、両の足から、さながら塵芥みたいに人間が刎ね飛んだ。——わあっと逃げるを追って、彼はなお、伽藍、堂院、いたるところで地震のよう

な音響と悲鳴をまき起し、あげくのはて蔵殿の一室へ入ると、大の字なりに寝てしまった。その躰たるやまた山谷を揺するがごときものであった。

それに呆れているどころか、後の始末やら物議こそまた一と揉めだった。番僧たちは、監寺、提点などを先に立てて、智真長老の座下へ迫つた。

「かかる例は、わが文殊院五台山の開山以来ありませんまい。靈域に魔獣を飼えとは釈尊の法にも聞きおぼえぬところ。よろしく即時ご追放あつてしかるびよう存じまする」

「まあ、まあ。そういわんで、こんどだけは慈悲の眼で見やれんかのう」と、智真長老は慰撫一方のていで努めていう。

「——大檀家の趙大人のお顔もあることじゃし、明日ともなれば、わしから智深にきびしく諭戒を加えて、以後きつと、慎ませようで」

囂々たる不平はたいへんなものだったが、長老の鶴の一声。ぶつぶつ引き退がるしかなかった。

翌朝。——智深はむっくり起きに、蔵堂裏の竹林へ出て、こころよげに放尿していた。そこへ上人のお召しときたので、彼は大慌てに後へついていき、畏る畏るその座下にうづくまつた。

「これっ智深。おまえはどうも困つたやつ。察するに病持ちだな」

「いいえ、体はこの通り人一倍丈夫ですが」

「何をいうぞ忘れッばいという一病があると申すのじゃ。得度のさい授けた五つの戒と、三帰を忘れたの」

「あ。病とはそのことで」

「さればじゃ。昨夜の大酒乱行はそも何事ぞ。山門の清規を破って、あのさまは」

「もう、しません」

「きつとか。以後忘れないか」

「つつしみます。はい。きつと、つつしみます」

しおしおと、智深は禅床へ引き退がった。もう人の耳こすりや潮笑にも、めったには怒らないぞと、顔に錠前をかけたような無口に変った。

だが、その年も暮れて、待つに長い山上の春がやっと訪れ初めた翌年の三月初めの頃、智深はぼかんと麓の空を眺めやっていたが、そのうちにふと、トンカン、トンカン、鍛冶屋の鈍音が風にのって聞えてきた。——と、なに思ったか、ありあう銀子をふところにねじこんで、ふいと僧堂をとびだし、今日は少し道をかえて“五大福地”と額にみえる大鳥居をくぐり、東の参道坂をどんどん降りていった。

「おや、こりゃあ何とも賑やかだわえ。こんな聚落があったとは今日までまったく気もつかなかったぞ。あほう、どうしてわが輩はいままで五台山下に門前町があるべきことを思わなかったのか。だがまあいいや、遅いにしても帰命頂礼——」

彼は、にわかになきうきとあるいた。眼もキョトキョトとせわしなかった。肉屋がある、酒屋がある、女の嬌声、赤ん坊の泣き声、さてはなつかしい大道芸人の音楽だの、古着屋、八百屋、旅人宿、うどん屋の婆アさんまで、かつての日の渭水の場末も思い出されて、どれもこれも悪くない。

「ああやっぱり人間界はいいなあ」

その人間臭い街のなま温いものに久々でくるまれながら、

ぼんやり通り過ぎかけて、

「おっと。ここだっけ」

と、一軒の鍛冶屋の土場へのっそりと入った。

山上にまで、テンカン、テンカン、銚子してきたのはこの鈍音と鉄台の響きにちがいない。手を休めた三人の鍛冶工は、鼻の穴から目やニまで炭にした真っ黒けな顔を揃えて、智深の姿を見まもった。いや見上げたというほうが当たっている。

「やあ親方、こんちわ。……どうだね、極く質のいいはがねはあるかい」

「へえ、お坊さまに、はがねの御用がございますかね」

「ばかにするな。坊主とはがねと、無縁という法もあるまい。錫杖を一本鍛えてもらいたいんだ。ちよつと、手ごろのな」

「なるほど。ですがお坊ンさん、誂えちゃあお高くつきますぜ。出来合いじゃいかがです」

「ところがわが輩の手に合う出来合い物なんて見たことないので持たなかったのだ。ひとつ急いでこさえてくれない。重サ百斤ほどなのを」

「冗談じゃない。百斤なんて錫杖は人間の持ち物にやありませんぜ。三国時代の豪傑関羽さまの偃月刀だって八十一斤でさ」

「では、関羽公と同格の八十一斤としておこうか」

「へへへ。無理するこたアありませんぜ。なにもお坊ンさんは、三国の劉備玄徳の忠臣でも親類でもねえんでしょ。およしなさいよ不恰好だから。それより飛びきり上等のはがねがございますから、水磨仕立てで六十二斤ぐらいなところは」

「むむ、その辺で折り合ってやるか。相談はついた。おいしいしょにこんか、親方」

「へ。どちらへでござんす」

「篝火祝いに、一杯飲ませてやる。どこか馴じみの家へ案内しなよ」

「ま、どうかお気楽にお一人で。——それよりはお坊ンさん。

錫杖は五両かかります。どうかお手付の銀でも、ひとつ」

「け。ケチなことをいうな」

なにがしかの小粒銀を投げ与えて、智深はゆらりと鍛冶の軒を煙といっしょに外へでてくる。そして街をぎよろぎよろ見廻した。

酒屋の軒を覗き廻ること二、三軒。どこでも例外なくお断りを食った。そこでついに街はずれまででてしまい、ふと見ると破れ廂から、酒と書いた旗をだしている一軒がまたあった。立ち寄れば、牛の屎まじりの土墻に、誰のいたずらか「李白泥酔ノ図」といったような釘描きの落書がしてある。

「……いや、おもしろい絵だな。いや、おれも一つ、あれくらい酔ってみたい」と、智深は独りごとをもらしながら、内へ入った。

「こら亭主。わが輩は五台山の坊主ではないぞ。だから心配はいらん。酒を一杯い飲ませてくれ」

「へいへい。どちらからお越しで」

「廻国行脚の途次で通りかけた者。といって乞食坊主でもない。ほうら銀子もある。それ、その大碗で早くよこせ」

むさぼるごとくがぶがぶ飲んで、たちまち碗を代えること十数杯。こんどは自分から立っていつて薄暗い厨房の調理台

にあった兎の股みたいな烙り肉を右手に一本つかみ、それを横へ啜えかけた。

「あっ、雲水さん。そいつあだめです。坊さま向きじゃございませんよ」

「亭主。なぜ止めるのか」

「犬の肉でございますよ。なんぼなんでも」

「なに犬肉だと。いや、よろしい。犬だからとて賤しむことはない。わが輩の腹中はすなわち弥勒だ、猿であろうが鹿であろうが一視平等。豈、差別すべけんやだ、けっこう。いけるじゃないか、おやじ」

にんにく味噌を付けてたちまち骨だけを足もとへ投げ捨て、さらに次の一本を持って、

「肴ばかりじゃしょうがないな。おい、その瓶ぐるみ持ってきてここへおけ。そいつあ黄米酒だろう。むむ、珍重珍重」
——やがて。陽もすでに黄昏れごろ、智深は、天雲を降りて天雲へ帰るがごとく飄々とひよろけつつ五台山へもどっていく。途中でぶつかりかける男女を見ると、彼らの逃げまどう姿へ、哄笑を撒きちらして。

「わはははは。さあ、智深さまのお通りだぞお通りだぞ。酔いどれには天子さまも道を避けるという諺があるのを知らんか。さあ、退いたり退いたり」

翌朝のことである。——といっても、五台山五峰の西にはまだ影淡き残月が見え、地には颯々の松原がやっと辺りを明るみかけさせて来た頃だった。

「うう寒い。……おや、おやおや。わが輩はどうしてこんな

とところに眠っていたのか」

智深はわれを疑って、むっくりと起きた。寒いはず、石だたみの上で寝ていたらしい。しかも自分が抱いて眠っていたのは、自分の二倍もある巨きな仁王像だった。山門の仁王様に相違ない。

ふと仰ぐと、日ごろ見なれたその仁王門は颯風の跡みたいに、見るも無残に破壊されており、もう一体の仁王像も、常に居るところには見えなかった。だんだんそこらが白んでくるにつれて、仁王の手やら首やらまた瓦だの玉垣の破片などが、惨として、智深をつつんでいることがわかった。

すると、そこへ、番僧の一人がきて叫んだ。

「おう智深。やっと眼がさめたか。長老以下が待つておられる。すぐ大講堂の廊までまいれ」

彼はまだ頭がはつきりしないらしい。ふらふらと歩いていった。見ると智真上人以下、大講堂の廊には、常ならぬ威儀で役僧全部で並んでいた。彼を見るやいな、まず都寺が起坐して、

「こら智深、よくうけたまわれ。なんじ、昨夜は、またもや麓にでて飲酒の戒を破って大酔のまま帰山せしのみならず、山門において、例のごとく暴勇をふるい、番僧雑人十数名を殺傷し、あまつさえわが文殊院の至宝たる仁王像を引きずり下ろして微塵となし、それに尿を放って、快を叫ぶなど、沙汰の限りな狼藉の果て、今暁までその場に眠りおったとのこと。

——すべて言語道断な次第じゃ。じゃによつて、一山大衆の名をもって、上人の裁可を仰ぎ、即刻、わが浄域より追放を申しつくるものである」

と、怒りをふくんで申し渡した。

智深は、半分ぐらいまで、他人事みたいに聞いていたが、自分が当人かと、やっと気づいて、

「えっ。そんなことをしましたか。この智深が」
すると監寺、書記、首座、提点らの役僧も一せいに口を揃えて罵った。

「ぬけぬけと、ようそんな顔ができたものだ。彼方の僧房を覗いてみよ、汝のために手足を挫かれた怪我人が、枕を並べて呻いておるわ」

「それのみか、門前町から山上の途中でも、見晴らしの亭に、追っかけ廻して歩いてきたとか」

「いちいち挙げればきりが無い。さほどな痴態悪業におよびながら、いまさらなんぞ、その白々しさは」

智深は二の句も出なかった。やがて悄悄とその場を退がると、智真長老から再度よばれて、

「さても是非ない仕儀。このうえ、当山にとどめおかば、そちの恩人たる趙の長者にもいっそうご迷惑をかけることになる。そこ思つて神妙に退散せよ」

藍の脚絆手甲、一重の僧衣、それに鞋一足、銀子十両ほどの恩施が、前におかれていた。

智深は、ぽろりと涙をこぼした。そして、猫のように。

「どうも、なんともかとも、申しわけございません。われながら今はわが身を持てあまします。といて首を縊る気にもありませんが、いったい、この魯智深はどう生きていったらいいんでしょうか。ね、お上人さま」

智真長老は、胸のうちで、心易でも立てているのか瞑目久しゅうして、一偈をつぶやいた。

「……林二遇ウテ起り、山二遇ウテ富ミ、水二遇ウテ興リ、江二遇ウテ止マラム。……四遇ノ変転ハ身二持テル宿星ノ業ナリ。魯智深、まずは生きるままに生き、行くがままに行け」
「はい。じゃあ、そういたしましたしょう」

「さし当って、身の落ちつく先もなくしては困ろう。わしの弟弟子は昨今、開封東京の大相国寺にあって、智清禪師と衆人にあがめられておる。この添書をたずさえて、大相国寺へまいり、よう禪師にすがってみるがよい」

「どうも何からなまでに、ありがとうぞんじます。……ではお名残り惜しゅうございますが」

と、彼が神妙に頭をさげると、侍座の役僧たちはみな笑った。「……なにがお名残り惜しいものか」と、彼の退散に、胸撫で下ろしていたからだろう。

さて。——その日。智深は悄然と麓町へ降りていった。そして、鍛冶屋の隣の旅人宿へ泊りこんだ。さきに鍛冶屋へ詔えておいた錫杖が出来上るのを待ったのだ。そしてやがて半月ほど後に、その出来栄えが見られた。重さ六十二斤水磨作りの錫杖は上々なものだった。

「ようし、この一杖さえあれば、天下の山川草木は、みなわが従者」

彼はたちまち、ここ数日の鬱を肩に払って、大満悦な態となり、すぐさま開封東京へさして出立した。

九 花嫁の臍に毛のある桃花の郷を立ち、
枯林瓦罐寺に九紋龍と出会いのこと

奇異なる旅の子魯智深は、幾度も山に臥し、野に枕したが、野獣猛禽も恐れをなしてか、彼の寝姿と鼾声のあるところは、自然一夜の楽園と化し、なんの禍いも起らなかつた。

もつとも智深は身に一トかたき食糧を持つてはなし、金銀は元より帯ぶるところにあらざだから、これを襲つてみたところで、得るものは何もありません。——その夕べも、腹をべこべこにして、やっと山中の一村に辿りついた彼だった。

「おうこの辺は、たいそう桃の多いところだな。今や桃の花ざかり。そうだ、今夜は一つそこの桃林に寝て、武陵桃源の夢とでも洒落ようか」

——すると、鶴のごとき一人の老人。彼が立ち入りかけた桃林の傍らから出てきて。

「もしもし、お旅僧。こよいは当家にちと取り混み事がございますし、それに不慮のお怪我でもなさるといけませんから、ほかへ行ってお休みくださいらんか」

「おぬしは誰だ」

「この桃花村の旧家で、劉家のあるじでございますが」
「……どうしたのだ、いくら老人にせよ、まるで粘土のような顔いろをして、いまにも泣きだしそうなその容子は」

問われると劉老人は、もうさめざめと本当に泣き出していた。「……じつは」と打ち明けるのを聞いてみると、今夜は愛娘

の婚礼の晩だという。

「なに、一人娘の婚礼だと？」

「いよいよ、おかしい。好奇心も手つだつて、なお仔細を聞きまじつてみた。」

そこで老翁が語り出すのを聞けば、この地方の青州の県軍でも手を焼いている匪賊の一団がこれから奥の桃花山に住んでいる。

愛娘の智というのは、その賊将の弟分と称する周通という者で、もとよりこつちから、嫁るといったわけではない。

「桃の花が咲いたら、智入りにいくぜ。前もつて、山から使いを出しておくが、智入りの夜には、花嫁を磨いて、酒肴の支度はいうまでもなく、万端、華やかにしておきねえ」

と、すでに周通の前ぶれを受けていたものだとある。そして、それに逆らえば、桃花村は一夜に焼き払われるか、みなごろしの目に遭うであろうと顛くのだった。

「あはははは、いまどき、古手なやつもあるもんだ。よろしい。じゃあ真夜半に、その桃花山の賊が押しかけ智に来るんだな。劉じいさん、心配するな」

「……と、仰つしやつてくだすつても」

「じつは、わが輩はもと渭水で提轄（憲兵）をしておつた魯という者だ。そういう裁きには手馴れている。わが輩を娘御の部屋へ案内するがいい」

「娘は昨日から泣き沈んでいて、人さまにお会いするどころではございません」

「会わんでもいいよ。娘御は早くどこかへ隠してしまえ。そしてわが輩が花嫁になり代つて、寝台の帳を垂れて寝ておる

から、賊の周通がきたら、盛大な祝宴と見せて、たつぷり酒を飲まして連れてこい。……いや、それまでの間、わが輩も独りで閨に待つのは退屈で堪らん。花嫁の部屋にも酒を忘れるなよ」

劉老人は、ためらうより恐れ気味だった。しかし、一族大勢がやってきて、だんだんに智深の説得を聞き、盲亀の浮木で、ついに彼の策にすぎた。

そこで智深は、宵のまに、花嫁の部屋に隠れこみ、その帳を垂れて、寝台に横たわつた。もちろん彼にも饗膳と酒が供されたので、鱈腹たべて、寝こんでいる……。

が、ときどき眼がさめた。もう何刻ごろか。表の方では、花智の列でも着いたのか、銅鑼や太鼓の音。そして、智迎えの俚歌”などが賑やかに聞えだしている。

「……ははあ、そろそろ祝宴が始まつたな」

その辺までは知っていたが、またいつかぐつすり寝入ってしまったらしい。夜は森沈と更け沈み、赤い蠟燭の灯にみちびかれて、魔王のごとき影がゆらゆら室の外まできたらしいのも、彼は全然知らなかった。

劉老人らしいのが、そこで声をひそめて、

「……では花智さま。てまえは、ここで失礼を」

やがてコトコト戻つていった。遠ざかるその蹙音をたしかめてから、賊の周通は、すうっと部屋へ入ってきた。

「おや、真つ暗じゃねえか。……ははあ、さては羞かしがつているのか」

独りごとをもらしながら、周通は手さぐりで花嫁の寝台へ近づいてきた。そしてまた、おや？ とでも思ったのか。

「ひどく酒臭くせえなあ。むむそうか。花嫁の部屋でも、身内の宵よい酒盛りとかやるのが慣ないだからそのせいだな。……これよ、娘、いや嫁御。なにもそう羞はかしがるにはおよばぬよ」

じつは、周通ちゆうつうのほうこそ少してれ気味である。柄がらにもなく、そろっと、帳ちやうの内へもぐり込んで、花嫁の衣裳の下へ手を入れた。すると、ヘンなものが彼の手にジャリツとした。どうも臍へそらしいが毛が生えていた。

「あつ。代え玉を食わせやがったな」

どたと、彼が寝台から転ころび落ちたので、智深は初めて眼をさました。ぱっと刎はね起きざま、花嫁衣裳を被かいたまま、「待てつ、智どの。逃げるとは薄情な」と裏手の桃林へと追ッかけた。

周通は柳の木につないであつた馬を解くやいな、柳の枝をムチにして一散に逃げだした。智深もまた、手下の馬の一端に跳とび乗って追ッかけていく。——それはいいが、さあ、劉家の後の騒動といつたらない。

残された手下どもは、変だと知って、劉老人を縛りあげ、これを曳いて、翌朝、桃花山の匪賊ひぞくの木戸へ帰ってきた。

ところが、なんぞはからん、そこでは、賊の頭目と魯智深とが、仲よく笑いながら酒酌くみかわしている。そしてまた、昨夜の押しかけ智——すなわち頭目の弟分の周通は、悄しおれ返って、そのそばで首うなだれている始末ではないか。

「やあ、劉じいさん、可哀そうに、捕まってきたのかい。お花髻、早く縄を解いてあげろ」

魯智深はげらげら笑って、仔細を話した。

昨夜、相手を追いつめて、この木戸まできてみると。弟分

の助太刀に出てきた頭目というやつは、なんと、渭水いすいの街の膏藥こうやく売り——あの打虎将だこしょうノ李忠りちゆうであつた。

「……ばかなやつらだ、こんなところでケチな山賊などしてやがって。まだ、膏藥売りのほうが、どれほどましな商売か知れぬえに」

と、今も、意見していたところだとある。

だが、打虎将李忠も、その弟分の周通と名のる男も、これが天性彼らには性にあっている生熊なのかも知れなかつた。表面は神妙に服して。「……いやもう、以後は決して、劉の娘になぞ手出しはしません」

と、誓っていたが、どうも本気とは思われない。

智深が少し白い歯を見せると、李忠は凶にのツて言った。「おれが渭水いすいの土地を売って旅へでたのも、智深、ほんとは、おぬしのせいだぞ。おぬしが関西かんせい五路ごろの顔役てい鄭ていをなぐり殺したため、おれたちにまで、役人の手が伸びて、片っぱしから牢へぶちこみ始めやがった。そのため、おればかりでなく史進も渭水を捨てて、どこへともなく姿を消してしまったじゃねえか」

「そうか。いわれてみれば、わが輩にも責任があつたことか。だがもう古手な素人しろうと替かしの生娘まむすめ漁あさりやケチな悪事はよした方がいいぜ。やるなら男らしい大望を持った方がいいよ。でっかい夢をよ」

とはいえ、智深も長居は無用と見たのであろう。ふたたび劉家や桃花村には仇あだをしないという誓いを二人に立てさせ、二人が矢を折って、悪党仁義の金打きんちゆうをしたのを見ると、劉りゆう老人を里へ帰し、自分もまた、飄ひようとしてここを立ち去ってし

まった。

そしてふたたび、東京さしての旅また旅をかさねてゆくうち、はからずも、ここ瓦罐寺と呼ぶ奇峭怪峰の荒れ寺に、一夜の雨露を凌がんと立ち寄って、彼は、世にあるまじき人間のすがたを見た。

「はあて……。これが建立された時代は、天子の勅使、一山の僧衆、香煙、金欄、さぞ目ざましいものだったろうに。よくもこうまで、荒れ果てたものだ」

瓦罐寺の地内へ、一步入った智深は、その荒涼たる景に、さしもの彼も、啞然とした。

鐘楼や堂宇は崩れ放題、本堂のうちも雀羅の巣らしい。覗いてみれば、観音像はツル草にからまれ、屋根には大穴が空いている。そこらの足痕は、狐のか狸のか、鳥糞獸糞、すべて異界のものだった。

「おういつ。人間はいねえのか。だれか住んでる奴はいないのか」

すると奥のほうから骨と皮ばかりな老僧が、ひよろりと立ち現われて、

「おお……。お旅僧か。ここには人をお泊めする糧もないぞよ。早う行かっしゃれ、行かっしゃれ」

「なに、糧もないと。あの庫裡で炊いている煙はなんだ。どうせ貴様たちの食物も里で貰ってきたお布施だろう。おれも腹が減っている。お齋にあずかりたいものだ」

「めっそうもない。わしたちですら、露命をつなぎかねているのじゃ。そんな大声だしていると僧の身の皮も剥がれち

まうぞよ。さ、早く立ち退きなされ」

「ていよく追っ払おうというのか。それとも誰かに気がねしてそういうのか」

「ここには、崔道成という悪僧と、丘小一という行者の悪いのが、わがもの顔に住んでおる。……わしらはその二人に寺を奪われて、やっと粟粥をすすって生きているばかりなのじゃ」

「ふうむ。崔と丘。そんなものが恐ろしいのか。とにかく、もうすこし話をきかせてくれ。その代りあっちで粟粥を一杯ご馳走になるぜ」

庫裡へ廻ってみると、まるで隠亡窯みたいな赤い火を薄暗い中に困んで、ここにも骸骨みたいな痩せ法師が、がつがつ粥を喰べあつてるところだった。

智深が鍋へ手を出したので、彼らは隅へ竦んでしまった。そして智深が二、三杯もすすりかけると、恨めしそうに、ぼろぼろ涙をこぼしては見つめている。いかな智深も、これでは喉に通らない。腹は減っていたが、いまいましてに、途中で欠け碗をほうりだした。

——と、外の方で、田舎唄だが、粋な声かふと聞えた。見ると、行者ていの若い男が、天秤で一荷の荷をかついで通った。その竹籠の中には、蓮の葉にのせた桃色の牛肉や酒や野菜などをのせている。智深は眼を光らせた。

「あいつか。この寺に巢を作って、おまえらには物も食わせないというやつは」

「そうです、あれが飛天夜叉とアダ名のある丘小一で」
「ほかにもう一匹、崔道成とかいう化道がいるわけだな。よ

うし、いま見た牛肉はわが輩が食ってやるぞ」

「およしなさい。そ、そんな真似をなすったら、すぐご一命はありませぬ。のみならず、私たちまでどんな目にあうか知れません」

「わはははは。なにをガタガタ慄えるのだ。まア見ておれ。

おまえらにも、今夜は肉の一片ずつをお布施してやるから」

豹のごとく、智深は跳びだして行った。手には鍛えてまだ日の浅い錫杖が、はがねの匂いも立つばかり光っていた。

とも知らず行者の丘小一は、むかし方丈の庭でもあったらしいところまでくると、荷を下ろして、待っていた二人の者と、なにか笑って話している。——見れば、大きな槐の下に、一卓をすえ、崔坊主は、一人の若い女を擁して腰かけていた。

女の中に挟んで、すぐ酒もりにでもかかるともりか。陶の器、杯などを、卓の上へ並べだした。ところへ、のっそり魯智深が近づいてきたので。

「やつ。雲水じゃねえか、てめえは。誰に断わってここへ来た」

「来てはいけないのか。あつ待った。その女子。いずれおまえは、里から攫われてきた人妻か娘だろう。あぶないよ、退いていな」

「なに、あぶねえと」

そこは悪と悪。眼を読むのは迅かった。

崔が起ったと見えたとたんに、その手から水の走るような一刀が智深の胸先三寸の辺を横に通った。かわすまでのことはない。智深の錫杖は傍らの丘小一へ向って一つぶんと旋る。

丘は退がって、これも腰の一刀を見事に抜いた。気合い、眼光、いずれも智深に劣る者とは見えない。

だが、恐いもの知らずの智深である。また、かつて一度でも不覚をとったためしはない。「おううっ」と彼の満身が吠えたのも久しぶりだ。——ござんなれという構え。

じりじり、その彼を挟んで、二刀の切ツ先は寸地を詰めつつ迫ってくる。まるで刀の先に眼がついているかのごとく、智深の毛ほどな動きも見のがさない。「……はてな？」智深は少し汗を吹きはじめた。「腹のへッているせいか？」いや、そうでもなかった。剣気というのか、一種の精気が呪縛をかけてくるのだった。智深はやつと自重しだした。

「南無三、こいつは、いけねえ。めずらしく手強いらしいぞ」
破陣の勢いで錫杖を一振すれば、丘小一の影は宙へ躍って新月の刃をかざし、崔道成は低く泳いで颯地の剣を横に払う。一上一下、叫喚数十合、まだ相互とも一滴の血を見るなく、ただ真つ黒な旋風をえがいては、またたちまちもとの三すくみの睨め合いとなった。

やがて疲れたのは、魯智深のほうである。事実、腹もへっていたが、しかし、かつて出会ったことのない強敵にも違いなかった。たじたじと押されつつある。そのうちさすがの彼も、今は自己の限界を知ったとみえる。やにわに後ろを見せ逃げだした。その図ウ体が大きいだけに、その逃げざまこそおかしかった。

まるで転がりやまぬ火達磨みたいに、山門を跳びだし、道を走り、石橋を渡って、ほっと大息ついて振り向くと、そこを関門としてか、追って来た崔と丘の二人は、石橋の欄干

に腰をかけて、

「さあ雲水。ひと息いれたら、もいちどおいで」

と、いわぬばかりに涼しい顔で休んでいる。

智深は物蔭からそれを眺めて、

「さて世の中は広いもんだな。あんな化け物もいるからには、わが輩もちと反省せねばなるまいで。残念だがここはまア負けておけ。戻ってゆけば犬死にだ。……だが、待てよ。これはしまった」

わが姿に気づいてみると、大事な頭陀袋を掛けていない。落したかと慌てたが、よくよく考えてみると、さっきの庫裡で、粟粥をふうふう吹いて食ううちに、粥をこぼしたので、脱いでおいた覚えがある。

「こいつは困った。あの中には大相国寺の智清禪師へ宛てた智真長老のお手紙が入っている。取りに帰れば、石橋でふんづかまるし。……といって、あれ持たずには東京へ行く意味もない」

彼は石橋を渡らずに戻れる道はないかとうろつきだした。すると溪谷へ降りる道があった。そこを沈んで彼方へ登ると、瓦罐寺の北へ出た。あたりは赤松林である。行けども行けども赤松ばかりと思われた。ところがやがて忽然と、こんどは死の林みたいなどころへ出た。おそらく一院の古い焼け跡でもあろうか。見みかぎり一点の緑もない枯れ木林だ。しかも今、彼の登音に、ふとその辺の岩蔭から、すつと起つて、こつちを振り向いた白衣の人影があった。人馴つこく智深のほうへ近づいてでもくるのかと思うと、白い人影は、彼を見て、「ちっ。くそ坊主か」

唾でもするような舌打ちして、後も見ずに、枯れ木の間に縫い去ってゆく。智深は彼の「……べっ」と唾を吐いた唇鳴らしが気に入らなかつた。一跳足に追いつがって、錫杖を横構えに。

「やいっ、待て。なんでいま、きさまアおれをあざ笑ったか」

「笑いはしない、くそ坊主かといったまでだ」

「ここには、ほかに人間はいない。おれのことをいったと思う」

「思うように思っておけ。たぶん当たっているだろう。ほんとの坊主なんてものは、近ごろ世間に見たこともないからなあ」
言語は爽やかだし、姿もすつきりした男である。白衣は行者姿のもの。或いは、丘小一の仲間かもしれない。

陽は沈みかけている。男は彼方の廃院へでも急ぐのか、ふんとまた、鼻で笑いつて歩き出した。その虚や狙うべしと思つたか、智深は突嗟に、

「カツ」

丹のごとき口を開いた。振り込んだ錫杖の下、白衣は朱と思ひこんだ。ところが男は、ついと、横に移っていた。静かに腰の戒刀へ手をかけて、

「坊主、見違えるな。おれはなにも死神じゃねえぜ。命をもらつても仕方がない」

「な、なにを、生意気な」

相手も次の錫杖は待たなかつた。抜く手も見せぬ迅さである。振りかけた錫杖がもし斜めに魯智深の眉間を防がずいたら、彼はきれいに割られた瓜みだいになつていたかもしれない。智深は跳び退いて、錫杖を持ち直した。

すると、夕闇を透かしていた眼と、キラとも動かない戒刀のみねから、落ちついた声が出てきた。

「おいっ、待った。ちよつと待て」

「怯んだか行者」

「いや、さつきから少し考えていたことがある。もしやあんたは魯提轄じゃあるまいか」

「えっ。わが輩の前身を知っているおぬしは誰だ」

「やれ、あぶないところ……」

行者はすぐ戒刀を鞘にして、つかつかとその顔を近づけてきた。

「史進ですよ。渭水でお別れした九紋龍史進でさ。てまえもこんな風態だが、いや、あんたの変りようではぶつかつても分りッことはない。提轄から坊主とは、どうもえらい化けかたですな」

十 菜園番は愛す、同類の虫ケラを。

柳蔭の酒庭は呼ぶ禁軍の通り客

「やあ、これは奇遇だった。さても人間てやつ、どこで別れ、どこで会うやら知れぬものだな」

魯智深はいった。——九紋龍史進もまたこの奇遇を尽きない縁と興じてやまない。そして相携えつつ、もとの瓦罐寺のほうへ歩きだした。

——途々、智深は、にわか出家の花和尚となつた身のいきさつを友に語り、九紋龍は渭水を去つてのち、延安や北京をさまよい、いまだに尋ねる師の王進先生にも巡り会えず、こ

うして枯木の廃寺に一時雨露を凌いでいたわけだ、と話す。

「そうか。お互いどツちも、風の間に間に、浪の間に間に、まア似たり寄つたりの身の上だな。しかしわが輩はこれから、東京の大相国寺へ行くんだが、史進、あんたはどうする？」

「こんなところで行者めかしていたのも、いわば一時の身過ぎ世過ぎ、当座のあてもないから、少華山にいと聞く、朱武のところでも訪ねていこうかと考えていたところだが」

「それもいいかもしれぬ。どつちみち、今のような腐爛した末期の世では、もともと、旋毛まがりになってきているお互いは、真面目にもなれず、いよいよ住みにくくなるばかりだろうし……。や、や、ちよつと待ってくれ。まだいやがる」

「なんだ花和尚」

「あれ、あの石橋の欄干に腰かけて、さつき散々、わが輩を苦しめやがった崔坊主と行者の丘小一が、まだ執念ぶかく見張っている」

「はははは。瓦罐寺に住むあの悪党か。和尚、こんどは何も怯むことはあるまい。ここに九紋龍という助太刀がいるからには」

いううちにも、すでに彼方の石橋の上では、丘行者と崔坊主が、こなたの二人を見つけたか、遠目にも巨眼熒々、いまにも斬つてかかってきそうな構えを示していた。

しかしこんどは、前に智深一人が相手だった場合とはわけが違ふ。あわれ浅慮にも、やがて、われから挑みかかつて来た彼らは、たちまち逆に、九紋龍の戒刀と、智深の錫杖の下に、お粗末な命の落し方を遂げてしまった。

「さあ、こいつらを片づけたら、さっそく、庫裡におき忘れ

た大事な頭陀袋ずたぶくろを取りにいかねばならん。史進、ここで待っていてくれるか」

「いや、おれも一しよにい」

——戻ってみると、幸いに頭陀袋はそのままあった。けれど、ここに細々露命をつないでいた老僧らも、身の上の分らぬ一人の女も、みな梁はりに首を縊くって死んでいた。おそらく先刻、智深が崔と丘に追われて、いちど負けて逃げたのを知り、次には自分たちが、どんな目に遭あわされるやらと、恐怖の余り、また今のような世を生きるにも絶望して、死をえらんだものかと思われる。

「ああ揃そろいも揃そろって。……こいつは何とも不ふ愆びんなことをした。だが仏さんたち、迷うなよ、これはわが輩わがのせいでないぞ」
めずらしく智深は奇特きとくな合掌をして、うろ覚えなお経きやうをとなえた。それを見て、九紋龍もそばからいう。「——寺院が寺院の役を果しえず、悪党あくとうばらの巢かっこうに恰好かっこうな魔所まじよとなっているからこんなことにもなる。いッそのこと、焼やいてしまったほうが後々のためであろう」と。

「そうだ、一切を荼毘だびに附つして、亡者もうじやの霊たまをなぐさめ、おれたちは、ここを下山げざんとしよう」

つい先刻、亡者どもがあばき合あっていた粥鍋かゆなべの窯かまどには、まだ鬼火おにびのようなトロトロ火が残のこっていた。智深はその薪まきの火を持って、庫裡くらりに火を放はつた。——そして兩人、宵の山路やまぢを、どんだん麓ふもとへ降りていった。

「おお花和尚はなにやう。あの山上やまの上の紅蓮くれんを見ないか」

二人は振り向いた。——満天は美しい焰ほのおの傘かさから火の星を降ふらせている。宋朝そうちょう初期しうきのころには、紫雲しうんの薰香くんかう、精舎しやうじやの

鐘かね、とまれまだ人界らいはいの礼拝らいはいの上に燦かがやいていた名刹めいさつ瓦罐がかん寺じも、雨露うろ百余年ひゃくねん、いまは政廟せいびやうのみだれとともに法灯ほうとうもまた到いたるところ滅ほろびんとするものか、惜あはしげもない末期まうきの光芒こうぼうを世の闇に染めだしていた。

智深と九紋龍は、それから二日路じふににちじほどの旅をともし、やがて華州くわしゅうと開封路かいほうじの追分おきわけにかかるや、再会さいかいを契ちぎって、袂たもとを別わかつた。

——さて。一方は日ならずして、時の花の都、開封東京かいほうとうけいにたどり着つき、さっそく大相国寺だいさうこくじの智清ちせい大禪師だいぜんじをその山門やまのに訪まうて、

「拙僧せつそうは智深と申す五台山の一弟子ですが、当山の禪師がおんもにて修行を積めいと、師よりお添状そえじやうをいただいでまいつた者。よろしくお取次のほどを」

と、頭陀袋から智真ちしん長老の手紙を取出して、役僧やくそうに渡し、一堂いちやうに座してその沙汰さたを待まちつた。

「はて。五台山ごたいざんの智真ちしん長老も、えらい者を、当山へさし向けてきたもんじやな」

大相国寺だいさうこくじの智清ちせいは、手紙の中にある智深の経歴けいれきを読んで、ちよつと、うんざり顔かほだったが、また禪家ぜんけ特有とくゆうなとでもいうか、へんな興味も覚えぬではなかった。

坊主ぼうしゆの前まへ身みには、ずいぶん変かつたのもあるが、智深のごときはまず珍めづらしい。——渭州いしゅう経略府けいりやくふの憲兵けんべいあがり。侠気けいぎはあるが、喧嘩けんか好き、酒好き。しかも人殺ひところししの前科ぜんかのため、剃髮ていはつした男おとこだとある。

「おそらくは、五台山でも持もつて余あつた者ものだろうが、智真ちしんはわしの昔むかしからの道友どうゆう、置おけぬといつたら、気が小さい禪家ぜんけよと、嘲わら

うであろうし。……さて、どうしたものか」

全役僧を集めて、衆議にかけると。

「来訪の一行脚は、どう見ても出家とは受けとれません。なんとも魁偉な人物です」

「第一人相もよろしくない。どことなく凄味がある。また、知客が迎えたとき、禅家の作法もよくわきまえぬものか、たずさえている香具、座具、袈裟などの使い方にも、まごまごしおった」

「ていよく、お断りあったほうが、当山のためかと存じます
が」

衆口紛々である。一人も歓迎はしていない。智清禅師は、ほとほと困った。——すると、都寺（僧職）が、うまい一案を提出した。

「馬鹿と鉢はなんとやら、そのような人物も、当山附属の野菜畑の管理所へやっておくには、案外、適任ではおざるまいかの」

「なるほど、なるほど。野菜畑の目付ならいいかもしれぬ」
「なにせい、あの酸棗門外の菜園ときては恐ろしく広い。のみならず、附近の兵営からは兵隊どもが荒らしに入るし、もつと厄介なのは、門外にある無頼漢街じゃ。年中、塙を破つて、瓜や菜根は大びらに盗んでゆくし、農耕の馬や牛も、いつのまにか食ってしまう。……と、番人も山僧どもも、なにもいせん。なにしろ奴らは凶悪なので」

「それや妙案。いかがでしょう禅師。風来の魯智深とやらには、試みにまず、その菜園目付役でもやらせて御覧じあつては」

「むむ、衆意同案とあれば」

一山の断により、さっそく首座（僧職）がその旨を、智深にいいわたす。智深は、ふくれ面だった。たとえ、化主、浴主の末僧でも、なにか僧職の端にはと期待していたらしい。

「まあまあ、やがてはだんだんに、茶頭、殿主、蔵主、監寺などの上職にも、修行次第でと申すものが、当座はひとまず菜園のほうで」

おだてられて不承不承、智深は酸棗門外の畑へ移されていた。管理所だの菜園目付のといえは聞えはいいが、来てみればただの大きな畑番の番小屋。「……ふざけやがって。ようし、わが輩をこんな所の案山子に使うというなら、おれの起居にも干渉はさせんぞ。そんなら、いッそ気楽でいいが」と、ここに花和尚魯智深は、この大地主にでもなったような気で持ち前の「野性の自適」をきめこみだした。

日ならずして、近所のごろつき街の空気には異変が起っていた。いつもの調子で畑荒らしに入った奴が、巢へ帰って言いふらしたのだ。

「おいおい、行ってみや。番人が代ったぜ。こんどの奴ア八頭芋みてえな面をした凄え坊主だ。おまけに、塙門に何やらむつかしい掲示なんぞ貼りだしやがる」

「なに代ったつて。どれどれ、どんな野郎か、面を見ようぜ。それに掲示たあ何だい？」

与太もんどもはつながつて、掲示の杭を取り巻いた。文にいわく。

——爾今、当山ノ僧人魯智深ヲシテ菜園ヲ管理セシム。
耕夫ノ令、厨入ノ百菜、スベテ右ノ者ニ任ズ。

猶又、無用ノ者、入ルベカラザル事。犯サバ、懲シメ
ニ会ワン。悔ユル勿レ。

大相国寺宗務所

「なんでえ、きまり文句じゃねえか。ひとつその、魯智深て
野郎のほうへ、見参におよぼうじゃねえか。……いるかい、
番屋の中に」

「いるいる。なにしてやがるんだろう、臍を出して、ぼやっ
と、嘯うなづいている面つきだぜ」

「ふ、ふ、ふ。野郎、恐いんだよ俺たちがね。こうして、ぞ
ろぞろ、いやに静かに近づいていくもんだから、わざと知ら
ん顔しているに違えねえ」

「だが、一度はお土砂をかけておかねえと、俺ツちを甘く見
損なうツてこともあらあ。どうだい、番人の代るたびにやる、
あの手を野郎にも食わせておいちゃあ」

「むむ肥溜しそだめの行水か。あの手を—ぺんご馳走申しておきやあ、
どんな奴も毒ツ気を抜かれてしまうからな。よし、やろう。
みんなぬかるな」

ごろつきたちが、胸に一物の揉ミ手腰で、うようよ近づい
てきたのを、知るか知らぬか、智深は大欠伸おおあくびをして、床の高
い番所の梯子段を降りたと思うと、のっそり畑のほうへ歩い
てきた。

「あつ、もしもし。こんどお代りになったご番僧さんじゃご
ざんせんか」

青草蛇あおたにしじょうノ李四りしと、迂路鼠うろねずみノ張三ちやうさんは、二、三十人の仲間を
後ろに控えさせて、智深の前に小腰をかがめた。そして凄味

をきかすため、相手かまわぬ博奕渡世の仁義をきって。

「ええ、てまえどもは皆、ついご近所に住む気のいい野郎ど
もでございりますが、ご掲示を拝見するツてえと、番所の和尚
さんがお代んなすつたとのことで、お顔つなぎに伺いました。
どうか、ひとつ、よろしくご懇意に」

「なんだい、まア」と、智深は眼をまろくして。

「おれはまた、どこか裏店の葬式つくだなが、道を間違えて入ってき
たのかと思つたよ」

「へッ、へへへ。おもしろいことを仰つしやるなあ。おいみ
んな。こんどのご番僧さんは話せそうだぜ。さ、こつちへ出
て、ご挨拶をしろ、ご挨拶をよ」

「いらん、いらん。そう安ッぽいお辞儀などはいらん。が、
顔つなぎなら、酒でも提さげてきたらうな」

「こいつア恐れいりやした。渡りをつけるつてえご定例じやうれいは、
ほんとのところは、そちらから、こち徒らへしていただくのが
作法でござんすがね。野暮をいうなあ止しやしよう。——お
いっ、眼めツ跛ば」と、張ちやうは仲間の一人へどなつて。「——どう
でえ、粹さいな和尚さんじゃねえか。さっそく一しよに飲んでく
ださるつてんだ。一ツ走り飛んでいって、街の酒屋と肉屋へ、
御用を仰せつけてこねえか」

「あいよ」と、すぐ二、三人は飛んでいった。

それを合図に、眼くばせ交かわしたごろつき連は、智深をと
り囲んで、なんのかんのと、次第に彼を大きな肥溜こえためのある畦あぜ
のはずれへ誘いだした。——智深は、これが彼らの計略だど
も、また、自分の立つたすぐ後ろが糞の池とも気づかなかつ
た。また、ちよつと見たのでは溜たの表皮一面、蠅はえの上に蠅が

たかつて、まるで黒大豆でも厚く敷いたような密度だから糞色も見えず肥の匂いもしないのである。で智深はただ、彼らの愛相や馬鹿ばなしに退屈を忘れ、他愛もなく一しよに興じあっていた。

すると、与太の一人が、すつ頓狂な声を発して、

「あッ、和尚さんのくろぶしに、大きな蛇が」

と、いきなり彼の脚元へ身を這わせ、蛇を打つと見せて、片脚を掻いかけた。掻われたら後ろの溜へもんどりは知れたこと。智深は無意識に体をねじった。そして、そいつをぼんと蹴放し、また、とたんに、も一つの脚へ搦んできたチンピラの横びんたへ向つては、

「ちよめ！」

と、童の頬でも撲るような平手の一擲を食らわせた。なんでたまろう、二つの体は仲よく躍つて溜りの中へ飛んでいった。刹那。うわあん……鐘の鳴るような唸りが起つて、満天満地に蠅が舞い立ち、ために、一天の陽もなお晦いほどだった。

「それつ、たたんじまえッ」

とは声ばかり。智深の体にたかつたと見えたものは、みなそれ、一颯に目を眩す蠅の旋舞といささかの違いもない。

——智深は早くも番所小屋の高床に戻つて、

「あははは、わはははは」

と、独りで腹を抱えている。

溜に沈没した仲間のチンピラを、どうやって救いあげて帰つたろうか。想像してみるだけでも智深にはおかしい。どうもこの畑番、至極退屈な役と思つていたが、とんだよい景物

が近所に見つかった。愉しい哉、世の生きものども。ちよいちよい野菜泥棒にも這い込むがいい。時により、智深にも仏心なきに非ずだぞ——と、彼はそれからというもの毎日、むしろ彼らの現われるのが、心待ちに待たれた。

だが、ごろつき街の連中にすれば、それどころかは、額を集めての、薄暗い密議まちまち。

「さあ、みんな、シツかりしろやい。こんどの番所坊主は、いままでの瓜頭とは瓜の恰好も違ふと思つたら、ちよつと中身も違ふらしいぜ。なんとか一度、ぶッ砕いてやる思案はねえか」

十数日の後である。練りに練つた一計を秘したもののか、蛇李と鼠張の二人が、番所の小屋に謝罪りにやつてきた。「……先日は乾分どもの悪戯。なんとも、お見それ申しやして」と、いとも神妙に、三拝九拝して、一献差し上げたいという申しいでなのである。

下地はよし、折ふしの炎暑に、智深も茹つていたところであるから、一も二もなく、誘いにまかせた。そして彼らについて出て見ると、園の蓄水池の畔り、涼しげな楊柳の木蔭に、庭をのべ、酒壺を備え、籃には肉の料理やら果物を盛つて、例の与太も二、三十が恐れ畏んで待っている。彼らは頭を揃えて、

「へえい。以後は決して、こち徒ら一同、畑荒らしはいたしませんし、ご菜園の御用とならば、どんなことでもいたしますから、どうかひとつ、今後はお手下の耕夫同様におぼしめして」

「えらく今日は行儀がいいなあ。なあに、寺でも食いきれな

い菜園だ。適度には持ってゆけ、持ってゆけ。その代りちよ
いちよい、わが輩へのお年貢を忘れるなよ」

智深は遠慮なく飲み大いに食らった。ちんぴらどもは彼の
酒量に驚き呆れ、三度も酒屋へ馳けつけた。

「……おや、なんだこれは？」

彼はやっと気がついた。彼の肩や頭へ何か時々、楊柳の上
からポトと落ちてくるものがあつた。手で撫で廻したのは不
覚である。驚やら烏やら、とにかく鳥の糞にはちがいない。

「ちいつ……。対手にならぬやつほど恐い対手はないぞ」

智深は呟いて少し座の位置をかえた。歌う者、手拍子を叩
く者、与太もんどもは、浮かれ騒ぐ。するとまた、頭上の柳
の葉隠れでも、烏がガアガア啼き騒いだ。のみならず、智深
の襟くびから杯の手に、またぞろ、ワラ屑みたいなのがこ
ぼれた。

智深は癩癩をおこして、突っ立った。

「ええい、やかましいっ。この化けもの柳には、烏の巢があ
るとみえるな」

「相すみません。和尚さん、いま梯子を持ってきて、巢を落
しますから、お待ちなすって」

「そんな手間暇がいるもんか。ここの烏も畑荒らしの一族だ。
こうしてやる」

あつと、ごろつきどもは思わず嘆声をあげた。智深が法衣
の諸肌を脱いだからだ。そしてその酒身いっぱい繚乱と見
られた百花の刺青へ、思わず惚々した眼を吸いつけられたこ
とであろう。

いや、驚倒したのは、それだけではない。智深が大きな柳

の幹を抱くようにして、半身をやや逆さにしたと思うと、む
くりと根廻りの土が揺るぎだした。ううむっ、と智深の半裸
から陽炎が立ち、大樹の親根が見え、毛根が地上にあらわれ、
どうっと、大樹は根コギになって仆れた。

「……どうだ、拙僧の余興は」

智深は洒落のつもりらしい。だが彼はがっかりした。気が
ついてみると、あたりのチンピラは、烏の群れより迅く、逃
げ散っていた。舌を巻いたどころの驚きでなく、恐怖に駆ら
れ、その日の計略も忘れて街へ逃げ去ってしまったものらし
い。

さすが、それからは仕返しも断念し、腹の底から溜伏した
ものに相違ない。以後はコソコソ影を見せても、花和尚さま
だの、花羅漢さまのと、遠くから平蜘蛛になって、めつたに
側へ近づこうともしなかった。

「こりゃ、淋しい」と、彼は啣った。

「それに、やつらの馳走になりっ放しなものも心苦しい。よし、
こんどはこっちで招いてやろう」

或る日、彼は酒肉を調べて、逆に彼らを園の一庭に招いた。
大よろこびで、彼らはやってきた。こうなると、日ごろのゲ
ジゲジも迂路鼠も青草蛇も、案外、天真爛漫なもので、飲む、
踊る、唄うなど、百芸の歡を尽して飽くるを知らない。

「ところで、花羅漢さま。今日は一つ、一同におねだりがご
ざんすが、お聞き届けくださいませようか」

「なんだ貧乏人の拙僧に」

「たいそうお見事な錫杖をお持ちでござんすが、いかがな
もんで、ひとつその、花和尚さんのお腕前を一度拝見したい

って、みんなが申ししておりますが」

「なに。おれの武芸をみせろというのか。そんなことなら無料ですむ。おやすい頼みだ」

さらぬだに、久しく振ってみなかつたかの鋼鍛え重さ六十二斤の鉄の愛杖。それを取るや、酒の薙を離れていった。まづ片手振りを試み、また八相、青眼、刺戟の構えを見せ、さらに露砕、旋風破、搏浪、直天、直地の秘術など、果ては、そこに人なく、一杖なく、ただ風車の如き唸りと、円をなす光芒がぶんぶん聞えるだけだった。

すると何者か。近くの破れ土塀の崩れの辺で、

「ああ、見事。……すばらしい！」

とわれを忘れて、つい発したような声でした。

その声に、智深はつい気合いを外してしまい、しんとしていた与太もんたちの群れへ。

「誰だい？ あんなどころから覗いて、いま妙な気合いをかけおったのは」

「お。……ありやあ花羅漢さま。武芸のほうじゃあ、たいしたお方でござんすよ。汴城八十万の禁軍ご指南役の一人、林冲と仰っしゃるお武家で」

「なに、林師範だって。そいつあ、えらいモンに見物されたな。ごあいさつせずばなるまい。おい、誰か行って、丁寧に呼びしてこい」

十一 鴛鴦の巢は風騷にやぶられ、

濁世の波にも仏心の良吏はある事

林冲には、通り名がある。豹子頭といい、あわせて豹子頭林冲とよぶ。

生れつきなる豹のごとき狭い額、琥珀いろの眸、また顎の鋭さは燕のようなので、そんな綽名がつけられたものか。

見るからに都の武人風。装いは洒落っていた。緑紗の武者羽織は花団模様はなまるもようの散らし、銀帯には見事な太刀。また、靴も宮廷ごのみな粹いまいなのを履はいていた。年ごろは三十四、五か。：

やがて、こなたへ歩いてくる背丈もまた抜群せたくといつていい。

智深は、その人を庭に迎え、名乗りあつてから、一盞を献じた。漢は漢を知り、道は道に通ずとか。二人はたちどころに、肝胆相照かんたんあいてらして、

「花和尚、以後はあんたを義の兄と敬おう。武芸からも、年齢の順からいっても、あんたが上だ」

と林冲がいえば、智深もまた、

「この魯智深には、ちともつたいない弟だが、そういつてくれるなら、ここで義兄弟の杯を」

といったわけで、時のたつのも忘れ顔に、緑蔭の清風は、この二人のためにそよめくかとはかり爽やかだった。

するとどこかで「——旦那さま、旦那さま」と、しきりに

林冲を探すらしい女の声がある。彼はすぐ薙をつつ立ち、そしてさっきの崩れ土塀の辺に、チラと見えた小間使い風の女の姿へ、

「おうい、錦児。拙者はここだここだ。なにか急用でも起ったのか」

「……あつ、だ、だんなさま、たいへんでございますよ、奥さまが」

侍女の錦児は、心も空な口走りをつづけ、馳け寄りざま何ごとかを、泣き泣き主人に告げだした。——聞くうちにも、林冲はその豹額にするどい敵意と不安を搔き曇らせていたが。

「……ま、泣くな。よしっ」と錦児をなだめてから、酒もりの筵のほうへ。

「妻の身にちと心配が起ったので、今日はこれで失礼する。花和尚、いずれまた会おう」

「やあ豹子頭。俄に酒もさめた顔いろじゃあないか。御夫人がどうかしたのか」

「いや、侍女の錦児をつれて、この先の東岳廟へ参詣にいった帰り途、なにか殿帥府の若い武士どもに搦まれて悪戯に困っているとのこと。捨ててはおけぬ。——ご免!」

「いやいな林冲の姿は、もう彼方の崩れ土塀を跳び越えていた。なにさま、豹身が風をきって跳ぶかの如く、それは見えた。」

無理はない。林冲にとっては、多年の恋が結ばれて、つい先ごろ、家庭を持ったばかりの新妻なのだ。——来てみれば、東岳廟と並ぶ五岳楼の廻廊の欄干に、それらしき武家風の若者十人ばかりが、腰かけている。手に手に吹矢の筒、弾弓、鳥笛などをもてあそび、べつの一組は、階の口を立ちふさいで、通せんぼをしているとしか思われぬ群れである。

「や、や。あれや高依の養子、高御曹司の近侍たちだな」

よもやと思つたが、やはりそれだつた。廻廊の下には、日ごろ見覚えのある白馬に見事な金鞍がすえてある。——そもそも、現宋朝の徽宗皇帝のもとに、いまや禁門汴城における勢威第一の寵臣は誰なりやといえは、馬寮の走卒でもすぐ——それは殿帥府ノ大尉（近衛大将）高依さまだ」と答えるであろう。——高ノ御曹司とは、つまりその人の養子なのだ。もとは高家の叔父、高三郎の子であるが、貰われて、時めく近衛大将軍家の公達とはなつたのである。

ところが、この御曹司、養父の権力をかさききて、ろくなことはして遊んでいない。取巻きの近侍たちも皆、上流子弟の愚連隊といつたような連中で、街の人々もこの悪貴公子の群れを「花花獵人」などと称していた。また中には「……血筋はあらそえないもの……」と、いう陰口もなくはない。

都民のうちには、現朝廷の寵臣高依も、むかしは、無頼な一遊民にすぎず、喧嘩、賭けごと、書画、遊芸、何にでも通達していて、いつか権門に取り入り、蹴毬の妙技から、ついに、徽宗帝に知られ、鰻のぼりの出世をとげた法外な成上がり者なることを今でも覚えていた者が少なくなかつた。——だから養子の高御曹司が、よその娘、人の女房にもすぐ眼をつけての女狩りなどと、高家のお家芸よと、怪しみもしないわけかと思われる。

が、それはさておき。

林冲の新妻はいま、五岳楼の御堂扉にしがみついて、執拗な高御曹司と、争っていた。

「いやですつ。私は人妻です。見ず知らずのあなた方に誘わ

れて、そんな御堂内などへはいかれませぬ。お放しくださいませ。放してッ」

「まあ、いいじゃないですか。あなたは見ず知らずというが、磨はもう夢に見るまであなたを前々から恋していた。ここでお会いしたのは、東岳廟のおひきあわせだ。ああ、そのお唇、そのお眼眼」

「ええ、けがらわしい。何をなさるんですかつ」

「女はみんな、初めは柳眉を逆だてて、そういうが、ひとたび、ほかの男を知ってごらんなさい。わが身のうちに潜んでいた泉の甘美に驚きますから」

「ばかつ。色きちがい」

「あ痛ッ。よろしい。あなたはその美しい織手で、磨の頬を打った。磨も暴力をもって報いますよ。火のごとき愛情の暴力で」

「あれッ。……たれか、助けてッ」

そのとき階の口に通せんぼしていた高の近侍たちを匆ねとばして、馳け上がったきた林冲が、

「悪戯者。人の妻へ、なんの真似だ」

と、いきなり高御曹司を突き飛ばした。そして、彼らが呆っ気にとられた刹那に、妻の体を引っ抱えて、さっと廻廊の角まで身を避け、次に彼らがどんな陣容を盛り返してかかってくるかと、身構えをとって睨んでいた。

しかし、相手の群れは、事の不意に度胆を抜かれてしまつたか、ただちに復讐に出てきそうもない。

「……や。林師範だぞ」「豹子頭か」と、小声をかわしていたと思うと、たちまち、どどどと階段を降りて、高御曹司を、

白馬金鞍の上に奉じ、まるで落花を捲いた埃のように逃げ去った。

新家庭の林家には、あれからというもの、何か気味のよくない暗影に忍び入られて、あわれ鴛鴦の夢も、しばしば姿の見えぬ魔手に脅かされ通していた。

それみな、高御曹司の陰険な迫害と、執拗な横恋慕とはわかつている。が、わかっているだけになお恐ろしい。相手は殿帥府の最高官の部屋住み。こちらは軍の一師範。どうにもならぬ。

「女房。気をつけてくれよ、わしの留守にも、外出にも」

「いいえ、この頃はもう、買物にも錦児ばかりやって、私は外へも出たことはありません」

林冲とその若き妻は、家にあっても声をひそませ、垣の物音にも、すぐ心を研ぐような習性にまであつていた。というのも、しばしば妻の身が襲われかけたり、林冲が友人の家で酔っている間に、不慮な事件が留守中に起つたり、何度となく、謎のごとき怪に呪われていたからだつた。

「……狙われているのは、私の身だけではございませぬ。私を愛してくださるなら、あなたもご自身に気をつけてくださいませ。禁軍へご出仕の行き帰りにも」

彼の妻は、林冲が門を出てゆくたびに、うるんだ眼で、良人に言った。男は出ないわけにはゆかない。林冲は笑ってみせる。

「案じるな、おれは大丈夫だよ。こう見えても、武術では豹子頭の前に立ちうるほどな敵はない」

——が、或る日、閱武坊の辻で、ひよっこり魯智深と行き会った。彼とは、あれからも数回飲みあって、いよいよ交友密なるものがあつたが、

「どうしたんだ豹子頭、会うたび顔いろがよくないぜ。そろそろ秋風に枯葉は舞うし、拙僧もなんだか淋しい。ひとつそこから飲ろうじゃないか」

と、その日も誘われるまま、居酒屋の軒をくぐった。

花和尚と語っていると、彼は何もかも忘れえた。しかし、妻のことなどは、話もしないし、相手も訊こうとはしない。

二人は、夕明りのころ、閱武坊の酒屋を出て、ぶらぶら街を歩いた。——すると誰やら後ろのほうから、妙な売り声で、呼ばわるともなく、呶々ともなく、ぼそぼそ言いながら、くツついてくる男があつた。

「——ああ狭い狭い、世間は狭い。この都に人間は多いが、眼のある人間は一匹もおらんじやないか。……こんなすばらしい銘刀を見てくれる者もないとは情けなや」

先に行く智深と林冲は、ちよつと、耳うるさげに振り向いたが、すぐ話に夢中な様子だつた。

するとまた、後ろで。

「大道商人の刀売りとは、わけが違う。仔細あってぜひなく手放す物。買い逃がしたら二度とかかる宝刀には、生涯出会うことはあるまいに」

——そのとき、先の二人は、いつもの四つ角で袂をわかつていた。「……また会おう。近いうちに」といつて去る魯智深の後ろ姿を見送って、林冲はふと呶々をもらしていた。

「いいもんだなあ。真の友達というものは」

そしてふとまた、歩きかけると、藍木綿の浪人服に、角頭巾をかぶった四十がらみの男が、手に見事な宝刀を捧げ、それに「売り物」とわかる草標示を掲げ、つと、林冲のそばへきて。

「どうです、安いもんでしよう。三千貫とは」

「刀か。刀は腰にもある、家にもある。いらぬいよ」

「そうか。お武家もお盲さんか」

「なに」

「そんな、ざらにある駄刀とはちと違う。眼があるなら、抜いて見させ」

「なるほど、拵えは良さそうだな」

「ちつ。素人くさい。柄拵えや鞆作りを売るんじゃないぜ。

いらんか」

「まア、待て」——つい好きなので手をのばし、刀の鯉口下三寸の辺をぐつと握ってみた。男は手を放す。林冲は思わず、むむと心で唸つた。

持ち味、たまらない触感と重みである。鞆を払ってみれば、夕星の下、柄手に露もこぼるるばかり。

ためつ……すがめつ……彼の眸は稀代な銘刀の精に吸いつけられ、次第に放しともない誘惑に駆られていた。

「浪人、どうしてこんな神品を手放す気になったのか」

「どうしてって。……この檻樓姿を見てくれればわかるだろう。飢えた妻子が待っている。それ以上、訊くのは罪だ」

「訊くまい。いくらだ」

「昨日今日、三千貫とわめいてみたが、売れない。御辺を眼のあるお人と見て、半分にかけてやる」

「欲しい。だが少々、金が足らん」

「一千貫。あとはビタ一文も引けない。それでよければ」

「よし、わが家の門までできてくれい」

ついに林沖は手に入れた。妻もよろこんだ。

——単に家宝を得ただけでなく、銘刀は魑魅魍魎も払うという。そんな心づよさも抱いたのである。

——と。三日ほどたつて。

殿帥府の副官陸謙から使者が来た。その書面をひらいてみると、

聞説。貴下ハ先頃、稀代ナ宝刀ヲ入手セラレシ由。武

人ノ御心ガケ神妙ナリト、高大尉閣下ニオカセラレテモ、御感斜メナラズ、マコトニ御同慶ニ堪エナイ。

という祝辞の次に、こう結んである。

……ツイテハ、高家御秘蔵ノ宝刀ト、貴下ノ愛刀トヲ、

一夕、較べ合ツテ鑑賞ヲ共ニシタシトノ高閣下ノ御希望

デアル。依ツテ、明日改メテ迎エノ使者ヲ出ス故、御携来

ヲ希ウ。

虞候陸 百拝

「……はアて。誰が、いつのまに刀のことなど知って、喋ったのか。もっとも大道で買った物。誰も見ていなかったとは限らないが」

林沖も、ちょっと怪しみ、妻もなにか動悸を感じたが、しかし、殿帥府副官の名では、公式な召しも同様で応じぬわけにもゆかない。もしかた、文面の通りなら光栄とも考えられる。何が待つか、ともかくもその翌日、林沖は正装して宝刀をたずさえ、迎えの者とともに、大尉の公邸に出向いた。

衛兵の見える公邸の門を入ると、林沖を伴った迎えの者は、「あれなる中門を通って、東の殿廊を進んでいかれい。その階に、召次の者が副官がお越しを待っておいでになろう」教えられるまま、彼は奥へ進んだ。けれどそこには誰も立ち迎えていない。

「はてな？」

振り返ると、彼方で見知らぬ衛兵が、黙って、北廊を指さしている。さては教え違いか聞き違いかと、北へ進むとまた一門があった。すでに禁苑の一劃とおぼしく、美々しい軍装の近衛兵が戟を持って佇立していたが、林沖を見ると、啞のごとく黙礼した。禁軍師範の林沖も、まだかつて、こんなところまでは来たこともない。

だが弱った。いったいどこを訪うたらよいのか。壮麗なる一閣の階を上って、内を窺うと、さらに中庭が見え、彼方に縁欄をめぐらした一堂があるのみだった。

「……あれかな？ なにやら人の気配もするが」

橋廊を渡って、一房の珠簾内をそっと覗いてみた。すると、

正面の欄間の額に、墨の香も濃く読まれたのは、

白虎節堂

とある四大字。林沖はぎょつと、立ち竦んで、

「や。これはいかん。節堂は軍の機密を議するところで、枢機に参ずる高官のほか立入りならぬところと聞いておる。えらいところへ迷い込んだもの」

慌てて後へ戻ろうとしたのである。が、時すでに遅かった。靴音たかく、さっと一方の扉を排して現われた將軍がある。

これなん、かつての毬使い高毬、いまでは殿帥府ノ大尉にして徽宗の朝廷に飛ぶ鳥落す勢いの高俵であった。

「こらっ、なにやつだ。節堂を窺う曲者は」

「あ。高閣下ですか。お召しによって伺うた師範林冲にござりますが」

「なに、お召しによってだと。いつ汝を呼んだか。そんな覚えはないッ。怪しい言い抜けを」

「いや、いや。確かに陸副官のお使いをうけ申して」

「陸謙、居るかっ。この者を召捕れっ。わしを暗殺せんと近づいた者があるぞ」

「あっ！ なんて拙者が」

すでに彼の四方は鉄桶のごとき兵士で取り囲まれていた。

その中には、顔もよく知っている副官陸謙の姿も見える。林冲は、それへ向って、

「使いをよこしたのは、貴公じゃあないか。家にある貴公の手紙が何よりの証拠だ。なんで拙者をこんな目に会わすのか。おいつ、笑いごとじゃあない。返事をしたまえ」

怒りをこめて叫んだものの、陸謙はでんで受けつけない。

「はははは。ばかな血迷い言を。……なんで一師範の汝を、高閣下がお召しになろうぞ。敵国のため、軍の機密を盗みに

忍び込んだか、または、高閣下に怨みをふくんで、お命を窺いおったか。いずれかに相違あるまい。——それっ、あの手に持っている宝剣を用いさせるな」

兵士らは、どっと喚きかかり、林冲の体を圧ッ伏せ、高小手に縛り上げて、その日のうち獄へ下げてしまった。

獄は、開封奉行所の構内にある。時めく高家から下げられ

た罪人だし、罪状云々とあつては、ただ、首斬れといわぬばかりな囚人だ。しかし府尹の職として、そうもならない。奉行はこれの調べを、与力役の孫に命じた。そして、一応の証拠固めをなすまでの時日を藉した。

これは、林冲にとって、受難中にも一つの幸いだったといえよう。はたまた、彼がこの世に果すべき人間業のいまだつきざるところだったか。

与力の孫は、名を定といい、囚人からも世間からも、慈悲心のある良吏として、慕われていた。綽名といえは良いほうにはつけないものだが「仏孫子」といえば知らぬものはない。

孫は、日ごろから林冲の人となりを知っているし、また、節堂事件が、高家の捏ッち上げくさいことは、すぐ感づいたので、われから進んで、いきさつを洗ってみた。

その結果、高御曹司の横恋慕が泛かびあがった。そして彼をめぐる取巻き連の陸謙、富安などという阿諛佞奸な輩が、巧みに林冲を陥穽に落したものとわかつてきた。——またそれは林冲が奉行白洲で訴えた冤罪のさげびとも合致していた。

「これまでの謎も、すべて私には解けています。この林冲をなきものとし、私の妻を奪わんとする高御曹司の執拗な呪咀が、さまざまな形となって、わが妻と家庭を悩まし脅かし通してきたものに違いありません」

——それは主席の奉行も認めた。けれど、奉行にしる高家の睨みは恐い。たとえ冤罪の証拠証人をならべ得ても、無罪にするわけにゆかず、死罪以外の処刑もどうかと、ためらわれた。

「じゃあ、お奉行に伺いますが……」

と、孫与力は、処刑判決のさい、日ごろの仏の孫さんにも似ず、色をなして詰めよった。

「この奉行所は、朝廷と民とのためにあるのでなく、高大将家のためにあるものでしょうか」

「孫定、なにを申すか。それはちと過言だろうが」

「でも、お奉行のごとき憚りをもてば、あだかも、高家の私設奉行所のごとき観を、庶民に与えるのではございませんか。

……さなきだに、高家の専横と、高御曹司の非行などは、口には出さねど、開封の都民はみな見て知っておりますからな」

「では、林冲の処刑は、どう裁いたらいいと申すのか」

「とにかく、死刑はいけません。死罪だけは、断じていけない。と、いって、軽罪では、高家の父子もおさまりませぬ。

死一等を減じて、辺疆の地へ流刑にされてはいかがでしょう」

「さ。どうだろう、そんな処分では」

「大丈夫です。高家の側にも、手ぬかりがありました。副官陸謙の手紙が林家にあったのを、てまえが握っています。あれを陽なたに出せば、奸策歴然ですから、いかに高家たりとも文句は噫にも出せないはずと、てまえは固く信じまする」

末期宋朝の濁世にも、なおこの一良吏があったのである。即日、流刑と決まり、林冲は白洲で宣告をうけた。

当時の慣わし、半裸にして、二十ぺんの棒打ちを背に食らわせ、その顔に刺青する。また、護送となつては、鉄貼りの

板の枷が首にはめられ、その錠前に封印がほどこされた。流刑先は、滄州（河北省）の牢城だった。——牢城とはつ

まり諸州から集まる罪囚の大苦役場の名。

また、その聴許を要請された殿帥府の高家でも、司法法廷の裁判には抗いかねたものだろう。だまって、その公文書に裁可の官印を捺して下げてきた。

さて。いよいよ罪人押送の日となつて、開封奉行所の門を一步出てきた林冲の姿は、もうこの一月ほどで肉落ち頬骨

あらわれて、足もとすらもなよなよしていた。その日、往来に群れなしていた街の男女や縁故の見送り人たちも。「……これが昨日までの林師範か」と、涙を催さずにいられなかった。

人目を浴びつつ、やがて州橋を越え、都関も出ると、また一群れの人々が待っていた。すると中から林冲の妻と、妻の父が走り出てきて、

「おお智どの。……待っていた。しばしの別れを、あすこの酒店で」

と、馬子茶屋みたいな店の奥へみちびいた。もちろん、これにはお定まりの賄賂が充分とどいていること。で、そこで

の限られた寸時の別れをお互いに泣いて惜しみあう機会はあるが、しかし、妻は身も世もなく、林冲の胸に涙の顔を埋めて離れない。すでに「——時刻、時刻」と、戸外の護送役人

が喚き立てても、離れようとしなかった。

林冲は、眦をふさぎ、ここに観念の臍をきめて、わざと酷

くいった。

「いつまで、嘆きあっていても、別れはつきない。また、深く考えてみれば、恋々と泣き濡れているだけが愛情でもない。

おそらく、この林冲がいなくなれば、高御曹司が、そなたの身や、お舅の上に、またあらゆる毒手を加えてくるだろう。

……早くどこかへ身を隠せ。そして、そなたはまだ若い身そ

ら、良縁があったら他家へ縁づいて、わしのことは忘れて幸福に暮しなさい」

彼は即座に、酒店の老爺から、筆と硯を借りうけ、離縁状を書いて、岳父にあずけた。

「お情けないっ。……あなたは私を、そんな女と思つていらつしやるんですか。いやですつ。……死んでもそんなことは」

妻は悶絶せんばかり、なお良人の膝にしがみついて慟哭する。その間にも、護送の役人は、軒を叩いて、

「早くしろ、早く」

と急ぐ。ついに舅は泣き狂うむすめを無理にもぎ離し、ともに擁して泣き死んだように丸まってしまった。それを見捨てて、林沖の姿を急ぐ腰鎖は、遠い流刑地の途へ仮借なく彼を追いたてていった。

押送役の刑吏は、端公（端役人のこと）の董超と薛霸という男だった。当時、宋代の習慣では、囚人をつれた端公の泊りには、道中の旅籠屋でも部屋代無料の定めだった。だから彼ら小役人は、旅籠へつくなり自身で火をおこし、粟を炊き、出張費稼ぎの小金を浮かせるのを役得としていたから、囚人の食物などは、ただ露命を保たせておけばいいとしているに過ぎない。

東京城の関外へ出てから二日目、小さな宿場町へ黄昏れ頃つくと、とある田舎酒館の前に馬を駐めて、彼らを待つていた男がある。黒紗の袍を着て、卍頭巾、黄革の膝行袴ばきに、馬乗り靴という扮装。そして鞭を逆手に、

「おお端公たち、いまついたか、ご苦労ご苦労」

と、何かすでに、ここでの会合を東京で謀し合せておいた

ことらしく、眼くばせくれると、端公らは、ただちに附近の旅籠へいって、林沖の腰鎖を部屋柱に縛りつけ、そして早速、以前の田舎酒館へ引返してきた。

卍頭巾の男はもう、卓に酒肴を並べさせて待つていた。そして、銀子二十両ずつ、二た山にして、彼らの卓の鼻先においてある。

「さあ、遠慮なく飲まんか。これから滄州まで何百里の道のりだが、途中にはもうろくな酒肴には出会わんぞ」

「へい。どうも恐れいります。……が、なんともはや、殿帥府副官つてえお偉い方の前じゃ、ついその、かたくなつちまいやしてね」

「なにも公ではなし、そう恐れいらんでもいい。こちらも人目をはばかることだからな。そこで開封奉行所を立つ前日、そのほろどもの私宅へ、そつと使いをやつといた例の件だが、心得たろうな」

「……そ、それがですよ旦那。弱りやしたな。こう二人で、首つき合せて相談してみたんですが、なにしろ奉行所のほうじゃ、必ず囚人の生命だけは無事流刑地まで押送せよ、万一あらば端公もまた、罰せらるべし……とございますんでね」

「そんなことはわかっつる。わかっつるからこそ貴様たちに密々こうして高家よりお頼みとしてお吩咐がくだつたのじゃないか。それができんとあつては、この副官陸謙もただでは帰れん。いやか」

「と、とんでもない。てまえどもみたいな端役人に、ご大官さまから内々のお頼みときちやあ、是も非もなく、お引受けは認めませんが、なにしろ、日ごろは薄給な身分ですし、家

には女房子年寄まで、うようよ腹を空かしているような暮しなのでもし職にでも離れますと、その、その日から」

「だから申しておるじゃないか。……そのほうたちの手で、滄州までの途中において、あの林冲をうまく殺しおせたら、褒美の金はもちろん、生涯、高家の庭番にでも何にでも使つて面倒はみてやる、食うには困らせはせんと……」

「へい。そこはまことに、ありがたいお話で、一生仕事だぜと、こいつにも言ったんですが」

「どうも煮えきらんやつらだな。何をまだ、そんなに思案投げ首をしているのか」

「ただの囚人なら、一も二もござんせんがね、なにしろ豹子頭林冲といっちゃ、禁軍のご師範、やり損なったら」

「たわけめ。なんのための首カセや腰グサリだ。人なき山中で一棒をくれてもよし、谷添い道で突き落し、あとから息の根とめてもいいではないか。……ただしだぞ、林冲を殺したと

いう証拠には、彼の顔から金印（いれずみ）の皮膚をはがし、それを証拠に持ち帰れよ。よろしいか。さあ合点がついたら、元気をだして大いに飲め。——そしてそれなる銀子二十両は、

当座の手付け金として渡しておくから収めておくがいい」

賄賂は彼ら端役人の端公には、日ごろも収入に数えている常習のものだが、こんどのは相手も違ふし、ケタも違ふ。

一生涯の運のつかみどころかとも思われた。

そこで、陸謙と別れた翌朝、彼ら端公二人は、またも片手に水火棍（三尺の警棒）をひッ提げ、林冲の背をしッぱだき、

しッぱだき、峨々たる山影の遠き滄州の長途へ、いよいよ腹をきめて立っていった。

十二 世路は似たり、人生の起伏と。

流刑の道にも俠大尽の門もある事

俗に、滄州までの道は二千里（一里ヲ六町ノ支那里）といわれている。

道々は難所折所。護送役の端公（獄役人）二人は、毎日林冲の縄ジリをとって追いたてながら、

「さて、どこでこいつを殺したもんだらう。ただの囚人なら雑作もねえが、なにしろ禁軍八十万の師範だ。いくら首枷がはめてあるからって、もしやり損なったらこっちの首がすぐ失くなる」

ついつい、十数日はいつか歩いてしまった。殺意もこう念入りでは、機会もなかなかつかめない。

「オイ、薛」と、端公の一人が、もう一人の董へささやいた。「毎日毎日、これじゃあ容易にラチはあかねえぜ。なんとか、そろそろ手を下さねえと」

「わかったよ。いちどに息の根をとめようとするから難しいんだ。あしたからは、林冲の足をあの世へ向けて、冥途の旅

の一里塚を一ツ一ツ踏ませてくれる。そのあげく、ばッさりやりやあ、なんの仕損じることがあるもんか」

その晩。——山の旅籠につくと、端公の薛は、いち早く、裏口へ廻って湯玉のたぎるような熱湯をたたえた洗足盥を抱えてきた。

「おい、林師範、これで足を洗うがいいぜ。疲れた足は、よく湯に浸すに限るんだ。夜もよく眠れるからな」

「や。これはどうも」

「なんだい。ははあ、首カセが邪魔になって、うまく体が屈めねえんだな。よしよし、おれが草鞋を解いてやる」

「とんでもない。お役人が囚人の足の世話なんぞを」

「いいってことさ。まア出せよ足を。……都じゃそうもいかねえが、長途の道づれ、なんの遠慮がいるもんかね」

親切ごかしについて乗って、林沖は、それが熱湯とも知らず、うっかり盥のなかに足を突っこんだ。あッ——と退くまもおそし、足りびはやけただれ、彼は足りびを抱えて、悶絶せんばかり転がった。

「てへッ、なんでえ、大げさな」

端公二人は、見向きもしない。彼らは、木賃の定例どおり、例の自炊にとりかかり、寢酒を飲んでしやぎ合った。もちろん林沖へも馬の飼料でもくれるように木鉢に盛った黄梁飯が、首カセの前に置かれはしたが……。

けれど火傷のくるしさ、食欲も出ず、夜すがら彼は眠れもしなかった。あげくに、翌朝は新しい草鞋を穿かせられたので、数里も行くと、草鞋の緒は血にまみれ、乾いた血と土とが、終日、足の皮膚を破った。

「おいおい林師範。どうしたんだい。そんな足つきじゃ滄州までは半年もかかっちゃうぜ。早く歩けよ、早くよ」

「むむ、どうにも歩けぬ。これでもあぶら汗なのだ」

「なに、歩けねえと」

薛が、水火棍（獄卒棒）を振り上げるのを、董は止めて、「まあまあ、そう短気を起すなよ。そのうち足も癒るだろう。さあ、歩いたり歩いたり」

棒の先で、軽く林沖の背や腰を小突いてゆく。撲られるより、このほうがはるか辛い。

それから三日目。有名な野猪林という原始林へかった。

夜ごとの睡眠不足と疲労に、さしもの林沖も、折々、立ち居眠りをもよおすらしく、混沌とよるめいていた。眼顔を見合せた端公の二人は。

「ああ、くたびれたな。どうだい、ちよつと一と昼寝していいこうじゃないか」

「よかろう。だが、縄ジリをどうする？ おれたちがとろりとしている間に、もしや林師範に逃げられちゃあ大変だが」

林沖も休みたかったので、つい言った。

「どうか、ご心配のないように、拙者の体を、木の根へ、厳重に縛って下さい」

「いいかい。じゃあ、すまねえが、ちよんの間、そうしてもらおうか」

林沖は、彼らのなすままに委せていた。彼らは、その手頸足頸まで、がんにがらみにして、林沖を大樹の幹に縛し終ると、やにわに、

「よしっ。もう、こつちのもんだ」

と、躍り上がった。その打って変った形相に、

「あつ。なにをなさる」と、林沖は叫んだものの、もう遅い。彼らは左右から水火棍を振り上げて、

「やい林沖、おれたちを恨むなよ。おめえにとっては、ここまでがこの世の定命。また、おれたちには出世の門だ。

——林沖を殺して面皮の金印（刺青）をはぎ取って帰れば、生涯安楽にしてやるとは高大將軍家のおさしがね。あの陸謙っ

という副官の命令さ。恨むなら、そっちを恨め」

いうやいな、林沖の頭蓋骨もくだけるとばかり、二つの棒が風を呼んだ。ところが、一棒はカンと異様な響きを発して宙天に飛び、一棒は腕ぐるみ捻じ曲げられて、とたんに端公二人は大地へ叩きつけられていた。

ここに現われた者は、林沖の難を聞いて、都門開封から後を追ってきた花和尚の魯智深だった。

「さあ、わが輩が追ったからには、もう、てめえたち邏卒は、召使いも同然だぞ」

智深はそこらの立ち木へ向って、禅杖を振るい、一撃二撃してみせた。およそ、どんな生木も巨象にヘシ折られたように肌を裂いて砕けた。端公二人は、慄えあがって声も出ない。

「師範。情けないお姿になられたなあ」

花和尚は涙もろい。こう労わりつつ、林沖を木の根から解いて、さて。

「……どうする豹子頭（林沖）。おぬしはここで逃げたいか。

それとも滄州の流刑地まで曳かれてゆく気か」

「お花和尚……」と、林沖は再会のよろこびに咽びながら「拙者も男だ。おのれ一人助かってはいられない。逃げれば、東京に在るいとしい妻や舅などに、この大難の身代りをさせるような結果になろう。やはり拙者は刑地にいつて、苦役に服すよ」

「そうか。……ぜひもないなあ。ならばせめて、滄州の近くまで、わが輩が送っていこう。さあ、この和尚の背に、おんぶするがいい」

「冗談じゃない。囚人の身が」

「なんの遠慮だ。大相国寺の菜園で、おたがいは義の杯を交わした仲間じゃないか。きさまはわが輩の弟分だぞ。さあ兄貴のいうことをきけ」

こうして、数日の旅は、花和尚が彼を背に負って歩き、端公らは、荷持ち、走り使い。また旅籠旅籠では、下男のごとく、追い使われた。

おかげで林沖の足はすっかり癒え、毎日の食養も充分にとられたから、以前にもます健康に復してきた。しかも道づれは刎頸の友、端公は従者のかたち。——行くてに待つ運命も長途の苦も忘れて、思わず数十日は愉しく歩いた。

「兄弟。名残りは尽きないが、明日はもう滄州でまえの近県に入るそうだ。今夜はひとつ、別れの思いを酌み合おう」

花和尚は、その夜の木賃宿で、鄙びた別宴を設けさせた。

お互い心ゆくまでと、酌しつ酌されつはしていたが、さて離愁の腸、酔いもえず、

「……豹子頭。おぬしの心がかりは、おそらく都にある愛妻や舅の身の上だろうが、智深はまだ当分、大相国寺の菜園にいるつもりだ。よそながら見ているから案じなさんなよ。それとここに持ち合せの銀子がある。地獄の沙汰もなんとやら、これを持って」と、二十両ほど、彼に渡し、また傍らの端公たちにも、小粒の銀子を投げ与えて、

「やい、牛頭馬頭」

「へい」

「あしたから、この花和尚がいねえからって、またぞろ師範に酷いまねをしゃがると、きかねえぞ。どうせてめえたちも、

お役がすめばすぐ開封東京へ帰るんだらう。よくわが輩の顔を覚えておけよ」

「わ、わかり過ぎるほど、わかっております」

翌朝、木賃の軒を出ると、智深はかさねて、林冲到別れのべ、風のごとく、開封東京の空へ引返していった。

その日、一行は滄州の県内に入った。

次の日である。はや何となく、部落も郊外のさまを思わせ、道に見る村娘の姿やら童の群れも、人里くさい賑わいが濃くなっていたが、やがて、村の用水川らしい石橋の附近まで来ると、

「おお、おお。柴家の大旦那が、狩猟からお帰りとみえる」と、そこらの河畔で川魚をとっていた男女も、畑の物を手車に積んでいた百姓も、みな道の端によって、なにやら地頭の行列でも迎えるようなさまだった。

端公の一人が、土地の者に訊いていた。

「その石橋の彼方に、豪勢な長者屋敷の門が見えるが、あれが柴家というのかね」

「へえ。おまえさん、柴進さまを知らないのかい。滄州通いの囚人送りの役人がよ」

「つい、聞いていないが、この界限で、そんな有名なお人なのかね」

「この界限だけじゃないよ、柴進はお名だが、通り名は小旋風、貧乏人にはお慈悲ぶかく、浪人無宿者なども、何十人となく、いつも食客として置いているほどでさ。たとえば、お前さんたちみたいな流刑者でも、ご門前へ寄れば、きつと施し物をくださるか、一晩泊めて、労わってやるとか、とにかく、た

いそうな侠客大尽さまなのさ」

「ああ、思い出した。それじゃあ、なんでも滄州の近郊には、宋の太祖武徳皇帝のお墨付を伝来の家宝に持っているどえらい名家があると聞いたが」

「それさ。それが今いった、小旋風柴進さまというこの土地の侠客お大尽。……あつ、もうおいでなすった。あのお馬の上のお方がそうだよ」

——見ればなるほど、一団の人馬が、上流の川添い道から下ってくる。

狩猟の帰りとは、ひと目でわかった。大勢の従者のうちには獲物の猪、鹿、尾長鳥などを担っている小者もある。さらに柴進その人は、巻毛の白馬に覆輪の鞍をすえて跨がり、かいらには紗の簇花巾、袍（上着）はむらさき地に花の丸紋、宝石入りの帯、みどり縞の短袴に朱革の馬上靴といういでたち。年ごろは三十四、五か。龍眉鳳目、唇あかく、いかにも洒々たる俠骨の美丈夫。背には一壺の狩矢、手に籐巻の弓をかいこんでいた。

「やっ。……ちよつと待て」

すでに行き過ぎんとしたせつな、柴進は急に振り向いて、従者の一人に、こういった。

「——あの道端に見える滄州行き之首枷人を、護送の端公に断って、ちよつとこれへ呼んでみい。……どうも、ただ人とも思われぬ骨柄だ。日々、滄州送りの囚人を見ぬ日はないが、あれなる男のような人態は見たことがない」

従者はすぐ走って、林冲と端公を、彼の前に連れてきた。この一機縁が、やがて豹子頭林冲の運命を大きく変えたも

のとは、後にこそ知られる。——しかしその場では、名乗り合つたすえ、

「さては、わが目にたがわず、あなたは先ごろまで、禁軍ご師範役として、武林に名の高い林冲どのおざつたか。——わしのもとにいる食客や若い者でも、都にありし日、あなたの教導を受けたという話がかねがね何度も聞いています。……ともあれ、ぜひ今夜は、てまえの屋敷に一泊していただきたい」

と、伴われて、柴家の門を、何気なく潜つたまでのことにすぎない。

いや、その夜の歓待の宴でも、一挿話はある。

大勢の家人食客の中で、皆から「洪先生、洪先生」と呼ばれていた傲岸な一武者があつた。

彼もしきりに、飲んではいしたが、柴進がひたすら礼をつくして、林冲を敬い、その骨柄を賞め、あまつさえ洪より上席にすえているので、洪先生たるもの、内心甚だよろこばない風なのである。

とも気づかず、柴進は上機嫌で、

「これこれ、二人の端公にも、杯をやれ。そして銀子、反物など、なんでも欲しい物を与えるがいい。その代り、こよい一夜は、柴進の責任において林冲どのの身はあずかる」
などといっている。もちろん、それらの賄賂は、首枷を脱らせる鍵代なのだ。端公にしても、恐い眼にあうよりは、ふところに入りのあるほうがいいのはいうまでもない。

だからこの夜ばかりは、林冲も首枷なく、心から馳走になつた。ところが、それも、洪先生にはおもしろくない。「……

林冲の武芸とて何ほどのことやあらう。しかも流刑の囚人ではないか」と、蔑みきつている眼ざしだ。

「……ははあ。洪先生、ひがんでいるな」

宴も酣となるにつれ、柴進もやつと気づいた。折ふし庭上には、冬の月が鏡のごとく冴えていた。彼はそこに壮烈な一図を描きだしてみたい思いにそそられたらしい。

「——どうです洪先生。日ごろは宅の若いもんや田舎剣者ばかりがお相手で、せっかくの神技も振う折はありますまい。ここに禁軍の前師範林冲どのが見えられたこそ、もっけの俸

せ、一手の試合をおためしあつてはいかがです」

「むむ。それは面白そうな」

待つてましたと言いたいところがしいが、洪先生は重々しく構えこんで、じろと林冲のほうを見た。

「異存はござらんが、なにぶん、それがしの剣たるや、仮借の相成らぬ強剣だ。それご承知の上なれば」

「林冲どの。洪先生はああいうが、あなたの方は」

「さ。拙者の棒術は、お見せするほどの妙技ではありませんが」

「では、庭上に出て、願おうか」

ここで、よろこんだのは、二人の端公だった。洪先生が大剣を払って、月下の庭に立ったのを見たからである。もしその大剣の一颯の下に林冲が敗れ去れば、手濡らさずで自分たちの目的も達しられる。——そう考えて、満場の人々の興味とはべつな固唾をのんでいていだった。

ところが、月下の試合は、一瞬にして、林冲の勝利に帰してしまつた。

彼は、棒をとって、立ち向つたのだが、戛然、白刃と棒が相搏つたと思うやいな、どこをどうして打ち込んでいたのか、誰の眼にもとまらなかつた。明白なのは、腕を折られた洪先生が、地にへた這つていた姿だけである。

「いや、さすがさすが。聞きしにまさる見事さではある。かかる技をお持ちしながら、牢城の苦役につかれねばならぬとは、さても何たる運命のいたずらか」

柴進はひとしお同情を深めたらしい。——次の日、彼が立つ折には、日ごろ親しくつきあっている滄州の長官、牢城の管堂(獄堂奉行)、また差撥(牢番頭)などへ宛てて、それぞれ添書を書いた上、大銀二十五両二封をも、あわせ贈つて、

「まあ、おからだを大事に勤めてください。いずれ冬着も届けさせましょう」

と、力づけた。さらに、また、二人の若者を付けて、牢城門外まで送らせるといふ親切気のかぎりであつた。

十三

氷雪の苦役も九死に一生を得、
獄関一路、梁山泊へ通じること

「……ああ、ここが以前からよく、この世の外のように聞いていた滄州牢城の大苦役地か」

死者の肌を思わず凍てきつた大陸の線。飛んでゆく鴻の影も、そのの生きていることが、不思議に見える。

「こんなところで、苦役につこうとは」

林冲は、いくたびも慄然とした。

それにしても、柴進の添書や銀が、ここでは、どんなにも

のをいったかしのれない。就役者はまず、百ぺんの殺威棒で打ちのめされ、いちどは気絶して“地獄への生れ代り”をやらせられるのが掟だったが、それものがれた。

また、管堂の面前で裸体にされ、四つん這いにされ、肛門を金棒でほじられ、やれ舌を出せの、前の物の毛を剃れのと、あらゆる非人間的な侮辱と翻弄に会うものが通例なのだが、それもまずお目こぼしにあずかつた。

そして、登簿、金印調べまで、すっかり終つて、これで労役につく仕事場がきまれば、まず地獄人口の一員に数えられて、果て知れぬ苦役生活が始まるわけだ。

「おい新入り、こつちへきな。——てめえの仕事は、獄神堂の番人ときまつた。おなさけだぞ。ありがたいと思ひねえ」

差撥は彼を拉して、途方もなく広い刑務区域をぐんぐん歩いていき、やがて閻魔大王の祠である古い一堂を指さした。

「ここはな、おい。天王堂ともいうが、掟に服さねえ獄囚は、片ツぱしから、しよツ曳いてきて、この前で土埋め、のこぎり引き、耳削ぎ鼻削ぎ、いろんな重刑に処す流刑地の内の死刑場だ。だがよ、おめえは朝晩、線香を上げ、掃除などして、番人役を勤めていれればいいわけだ」

「それは、何とも倅せでした。他の服役者にくらべれば」

「そうよ。よつぽど恩にきなくては罰が当るぜ」

「その上にもですが、なんとか、お計らいをもって、首枷をおゆるし願われませぬかなあ」

「除つてくれというのか。ふふん、そりゃあ、だいぶ物費りになるがね」

「銀子なら、なおこれに所持する限りのものは、いといませ

んが」

「そうかい。もつとも、おめえのところには、まだ柴家からの差入れもあるだろうしな。むむ、まかしておきな」

差撥は、銀をうけとって戻ったが、やがてその夕きて、首枷をはずしてくれた。

冬は深まる。

大陸の氷地はかんかんに凍てきてても、数万の服役者には一日の休みもない。ポロ布と垢と水漬と眼ヤニにまみれた骨ばかりの人々が、朝は暁天から蟻のごとく、ゾロゾロ出てゆき、夕には疲れた煙のように、どんよりと簇り戻ってきて、やがて眠る。

苦役場は三十里四方もあろうか。農耕、土木、鍛冶、木工、染色、皮革なめし、車輛作り、牧畜、酪農、機織など、その生産は、あらゆる部門にわたっている。だが、ここでの消費物資ではない。ほとんどが都へ輸送され、宋朝の贅と権門の奢りと、軍事面に費やされる。

が、林冲は、柴進のおかげで、苦役だけは舐めずにすんだ。柴進からの差入れ物はすべて、獄吏たちに分け与えていたから、彼だけには、別扱いの自由が黙許されていたわけだった。

時折、買物などしに、街へも出かける。

すると、ある日である。後ろのほうから「……もし、もし」としきりに呼ぶ声がある。そして、ひょいと振り返った彼の

前へ、

「おっ、やっぱりそうだった。林師範さま、李小二でござい

ますよ。……いったいまあ、どうしたわけで、こんなところへ」

飛びつくように寄ってきた町人姿の男があった。

「やあ、これは恥かしい。そちは以前、開封の家の近所にいた酒屋の手代ではないか」

「どうも、あのせつは、まことにご恩にあずかりました。今もって、女房ともよくお噂などして、忘れてはおりません」

「はて。なにか世話でもしたことがあったかなあ」

「若気とは申しながら、とんだ費いこみをやりまして、あぶなく主人から役所へ突き出されるところを、お助けいただいたことがございます。そのせつお立て替えてくださったお金すらまだお返ししてもおりませんで」

「なんだい、ずいぶん古い話じゃないか」

「まあ、それはともあれ、ちよつと手前どもまでお越しくださいませんか。その後、面目なさに、主家を離れ、流れ流れて、この滄州くんだりまで来てやつと落ちつき、いまでは、小さい飲み屋をやっておりますんで。へい、きつと女房も、びっくりするに相違ございません」

これが縁で、その日を皮きりに、彼は街へ出るごとに、李小二の店へもよく立ち寄った。

裏街の小料理屋で、女房と小僕を使って、李小二は厨房も自分でやっている。牢役所の獄吏にも馴じみが多いので、役所へきたついでには、天王堂へもきて、林冲の洗濯物や縫物を見てくれたり、肉饅頭をおいていたり、とにかく気心のいい夫婦なので、林冲もとんだいい知人をえたと、よろこんでいた。

すると、その年も越えて、或る日のこと。

「た、たいへんですぞ、林冲さま」

「なんじゃ李小二。顔色を変えて」

箒ほうきを手に、そこらを掃いていた林冲は、彼があたふたと求めるまま、急いで、堂内に入り、その一房の扉を、内からぴったりと閉めた。

李小二が店をすてて告げにきたのを聞けば、なるほどこれは、林冲の身にとって、容易ならぬ凶変を思わす予報にちがひなかつた。

今日の午下ひるがり頃だという。

ぶらりと、彼の店へ入ってきた二人づれの横柄おうへいな来客があった。

一人は、色の生ツ白い小づくりなやけ男。もう一人は軍人らしい体つきの赤っ面あかむち。ともに、年は三十がらみだ。何気なく「いらっしやいます……」といったとたんに、李小二はぎよつとした。どうも都で見た顔だと思つたら、その赤っ面のほうは、たしかに高こう大將軍家の副官陸謙りくけん。

はて、こいつア何か？ ——と直感したので、女房を客のおあいそに出し、酒、料理などの註文を聞いたり、それとない雑談を、厨いたま房窓からきき耳たてて窺うかがっていると、やつぱり開封かいほう弁べんだし、またしきりに高將軍だの、高家だのという囁ささやきが飛びだしてくる。

それはまだいい。ところが、そのうちにだ、

「——おい、店のおやじ、途中から使いは出してあるが、やがてほどなく、牢城らうじやう営えいの管営かんえい（奉行）と差撥さばつ（牢番長）がこれへ見えるんだ。そしたら、後の客は、入れてはならんぞ。店は買切りにしてやるからな」というご託宣たくせん。

果して、まもなく、管営と差撥がやってきた。

料理を増し、酒を加え、しばらくは、さり気なく飲んでいく様子だったが、そのうち笑い声もやみ、急に、ひっそりしてしまった。

李小二は、女房の尻を突ツついて、耳打ちした。彼女は眼でうなずいて、そつと、料理場と店の境にたたずんで、聞き耳を澄ました。奥では李小二が、眼を凝こらしている。そのうちに、女房の腰から足の辺がわなわな慄ふるえだしてきた……。なにかよほど恐ろしいことでも聞いたに違ちがひない。

卓たくに首をよせあつていた四つの顔は、胸を上げて笑い合つていた。陸謙の手から、管営と差撥の両名へ、莫大な銀が手渡された。

——そしてまた、酒飯しゅはんに移り、やがて帰り去つたのは、ついさつきで、まだ街の屋根を夕陽が赤く染めていたころだった——とある。

ここまでの話を聞いて、林冲りんちゆうも驚いた。

「では、陸謙と一しよのにやけ男は、富安ふあんという野幫間のたいこだろう。やつは、高家の御曹司の腰巾着こしきんちやくといわれている佞物ねいぶつ。だがその二人が遙々はるはる、なにしにこの滄州そうしゆうへやってきたのか」

「あなたを殺しにきたんですよ。……と聞いたんで、女房のやつは、ぞうツと、背すじが寒くなつて、竦すくンじまったわけなんで」

「銀と権力で、ここの管営と差撥を、買収かいしゆしてきたわけなんだな」

「そうでしょう。なにしろ、大変なことになるましたぜ。なんとか、ご要心をなさらなくっちゃあ」

「まあいいよ。どっちみち凶^{きようじゆう} 状持ちとなった身だ。李小二、女房にもいつてくれ、心配するな」と

しかし、さすがに、李小二が帰った後は、なんとなく安からぬものがある。その夜の夢見もよくはなかった。

「ようし。それほどまで、執念ぶかく、この林沖の一命を狙うとあるならば、いっそ、それもおもしろい。この命、こっちもただではくれてやれん」

かねて何ぞの場合にはと、ひそかに買い求めて閻王像^{えんおうぞう}の壇下^{だんか}に隠しておいた朱房^{しゆぼう}のついた短槍^{たんそう}と短剣。その短剣だけをふところに呑むと、彼は用事をよそおって、ぷいと街へ出ていった。

そして、広くもない滄州の街、やつらの姿を見かけたらただ一突きにと、逆に刺客を狙って、その影を探し求めていた。

数日は、何事も無い。相手の危害が見えないのと同時に、彼らの姿にも出会えなかった。

妙なもので、自然、研^とげていた気もゆるむ。しばらく李小二の店へも寄らなかつたが、十日目ごろの午後、ちよつと覗^{のぞ}いて、

「変だなあ、あれきりだが？」

と囁^{ささや}くと、夫婦とも、ほつとした顔で、

「それはまあ、なによりでございますよ。このままで何事もなければ……。ま、ひと口、召しあがっていらっしやいませな」

「そうしうか」

と、久しぶり、一酌^{しやく}して、夕刻前に、営へ帰っていった。

——すると、点視庁^{てんしちやう}からの呼び出しで、

「明日から、刑務場十五里先の東門外にある馬糧廠^{ばりやうしやう}へ転務を命ずる。起居は中央の飼糧^{まくさ}小屋の一つにとること」

という職場がえの命令である。

そこも割りのいい役らしい。飼料^{かいば}の出し入れには袖の下も多いとかで、囚人仲間では、羨望^{せんぼう}の職場だ。

「承知しました。さっそくに移ります」

多くもない荷物を持ち、彼はその夜のうちに、東門外へ引越した。折から颯^{ひょうひょう}々たる朔風^{さくふう}の唸りが嚴冬の闇を翔^かけ、空には白いものが魔の息吹^{いぶ}きみたいにちらつきだしていた。

——見れば、荒れ崩れた長い黄土の土塀、曲がりかけた観音開きの木戸。入って、まん中の一番大きなまぐさ小屋が、番人の住む台所付きの建物らしい。

黄ばんだ寒灯^{かんとう}の洩れてくるところから、前任の老番人が、彼の跽音^{あしおと}に首を出した。

「ほう、おまえかね、こんどのまぐさ番は。昼、わしのほうへも、天王堂の者と入れ代れというお差紙がきていたが」

「やあ、遅く来て申しわけない。食器や雑器など、天王堂へ置き残してきたがらくたもあるが、よかつたら使ってくださいい」

「そうかい。ここにも、おらの使っていた酒瓢^{さけひやく}筆やら、鍋や欠け茶碗なぞもころがってるよ。よかつたら使うがいいぜ。それとな、夜具はこの隅に。もっと奥には、あんなに炭俵が山と積んである。なにしろ寒いから、冬中は炉^ろに火は絶やさねえでの」

「買物はどこへ出ますか」

「そうそう、西の藪道^{やぶみち}を二、三里行くと、ちよつとした酒

屋や肉屋の用は足りる。ただ、馬糧廠は、まぐさ盗ッ人がよく狙うところだから、それだけは用心しなよ」

小屋の家主は、かんたんに入れ代った。

天王堂とちがって、板屋葺の古い建物。寒いことおびただしい。なるほど、大きな炉やら炭俵の山があるわけだとうなずかれる。

馴れぬせい、最初の一夜は、寒さでガクガクと熟睡もできなかった。

明けてみると、外は大雪。しかも終日降りやむ気色もない。林沖は退屈をおぼえた。

すると夕方。差撥の部下らしい巡邏が、小屋の隙間から内を覗いていった。その登音も、吹雪の吠えにすぐ掻き消え、小屋の灯はまたすぐもとの寂寞に返ってゆく。

「ああこんなとき、酒の買い置きでもあれば少しは愉しめるんだが」

味気ない炉に、しきりと、李小二の店が恋しくなる。だが街は遠すぎるし……と、ふと壁を見ると、風流な恰好をした酒瓢箪がかかっている。

「そうだ、西の藪道を二、三里行けば酒屋もあるとかいっていたな。どれ、一と走り行ってくるか」

その瓢箪を、朱房のついた短槍の先にくくりつけ、羅紗張りの笠に、蓑を着込み、がらと吹雪の戸をあけて外へ出た。

——が、気にかかったらしく、また内へ戻って炉の火へ厚く灰をかぶせ、灯を消し、洞然たる屋根裏まで見通して、

「まず、こうしておけば、間違いなからう？」

咬きながら、小屋の錠をおろして出ていった。

大陸特有な魔の白夜。

積雪は沓をうずめ、朔風は横なぐりに地を掃いて、咫尺もわからない。息はつまるし、睫毛には雪片が氷りつく。

「おや、何の古廟だろう？」

半里ほどきて、ふと息を休めた道の傍ら。道祖神やら何の廟やら知れないが、林沖の心に、ふと仏心でもうごいたのだろうか。ひとと、雪中に額ずいて、

「そも前世の宿業にや、林沖、罪のおぼえもなきに、この獄地に流され、かくのごとき、生ける醜骸となっております。

あわれ、なにとぞご加護あらしめたまえ。遠き都にあるわが妻をも護らせたまえ」

と、口のうちに祈念して、やがてまた、歩きだした。

やっと辿りついた小部落の酒屋で一ぱいひっかけ、さらに瓢箪には酒、ふところには焼肉の包みを抱き、やがて帰り道についたころは夜も更けていた。雪はいよいよ烈しく、風は足に逆らい、満身これ飛雪の姿で、笠のつばを抑えつつ、もとの馬糧廠まで馳けもどってきた。

そして何気なく、例の観音開きの木戸口を蹴開き、内へ入ってみると、こはいかに、他のまぐさ小屋は無事なのに、自分の寝小屋の一棟は、雪の重さに押し潰されたのか、見事、ペしゃんこになっている。

「はアて。これは弱った。……これじゃあ、飯も炊けねば、寝場所もない」

途方に暮れたとはこのことか。

「こうしては、この身まで、雪の中に埋められてしまう。」

そうだ、今夜はさっきの古廟こびやうに寝て、夜が明けてからの思案しあんとしよう」

板屋根の一部をめくって、心覚えのところから蒲団ふとんだけを引っ張り出し、それを担かたいで、村道の古廟まで返ってきた。

廟の中は案外広い。ひよいと見ると、金色こんじきの鎧よろい甲いかぶとをつけてた恐ろしい武神像と、二匹の小鬼が祠まつつてある。また壇には、供物くもつだの蝟燭ろうそくの燃え残りだのたくさんな色紙などが散らばっていた。彼は、その前に夜具をのべて、

「やれ、一寸先はわからぬもの。妙なところで夜を明かすことになったもんだな。だがまあ、瓢箪ひょうたんに酒のあるのが何よりの倖ませ」

さっそく焼肉の包みを解いて肴さかなとし、瓢ひょうの口から冷や酒を仰飲あおっていた。

「ああ、いいあんばいに酔ってきた。これでぐツすりできれば」

ごろと、身を横ざまに、手枕となったが、やはりいけない。着ている白木綿の服や肌着を透とおして雪水がジミジミと沁しみてくる。——のみならず、どこか遠くで、バチバチと妙な響きが、雪風にまじって聞えてくる。それがまた耳について、寝つかれなかった。

「や、や。変に明るいぞ」

ぎよっとして、彼は飛び起きた。廟びやうの破れ壁の隙間から、赤い夜空が見えたのだ。

「しまった！ まぐさ小屋の方角だ」

彼のあたまには、すぐ小屋の炉ろの火がその原因と考えられていた。まぐさ小屋は一棟ではない。たちまち馬糧廠ばりやうしやう一面の

火の海となるやもわからない。

「すわ、こうしては居られぬわえ」

枕もとに立てかけておいた朱房の槍を持ち、すぐその消火のために駆け向おうとしたときである。彼はギクと足を立ち胸むすめた。

廟のすぐ前で、なにやら人声がしているのだ。聞くともなく、耳をすましている。

「うまくいったなあ、管宮かんえい。……やあ、差撥さばつもご苦労だった。

これで林冲りんちゆうも、こんがり、黒こげになつたらう」

——声には都で覚えがある。高大将家の副官、陸謙りくけんにちがない。

それに答えているのは、これも紛まれない管宮と差撥だ。もう一人いるのは、陸謙の連れの富安ふあんだろう、あなたの猛火を眺めあいながら、しきりにげらげら笑っている。

「まったく、管宮さんや差撥さんの大手柄でしたな。この大雪を幸いに、部下に命じて、林冲の寝込みを計り、小屋の腐れ柱を一気に除とらせたというんだから堪りませんや。大雪の重さはあるし、やつは、屋根裏の梁はりに圧おされて、寝たまんまのお陀仏だぶつとなったに相違ありません。林冲にとれば、まあいい往生でさあね」

「いやいや、それだけではまだ、完全とは思われんので、われわれ兩名が、ここへ来がけに、あの潰つぶれた屋根へ、さらに松明たいまつ十本ばかり投げ捨ててきたのでござる。これならばもう万に一つも彼奴きやつの生きのびるおそれはない」

「さすが管宮。ご念の入ったことだ」

ほめそやしている陸謙の声はつづいて。

「——これで、身どもも主家の使命を見事仕遂げ、面目ももつて都へ帰ることが出来る。いずれ帰府のうえは、高家より足下たちへご褒美の沙汰もあるうが、では、これで」

「はや、お立ち帰りで」

「むむ、人目については、相互のためによくないからな。旅舎へ戻つて、早晩に出立しよう。富安、まいろうか」

別れ去ろうとする刹那。——林冲は、内から廟の扉を蹴開いて、

「待てつ、下種ども！」

いきなりまず、手近にあつた差撥を短槍の先に引ツかけて、びゅつと、黒い血しぶきとともに刎ね飛ばした。

「や、や、や。なんじは？」

「腰が抜けたか。林冲はここにいろ」

「ぎやつ。た、たすける。助けてくれ」

「卑怯者つ。なにをほざくか」

すでに、林冲の豹眉は、彼本来のものに返つていろ。豹身低く、短槍の一閃また一閃、富安を突き刺し、あつというまに管営の大きな図う体も串刺にしてしまい、つづいて雪の中を逃げまろぶ陸謙の影へ向つて、

「佞物。どこへ行く気か」

びゅんと、手の槍を征矢のように投げつけた。槍は彼方の背に立ち、異様な絶叫をツンざいて、夜目にも鮮らかな血の色がぱつと四方を大きく染めた。

「ああ、ついにおれは四人の軍官吏を殺した。宋朝のもとでは、いまは身を容るるところもない犯人となつた——林冲はみずから慄然としたが、身を翻して廟の前に額ずき、武

神の像に礼拝して独り何度もいつていた。

「思うに、もう宵のうち、まぐさ小屋が仆れていなかったら、この林冲は彼らの悪計どおり、梁の下に押し殺され、さらに焙り殺されていたかもしれませぬ。それが助かつたのは、廟の神意と存ぜられる。まさに、天のお助けだ。この先とも、林冲を護らせたまえ」

そして、朱房の短槍を持ち直すやいな、夜の明けぬまにと、雪を蹴立てて、その場から姿をくりました。

馬糧廠の火の手も、この積雪で、まもなく下火にはなつたらしい。しかし一時は、警板や警鐘の乱打に、刑務場から附

近の村々でも、みな起き騒いで、非常の夜警についていた。そのため、林冲はまったく逃げ道を封じられ、あつちこつちを、袋の鼠のように走り廻つたが、ままよとばかり、ついに街道口の大焚火を見て、その仲間へ割りこんでいった。

「うう寒い。すみませんが、すこし焙らせておくんなさい。皆さんも、ご苦労さまで」

「さあさあ、ぬくもるがいい」と、四、五十人の村民たちは、何気なく譲ってくれたが「——おや、おめえは村の者じゃないな。面に刺青があるじゃねえか？」

「へい、牢城営の使いのもんでございますよ」

「牢営のお使いだつて、おいおい、いやだぜ、そう側へ寄つてくれるなよ。おめえの着物は血だらけじゃないか」

「あ、この血ですか。なあにこれは牛を屠殺したときの汚れでさあ。じつあ昨晚、管営さまと差撥さんの官邸でお客のご招待があつたんで、牛やら羊やらの屠殺をいいつけられたも

のでございますから」

「そうかね。それにしちゃあ、いやに生々しいが」

大勢の村民たちはみな、不気味な顔をしあつたものの、流刑囚の兇悪さは日ごろ見ているので、それ以上は何も問わない……。また林沖も、ひそかにこれはまずいと警戒しだったが、ふと見ると、大焚火のそばには、村民たちが寒さしのぎに飲んでいた酒瓶が幾つも開けてある。それを見てはもう矢もたてもなかった。

「すみませんが、そいつを一杯、振舞つてくれませんか」

——しかし、誰も黙っている。うんともいわず、すんともいわない。

林沖は「えい、面倒な」と勝手にそこらの器を取つて二、三杯飲んでいた。

ところが、その間に、古廟の方から走つてきた者が、後ろの方で、なにやらコソコソ耳打ちし合つていたのだった。やがて林沖のそばへ来て、

「おまえさん、よっぽど酒に渴えていなさるんだらう。さあ、こんなときだ、飲むさ。存分、飲んでいくがいいや」

と、こんどは頻りにすすめたした。

もうこの辺でと、酒の碗をおきかけていたが、つい林沖はまた手に取つた。そしてたちまち半壺を飲みほし、さて、礼を言いながら起ちかけようとしたときである。向う側にいた一人の男が、ぱつと林沖の頭から投網をかぶせた。

「それっ獲つたぞ」

とたんに、彼の上へ、棍棒、鉤棒、鳶口、刺叉、あらゆる得物の乱打が降つた。そして、猪の亡骸でも担ぐように、部落の

内の靦干場へかつぎ入れ、

「こいつはおそらくただものじゃねえぞ。夜明け次第、管営さまのお役所へ届け出る。ひよつとしたら、ご褒美ものかもしれねえぞ」

と、わいわい、どよめき合つていた。するとほどなく、村長が飛んできて、

「たいへんだぞ皆の衆、たつたいま、柴進さまのお屋敷の壮丁が飛んできて、捕まえた男は、手荒にするな、侠客大尽の柴進さまが、以前、世話をなすつた男だといふことだ。——いますぐこれへ、柴家の衆が引き取りにくるそうだ」

「えっ、柴の大旦那の知り人だつて。そ、そいつは飛んでもないことをしてしまつたわい」

「いや、何もお叱りはねえよ。だが決してこのことは口外するな、もし口外したやつは、村にはおかぬぞというお達しだぞ。村長のわしの立場もなくなる。みな衆、頼んだぞ。牢城宮へはいっさい啞になつてくれよ」

——さて。この夜の騒ぎも七日、十日と過ぎていつか噂も下火となつていたところ。

村の名望家、例の小旋風柴進のやしきの奥まつた一室で、あるじの柴進の前に、その懇情にたいし、心からな礼と、別れの辞をのべていたのは、余人ならぬ豹子頭林沖であった。

あの夜。この柴家の内へ、助けられてきて、さまざま手当をうけたことも、そのときは全く覚えもなく、翌日、聞かされたことだつた。

ここには、数十人の屈強な壮丁や食客もたくさんにいる。だから馬糧廠の火災と同時に、古廟の前の兇変も、たちどこ

ろに柴進の耳へ聞えてきたし、柴進もそれを知るやいな、
「さては、林師範へ何か危害がかかったところを、逆に師範のため、都の刺客も管営も差撥も刺し殺されたにちがいない。日ごろから悪評しきりな管営や差撥だった。命を落したのもいわば天罰……。ただ、林師範こそお気のどくな身の上だ。あの人を見殺しにしてはならぬ」
と、たちどころに手分けを命じて、その結果、瞬時に、邸内へ助け入れたものだった。

——その柴進は今、すっかり体も恢復した林冲を見て、いとも満足そうに、また、名残り惜しげにこう告げていた。
「できることなら、長くわが家にいていただきたいが、いまはそうもなりません。といって、あれ以来牢城役所では四道の街道口に関所を結び、蟻も通さぬ検問のきびしさとか。しかしまあ私にまかせて、ひとまず山東のほうへ落ちのびてください。計略はこの柴進の胸にありますから」
「まこと親身もおよばぬお情け、生涯忘れはいたしません。すでになかったはずの後半生、いかようとも、おさしずになんせませます」

「では、これに紹介状をしたためておきましたから、山東の梁山泊へ行って、よい時節をお待ちなされるがいい」
「ほ。……梁山泊とは」

「まだご存知ないか。——山東は済州の江に臨んだ水郷で、周り八百里の芦荻のなかに砦をむすぶ三人の男がいます。——頭目を王倫といい、その下には宋万、杜選と申して、いづれも傑物。部下、七、八百をもち世に容れられぬ輩ばかり。ま

た伝え聞いて、宋朝治下の世に、身のおき場のないような者どもも、次第にそこへ難を避けていくというありさまで、いわば自然にできた日蔭者の別天地でもある。……その首領三名とは、てまえもよく知っている間柄。あなたがお越しあれば、粗略にはいたしますまい」

「それは、願ってもない場所。ぜひ行ってみたいが、しかしどうして、滄州の街道口をうまく脱出できませんようか」

「ご心配あるな。今日はもうその手筈もできていますから、途中までこの柴進もお送り申しあげる。いざ、お身支度を」
促されて彼は柴家から贈られた衣服に着かえ、また饞別の銀子、旅の用具なども、肌身に持った。

柴進みずからは、華奢な狩猟扮装を、この日は一ぱい派手やかに、馬上となつて、門前に出る。そこには、すでに従者食客など数十人が、旗をささげ、鷹をすえ、また狩犬をつれ、手には槍、勢子棒などを持って勢揃いしていた。

林冲の身は、巧みにこの中の同勢の一人に偽装されたのだった。——かくて堂々と、滄州の街道はずれを行けば、路傍の土壁には、林冲の人相書が貼つてあるのが、しばしば見え、辻には「林獄囚逮捕令」の立て札が、いたるところで眼についた。

「見ましたか？」

柴進が馬の上から、後ろの林冲を見て笑えば、林冲もまた、無言のままニヤリと笑う。

まもなく、東街道口の新関の柵門と番所小屋が見えてきた。たたたと、同勢小早めに足なみを迅めて、その前にさしかかると、

「待て、待てっ」わらわらと躍り出してきた関守の番将、番卒たちが、

「おう、これは柴家の大旦那でしたか。今日もまた、狩獵へおでましで」

と、俄に態度をかえて、お愛相を言い囃した。

柴進も、うららかな顔をして。

「やあ、牢城の兵隊さんたちか。先頃からどうもご苦勞なこつたなあ。まだ捕まらんかね、人相書の野郎は」

「かいてもく手懸りがねえんですよ。災難なのはわれわれで、夜も日も番屋に常詰で、ここんとこ街の灯も見ておりませんやね」

「そうだろう。だが夕方の帰りがけには、しこたま猪の肉や鳥を土産に置いてくからな。酒も届けさせておこうよ」

「そいつは愉しみだ。お願いしますよ旦那」

「心得た。だが役目は役目だ。一応、供の連中を一人一人調べてくれ」

「御法度の明るい旦那のこと。そんな必要はありませんや。さあお通なすつて」

「でも、万一お供の中に、お尋ね者の人間が紛れこんでいたらどうする」

「わはははは。ご冗談を」

「はははは。じゃあ、ご免っ——」

同勢三十余人。まんまと、こうして馳け通ってしまったのだった。

やがて十里も行ったところで、林冲一人が、その中から途をかえて別れ去ったのはいうまでもない。以後、彼の旅路は

二十日あまりの山野をいそぎ、やがて朔風肌を切るような雪もよいの或る日、見わたす限り蕭条として葭や枯れ芦の江岸にたどり着いていた。

渡船場らしい水際に、酒屋の旗をかけた茶店が見える。

そこで、一杯ひっかけているうちに、一と癖ありげな茶店のおやじが、じろと林冲を眼で撫でまわして。

「旅人。あんたアこれから、山東のどこへ行くって、おつもりだね」

「そいつアこつちから聞きたいところさ。亭主、ここの渡舟はどこへ行くのか」

「ここは渡し場じゃねえわさ。たまに魚を漁りに出る舟が着くだけでね」

「では、梁山泊へ渡してもらおうわけにもゆかんか。はて、弱つたな」

「梁山泊へおいでのつもりかい」

「ふうん……？」と、おやじはいよいよさんな眼をして。

「どこで聞いたか知らねえが、梁山泊へというからにやあ、おめえはお上の目明しか、それとも何かべつな目あてでもあつてのことか。あそこへ渡ったがさいご、ただごとじゃあ帰られねえぜ」

「そこは合点だ。じつはな亭主。その梁山泊の頭領あてに、こんな添え状をもらつてきた者なんだが……」と、柴進の手紙を示すと、おやじはその上わ書と彼の姿をじつと見くらべ、

急に物腰をあらためてこう言いだした。

「いや、お見それ申しやした。滄州の柴旦那のご手蹟に間違

いはねえ。どうもとんだご無礼を。……ようがす、いますぐ迎いの舟を呼びますから、もう一杯、そこで寒さ凌ぎを飲っていておくんなさい」

茶店の亭主とは、そも何者ぞ。これもまた山東梁山泊の耳目として、ここに仮の生業をしている手下の一員には相違あるまい。

小屋の奥へ隠れたと思うと、彼は一張りの弓を持って現われ、大きな鎗矢をつがえて、はるか水面遠き芦荻の彼方へ向って、びゅっんと、弦をきった。矢うなりは水に響いて長い尾を曳き、その行方に、一群の鴻がバツと舞い立ったと思うと、やがて一艘の早舟が、芦荻の波間をきって、こなたへ漕ぎすすんでくるのが見えた。

十四

無法者のとりで梁山泊の事。ならびに吹毛剣を巷に売る浪人のこと

梁山泊は正確に周り何百里とも見きれず、号して当時八百里（支那里）といわれている。風浪の日はおそろしいが、晴れた日は、山をめぐる白雲、太古の密林、そして、目路のかぎりな芦の州から葭の汀とつづいて、まるで唐画の「芦荻山水」でも見るような風光だった。

ところが、ここには、宋朝の世に容れられぬ反骨の徒、不平の輩などいつか何百人群れよって山寨をきずき、公然、時の政府に抗して義盗となえ、舟行や陸の旅人などをなやましていた。従来しばしば取潰しにかかった官軍といえど、生きて還った例がない——と、までいわれている巨大な「無法

者地帯の浮巢”だったのだ。

「——なるほど、これでは」

その日、朱貴（茶亭の亭主、実は山寨の一員）が呼んだ早舟に乗せられて、対岸の金沙灘で舟を下りた林冲は、行く行く、その要害には舌を巻いた。

芦荻と芦荻の間は舟の迷路をなし、陸の道は迷宮を行くにひとしい。賽の河原にも似て、蕭条たる水辺、幾ツもの洞門、谷道、また密林の中など、忽ち帰る方角もわからなくなる。

かくて、山腹の断金亭までたどりつくと、そこで彼は、首領の王倫に会った。

王倫はもと、都でまじめに学問を志し、進士の試験勉強に励んでいたが、官府の腐敗を見たり、世間の裏表を知ると、勉強が馬鹿らしくなった結果、試験にも落第してしまったので、ついに自暴ツぱちの放浪をつづけたあげく、この梁山泊へ来て宋万、杜選、朱貴などの仲間を得、いつか七、八百人の頭目まつりあげられていた者だった。

「おう、滄州から柴進どのの添え状を持ってきたという豹子頭林冲とは、あんたのことか。まあ、おかけなさい」

「これは王倫どのですか。それがしは、もと禁軍の師範、林冲という者、天地、身の容れるところなき人間です。ここに置いてはくださるまいか」

「ご事情は、柴進どのの添え状にも、つぶさに見える。あの方には、以前、恩義をうけているので、お身柄は万々ひきうけた——と申しあげたいところだが、実はだナ」

王倫は、ちよつと、左右にいる宋万や杜選の顔を憚りつつ、

「……正直にいうと、この梁山泊には、現在でも、七、八百人もいるので、いつも食糧が不足がちなのだ。申し難いが、銀子十両を、草鞋銭にさしあげる。身の振り方は、ほかへ行つて考えてくれないか」

林冲は、憤然として、断わった。

「せっかくだが、物乞いに来たわけではない。では柴旦那の手紙を返してくれ。引き退がろう」

すると、宋万と杜選の両名は、あわてて彼を引き止め、また一方の王倫を説き始めた。

「頭目。その扱いは、ちとどうかと思うぞ。第一には、柴の大旦那の顔をつぶすし、第二には、梁山泊の人間は、義を知らぬ忘恩の徒だといわれるだろう。おれたちの仲間は、恩と義でもっている世界だ。それでいいのか」

「でも、山寨の仲間には、めったな者は加盟させられない。万一という惧れもある」

「それは口実にすぎまい。疑わしく思うなら、仲間の誓約を立てさせればよからう」

「誓約。ふうむ……じゃあ、やらせてみようか。おい林冲とやら、誓文なんざ、書けとはいわんよ。その代りに、この王倫の命じることを、三日のうちに、きつとやってみせられるか」

「ここへ置いてくださるなら、いかなることでも」

「よし。じゃあ、もいちど梁山泊を出て、対岸の山東街道に潜み、三日以内に、人間の首を一つ取ってきて、これへ見せてもらおうか。——それも百姓漁夫の首ではいけない。役人なり然るべき武士の首だぜ」

「心得た」

夜は山寨の宛子城で、彼は客としての歓宴に囲まれた。けれどその酒宴中でも、王倫の態度はどこかよそよそしい。林冲も彼の人物を観て「……ははあ、この人は嫉妬ぶかくて、狭量らしい。自分のごとき前歴の人間をここに置いて、将来、首領のお株を奪られでもしてはと、惧れているに相違ない。そんな小人の下にはいたくもないが、さて、天下ほかに身のおくところもない身だし……」と、独り愉しまぬ色をつつんで、三日以内の約束を、観念していた。

次の日、彼は身仕度して、長巻の野太刀を一本ひッ提げ、道案内の雑兵に舟を漕がせて、山東濟州街道に渡った。

第一日は、人にも会わなかった。

二日目は雪晴れの好晴で、「——今日こそは」と、路傍に潜んだり、林の中をカソコソと彷徨っていたが、見かけたのは、黄昏れごろ、家路へ帰ってゆく貧しげな漁夫と、子供づれの百姓夫婦だけだった。

「限られた日は、あと一日きりだが」

疲労と焦躁に、林冲の眼は、すっかり獣じみていた。すると昼少し過ぎ、その眼にとまった一個の旅人がある。——やや勾配の急な雑木山の道を、大きな旅柎を担いで、こなたに降りてくる人影なのだ。「しめたッ」とばかり、よくも見さだめず、走り寄って、その眼の前へ、

「待てっ、旅の者」

長巻の石ヅキを、とんと地に突いて見せた。すると、相手の男は、仰天して、荷物もそこへうツちャツたまま、

「ひっ、人殺しっ」

と、盲滅法、谷そこ目がけて逃げ転げていった。その悲鳴
といい逃げる恰好も、役人でもなし、武士でもない。林冲は
がっかりして、

「ちいっ。もう三日目は暮れそうだし。……はアて、よくよ
く運のない俺だとみえる」

そして、何気なく、道に捨てられてある荷物へ眼を落して
いると、どこからともなく、一陣の殺気が、さっと彼のその
横顔を吹いてきた。

はっと、振り向くと、

「盗賊っ。その荷を拾って、生命は落してもいいつもりか」
怒気と嘲笑をまぜて、言葉そのものが、すでに刃のような
声だった。

見れば、先に逃げた荷持ちの男の主だろうか。

まだ三十がらみの壮者だが、顔いちめんの青痣へもつてき
て赤いまだら髻を無性に生やし、房付きの范陽笠を背にかけ
て、地色もわからぬ旅袍。それへ白と青との縞短袴をはき、
牛皮の毛靴を深々と穿って、腰には、業刀らしい見事な一振
りを横たえてもいる。

「あははは」と、男は林冲が、硬直したのを見て笑った――
「生命は惜しいし、荷は欲ししか。やい盗賊、荷物の男に代
ってその荷を担ぎ、町のあるところまで、身どものお供をし
て行くなら、そこは人情、酒の一杯ぐらい、飲ませてやらぬ
限りもないぞ。ばかめ、どっちを撰ぶのだ」

「むむ、見受けるところ、貴様はただの素町人ではないな。
武士だな」

「おおき、いまでこそ浪々の身だが、昨日までは、五侯の一
人楊令公の末裔として、徽宗現皇帝の旗本にも列せられた武
士中の武士だ。もしそれだったら、どうだというのか」

「よしっ、その首、もらった」
「なにッ。ふざけるな」

ほとんど同時。白光を噴いた双龍にも似る二人のあいだに、
鏘々として、火花が散った。しかし彼の長剣も、林冲の長
巻も、幾十合となくその秘術を尽しあったが、どっちも、相
手の一髪すら斬ってはいない。果ては鏢ゼリとなり、相互と
もに息あらく、ただ鬚の毛を汗にするばかりだった。

すると小高い所から、突然、声がかかった。

「やあ、待ち給え。林冲の三日の約はそれでいい。旅のお武
家にも、どうぞ刃をお引きください」

誰かで見れば、日限切つての約束した林冲の様子いかにと、
それとなく見にきた白衣秀士王倫、杜選、宋万、そのほか梁
山泊の手下数十人の群れだった。

「豪傑、ぜひ今夕は、われわれの寨まで来てくださらんか。
仔細はその上でお詫びするし、また、お身の上も伺いたい」
たつて、梁山泊の寨、聚議庁までつれてきて、その夜、盛
大な宴を設けた。

王倫の考えでは、林冲一人を置くのでは、自分の地位も惧
れられるが、彼に対して、もう一名の互角な人物を配下にお
けば、自然、相互が牽制し合う形になり、御すには御しやす
いし、わが将来も安泰なものと、すぐ胸算用してのことだっ
た。

で、しきりに、酒をすすめ、礼を低くして、

「どうです、浪々のお身の上と伺いましたが、ひとつここに足を留めて、存分、男の一生を愉しんでみる気はありませんか」

それとなく、水を向けてみた。

「いや、お志はかたじけないが、じつはまだ開封の都には、屋敷もあり、身寄り一族も残してあるんで、どうしても一度は立ち帰らねばなりません。——その身が、何故、かかる浪々にあるかといえ、じつは面目ない次第だが」

彼は、ぐっと杯を干して、自嘲をうかべた。その青痣のよきな顔面は、酔うほど一そう青く見える。

「——わが家は代々、宋朝の旗本なので、殿司制使の役であり、かねてまた、高天將軍閣下直属の親衛軍の一将校でもあった。……ところが昨年のこと、徽宗皇帝が、万岁山の離宮にお庭作りを営まれるに当って、制使十名を、西湖へご派遣になり、西湖の名石をたくさん、都へ運ばせることになった」

「なるほど……」

「拙者も制使の一人だった。そこで西湖の花木竹石の珍を大船に積み、黄河を下ってきたところが、運悪く、途中でひどい暴風に遭い、ついに役目も果し得ず、面目なさに、そのまま田舎に身を隠しておるうち、やっとこのたび赦免の令が出たというわけだな……」

「いや分った。それで都へ帰る途中でしたか」

「いかにも、都へ帰って、もいちど以前の官職につき、家名を復さなければ先祖にすまん……と思つて、要路の大官どもに贈る賄賂の品々を荷物となし、これまで来ると、いきなりそれに居る林冲とやらに斬りつけられ、二つとない首を、あ

ぶなく進上してしまふところであった。はははは」

聞いて、林冲も初めて、口を開いた。

「申しおくれたが、自分も以前は、近衛ノ將軍高俣の下にいて、禁軍師範の職にあった豹子頭林冲と申す者。……だんだん伺つてみれば、貴公とは、以前の同僚のようなものだが、もしや御辺は、あだ名を“青面獸”と呼ばれていた楊志殿ではないのか」

「おお、いかにも手前はその、青面獸楊志だが、林師範ともいわれたお方が、どうしてかかるところに居られるのか」

「ま。この刺青を見てください……」と、林冲は、わが額の刺青を指して、苦々と笑いながら、逐一、都から滄州の流刑地に追われた仔細や、またその大苦役場からのがれて、ここへ落ちて来たまでのいきさつを語つて——

「悪いことは申さぬ。この林冲の例を見てもわかること。しよせん、高俣將軍はあてにならぬ佞奸なお人だし、またそれをめぐる軍人、役人、徽宗朝廷のすべでも、腐敗墮落している現状では、たとえ貴公が都へ帰つたところで、とても長く安穩に暮すことはできません。……それよりは、頭領王倫のおすすめにまかせ、われらとともに、この別天地で、男と男の義を生きがいに、存分生きてみる気はありませんか」

「どうも何やら心も惹かれるが、先にも言つたような次第で」

「いや、それまでに仰っしゃるなら、無理にお引き止めもいたすまい」

王倫もあきらめたが、

「……では今夜は、歡を尽して、青面獸楊志の前途を祝うとしよう。ただ、他日でもよい。梁山泊の一天地には、かかる

男どもが集まって、宋朝の腐敗に抗し、こんな生き方をして
いるということは記憶にとどめておいてください。そして何
かの時は、お力になっていただければ倅せというもの」

「一河の流れ、一樹の縁。それはいうまでもありません」

あくる朝も、楊志は山寨から饒別を貰うやら、また、王倫
以下の盛大な見送りを受けなどして、一舟の上から手を振り
つつ、梁山泊を離れて行った。

——さて、ここで物語は、長身青面の壮士、楊志の旅と
もに、開封東京の都へ移って行くことになる。

都へ移った楊志は、さっそく持ち帰った荷を解いて、地方
で蒐めた珠玉、名硯、金銀の細工物など、とにかく金目な物
を惜しみなく、大官たちへの賄賂に使った。そしてようやく、
復職のめどもつき、あとは殿帥府最高の大官、高大将の一印
が書類に捺されれば……というところまで漕ぎつけて、

「まずは、これでつつがなく、家名を持ち直すことができた
わ」

と、希望のその日を待ちぬいていた。

やがて数日の後、殿帥府から「——出頭せよ」との達しが
届いた。晴れの日なので、殊に身ぎれいに慎み、府の一閣に
控えていると、やがて帳を払って現われた近衛ノ大將軍高俅
が、椅子に倚るやいな、傲然とこういった。

「楊志とは、そのほうか」

「はっ、前の制使十名の一人楊志にござりまする」

「どの面さげて、これへ来たか。履歴、上申の書などを一晒
するに、汝は元來、宋家代々の重恩をうけたる家柄の身であ

りながら、昨年、帝の御命にて、西湖石の運搬にあたった折
には、途中、船を難破させたのみか、そのまま行方をくらま
して、自首もせず、今日まで隠れおった不届き者ではないか」
「あいや、事情は、上申書にも逐一したためた通りでござり
まする。かつはまた、ご赦免の沙汰も聞えましたので、出府
いたした次第、なにとぞご寛大をもちまして」

「ばか者、黙れっ。——赦免の令は、汝のために出したもの
ではない。十名の制使中、あらましは任務を全うしているが、
なお二、三西湖に戻って、罪を待つ者もあるゆえ、それへ赦
免を申しつかわしたまでだ。汝のごときは、その場から逐電
して今日にいたった不届き者、復職などは罷りならん。もつ
てのほかな願ひ。とツとと退がりおろう」

楊志は暗愴となった。絶望に打ちのめされて、以来、怏々
の悶えを独り抱きつづけた。

「……いまにして、林冲のことばも思い当ってくる。先祖か
らの家名、父母の形見といえるこの体、それらを汚すに忍び
ぬま、王倫が引き止めるのも断って、なお夢を都につない
で帰ってきたが……、ああ、やはり高俅が権を振うこの都府
は、俺のような人間の住めるところではない」

今はなすこともなし、ほかに職を探す意志も出ない。すで
に復職の運動や賄賂のため、売る物は売りつくしていたし、
明日の食にも困る窮状に追われてきた。

「そうだ、ここに祖先から伝わる一腰の名刀だけが残ってい
る。これを売って、身寄りの老幼に頒け与え、あとを路銀と
して、どこか遠い他県へ行つて、身の振り方でもつけようか」
その日。——彼は一剣を持ち出して、それに売り物の

草標児”をさげ、馬行街の四ツ辻に立っていた。

しかし、なかなか値段を訊いてくれる者さえない。そこで楊志は、午過ぎから天漢州橋のにぎやかな橋袂に河岸を変え、

「名刀の売り物だ。この稀代な宝刀。たれか眼のある人に譲りたいが」

と、道行く人々に、呼びかけていた。

すると、胸毛もあらわな大男が、ずかずかと彼の前へ近づいてきた。ぷうんと、酒気と油を交ぜたような体臭が鼻を衝く。——それを見るや往来の者はすぐ、

「そら、無毛虎が何か刀売りへ突っかかっていったぞ」

「毛無シ虎の牛二が、またなにか、因縁を付けるんじゃないか」

と、囁き合つて、もう辺りは人立ちの様子だった。

案の定。——無毛虎の牛二といわれる街の悪は、のツけから、楊志を見くびつて、からみ始めた。

「なに。こんな古刀が三千貫だと。……やいやい人を盲にするのもいい加減にしろよ、いい加減に」

「ははは。酔っているな。おぬしに買ってくれとはいわぬ。退いてくれ。さあ、通ってくれ」

「大きなお世話だ。おれには買う力がねえとでもぬかすのか」

「弱るなア、どうも。刀はわが家の宝刀なので、子供に別れるような気持ちなのだ。お前さん方の持ち物にはさせたくない」

「よしつ、買った。そう見くびられちゃあ、こつちも意地だ。

買わずにやおかねえ。だがよ、おい。まさか鈍刀じゃアある

めえな」

「しつこいなア。お前さんには売らないと申すのに」

「ふざけるな、売り物の“草標児”を下げてるじゃねえか。

さあ、買ってやるから、切れ味を見せろ。それとも、尻込みする気かよ、ええおいつ。……さては、汝ア騙りだな」

「この人なかで、騙りとは聞きずてならん」

「そうよ、三十文の刀だつて、豆腐や蓮根ぐらいは切れらア。

三千貫の宝刀なら、いったい何が斬れるというのだ」

「聞くがいい。銅や鉄を斬っても刃こぼれ一つしない」

「ふん。それだけか」

「髪の毛を吹きかければ、毛も斬れる。——名づけて吹毛ノ剣という」

「洒落たことを言やアがる。それで生きた人間は斬れねえときては、なんにもなるめえ」

「斬つても、刃の肌血の痕をとどめぬというのが、この宝刀の鍛えだ。さあ、それだけの説明で充分だろう。退いてくれい」

「いや、おもしろえ。そんならこれを斬つてみる」

牛二は、一トつかみの銅貨を、州橋の欄干の上に、塔みたいに積み重ねて。

「さあ、その騙り野郎。ここへきて、この銭を見事斬つてみる。斬つたら、三千貫くれてやるが、斬れなかつたら、ただではおかねえぞ」

群集はわつと輪をひらいた。名うてな街のゲジゲジと、刀売りの大言壮語。どうなるやらと、往来はいよいよ山をなすばかりである。

「……よしッ、見せてやる」

楊志ようしはついに欄干の前へ寄っていった。じつと、錢ぜにの一点を見ていることしばし、抜く手を見せずとは、その間髪まひのことか。——二つに斬れた錢の数枚が、刃やいばの両側へバツと飛び、しかも欄干には傷痕きずあとも残さなかった。

「やあ、斬れたッ。ほんとに、斬れたわ」

どよめく見物人の喝采かつさいを尻目に、毛無シ虎は、なお躍起だった。いきなり自分の鬢びんの毛を一つかみほど、捲むしり抜いて、「おツと、待ちねえ浪人。そんな手品は、大道芸人もやるこッた。さア、これをいう通りに斬ってみろ」

いよいよ、かさにかかって吠えかかった。

「おおさ。性根をすえて見るがいい」

楊志は左の手に、それを受けた。そして晃々こうこうたる宝刀たからばの刃に向って、掌ての髪かみの毛を、ふツと静かな息で吹き起すと、

「あら、見事……」

見物たちは一瞬に、うつつを抜かした。——見れば楊志の息にかかった髪かみの毛は、あたかも宝刀の精に吸いついてゆくように、彼の掌てを離れるや飛毛ひもつの舞を描きながら、ハラリ、ハラリ、みな二つに斬れて落ちるのだった。

眼をすえていた毛無シ虎は、

「うるせえや、見物人めら。まだまだ、おれの負けじゃアねえ。第三には、人を斬っても、刃の肌に血の痕を残さねえと、吐ほさいたはずだ。さあ浪人、証拠を見せろ」

「見せてやる。犬を曳ひいてこい」

「犬をどうするッてんだ？」

「いわれなく、人は斬れぬ」

「たいがい、そういうだろうと思った。騙かたり者の逃げ口上はきまっていらいア。出来ねえなら出来ねえと、ご見物に向って謝罪あやまれ」

「おぬしに刀は売らぬのだ。まアこのくらいで勘弁せい」

「いや、ならぬ」と毛無シ虎は、楊志の手頸てくびをムズとつかんで、

「——この刀は、おれが買う。買主との約束どおり、人間を斬っても血の曇りを残さぬといった証あかしを立てろ」

「それほどいうならば、金を出せ」

「金はいまねえが、後金あとがねということもあるんだ。とにかく生きた人間を斬って、この通りだという値打ちを先に見せるがいいや。それとも、四ツん這いに手をつけて謝罪あやまるか」

ほとほと持て余した楊志は、ここにいたって、ついに堪忍の緒を破つたらしい。しかしその青い面色に一抹まっの凄気せいきは見せたものの、依然、言葉はしずかに。

「……さて、お立会い」

と見物人へ向って言った。

「ごらんの通り、この無頼者ならずものめが、先刻より私にさまざまな難癖なんへくをつけ、なんとなだめても収おさまりがつきません。その上にも、生きた人間を斬って見せろと申してきき入れませんが、いったい、どうしたものでございましょうか」

すると、見物の群れから、弥次馬が、

「斬ちちまえ！ 斬ちちまえ。——そういう毛無シ虎に、斬れ味を見せてやるがいい」

「その野郎がいなくなれば、第一、街が明るくならあ。よろ

こぶ者はあつても、悲しむ奴はたれもねえよ」

「ご浪人、頼むから、やってくれい」

わいわいと、四方から声の礫つぶてだった。

こう聞いては堪らない。毛無シ虎は、その本性をなお剥むき出しにいきました。いきなり楊志ようしの胸いたを、どんと一ト突きして、その手にある宝刀をつかみとろうとかがつたらしい。

——が、彼の上半身は、ひよると、空を泳いでいた。と見えたのも一瞬である。見物人の眼には、一朵だの血の霧が、バツと、大輪の花みたいにそこで開いたかのように映った。

「わああっ……。やった！」

まさかと思つていたので。呻うめきに似た群集の声には戦慄がこもつていた。すでに見る楊志の足もとは、真二つとなつた毛無シ虎の巨体がピクともせずぶつ仆ふれている。そして彼が垂直にして持ち捧たげていた長剣には、なるほど、血ち脂あぶらの曇りもとどめていなかつた。

「街のみなさん」

彼はそのまま姿勢で群集へ向つて告げた。

「——おしずまりください。あなた方にご迷惑はおかけしません。見られたような仔細で、てまえはついに白昼、この天漢州橋の大道で人を殺あやめました。法罰、のがれ得るところでない。あなた方が生き証人だ。これから奉行所へ自首して出ます。そこを開いてお通とおしてください」

彼の態度は立派だった。群集はそれにも感動をうけたらしい。聞き伝えて、彼が入つた奉行所の門前には、庶民が群れをなして、

「毛無シ虎が悪いんだ。牛二ぎふじはふだんから街の者を泣かせ、

なに一つろくな真似まねはしていない。刀売りを助けてください」

と、口々に叫んだ。——以来、毎日のように、嘆願書やら差入れ物やら、楊志のためにはと、義金まで募つつて、あらゆる助命運動が、街の有志によつてつづけられた。

六十日間の留置期間に、彼の処分もほほきまつた。官辺でも、折紙付きの毛無シ虎には、手を焼いていたところだし、吟味役人から牢番にいたるまでが、ことごとく楊志の同情者であつたことも、情状の酌しゃく量りょうを容易りょうにしたらしく、

「——北京ホツケイノ地へ流罪ルザイトナシ、大名府留守司ダイミョウワルズシノ軍卒オトニ貶おとスモノ也」

これが、罪の判決であつた。同時にまた、

「所持ノ宝刀ハ、是ヲ官ニ没取ス」

とも、言い渡された。

定法どおりに、額ひたいに金印きんいん（刺青）を打たれたのはやむをえない。だが、追ッ払いの背打ちの棒もかろく、やがて護送使の手で、はるか北京ほつけいの空へ差し立てられていった。

十五 青面獣の楊志、知己にこたえて神技の武を現す

こと

北京ほつけいは、当時、大名府だいみょうふともいい、五代各国の首府としても名高い。

河北カホク、治レバ天下治リ。河北、乱ルレバ天下乱ル”

唐とうの世代から、すでにそんな言葉があるとおり、西に太行たいこう山脈、東に遠く渤海ぼつかいをひかえ、北方に負う万里ノ長城は、北夷ほくいの襲攻にそなえ、不落の名がある。

しかし、近年では、満州の女真（金）や遼の侵攻も油断がならぬため、徽宗の宋朝廷でも、ここを重視して、その留守司（北京軍司令官、兼、守護職）には、特に大物の人物を配しているた。

世傑梁中書は、その人である。

彼は、都の太師（太政大臣）蔡京閣下の女婿であり、この北京では、軍権、民政、その一手にゆだねられている留守司の重職なので、その羽振りのよさは、言をまたない。

「おや、東京の楊志が、平軍卒に貶されてきたのか」

或る日、梁中書は、護送者から届け出ていた書類の一片を見て、こう呟いた。

楊志ももとは名家の出なので、その人柄も薄々は知っていた。——で、護送使の者に、身柄受取りの官印をあたえて帰すと、さつそく、自邸に楊志を呼んで、

「そちはいったい、どんな罪を犯して、平の軍卒などに貶されてきたのか」

と、事情を問いただした。そして、彼の口から委細を聞く

「なあんだ、そんなわけだったのか。よろしい、折を待ちたまえ。君ほどな人物、いつまで、一兵卒にはしておかん」

大いに慰めて、当座は梁中書の邸内の兵卒に飼われていた。

だが、いかに彼の権威でも、理由なく楊志を取り立てるわけにはゆかない。そこで、城外の大練武場で、一日、北京総軍の大演習が行われるときを待って、楊志の武技を試し、もし彼に抜群の業があったら、それを称えて、大いに登用してやろうと考えた。

頃は、春めき始めた二月の頃。

大演武場は、北京三軍の旗と兵馬で埋まった。時刻となれば、貝が鳴り、鉦鼓がとどろき、軍楽隊の演奏とともに、梁中書は副官その他、大勢の軍兵をしたがえて、式場へ臨んだ。敵かな閲兵の後、李天王李成、閻大刀閻達、二将の号令のもとに、全軍、中書台に向って、最敬礼をささげ、また、三たびの諸声を、天地にとどろかせた。

たちまち、全軍は二陣にわかれ、紅旗、白旗が打ち振られる。鼓を合図に、両軍それぞれの大兵が、鶴翼、鳥雲、水流、車輪、陰陽三十六変の陣形さまざまに描いてみせ、最後にはわあああつ……と双方起って乱軍となり、そこかしこで、凄まじい一騎討の競武が展開された。

中でも、紅軍の副牌（部将）周謹の働きは目ざましく、彼の槍の前に立ちうる者はなかった。

「周謹。日ごろの猛練習も思われて、今日の働き、見事だったぞ」

梁中書は、輝くばかりな銀色の椅子から、彼を賞めて、また言った。

「ところで、もと東京の殿司制使楊志が、流されて一兵卒に落され、今日も余の供として後に来ておる。彼は近衛の一将として、武芸十八般に秀でた男。——彼とここにて、槍術を競べてみせい」

「おそれながら……」と、周謹は口をとがらせた。

「流され者の一兵卒と、試合せよとは、余にも」

「なにをいうか」梁中書は、わざと、声を高めて一喝した。

「いまや諸国に盗賊はびこり、国境には、遼族、女真の賊の窺

うもあって、今日ほど国家が人材を求めているときはない。まこと神技の武術を身に持つ者なら、一兵卒たりとも、これを用いぬは、国家への不忠である。それを周謹は不服だといふのか」

「いや、決して、さような意味では」

「なればこれへ、楊志を呼べ」

召し出された楊志は、かねがね梁中書の好意のあるところを覚^{さと}っている。もとより異存のあろうはずもない。

兩人は、黒ずくめの戦袍^{せんぽう}（よろい）と黒駒を与えられた。使用の武器は、たんぽ槍（穂先を羅紗でくるんで玉とした物）で、それにたつぷり石灰がふくませてある。

「いざ」

と、将台を前にして、兩人、馬上の槍を戦わせた。

真槍でないから、ちよつと、勝負の判定は難しいようだが、しかし、腕前の差は歴々とあらわれた。馳け合うことしばし、周謹の体や黒馬の肌には、白い痕^{あと}が斑々^{はんはん}と描き出されたのにひきかえ、楊志の五体や駒には一点の痕もついていない。

勝負あった！ の銅鑼^{どら}が鳴る。

すると、兵馬都監^{とかん}の李成^{りせい}が進み出て、将台へ訴えた。

「周謹は無念そです。彼の得意は、弓にあるので、弓を持たせて、もう一度の勝負をご覧願わしゅう存じまする」

「楊志。よろしいか」

「心得ました」

ふたたび、指揮台で青旗が打ち振られ、金鼓^{きんこ}一声、馬は馬を追って、演武場の南の方へ、パツと駆け出た。

逃げていくのは、楊志だった。

周謹は、三矢^{さんしや}を放って、三矢とも、見事、楊志の片手の楯^{たて}で払われてしまった。

こんどは、楊志が追う番に廻った。——楊志は、弓を引きしぼって周謹の背に迫ったが、わざと急所を射はずして、その肩を射た。しかし、たとえ肩でも何かはたまろう。あつと、相手は馬上からころげ落ちた。

「さすが楊志の武技は中央の武技の一流だった。——周謹はしよせん敵でない。しばらく周謹の現職を楊志にゆずらせ、今日以後は、楊志をもって副牌^{ふくはい}（部の将校）に取り立て得さす。

——管軍書記、さっそく辞令を彼に授けろ」

梁中書^{りやうちゆうしよ}が、かく命じると、突如、軍列の一端から躍り出ている偉丈夫があつた。

「今のおことばは、この索超^{さくちゆう}には、大不服です。周謹^{しゆうきん}が拙者の弟子だからとて申すのではありませんが、楊志の武技は中央一流との御意^{ごい}は、聞きようでは、北京^{ほうけい}総軍には、人もなきかの如く聞ゆる。それほどなご賞辞ならば、この索超を打ち負かしたうえにて、彼へおさづけ願いたい」

「はははは。誰かと思えば、急先鋒とアダ名もある正牌軍^{せいはいぐん}（一軍の大將）の索超か。よからん、よからん！ 望みとあれば勝負してみよ」

いよいよ、事は物々しくなった。両者にはあらためて、本格的な武装を命じ、試合場所も、将台の欄^{らん}まぢかに移されたので、梁中書は白銀の椅子を欄前にまで進め、折から北京七門の楼門上には、大きな日輪が夕雲に落ちかけてきたので、縁飾^{ふちなで}り美しい蓋傘^{おひがさ}は、彼の冠の上に瑤々^{ようよう}として翳^{かざ}されていた。

開始の軍樂。——それがやむと、両側の柵内で、金鼓が鳴り、楼の上では用意！の黄旗が早や振られている。

どかんと、はるか馬場の末のほうで、烽火用の爆音が、夕空に飰した。見れば、西の門旗の下からは、急先鋒索超、東門からは、青面獸楊志。各々さんぜんたる鎧、甲のいでたち。さながら戦陣そのままな猛気を飾って、静々、こなたへ相寄って来るのが見える。

「おうっ……」

たちまち、二騎の姿は、魚紋を描いて、もつれ繞った。

索超は、雪白の馬上に、金色の焰を彫った大斧をひっさげ、楊志はするどい神槍を深くしごいて、とうとうと馳け巡りながら虚をさぐる。

この戦いは、見事だった。両者の威風といい、その技といい、見ているにさえ息づまった。——大斧の閃々、槍尖の電光、おめき合うことも幾十合か。馬も汗するばかりなのに、どうしても、勝敗はつかない。満場は声なく、巨大な落日の紅炎は、西の空へ、刻々に沈んでゆく。しかもまだ、相互ともに意気旺なだった。まさに不死身の人間の戦いかとも怪しまれている。

「ああ。みごと」

梁中書は、いつか夢中で、その銀椅子から立っていた。彼は満足した。大名府に両雄を得たり、といつてよろこんだ。彼のそばから伝令が走った。引分けの銅鑼が鳴る。索超の部下は、万雷のような勝鬨をあげたが、楊志の方には、歓呼もない。

しかし二名は、台下に並んで、ともに、同等な賞を拝領し

た。そして夜は演武庁の楼上で、盛大な祝賀の宴に誉れを謳われ、その席上ではまた、

「以後、索超、楊志ともに、相並んで、軍の提轄使（憲兵の長）たるべし」

と、任命された。

何が不幸か幸か、げにも人の運命はわからない。これからというもの、楊志は、梁中書に気に入られ、楊志もまた、恩に感じて、心からその人に仕えていた。

いつか夏も近づいて、五月の声を聞くと、その日は、端午の節句だった。

佳節の客もみな帰って、梁中書は蔡夫二人きりで、やっと私室にくつろいだ。そして夫人の杯に、菖蒲酒を注いでやりながら、

「どうも、こう忙しい重職になると、めったに、そなたの笑顔を見ることもできんなあ」

と、わざと妻のよろこびそうなことをいった。

蔡夫人は艶な姿態のうちに、つんと、いつものお実家自慢を匂わせて、

「でも、こんな栄誉と福貴は、万人の羨むものではございませんか。勿体ない」

「とんでもない。愚痴をこぼしたわけではないよ。それどころか、そなたの父、蔡大臣のお引立ては、夢寐の間にも、忘れてはおらん」

「そういえば、あなた、やがてもう、父君の誕生日も間近でございますよ。お忘れですの」

「なんの、忘れてなろうか。岳父のお誕生日、七月十五日。

ことしこそは、去年のような失敗をせぬようにと、内々心をくだいておる」

「去年はまあ、とんでもない抜かりでしたわね。お父君のお祝にと、あんなにまで、おびただしい金銀珠玉を東京へ送らせてやったのに、その途中で群盗のため、すべて強奪されてしまったことではございませんか」

まるで良人の落度でも責めるように、蔡夫人の眸が、耳輪の瑠璃より細い鋭い光で、梁中書の横顔を射ていた。それには彼も二の句がなく、今年もまた、早くから頭を悩ませている風だった。

「ねえ。どうなさるおつもりですの。……今度は」

「だからさ、今年もすでに、心がけて、すでに十万貫に価する珍器重宝は、この北京の古都を探って、ひそかに庫に蒐めてあるわさ」

「いいえ。それよりも、その高価な宝を、どうして無事に、東京のお父さまのもとまで届けさせることができるか。そのご留意のほうか、かんじんではございませんか」

「それには、人だな。なんといっても、よほど信用のおける人物でのうてはかなわぬし、さらには、いかなる賊と出会っても、断じて負けをとらぬ勇者でもなければならぬ」

「この北京何十万の軍には、それに適う一人の人物もいないのですか」

「いや、そんなことはない……」と、あわてて彼は言い消した。

「——勇者はいる。武術の達人も少なくはない。だが考えてみい。十万貫の重宝といたらたいへんな富だ。いかにわし

の蓄えと俸給でも、そんな多額な金目の物を、一私人としては、都の岳父に贈りうるはずのものではないからな。……腕ぶしばかり強くても、腹ぐるい人間には、このことは打明けられぬし、使いにも差向けられんというわけだ。それでこの人選には、わしも全く慎重にならざるを得んのじゃよ……」

「ほんに、そう伺うと、人はないものかも知れませんね。けれど今年こそは、お父君に糠よろこびをおさせしては、あなたとしても、申しわけがないでしょう」

「……まあ待て。まだ幾十日の間もあること。全然、心当りの人間がないわけでもない。充分、信用がおける人間かどうか。ま、もう少しみてみよう」

いま、梁中書の腹にあるただ一人の人物——その候補者とは、いうまでもなく、かの青面獣の楊志以外な者ではなかった。

十六 風来の一怪児、東溪村に宿命星の宿業を齎すこと

近ごろ。山東は済州の鄆城県に、あたりしく赴任して来た県知事がある。

姓は「時」名は「文彬」。県民の評判はたいへんよかった。現下世は腐敗の極といわれているものの、なお多くの中には良吏もいたのである。非理曲直すこぶる公明で、私の暇には蘭を愛し琴を奏で書もよく読むといったような文彬だった。

「——自分がこの地へ着任いらい、まだ何も見るべき行政はしていないが、まず県下の治安を第一に確立したい」

彼は或る日、県（県は日本の郡単位）の庁堂の壁に、民治の主旨をかがけて、その日、公庭に集まった全吏員にこう告げていた。

「これまでどこに赴任してみても、およそ吏として、民を安んじ民と和楽をともしるといふことはじつに難かしい仕事だと痛感しておるが、わけてこの県は難治な地方と思われる。なぜなれば、大盗の巢窟、梁山泊などの水郷もあって、旅途はさびれ、土民の氣風も荒く、そのうえ日々聞ゆる兇悪な犯行にさえ、従来、官の実績は何もあがらず、官は無力なものと、民からも悪党からも見くびられておる」

全員はしんとしていた。みな面目ないふうである。が、列の中ではそれが不服らしく満面をムズムズ燃やし、耳を押ツ立てて聞いていた巨漢二人の顔があつた。

いづれも、庁の与力、つまり捕手頭である。

その一人は、騎兵捕手の与力で、名を朱同といい、あだかも鬚のような髯をもっているので、「美髯公」という綽名があつた。

また、もう一名の歩兵与力は、これも身の丈七尺をこえ、人なみはずれな腕力に加えて、およそどんな土塀もちよつとした小川も一躍にとびこえる特技のあるところから、県中、この人を「挿翅虎」ともアダ名している雷横という者だった。

こう二人は、新知事の訓令にもどこか反撥的な面構えをみせていたので、文彬はその眼氣を感知し、微笑を見せながらすぐ次へ移っていた。

「——だが、過ぎたことはせひもない。ただ、今後はお互いの協力で県下の治安に尽していこう。そこで捕手頭の雷横と

朱同に命じるが」

二名は列の中で、ちよつとその直立をただした。

「ご苦労だがさっそく部下をひきいて、一方は西門道から村々を巡邏してゆき、また一方は、東門街道を出て県下を巡り、途々賊あらば捕え、民の難あらば助け、そして二た手の巡警隊は、東溪村の山上で落ち合い、相互の情報を交わし合うがよい」

「心得ました。では、すぐさま」

「いや待て。——東溪村の山上には、天下の奇樹といわれる有名な大紅葉がある。あの葉は他に類のないものだ。おのおのは、相違なく巡邏した証として、そのもみじ葉を持って帰れ。よろしいな、怠れば罪に問うぞ」

文彬新知事。抑えるところは抑え、厳しいところは、なかなか厳しい。

その夕、朱同は西門を立つたが、彼の方はしばらく措き、まず雷横の行く手を見よう。

捕手二十余人をつれた雷横は、べつに東門街道を出て、村々を巡邏し、翌日も県下を歩いてから、約束の東溪山へのぼっていき、例の大紅葉の下に立つた。そしてさて、待つま程なく、一方の朱同組もやって来たので、ここで情報交換しあつた後、二人は思わず哄笑した。

「いやどうもご苦労さまだ。こんな時にかぎって、小泥棒一ぴき見当りはしねえ。なんのことはねえ紅葉狩りにきたようなものさ——」

帰路は夜にかかった。お互い逆に道を換えて、松明を振りつつ山を降つたのである。

すると、その雷横組のほうが、麓^{ふもと}ぢかい靈^{れい}官^{かん}廟^{びょう}のほとりまで来たときだった。ひよいと見ると、廟^{びょう}の扉^{ひら}が、魔^まの口^{くち}みにたいに開^{ひら}けッ放^{はな}しになっている。

「おや、廟^{びょう}守^{まも}もいねえのに、おかしいぜ」

雷横はふと立ち止まった。多年の直感^{ちきん}が何か異臭^{いしゅう}をそこに嗅^かぎつけたものらしい。

「やいやい。念^{ねん}のためだ。松明^{たいまつ}を持って、踏み込んでみる」

雷横のひと声^{こゑ}に、部下^{ぶく}の捕手^{とら}たちは、どやどやと廟^{びょう}のうちへ躍^たりこんだ。

するとそこには蜘蛛^{くも}の巣^すだらけな暗闇^{あんあん}を天国^{てんごく}として、一人の大男^{おおおとこ}が、お供^{ついで}え物の卓^{つくえ}の上に、まっ裸^{はだし}な体を載^のせ、丸^{まる}めた着物^{きもの}を枕^{まくら}に、高いびきで熟睡^{じゅくすい}していた。

「ほう、凄^{すご}げえ面^{つら}して寝^ねていやがる……。眼^{まなこ}も覚^さまさねえぜ」

と、捕手^{とら}もあきれた。

毛脛^{けすね}、胸毛^{むね}、まっ黒^{くろ}な肌^{くみ}。裸足^{はだし}に馴^なれた足^{あし}は象^{ぞう}の皮^{かわ}みたいだし、顔^{かほ}は赤痣^{あかあざ}だらけで、眉毛^{まゆげ}などあるかないかである。おまけに厚^{あつ}い唇^{くちびる}から涎^{よだれ}をたらして、正体^{まじ}もない寝^ねざまなのだ。

「……ははあ、兇^{あや}状^{じやう}持ちの股旅^{またたび}者^{もの}だな。叩^{たた}けば何か出るだろう。なにしろ、紅葉^{もみぢ}の葉^はツ端^はじや土産^{みやげ}にもならねえからな」

呟^{つぶや}くやいな、雷横^{らいごう}は、その卓^{つくえ}を蹴^つって、男^{おとこ}のからだもろとも、引^ひつくりかえし、

「縄^{なわ}をかける。四^よの五^ごをいわすなッ」

と、不意^{ふい}にその男^{おとこ}を搦^{から}め捕^とらせた。もちろん、赤痣^{あかあざ}の若者^{わかしよ}も、吠^わえたり暴^あれたり、抵抗^{ていこう}はしたが、二十余人^{にじゅうににん}の捕手^{とら}に会^あってはとうしようもない。手負^{てふ}い猪^じ

のように東溪山^{とうせきざん}の麓^{ふもと}へと曳^ひきずられていった。そもそも、この山裾^{やますそ}には、一^{いっ}すじの溪川^{たにがわ}を境^{さかい}として、西溪村^{せいせきそん}と東溪村^{とうせきそん}との、二^に聚落^{じゅうらく}がある。

かつて、その西溪村^{せいせきそん}のほうでは、白昼^{はくちゆう}でも妖怪^{やかい}が出るといふ噂^{うわさ}がたち、事実^{じじつ}、その淵^{ふち}で理由^{りゆう}なく村^{むら}の男女^{なんにょ}が溺^なれたり、牛馬^{うま}が引き込まれたり、怪異^{かいい}な変^{へん}が多^{おほ}かった。

すると或^{ある}る年^{とし}。一人^{ひとり}の旅僧^{りょそう}が、

「わしが鬼魂^{きこん}を鎮^{しず}めて、供養^{きやう}してあげる」

と、大きな青盤石^{せいばんせき}に経^{きやう}を刻^きませ、妖怪^{やかい}退散^{たいさん}の法要^{ほふう}を行^いなつて去^いった。

それからというもの、西溪村^{せいせきそん}には無事^{むじ}がつづいた。——西溪村^{せいせきそん}の幽鬼^{ゆうき}はみな、東溪村^{とうせきそん}へ逃^にげていったのだ——と言^いい囃^{はや}された。

怒^{いか}ったのは、東溪村^{とうせきそん}の名主^{なぬし}、晁蓋^{ちやうがい}である。

「化^まけものなんざ、いくらでもこいだが、おれが名主^{なぬし}でいる以上^{いじやう}、そんなケチ^{けち}をつけれられちゃあ黙^{だま}つてはいられねえ。西溪村^{せいせきそん}の奴^{やつ}らめ、明日^{あした}の朝^{あさ}になって、腰^{こし}を抜^ぬかすな」

晁蓋^{ちやうがい}は、深夜^{しんや}、ひとりで溪川^{たにがわ}を渡^{わた}って行き、西岸^{さいがん}の供養塔^{きやうだう}を担^{かか}いで帰^{かえ}った。そして東溪村^{とうせきそん}の見晴^{みは}らしのいいところへ、それをでんと据^{かか}えこんで、澄^{すみ}ましていた。

以来^{いらい}、この庄屋^{しやうや}さんに、あだ名^{あだな}がついた。

——托塔天王^{たくたてんわう}。

その名のほう^{ほう}が、有名^{ゆうめい}になった。

「おいっ、誰^{たれ}か起きてみねえのか。さっきから表門^{ひょうもん}を、どんどん叩^{たた}いている奴^{やつ}がいるじゃあねえか。どいつもこいつも寝坊^{ねばう}だな」

晁蓋はさつきからどなっていたが、ついには自身寢室を出て、表門へ出ていった。

その朝。いや、夜はまだ明けてもいかなかった頃である。

「うるせえな。だれだい、今頃」

開けてみると、黒々とたいへんな人影だ。松明の火光の中には、大の男の縄付が見えるし、顔見知りの雷横もいる。

「やあ、どなたかと思ったら、県の与力さまじゃあございませんか。いったい、どうなすったんで」

「おう晁蓋。こんな大勢して甚だすまんが、部下の者に朝飯をとらせたい。暫時、屋敷のすみを貸してくれんか」

「おやすいこツてすが、何か大きな捕物でも」

「なあに、そんな仰山な獲物でもねえが、靈官廟の内に、うさんな野郎が寝込んでいたので、引ッ縛ってきた帰り途だ。

あそこも村の内、おぬしに声をかけないのも悪いからな」

「それは、どうも……ま、ずっとお通んなすってください。いま雇人どもを起して、さっそく朝飯の支度でもさせますから」

まもなく莊院の内は、大賑わいになった。県のお役人衆とあつて、下へもおかず、酒飯はもちろん、風呂まで沸かす騒ぎだった。

そのすきまに晁蓋は、門長屋の暗い一戸を覗いてみた。庄屋として、縄付の男を一見しておく義務を感じたからであるう。

見ると、鳶色の体に無数な傷を負った若者が、両手を梁に吊り上げられたまま、爪先だちに立っていた。大火傷でもし

た痕か、赤痣いちめんな顔を歪め、苦痛を齒がみで耐えている。

「はて。村じゃ見たことのねえ男だな。おい、どこのもんだ、おめえは」

「遠方から来た者です、へい、この地方に、お訪ねしたいお人があったのに。……そ、それを理不尽にも、いきなり縄目にかけてやがッて。……あ痛て、アててて」

「なんだい。いい若いもンがよ。して、訪ねるお人つてえのは？」

「東溪村の托塔天王だ」

「えっ、なんの用得」

「そいつア言えねえ。だが晁蓋さんは、村名主だとか。……旦那、この村は何村ですえ」

「東溪村だよ。そしてこういう俺が、その晁蓋だ」

「あつ、だ、旦那がですかい。……じゃあ、聞いておくんなさい。あつしゃあ、東潞州の生れで」

「あ、たれか来た。早く用向きだけ、ひと口にいえ」

「じつア、ひよんな早耳から、ど、どえらい儲けぐちを知ったんで、それをお報らせに来たんでさ。旦那なら相談になると思つて」

「よしっ、後で聞こう」

「後でツたつて、この縄目じゃあ」

「助けてやる。——俺の甥になれ、甥によ。五ツ六ツの年に村を離れていたが、風の便りを聞いて尋ねてきたという風にな。……いいか、うまくばつを合わせろよ。場面は俺が仕組んでおく」

なに食わぬ体で、晁蓋はその足で、離亭に休んでいゝ雷横の席へ顔を出した。

「おや、もうご出立のお仕度で」

「やあ晁旦那。時ならぬ時刻に、えらい厄介をかけて、すまなかつたな。夜も白んできたから、ぼつぼつ出かけようと思ふ」

「ご苦労でございますなあ。またどうぞ、近くへお越しのせつには」

門のほうでは、はや部下たちが、槍、棒、刺叉などの捕具を持って勢揃いし始めている。雷横もまた、颯爽と出ていった。

見送りにかこつけて、晁蓋はその後についていき、そして、門長屋から曳きズリ出された縄付を見て、

「ほ、ほう……。凄い大男ですな」

と、わざと目をみはって呟いた。

——この時、と合点したらしく、縄付の男は、不意に大声で呼びたてた。

「あつ、おじさんだツ。おじさん、助けてください」

「な、なんだつて？」

晁蓋は、わざと怪訝な顔してから、ややしばらく、じつと相手を見すまして。

「や、や。おまえは王小三じゃないのか」

「そ、そうですね、叔父さん。……ああ、叔父さんは、それでも、この小三を、覚えていてくれたんですね」

びっくりしたのは捕手たちである。わけて、雷横は、ぎよツとした。

「えつ、甥御ですか、この男は……。はアて、こんな股旅者が」

「なんともはや、面目もありません。恥をいやあ、てまえの姉夫婦の子です。これがまだ六ツ七ツの洩タレごろに、夫婦とも南京へ夜逃げしたきり音沙汰なし。その後、この小三の奴ア、いたずらして頭に大火傷をこさえ、それが十四、五のころで、親とともに一時は村へ舞い戻っていましたが、都の風に染んだ怠け者、またすぐ出ていってしまいました。……以来、姉夫婦も不運つづきで、赤痣の小せがれは、やくざに誘われて、家にも居つかず、親不孝を売り歩いているたア薄々聞いていましたが、まさか、雷横さまのお縄を頂戴しようとは」

「ふうむ……。意外なこともあるもんだな」

晁蓋は、はつたと、偽の甥をにらんで。

「やいっ小三。なぜ、故郷の村へまで来て、悪事をしやがったか」

「ちがいます、叔父さん、あつしゃあただ、腹はへるし、埒もないので、靈官廟で寝ていただけです」

「悪事もせぬのに、なんで召捕られたんだ」

「わかりません。夢みたいなもの、あつと気がついたら縛られていたんで」

「嘘をつけツ」

激怒を作つて、晁蓋は捕手の棒をひつたくり、いきなり男の肩を二ツ三ツなぐりつけた。

「野郎、ほんとをいえ、ほんとを」

「だって叔父さん、ほかに言いようはありませんよ。……仰

っしやる通り、身を持ちくずし、親不孝をかさねましたから、ひとつ叔父さんにこの悪い性根を叩き直してもらおうと、空き腹を抱えて尋ねて来たんです。だからこそ、盗みもせず、夜が明けたら、叔父さんそこへ辿りつけると思っていたのに」「こいつが、ひとを泣き落しにかけようと思やがって。そんな手に、俺がのるかっ」

また振り上げる棒を、こんどは、雷横が慌てて止めた。小三に同情したわけではないが、元々、不審の程度で捕えたに過ぎないのだから、と宥めに廻って、

「当家の甥御とわかれば、仔細はない、はやく、その縄目を解いてやれ」

と、部下へも命じた。

「ちえッ、運のいい奴だ。小三、このご恩をわすれるな」と、晁蓋は彼をシリ目に措いて――

「どうもせっかくのお役儀を、なんだかこう、ムダ骨折らせたような恰好になって、申しわけございません。ひとつ、もいちど奥で、お口直しをしてお引揚げくださいませんか」
強つて、雷横をねぎらい直し、またそつと、銀子何枚かを心づけた。部下へもまた、それぞれの物を与え、どうやら彼の画策は上々で、まもなく雷横一行は、その門を立っていった。

あとの莊院の奥では、それからのことだった。

真新しい衣服頭巾をめぐまれ、朝飯もたべて、すっかり元氣を取り戻したかの股旅者は、晁蓋を前にしてその素姓を明らかに語っていた。

「もとより手前はやくざ、生れ故郷は東潞州でござんす。苗字

は劉、名は唐、と申しまして、それは顔も知らないうちに死に別れた親のくれた名。人さんからは、この赤面のため、赤馬だの赤髪鬼などとアダ名されております。どうか今後とも、お見知りおきのほどを」

と、型どおりな、初対面の仁義をきって。

「――ご高名は、とうに伺っておりますんで、いちどはご縁をえたいと存じておりましたところ、つい先ごろ、山東、河北の密貿易仲間の者から、耳よりな儲けぐちをチラと聞きこみ、こんな大ヤマを張れる相談相手は、托塔天王、いや晁旦那よりほかに、誰があらうと、お見込み申して、やってまいったような次第で」

「いやよくわかった。だがその、大ヤマを張る儲け仕事たあ、いったいなんだね」

「ようござんすか、ここで申しあげても」

「あ。ちよつと待ちな」と、晁蓋も念を押されて立たざるを得なかった。扉に鍵をかけ、窓の帳も垂れて――「さ。安心して、話すがいい」

「じつあ、近いうちに、北京は大名府の梁中書が、十万貫てえ金銀珠玉骨董を、開封東京へ、密々に送り出すはずですが、よも、ご存知でござんすまい」

「知らぬ。それはまた、なんのために」

「梁中書の女房の親父、いま宋皇帝の朝廷では最高の地位にある蔡大臣への、誕生日祝いに贈るツてえわけなんです」

「まあ、閥族同士の公然な大贈賄というわけだな」

「そうですね、それにきまってまさアね。いわばみんな、庶民の汗や膏や、よからぬからくりで作った不義の財。そいつ

をこちとらが、狙ってぶんどったところで、天道様も、よもやこち徒だけを悪いたア仰つしやるめえて考えますがね」
「去年は、途中で賊のために、盗られたとかいう噂だったか」
「ですからさ、旦那。他人にやらせちゃもつたいねえじゃござんせんか。——世間の噂にや、托塔旦那は、男伊達だ、槍や棒も旦那芸じゃねえ。しかも、不義には強いお方だと聞いております」

「よしてくれ。俺あ、おだてには乗らねえよ」

「ご免なすつて。そんな気もちで申したわけじゃございません。ただ、なんぼ北京軍の総帥でも、この干乾びたご時勢に、年々十萬貫もの財宝を、女房の実家へ貢いでるつてえなあ、たいした大泥棒でございませぬ。ようし、それならこつちも上わ手をいって、横奪りしてやろうというわけ。……どうですえ、旦那、ご分別は」

「先にああ、去年の失敗がある。よもや今年は、のめのめ掠奪められるような凡くらを警固としては出かけまい」
「なんの、この劉唐だつて、腕には覚えがあるつもりだ。まして托塔天王様に、うんといつて、一つ乗り出していただければだ」

「なるほど、話はすばらしいや。ちよつと、食指が動くな」
「だからさ、お譲り申しますよ。この儲け口を」

「ま。……よく考えようぜ。おぬしも、客間で一杯やって、ゆっくり休んでいなさるがいい。やるかやらぬか、おれも思案の腹をきめ、その上での相談としようじゃないか」

ぜひなく、赤髮鬼の劉唐は、一応、客間へ引きさがり、あてがわれた酒の膳について、独りがぶがぶ飲んでいた。

——だが、どうにも彼は、おもしろくない。晁蓋の生返辞が気に入らないのだ。「ははアん。俺をただの与太もんと見て、相棒には不足と考えたに違いねえ」そう思うと、酒が業腹を焚きつけて、我慢がなくなってきた。

ふと窓外を睨むと、一頭の裸馬が、裏門につないである。なに思ったか、劉唐は「……ようし」と独り呟いた。そして壁の槍掛から一本の野太刀をつかみ取って、

「与力の雷横もまだ遠くへはいつていまい。——そもそも、あいつのために、縄目にあい、ぶざまな弱音を吹いたので、晁蓋までが、この俺を、だらしのねえやつと、見くびつたのだ。雷横に追っついて、野郎の詫び証文か片腕でも奪つてきて見せたら、晁蓋もおれを見直すだろう」

どんな自信があるのか、赤髮鬼はヒラとそこを跳び出すやいな、莊院の裏門から県の街道を馬で矢のごとくすつ飛んでいった。——時に、陽はゆるゆらと牧場の朝露を離れて高く、木々には百鳥の囀り、遠山には丹霞のたなびきが美しい。これで地に人間の争いがなく、宋朝の政に腐爛さえなければ、この世はそっくり天国なのだ。

十七 寺小屋先生「今日休学」の壁書をして去る事

どうせ、急ぐ道でもない県下巡邏の捕手たちだった。

すき腹に朝酒の振舞いをうけ、雷横以下、なおさらブラブラ歩きにもなっていた。そして彼方の石橋一つ渡れば、次の隣村という村境でのことである。

「おおうい、待てえつ。雷横、待てつ」

突然な後ろからの声に、ぎよっとして振り向くと、なんと例の赤痣が、ひらと飛び降りた裸馬を楊柳につないで、野太刀に反りを打たせて向ってくる。

「やっ、きさまは、さいぜん縄目を解いてやった、莊院の甥だな。なにしに、この雷横を追ってきたのか」

「詫び証文を貰いにきた。さあ書け。——昨夜はなんの咎もない人間に、理不尽な縄目をかけ、まことに相すまぬ落度であつた——と、詫び状一札書いて渡せ」

「ふざけるな。こちらの慈悲も忘れやがって」

「慈悲が聞いて呆れらあ。叔父御からは、銀子何枚かを、袖の下に貰っていたらう。ええ、面倒くせえつ。詫びの一枚をよこさねえなら、その片腕をぶつた斬つて、貰つて帰るぞ」

「こいつがッ……」と、雷横は憤つて「——晁蓋の甥というので、ゆるしておけば、よくも、いい気になりやあがつて」

「おおさ！ 俺をなんだと思つてやがる。靈官廟じゃあ、寝込みでは是非もなかったが、いまはちつと俺さまが違うぞ。いわれもねえ縄目の返礼だ、雷横、覚悟っ」

振りかぶつてきた野太刀の迅さ——。雷横はかわすひまもなく、腰の官綬刀を抜いてバシツと受けた。そのまま打々発止と火花の間に斬りむせび合うこと数十合——。

わつと騒ぎ廻る捕手たちが、横から手を出す一瞬のすきもない。

「こんな小僧っ子」——雷横は闘いつつ、まわりの部下へ、豪語した。「——おれ一人でたくさんだ。手を出すな。遠巻きに見物している」

しかし、結果は、彼の大言の通りにゆくかどうか、なんと

もいえぬ形勢に見える。

雷横の刀術に、鳳の概があれば、赤髪鬼の野太刀にも、羽を搏つ鷹の響きがあつた。赤髪の影が旋風に沈めば、迅雷の姿が、彼の上を躍つて跳ぶ。——いずれにも、流儀があり、技があり、法にかなつた秘と秘の術競べとはなつたので、この勝負、いつ果てるともみえなかつた。

だが、雷横の部下たるもの、もう見ては、いられない。

「——あつ、お頭があぶないッ」

誰かが叫ぶ。

同時に、どつと助太刀にうごきかけた。

ところが、すでにその寸前、街道わきの緑蔭静かな一戸の垣の網代戸から、さつと走り出てきた田鶴のごとき人品のひとがある。

「まあ、待たっしやれ」

と、その者は、手に持っている分銅付キの細鎖で、双互の間を分けへだて、

「お二人とも、刀をお引きください。どうした仔細か、わしに任せてくださらんか。わしの家の前で、こんな芸をやられては、まさかただ、見物しとるわけにもいかんじやないか」

事に迫らず、からからと笑つての扱い。雷横と劉唐も、思わず太刀を収めて、その人を見た。これなん、この片田舎には過ぎた童塾（寺小屋）の先生、智多星の呉用で、道号加亮、あざ名が学究。略して、呉学人とも、呉用先生とも、よばれている者だつた。

黒縁の麻ごろもに、学者頭巾をかぶり、髯長やかだが、さりとて、腰の曲がった老人ではない。白哲にして、なお紅唇

の精気若々しく、眼まなこすずやかな底に、知識人の何かがある。

学人がくじんは、代々土着の家柄の人で、世評に聞けば、書は万卷に通じ、胸むねに六韜三略をきわめ、智は諸葛孔明しよかくこうめいに迫り、才は陳平ちんぺいにも比肩ひけんし得よう、とある。そのうえ、濟州さいしゅうの地方、この人あって、童歌の清きを失わず、また能く、読書よみよむの声を野に保つ……とまで賞めそやされているほどだった。

「退のいてくれい、寺小屋先生。怪我けがをするぞ」

劉唐は、なお息まき。雷横もいうまではなく、官の与力こけん、估券こけんにかかわる。

「学人。ほうツといてください。用捨はならん」

「盗賊ですか。この男は」

「いや、莊院しょうやの甥なまこツ子とかだが」

劉唐が、横から吠えた。

「盗ぬすッ人とでもねえ俺を、盗ぬすッ人と間違えて、繩をかけやがった凡ほんくら与力だ、そいつは」

「まだ吐ほざくか」

「いうとも、詫わび状よこせ」

「うぬつ。もいちど、繩目を見たいのか」

ばツと、兩人の踵かかとが、砂を蹴かつて、またもや、と見えた一

剎那しとな、どこかで、

「ばか者ばかものつ、なにをしているー！」

と晁蓋あかがいの声がした。

息せき切きつて、あとからここへ馳はけつけてきた彼は、馬の背から飛び降りるやいな、二人を割わつて、まず雷横にあやまった。

「どうも、はや、とんでもねえ奴です。お腹立ちでもござい

ましようが、どうかご勘弁なすって下さい」

そしてまた、劉唐の肩を、一つ突き飛ばして、

「この酒食さけらい野郎め、ちよっとの間に、もう酒をくらった揚句あげく、なにを考かんえて、飛び出したかと思えば」

いきなり、彼の手から、野太刀をひったくつて、刀背みねう打ちに撲むりかけた。驚おどいて、その手もとを抑え、

「あつ。そうまあ、ご立腹たつぷくなさらずとも」

と、止めたのは呉学人である。

「いま、聞いてみれば、他愛たあいもない間違いの意趣返しだとか。

それに酒気があるなら、なおさらのことだ。雷横らいごうどのも、お役儀やくぎの途上とじょう、ゆるせまいが、ここは晁蓋あかがいさんと、わしに免じて、ひとつ堪忍かんにんしてあげてくださらんか」

ふたりの詫わびでは、雷横も渋しぶれない。それを機しかに、雷横は部下をまとめて去り、劉唐は、晁蓋あかがいから「先に屋敷へ帰っていろ」といわれて、これもまた、裸馬はだかばにまたがり、ニヤニヤしながら戻かえっていく。

あとは、呉用と晁蓋あかがいの、二人だけだ。

「いや今日は、えらいものを見せられたよ。——あなたが来たからよかったが、さもなければ、野太刀と官刀の勝負、さあ、どっちとも分わらなかつたな。雷横は有名な刀術の使い手だが、どうして、あの赤痣あかあざもなかなか強い。ひよっとしたら、達人雷横も、やられたかもしれん」

「へえ？ ……そんなでしたか、あの赤馬あかばが」

「ハハハハ、赤馬はよかつたな。まさに後漢ごかんの呂布りよふの愛馬せきと赤兎せきとを思おもわす風がある。甥御せみごさんと伺うかがったが」

「いやいや、先生、それには深いわけあいがあること。いか

がでしよう、折入つてご相談申しあげたい儀があるのですが」「折入つてとは、よくよくのことか?」

「まったくの、よくよくのごことで、どうにも、自分の思案には余りましたので」

「待たつしやい。あいにく、授業の日だが、壁書を残しておくから」

呉用は、一たん家の内へ入った。婆やに何かいいつけ、また、筆を取つて、サラサラと書いた一紙を、学童の眼にふれやすそうな教室の壁に貼りつけておいて、

「これでよし。これでよし。さあ、晁蓋どの、同道しようかと、外へ出てきた。

晁蓋が、ふと、立ちよどんだのは、呉用が壁に残した貼り紙の文句に、氣をとられていたからだ。子供にも読みやすいように、それにはこう書かれてあつた。

先生ハ今日

急用デ、才留守

素読ハ ソトク 才休ミスル

才習字ハ 家デヤルコト

遊ブ者ハ

蛙ト遊ベ

河ヘ落チルナ

相談事も、事によりけり、というものだ。

北京の梁中書りやうちゆうしよから、都の蔡大臣さいへ、誕生日祝いに送る時価十萬貫のものを、「奪うべきか。見のがすべきか?」また。

「——奪うとしたら先生には、どんな奇策がありますましよう

か?」とは、いかに、今孔明いまこうめいの称ある智多星ちたせい呉用先生でも、おいそれと、返辞ができたものではあるまい。

人を遠ざけた晁家の書楼しやうろうの一室。

「……じつは」

と、声をひそめて、主の晁蓋あらしから、今暁の事の次第、劉唐りゅうとうの本体、またその劉唐が持ちこんだところの情報などを、審かに打ち明けられて、さすがに呉学人も黙考、久しい体ていだった。

それへ答える前に、彼がひそかに思うには。

これはみな、宋朝そう腐爛の悪世相が、下天げてんに描きだしつつある必然な外道げどうの凶絵だ——。これを人心の荒すまびと嘆くも、おろかであろう。

単に、悪を悪と見なすなら、悪の密雲は、上層ほど濃い。上層ほど、大きい。しかも、政治にかくれ、権力にものをいわせ、公然と合理づけた悪を行つて、恥ずるを知らない。

それに反して、民土の悪は、おおもねが小悪だ。生きるために。また、いささか生命いのちを愉しむために。共通の人間欲のために。あるいは、反逆のために。

わけて今は、反逆の徒が多い。虫のわくごとく地にこれをわかせたものは、宋朝自体の腐土ではないか。この世をば我が世”と思ひ上がっている貴紳大官ではないか。

梁中書、蔡夫人。蔡大臣。それらも、驕慢星きやうまんせいの二タ粒三粒だ。

それにはたいし、地にはいつか、上層の驕慢星に闘わんとする反逆星が、宿命したのはぜひもない。

この地煞星ちさつせい(まがつぼし)はもとより庶民の土を藉かりて住み、

悪行いたらざるなき悪戯星の性は持つが、しかし、いささかの道義は知り、相憐れむの仁を抱き、弱きはこれを虐げず、時に、漢と漢とが、ほんとに泣き合うことも知っている。

単純むしろ愛すべく、野性、憐れむべきであるが、なお人間らしき人間たる、真性だけは失っているものではない。

これを捨てず、これを刑せず、もし愛情と同鬱の友となつて、よく用い、また善導しつつ、いまの糜爛社会に何らかの用途と生きがいをも与えて、ともに、世を楽しむ工夫はないものか。……あれば、宋朝治下の塗炭の民土に、一颯の清風と、一望の緑野を展じるものと、望みをかけ得られないこともないのだ。

「……晁蓋どの」

やつとその沈思から面をあげた呉学人は、

「おやんなさい。智恵も貸しましょう」

ぼつんとだが、一語は明晰に、また断の力がこもっていた。

「えっ。ではお智恵も貸してくださいますか。じつは昨夜、妙な夢を見ましてね」

「どんな夢を」

「北斗七星が、てまえの屋敷の棟へ落ちてきた夢です。変な、と思っていたら今暁の出来事……吉か凶か、判断に迷っていましたが、先生のおことばで、力をえました」

「だが、わしがやめろといつても、怖らく思い止まるまい」

「ご明察どおりです。この晁蓋にすれば、なにも危ない橋は渡らずとも、家代々の莊院、食うにも着るにも困る身じゃございませぬ。けれど、いまの世を見渡して、どうにも、腹から愉しめぬものが、日ごろ、もやもやしていたモンです。そ

こへ持ってきてのこの話でさ。正直申せば、欲と義憤の二タ道かもしれませんがね」

「しかし、梁中書も、今年は去年の轍はふむまい。難かしいぞ」

「覚悟の前です。……が、先生のご意見としては」

「どうしても、粒ヨリな人間七、八人の結束は要る。お宅の雇人や壮丁など、何十人いても、役には立たん」

「ゆうべ見た夢は、北斗七星。……まず先生と、てまえと、赤馬の劉と、ここにやあ三人しかいませんが、うまく星の数だけ揃いませんかね」

「さアて」と、呉学人は、ふたたび何か眉を沈めていたが、

「いや、ないこともない、はからずも思い出した者がある」

「えっ。先生がそんなにまで、力をこめて、頼もしそうにいう人物というのは」

「三人兄弟。しかも三人とも、義に厚く、武技に秀で、事に当たたら、水火も辞せぬ男たち」

「はて、今時どこに、そんな勿体ない男が、どこに埋もれていたでしょうか」

と、晁蓋は、思わず膝を前へすすめた。

呉学人は、一気に言った。

「その三兄弟とは、阮小二、阮小五、阮小七といつて、血をわけた真の同胞。——濟州は梁山泊のほとり石碣村に住ん

で、日ごろは、江の浦々で漁師しているが、水の上の密貿易も、彼ら仲間では、常習とされている。……もとより、文字はない男たちだが、その義心と武には、わしも見込んでいた

者だ。会わぬこともう両三年になるが、よも、わしのことは忘れてはおるまい」

「ああ、阮の三兄弟でしたら、薄々、噂には聞いていました。石碣村といやあ、わずか二日道、使いをやつて、ひとつこれへ呼んでみましようか」

「来るものか、あの兄弟たちが。この呉用が出向いて、相談をもちかけても、よほど三寸不爛のこの舌で口説かぬことは」

「なるほど。それほどな男とあれば、なお頼もしい。先生、お出かけくださいますか」

「行つてもよい。……が、学童らの授業休みの貼り紙に、もいちど、日延べを書いて来ねばならぬ」

「今夜立つても、明後日の午には着きます。その前に、赤馬も加えて、一杯さしあげたいし、その上でのご出立でも」

「おおそうしよう。さてさて、人生の朝暮、なにが起るか知れんものだな」

彼は一度、童塾へ帰って行き、夕方からまた見えた。そのときは、赤馬の劉唐も同席し、詳しい話は、もうあるじの晁蓋から聞いている容子だった。

三人は、二更の頃まで、飲んでいた。——時々、声がひそまるのは、密議らしい。北京から東京への道すじを、例の時価十萬貫の生辰綱（誕生祝いの荷籠）が行くとすれば、その通路は、どの辺に当るか？ 去年と道すじを変えるか否か？

これらはまだ未知数というしかない。今は、五月初め。誕生祝いは七月十五日とか。——なお七、八十日の間は、たっぷりある。

「準備に日は欠かぬ。だが、三兄弟の誘いこみは、早いに限る」

呉用は、酒もほどほどに、さっそく旅支度にかかりだす。外は、ぬるい夜靄の夜だし、陽気にはまず申し分もない。

「じゃあ、わざとお見送りもしませんが」

「むむ、人目は避けよう。劉唐さんも、わしの帰るまでは、おとなしく客間に籠っていてもらいたいな」

「もうご心配はかけません。吉左右をお待ちしております」
門を立てて行く呉学人の影は、すぐ模糊たる夜靄のうちに淡れ去った。

一日おいて、翌々日の午じぶん。

早くも彼の姿は、水郷石碣村のほとりに見られた。

かつて、何度も遊んだ土地だ。阮小二の家も、探すまでのことはない。芦汀に臨み、山に倚り、数隻の小舟をもやった棒杭から、茅屋の垣にかけて、一張りの破れ網が干してあった。

「おいでですか、どなたか」

廂を、覗くと、昼寝でもしていたか。

「だれだね」

むっくり出てきた若者がある。

これが阮小二だった。腰切りの漁衣、はだけた胸。その大胸毛は珍しくないが、石盤のような一枚肋骨は、四川の絶壁を思わずに充分である。

「やあ、……これは」

濃い眉毛も、大きな口も、一時に、あどけなく相好をくず

して、

「お珍しいなア、先生じゃございませんか。いったい、どうした風の吹き廻しで」

「急な頼みごとができたのでな」

「へえ、どんな御用で」

「さる知人の富家で、お祝いごとがある。それで、めかた十四、五斤の金鯉を、どうしても十匹ほど入用と、折入っての、頼まれごとき。弱ったな」

「まア、お上ガンなすって。いや、いっそ、江の向う浦へ行きましようや。ちよつとおつな旗亭がありますぜ」

裸足で飛び出した阮小二は、すぐ杭の小舟を解き放して、呉用の体を掻いとり、櫂を操って漕ぎだした。

江を行くこと、さながら自分の足で颯々と歩くにひとしい。まもなく、江のまん中を、斜めに過ぎるうち、芦の茂みを透して、チラとべつな一隻が見えた。すると、こつちから阮小二が呼んだ。

「おうい、小七。……小五はどうしたい、小五はよ」

水漕して、向うからも答えてくる。

「オウ、小二哥いか。……小五哥いに、なにか用かね」

「大ありだ、呉先生が、おいでなすったぜ」

「なんだア？ 呉用先生だつて。うそいえ」

「ほんとだ、てめえも来いよ。先生を誘って、これから一杯飲りに行くところだわ」

「こいつはいけねえ、与太をとばして、そいつアとんだ失礼をしちまった」

芦むらを漕ぎ分けて、さっそく近づいてきたのを見ると、

これなん、村では活閻羅ともアダ名のある末弟の阮小七。

釣でもしていたか、竹ノ子笠に、碁盤縞のツツ袖水着、笠の翳ながら、大きな出目は、らんと耀き、筋骨はさながら鉄といえば言い尽きる。ひたと、舩そろえつつ。

「ごめんなさい、先生。あんまりお久しぶりなもんで」

「行くかね、いっしょに」

「ぜひ、お供を。……ちよつくら、おふくろの家へ寄って、小五哥いも誘いましようや」

近くの岸へ寄る。ここにも、水を繞らした小部落があった。その一軒へ、舟の上から。

「おふくろ。小五哥いは、いますかい」

「いないよ」と、膠もない返辞。

「——漁師の親のくせにして、あたしやあ、ここ幾日も、魚の顔を見たことがないよ。あの子ときたら、毎日、ばくちばくちの追い目でさ。あきれたよ。たつた今も、あたしの簪を引つたくって、消えて行ったばかりだよ」

小二は、頭を搔いて、逃げるように、また漕ぎだした。

「どうも先生、いやなことを、ついお聞かせしちゃって、どうぞお気を悪くなさらないように」

「はははは。そんな内輪ごと、なにも、初めて知ったわしではないよ」

「でもネ、折がまずいや。……小五哥いも、目が出ねえらしいが、どうも早や、あつしら兄弟は、みんな、ばくち好きの、ばくち下手ってやつでしてね」

「近ごろ、いけませんかな」

「近ごろなら、先生、まだいいんですがね、もう一年以上も、

取られつ放しの、素寒貧つづきですよ。魚をとったぐらいじや、いくらとつたつて、間にあわねえ」

「小二哥い、およしよ」と、小七が横からいった。「つまらねえことを、お耳に入れたつて、頭を搔いたくせに、自分からまた、シケたぼやきをお聞かせするたあ、どんなわけだい」

「ちげえねえ。先生、笑ってください」

「はははは」と、呉学人は、彼らの註文どおり大いに笑つて、「——いつも、おまえ方は、明るくていいな。運は時のものだ。時が来れば、あっち向きの花も、こっち向きに咲き変わる朝もある」

言いながらも、じつは心のうちで、これは脈がある、わが計なれりと、ほくそ笑んだ。

漕ぎゆくほどに、村の漁師町が望まれてきた。旗亭の旗も見える。橋畔の家々の洗濯物も見える。舳はずんずん岸へ寄せていた。

「ああ先生。いい都合だった。ちようど、小五がいましたよ」

「ほう、どこに」

「ほれ、あんなところに」

小七が指さすところを見ると、なるほど、いま橋袂から降りてきた一人の男が、舟のもやいを解きかけている。

手頸に提げたのは、どうも、縄を通した二タ差しの銅銭らしい。

どこか殺気のただよう眉間は、ばくち裏れのせいだけでなく、異名も、短命二郎といわれているほどだから、独自一人相というものだろう。喧嘩に俊敏なのは、その尖り肩や脛の長さでも察しられ、ボロの漁着の胸もとからは、青ずんだ豹

の刺青が見え、その凄味を消すよりは、むしろ増すかのようにな、頭上斜めにかぶった刺子頭巾の横鬚に、一枝の柘榴の花を挿していた。

相見ながら、漕ぎ近づくと、

「よう小五さん」——呉学人から、声をかけた。

「どうです、いい目が吹いてきそうかね」

「誰かと思つたら……」と、小五はやっと、怪訝顔を解いて笑い出した。

「——先生たあ、思わなかつた。さつきから、あの橋の上で、見てたんだがね。どこへ行くんだ、小二哥い」

「この先の旗亭よ。来ねえかい」

「橋際にもあるぜ。妓もいるし」

「いや先生の馳走には、妓よりは風景だろ。これから夕陽が沈む頃あいまで、芦と水と、帰る帆と、それからあの梁山泊の山々が、紅い瑠璃色からだんだん紫色になつていたり、おれたちでも、恍惚するほどな景色に変わる。あれがご馳走だ。もう一ト漕ぎして、水っ端の旗亭まで行こうや」

「よかろう、三艘、舳を揃えて繰りこむか」

小五の柘榴頭巾も、自分の小舟へ、ひらと跳び下り、たちまち、櫂音たかく追いついてきた。

十八 呉用先生の智網、金鱗の鯉を漁つて元の村へ帰ること

「ああ酒も美味しいが、空気までがまた美味しい。お互いこんな日に会うのも、生きてこそだな。おまえ方、三人兄弟と一し

よに、こうして杯を持つのもまことに久々だし」

「先生、よほどこの旗亭がお気に召しましたね」

「ム。貧しい漁村の一杯飲屋も、時によれば岳陽樓の玉杯にまさるといふもんじゃない。……江の畔には柳や槐のみどりが煙るようだし、亭の脚下をのぞけば、蓮池の蓮の花が、さながら袖を舞わず後宮の美人三千といった風情」

「はははは、先生のこんな上機嫌は初めて見たぜ。なあ弟」

兄の小二がいうと、弟の小五、小七も口を揃えて、

「よかったなあ、せっかく、ご案内してきても、どうかと思つてたんだが。……とところで兄哥」

と、ここで小五が、口をはさみ、

「おれだけまだ聞いていないが、呉用先生がとつぜん村へ現われたつてえのは、いったい、どういう御用向きなんだね」

「それがサ」と、長兄の阮小二は、ちよつと自分の頭を叩いて——「目方十四、五斤の金鯉を十尾ほど揃えてくれと仰っしゃるんだが……近ごろの漁場じゃ、おいそれとは、とれそうもねえや。……でも、先生の知人のお大尽が、婚礼に使うんだから是非にと、先生も頼まれちゃったというんだよ。弱ツたもんだな」

「ふうむ、そいつはご難題だぞ。……が、まあいいや、先生、もひとつ、いかがです」

「もうだいぶ酩酊きみだよ。日も靉靄と暮れかかるし、心気は朦朧だ」

「先生、とにかく今夜は、汚い小屋じゃございませうが、てまえどもの家へお泊りくださいませんか。ここ一杯屋も、晩まではやっておりますので」

「おう、ご厄介だが、世話になるよ。とにかく十尾の金鯉を持たなければ、友人のてまえ帰れんからのう」

これは口実、呉学人の思う金鯉とは、もとより金色の鱗をもった魚なのではない。兄弟三人を網中の獲物として、首尾よく、晁蓋一味の大仕事の味方にひき入れて帰ることだった——しかし、その真実を言いだすのは、場所もまずい、と考えて、

「じゃあ、ぼつぼつ立とうか。おいよ。旗亭の亭主、勘定をしてくれい」

「とんでもない、先生に金をつかわせるなんて……。この払いは、手前ども兄弟にまかせておくんなさい」

「よかろう。では、わしは手土産でも提げるとしよう。亭主、大甕一壺に酒を詰め、牛肉二十斤、鶏一トつがい、あの小舟のうちへ積んどいておくれ」

呉用は銀子一両を亭主に渡して頼んでいる。

阮の三兄弟も、それぞれ小舟にもどり、やがて呉用をのせて、夕波の江を漕ぎ渡って、家路についた。

「さアお上ガンなすって」

案内してきたのは、昼、行きがけにちよつと寄った阮小二の家である。兄弟三人中、女房持ちは長兄の彼一人らしい。さっそく持って帰った肉や鶏を、女房と漁場の餌採り小僧にいつけて、料理にかからせ、

「先生、ここなら夜ツツびて飲み明かしたっていいんですから、どうぞ今夜は帯紐解いたおつもりで召上がっておくんない」と、水に臨んだ裏部屋の破れ簾を捲いて、映し入る月の光を囲んだ。

料理もできる。杯も巡りはじめる。江上でいちど醒めた酔いがぱつと出て、話はすぐ弾みだした。

「なア兄弟がた。またしても、気がかりを言いだすようだが、十尾の金鯉を揃えるぐらいなことが、どうしてそんなにむずかしいのか」

「それやあ先生が、学問や兵法には通じていても、世事にはお晦いからでございますよ」

「ふうむ……こいつは一本参ったかな。しかし、どういう仔細か、そこを聞こうじゃないか」

「入江や海なら、どんなところにも、どんな魚でもいると思うのが、そもそも世間知らずでサ。——打ち明けて申しますと」

「なんだか、ひどく物々しいのう」

「まったく、物々しいお話ですがね、あっしどもの漁場としてこの石碣湖なんてえのは、猫のひたえみみたいなもんで、一尾十斤もする大鯉を揚げるにやあ、どうしても向うに見える梁山泊の辺まで漕ぎださなくちゃ採れません」

「それ、そこがおかしいじゃないか。梁山泊なら水つづき、しかも彼方に見えている。どうして、そこで採ってこれれんのか」

「鬼門ですよ。梁山泊ときては」

「鬼門。いよいよ変だな。どういうわけで」

「イヤ、お話にも何もなりやあしません」

「まさか、殺生禁制の禁漁区でもなकारうに」

「殺生禁断どころか、ヘタに近よれば、こちとら、人間さま

のお命があぶねえんですよ。——ずっと以前は、梁山泊の沖こそ、あっしども兄弟の稼ぎ場でしたのに、イヤひでえことになったもんで、お蔭ですっかり貧乏つづきのこの落ち目、忌々しいが、どうにも仕方がありません。なあ弟」と、兄弟顔見あわせての嘆息だった。

呉用は心ひそかに、しめたと思う。どうやらこの辺に、兄弟の本心を引き出す鍵がありそうである。——と見たので、杯も下において、

「ほ。……それが落ち目の原因とは一生の大事ではないか。あんた方三名、人なみ以上な五体と若さを持ちながら、なんでそんな運命に負けて指をくわえていなさるやら。……はて、わからんな、もすこし打明けたところを聞かせてくださらんか」

せまくても石碣村の浦人仲間では、男名を売っている兄弟三人が、「——なんでそんな運命に負けて指をくわえているのか」といわれたのだから、少々口惜しかったにちがいない。

——そこで兄弟こもごも、憤然とじつを訴え始めたが、それこそは、加亮先生呉用の思うツボであったであろう。

「……なにしろ、先生。その梁山泊ってというのは、群盗の根城なんです。いってみればまア天下に恐い者なしの無法者の巣ですからね、かなやあしません」

「それは初耳だな。いったい、どんな人間どもが寄っているのか」

「白衣秀士の王倫というのが大将株でしょうか。こいつはなんでも、東京の役人試験に落第した書生くずれだそうで、以

下、摸も着ちやく天てんの杜と選せんとか、雲うん裏り金剛こんごうの宋そう万まんとか、早かん地ち忽こつ律りつの朱し貴きなんてえ手て輩はいがおもだつたところで、手て下げ六ろく、七しち百人ひゃくにんもいるんですから、いくら齒はがみをしてみたって、こちとら兄弟けいだいじや手ても出でせませんや」

「むむ……それじゃあムリもない。そんな豪ごう勢せいな賊ぞく案あんか」

「おまけに、近きんごろその仲間仲間へ落おちていった、もと宋そう朝ちようの禁きん軍ぐんの師し範はん、豹ひょう子し頭とう林りん冲ちゆうというのがまた、めッぽう腕うでの冴さえた男おとことかで、いよいよ梁山りやうさん泊ぱくと聞きいたら泣なく子こも黙もくるくらいなもんです」

「が。妙めうだナ、それも」

「先生せんせい、なにを首かぶを傾かげなさるんで」

「だって、いかに今は、濁じやく世せのどん底そことはいえ、上かみには宋そう朝ちようの政府せいふがあり、地方ちほうには各省くわいしょうの守護しゆご、管くわん領りやう。田でん舎しゃには郡ぐん司し、県けん吏りもいるものを、そんな大だいそれた群ぐん盜たうが、天てんもおそれず、山東山東の一角いっかくを占しめておるなど、信しんじられんことではないか」

「さ、それがですよ先生せんせい。このごろの役やく人にんときたら、賄わい賂ろくには弱じやくく、人民じんみんには強きやくく、検けん地ちや事じ件けんで村むらへ来きようもんなら、豚とん、羊やう、鶏けい、家あひる鴨もまで食くらいつぶしたあげく、晩ばんには娘むすめを伽とぎに出だせの、帰かへりには土ど産さんを馬うまに着きけるなんて吐ぬかしゃあがつて、そのくせ、ちよっと手て強こわい山さん賊ぞくや無む頼らい漢まにでもぶつかるど、逃にげまわるのが関せきの山さんで、たとえ、盜たう難なんや乱らん暴ぼう者しやがあつて、訴うえ出でたつて、間まに合あう頃ころに來きたためしなどありやしません」

「ひどいな。本当ほんとうかな、それは」

「嘘うそだと思おもつたら、先生せんせいもちと、この辺へへ住すんでごらんなさ
いよ」

「そりや見てはおれまい。幸さいい、わしの住すんでいる土地ちには、晁ちやう蓋がいといふなかなか肯きかない莊しやう院いんがある。そのせいも、それ
ほどでもないが」

「だから奴やつらには、金かね力りきが腕うでか、どツちかでないけりやあ応お対たいもできません。弱じやくい土地ちの、素そ直ちくな土ど民みんと見るほど、権けん柄へいを
振り廻まわすのが、いまの役やく人にんですからね」

「貧ひん土どこそわが世よの春はるといつたよな振しん舞ぶだな。これや何なにと
かせずばなるまいて」

「そうですよ、先生せんせい。なにもさもし根ね性せいで、役やく人にん暮くらしの
垣かきの内うちを覗のぞくわけじゃあねえが、大だいゲサに言いやあ、金かね銀ぎんは秤はかり
で分わけ取り、衣い裳しやうは好このみ放はな題だい、食くい物ものは贅ぜい沢たくざんまい。それ
がみんな、人ひとを泣なかせてせしめているものだから、業ごう腹ぼくでた
まりません。こちとらなど、働はたらいても働はたらいても、どうしてあ
いつらの真ま似ねもできねえのかしらと、稀たまにやあ、情なさけない氣き
もしてきませぬぜ」

「なんだ、漢おとこたるものが！——と呉ご用よう智ち多た星せいは、ここぞと、
語ご氣きを入れて、叱ののるように、兄あに弟ていの顔かほを、らんと睨ねめ廻まわした。

「あんた方は今いま、いう口くちも穢けがれるように、腐くされ役やく人にんを嘲わらつた
じゃないか。その口くちですぐ、役やく人にん暮くらしの真ま似ねもできぬとは、
なんたる意い氣き地ちのない愚おろ痴ちか、みツともないぞ、いい漢おとこが」

「先生せんせい、ごめんなきい、つい、つまらねえ愚おろ痴ちをこぼし、面おもて
目め次つぎ第だいもございません」

「いや、あやまるには及およばんさ。だが、わしはおまえ方の、
兄あに弟てい鼻び鼻びで言いいおるんじや。どうして、これほど立た派はな漢おとこ三さん疋びき
が、食くうや食くわずでいなければならぬかと……」

「ありがとうございます。そう仰おほつしゃつてくださるなあ先

生だけだ。もし先生みてえなお方があって、こんな漢どもでも、腕と根性ツ骨を、気前よく束で買っておくんなさる人でもあれやあだが……まずねえなア、今の世じゃあ」

「いやある」

「ありますかえ、先生」

「なきにしもあらずだ。——いっそ、梁山泊へ行ってみたらどうだ」

「だめ、だめ」

兄弟三名、三人ともに、鼻っ先で笑いながら、手を振った。

「そんな智恵なら、なにも先生に教えられねえでも、朝夕に眺めている梁山泊、とうに、そっちへ転げ込んでいますが、あそこには、白衣秀士王倫という気に食わねえ野郎が首領に坐っているでしょう。気の小っけい、侠気も義もねえ男だと聞いています。いくら飢しいッからって、そんな泥臭え野郎の下にやあ付きたくありませんからね」

「よく言った。その背骨を失ったらもう漢はない。では何か、もしここに、腹から心服できる者があって、かりにおまえ方の漢を見込んだうえ、買うといったら、どうなさる？」

「あははは。ありッこねえや。そんな人は」

「いやさ、もしあったらば」

「それや、いわずと知れている。漢が漢とゆるしあうことでしょ」

「そうだ」

「そんなら、水火も辞しません」

「ならば改めて、君たち三兄弟に、ひきあわせたい人がここにある。どうだ会ってみないか」

「だれです、それは」

「ここからわずか数十里、東溪村の名主をしている晁蓋だが、これは山東河北きつての人物とわしは平常、観ておるが」

「あ。托塔天王とアダ名のある莊院さんですか」

「知っているのか」

「いや、聞いているだけです。——義に厚く、侠につよく、たいそう金ばなれもきれいな人とは伺っておりますが」

「なにを隠そう、じつは今度のわしの用向きというのは、その晁蓋から頼まれて、或る一用を帯びて参ったわけじゃが」

「では、なんですかい。金鯉十尾ご入用とかって仰っしゃったのは、嘘なんですか」

「方便じゃよ。方便はゆるしてくれい。なんとなれば、君たち兄弟の腹の底を見とどけぬうちは、めったに口を割れぬ秘密なのだ。しかし、いまはもう寸分、君たち三名の義を疑ってはいいない」

「どういいうご相談事なので」

「くわしくは、その晁蓋と君たちが、義の杯を結んだうえで打合せるが、かいつまんではいえば、一世の大金儲けと、悪政府の大官を膺懲しようという快事だ。つまり、その二つを、一挙に併せてやろうという目企みだが、ぜひ君ら三兄弟にも、その仕事にのッてもらいたいという晁蓋の切なる望み。……で、かくいいう呉用が誘いだしに参った次第だ」

「ほんとですか、先生」

兄弟は、眼をかがやかした。短命二郎の阮小五などは、感激のあまり、自身の首すじを平手で叩いて、

「待ってました。この首は、この漢の値打を知って買って

れる人のためにあるようなモンでした。なあ哥あにき」

「そうだとも。この漢あつし一匹、もし先生が買うと仰あやつしやるなら、いつでもと思つていたのに、そのうえ、晁蓋あつしさんまでが、あつしどもを見込んで、力を借りたいというのなら、一も二もありやしません。早速ここで誓ちかいましょう。どんな秘密でも打明けておくんさい。こう見えても、裏切るような下種げすどもじゃござんせん」

「じつは、こうだ。——この七月十五日、朝廷最高の頭官けんかん蔡大臣さいだいじんのもとへ、その人の誕生祝うらなひいとして、値あたい十萬貫におよぶ金銀珠寶しんぎんしゆぼうが北京ぺいけいからひそかに送りだされる。——贈りぬしは北京だいみやうの大名府だいみやうに君臨する梁中書夫妻。——もとよりその財貨さいわ宝玉ぼくぎよは、すべて悪政の機関からくりから搾りとつた民の膏血こうけつにほかならぬ。……これを奪うのは天の誅罰ちゆうばつといえなくもあるまい。

途中、その輸送を襲うて、これをせしめる手だてなどは、晁蓋あつしやほかの同志と同席のうえでなお仔細に密議せねばならんが、要はそういう目的だ。すぐわしとともに東溪村まで行つてくれぬか」

「いきますとも」

小二、小五も二つ返辞で、

「おい小七。いつもおめえが、夢みたいにいってたことがよ、なんと、夢ではなくて、ほんまに来たぜ」

と、三兄弟、手の舞い足の踏むところも知らず、といった風なよろこびだった。

——明ければ、早朝から、兄弟いそいそと二日三日の旅立ち支度。呉学人を先にして、東溪村へさして行つた。

月はまだ五月初旬の爽涼そうりやう、若者の心そのままな薰風くんふうが袂たもと

を打つ。

東溪村へ入つたのは翌々日の午ひるさがり。さすが莊院しやういんの示しがよいせい、石碣村せつがふそんなどはくらべものにならない村道のきれいさ、村の土倉どそうや、屋根もどことなく落ちついて見える。

——と、彼方の一ト構えの土塀門えんじゆの外、槐えんじゆの下の木蔭に「今日もや着く？」と待ちうけていた晁蓋その人と、食客の赤髮あつし鬼劉きりゅう唐たうのすがたが、はやそこに見いだされてきた。

双方、すでに遙かより相見ながら、

「やあ」「やあ」

と、手を振り上げつつ相寄つて行つた。

十九 六星、壇だんに誓う門外に、また訪おとずれる一星のこと

その夜の酒宴のさまなどは、くどくどしい。

呉学人ごがくじんは、兄弟三人のつれ出しに、苦心はしたが、わが功は多くをいわず、

「これが、わしのすすめた阮兄弟げんだ。まず見てくれ」と、いったあんばい。

晁蓋あつしは、一見すっかり気に入つた。また三人の兄弟のほうでも、晁蓋の重厚で、そしてさっぱりした人柄のうちにも、情義の厚そうなところを見て、

「こういう人とのつきあいなら、かねて望んでいた漢あつしづきあい。一生賭かけても、悔いはない」

と、はやくも惚れこんでしまった様子である。

赤馬赤馬と呼ばれている赤髮鬼劉あつし唐たうは、呉先生や晁蓋のあいだにあっては、見劣りすることせひもないが、これも精悍せいけん

にして邪悪ではない。短命二郎小五とは、よい組合せた。

飲み明かし、語りあかして、さて一睡もつかのまの、翌早朝。

同志六名は、嗽い手水の身清めしたうえ、晁家の奥の間にある祭壇に向って立ちならんだ。——壇の道教神のまえには、紅蠟燭赤々と燃え、金紙の銭、色紙の馬、お花、線香、羊の丸煮などの供え物が、種々、かざり立てられてある。

誓いの儀式だ。土器を取って、羊の生血をそそいだ神酒をすすりあい、やがて呉学人が案文した起誓文を受けて、晁蓋が壇にむかつて読みあげた。

——キナナラク聞説。

宋朝ノ管領、梁中書、北京ニアリテ、民ヲ毒シ、権ヲ用イ政ヲ恣シテ富財ヲ私スルコト多年。然ノミナラズ、夫人蔡氏ノ岳父、蔡大臣ノ都ノ邸ヘ向ツテ、連年、生辰綱シヨウシンコウ（誕生祝いの金品）ヲ贈ルコト実ニ巨額ニノボル。

茲ニ、今年七月十五日ノ生辰ヲ期シ、又モ十萬貫ノ不義ノ財貨ヲ密カニ都門東京ヘ輸送セントス。天冥、豈コノ不義ヲ許スベケンヤ。

即チ、ワレ等六名、天ニ代ツテ、懲罰ヲ下シ、以テ佞吏ノ肝胆ニ一颯ノ腥風ヲ与エントスル者ナリ。モシ盟ヲ破リ、異端ヲ抱ク者アラバ、ソレ天ノ冥罰ヲ受クルモ恨ミナキコトヲ天地ニ誓ウ。——神明、照覽アラセ給工。

「……いざ、いざ順に」

おのおの、紙の銭を焚き、代る代る礼拝する。

「さあ、これで誓いはすんだ」

お供え物を下げて、一同また、客間で飲み直していた。

すると何となく、物騒がしい声が門外の方で聞え出した。はてと、晁蓋が耳をすましてみると、そこへ家人のひとりが出来て、さも持て余し気味に訴えた。

「旦那、旦那。ご酒宴中、なんとも相すみませんが、ちょっと、おいでなすって」

「うるせえな、お客さまの席へ。いったい、なにをがやがや騒いでいるんだ」

「それがその……なんとも手のつけられねえ強情ツ張りな山伏なんですて」

「山伏だと。よくねえなあ、この頃の行者って奴あ、装恰好だけは、もつともらしく拵えて歩きやあがって、作法も経文もろくそッぽ知らねえようなのが、ただ食い稼ぎに村へも時々入って来やがる。うるせえから、粟の一升もやって追っ払え」

「ところが、てんでそんなものア眼もくれねえんです。へい」

「じゃあ、なにを施せと、ねだっているんだ」

「旦那に会わせろって、ごねるんですよ」

「ふざけるな。そんな物乞いに、いちいち会っている暇はねえ。それよりは、てめえたち若いもんが大勢ガン首を揃えてやがって、そんな者一人を持て余してるたあ、なんてえさまだ」

「そう仰っしゃいますが、ま、ちょっと来てごらんすってください。——自分は一清道人と申す者——とか何とか吐き

いて、ちょっと触ろうものなら、すぐ人を手玉にとつて、ぽんぽん投げつけてしまやあがるし」

「なに、手むかいするのか」

「そいつア向うでいってる文句でさ。手出しをすると用捨はせぬぞ。晁蓋に会わせぬ以上はここは動かん……なんて啖呵を切りやあがって、四人や五人タバでかかっても、あっさり片づけられちまう始末なんぞ。なんともはや、私たちじゃあ手におえません」

晁蓋はやつと、腰を上げた。

「先生、お客人にも、失礼ですが、ちょっと中座させていただきます」

彼が門前へ出ていってみると、なるほど、莊丁大勢、ただ遠巻きにだけして、恐れおののいている様子だ。中には、手脚を傷められて凄愴な面をしている連中も少なくない。

「どこにいるんだ、そいつは」

「ほれ、その槐の木の下に、悠々と、憎ていな笑い顔して、腰かけておりますよ」

「あ、あれか」

晁蓋は、つかつかと、彼の前へ歩いていった。

彼のほうでも、晁蓋を見るや、すつくと同時に起ち上がった。

山行者の着る裾みじかな白衣に、垢じみた丸グケの帯。

は負わず、笈の代りに古銅づくりの一剣穿きのもの。さてまた、年ごろの麻鞋は、これも約束の行者穿きのもの。さてまた、年ごろはといえは四十を出まい。黍色の容貌に、腮だけの羊髯をバサとそよがせ、口大きく、眉は少し八の字、どこか愛嬌さえ

ある顔だが、身の丈ときたら一幹の松のごとく、すつくと見え、さらに憎ていなのは、手に鼈甲紙の団扇などを持って、ふところに風を入れていたことだった。

「道士、えらいごけんまくだな」

「騒いでいるのは、こच्चいではない。勝手にここの雇人どもが、自分で瘤をこしらえておるまでのこと」

「布施は何がお望みなのか」

「またどうか。物乞いじゃおざらん」

「では、なんでお動きなさらぬ」

「あるじの晁氏に会いたいのみ」

「その晁蓋は、じぶんだが」

「や。あなたか」

「用を聞こう。手ツとり早く」

「ここでは申せぬ。折入ッての儀だ。どこぞ二人だけで話したい」

「じゃあ、こच्चいへおいでなさい。一樹の縁だ、茶でも上げよう」

軽い気もちで、門内へ入れたのである。といつても、奥の客間ではない。間に合せの小部屋だったのはもちろんだ。

通されて椅子によると、さすが礼儀はただしく道士はすぐみずから名のつた。

「お騒がせして申しわけないが、拙者は公孫勝、道号を一清と呼ぶる者。生れは薊州の産です。申してはお笑いぐさかもしれないが、幼少より武芸が好きで、あちこちの道場歩きなどで多少名を鳴らしたため、公孫勝ノ太郎とか、入雲龍ノ

太郎などと少しは恐れられたものです。——かつまた、いささか方術(ほうじゆつ)(道教の法術)に通じ、自在に風雨を呼び、隱遁飛雲(いんとん)の法も行うが、それも決して広言ではありません。——と

と、公孫勝の一清は、その羊ヒゲを掌(て)のひらで何度も逆さに撫(な)でつついう。にんまりと人を射てくる眼(まな)ざしには、なるほど方術師らしい底冷たい眼光があった。「——当村の名主晁氏(ちやうし)のお名は、久しく耳にするのみで、御見(ごけん)は今が初めてだが、初対面の手みやげに、じつは軽少なれど、金銀十萬貫に値する儲け仕事を持参いたした。なんとお受けとりたまわるまいか」

聞くと、晁蓋はつい笑いだした。

「そいつあ、北方から都へ行く生辰綱(しやうしんこう)(誕生祝いの荷)じゃございませんか」

「あつ——？」
愕然(がくぜん)と、一清道人(いっせいでうじん)は、相手の顔を、穴のあくほど見まもつて、

「ふしぎだ。誰知るはずもないものを、どうして晁(ちやう)のものには、ご存知なのか」

「はははは。なにをいわっしゃる、こつちがびっくりしましたわい」

「それはまた、どうしてです」

「だって、当てずッぽうに、出たらめをいって見たまでですよ」

「いや、それこそ神感と申すもの。あなたは受けなくてはいけません。取るべきを取らずんば何とやら、しかも、密送の

生辰綱(しやうしんこう)は、不義の財だ、なんで、奪(は)うに憚(はば)りがありましたよ
うや」

こう、説き伏せんとして、一清道人がその弁をふるいかけたときだ。突如、扉(と)を排(はい)して顔を現わした者が、いきなり彼の頭へ大喝(だいかく)をくらわせた。

「不敵な密談、みな聞いたぞっ」

「やっ？」

せつな、一清道人は、さつと椅子(いす)を跳び離れたが、とたんに、晁蓋とそこへ入ってきた呉用学人(ごようがくじん)とが、声を合せて、哄笑(こうせう)していた。

「いやいや、公孫先生(こうそんせん)、おあわてなさるな。——ご紹介いたしましよ。このお方は」

言いかけるのを引き取って、呉用は、自分から加亮智多星(かりやうちたせい)と名のりを告げ、そして、

「こんなところで、ふとお会いできようとは、じつに意外。

一清道人、公孫勝のお名は、夙(つと)に江湖(こうこ)(世間)で伺(うかが)っていました」

「さては、貴殿(あなた)が呉学究加亮先生(かりやう)でございましたか。さても、広いようで世間はせまい。しかし、さすが晁家(ちやうけ)のお知り合いは違(ちが)ったもんですな」

「奥にはまだ、今日しも、心をゆるしあつた幾人かが寄っています。……ご主人、ひとつ公孫勝氏も、その座へおひきあわせしようではないか」

「先生のおゆるしとあれば」

晁蓋は先に立って、奥なる客間へあらためて、また新しい一人を加え、阮(げん)の三兄弟と、食客(りやく)の劉唐(りゅうたう)を交じえ、ここに一

堂に会する者七名となった。

「思えば、不思議な」

晁蓋はやがて言った。

「先頃てまえは、わが家の棟に、北斗七星が落ちると夢見て、眼をさしました。ここに偶然、七人の顔が揃ったのも、夢の知らせ、事成就の吉兆でもありませんようか」

「げにも」

と、呉学人は、うなずいた。

「これこそ晁氏の積善の報いだろう。かえすがえす幸先はよい。さつそくにも、劉君は、北京府へ潜行して、生辰綱の輸送路を、どの道にとるか、護送の人員はどれほどか、またその宰領は何者なるかなど、密々探つて、その都度知らせてもらいたいものだが」

「いやいや、その儀ならば——」と、公孫勝が口をさしはさんだ。「わざわざ、へたな密偵などは止めたがよい。それらのことは、すでに拙者があらかじめ調べ取つてある」

「えつ。おわかりか」

「間道をとらず、わざと今年は、黄泥岡の本街道を行くらしい」

「ならば、それをもつけの俸せ。黄泥岡の東一里の辺に、白日鼠とアダ名のある知り人がある。足溜りには、もつてこいだし」

そこで、晁蓋の意見も出た。

「決行には、手強にやりますか。すんなりと、おとなしくやりますか」

「臨機応変——」と、呉用がいう。「相手が腕ずくなら腕でゆく。先が智恵で来るなら智恵で挑む。……細かなことは、そ

の場でないかと、決め手には出られませんな。さきも、さる者の裏の裏でも搔かれたらたまらない」

「仰っしゃる通りだ」と、晁蓋も公孫勝も、異口同音に、

「妙計と信じたことも、敵の応変によつては、みずからの死地ともなる。余り計に凝つて、策士策に溺るなどのことがないように、おのおの、自在身を持つて神出鬼没といきましようや」

ここでほとんど手打ちはできた。夜に入るまで、飲み興じ、あくる早晩には、すでに阮の三兄弟は、もとの石碣村へ、飄として立ち帰るべく、朝飯をいそいでいた。

「時が来たら、そつと急報する。そのさいには、抜からぬように」

「ご安心なすつて」

三兄弟はニコと笑つて鞋を穿いた。路銀だといつて銀三十両を晁蓋が贈つたが、どうしても受けとらない。呉先生は、その物固さを笑つて、

「瘦せ我慢しなさんな。銀子のちよつとやそつと、受けても辞しても、晁家としては、おなじこつた。まず、それは貰つて、旗亭の借金でも返しておくほうが上策というもんじゃよ」

かくて。——三兄弟は別れ去り、公孫勝と劉唐とは、晁蓋の名主屋敷に、食客としてとどまつた。さらに呉用のほうは、つい近所の住居のこと。家塾に歸つて、あいかわらず村童相手の寺小屋先生になりすまし、折を見ては、ちよくちよく莊院の奥を訪ねて、茶ばなしの間に、世間たれも知らぬ密事の打合せをすましては、また何くわぬ顔で、塾の学童の中へもどつていた。

二十 仮装の隊商十一栖、青面獣を頭として、北京を出立する事

ここは北京大名府の梁中書の官邸だ。

後房の園には、黄薔薇の香が蒸れ匂い、苑廊の欄には、ペルシャ猫が腹這っていた。猫は眠った振りして、中央アジア産の白い狎がいま蜂を捕えて翳っているさまを薄目で見ていゝる。すべてこれらは、有閑な蔡夫人の物ずきが蒐めた愛玩の誇りらしい。

「あら、また水がない！ 誰です！ 私がいつもいつもやかましくいつているのに、また鸚哥の餌水が切れてるじゃないの」

いま、鸚哥の籠の下に立った蔡夫人は、鸚哥に負けぬカン高い声をして、後房の侍女をよびつけていた。すると、

「うるさいなあ、ちと静かにしてくれんか」
と、書院窓の帳をあげて、良人の梁の顔が、舌打ち鳴らした。

「おや、そこにおいでだったんですか。なにをなすってらっしゃるの」

「なにをって、調べものさ。書類調べだよ」

「お手すきなら、ちよっと、この苑廊の榻（長椅子）までお出ましくださいませんか」

「やれやれ、根気がつきるなあ。茶でも運ばせてもらおうか」
「ま、そこへおかけ遊ばせな。ちと内々のおはなしですから、

侍女は遠ざけました。すんでからお茶にいたしましょう」

「なんだね、急に事ありげに」

「だってあなた、今日はもう幾日だとお思いなさいませの。空をごらんないませ、もう夏雲ではございませんか」

「そういえば、初蟬が聞えだしたな」

「なにをいつてらっしゃるの。蟬なんか、二十日も前から啼いていますわ。いったい、東京へ送り出す父の誕生祝いの品々は、荷拵えばかりなすつておいて、どうなさるおつもり？」

「もちろん、万全を期して、七月十五日までに着くよう、輸送せねばならん。……だがね、誰を輸送使として遣すか、その宰領の人選に、頭を悩ましておるんじやよ」

「それには、お心あたりがあるなんて、いつか仰っしゃっていただけはございませんか。そのお胸の人間ではいけないんですか」

「いけないか、適任か、使ってみなければわからんさ」

「使ってみての上なら、誰にだってわかることじやありませんか。ばかばかしい」

「おいおい、そう頭ごなしに、大声でいうなよ。中門の外には、衛兵が立っておるんじや。聞えたらこの梁中書、まるで赤面ものじやないか」

「そうそう。兵隊で思い出しましたわ。兵隊上がりの提轄、青面獣楊志とやらでは、いかがなんですの」

「その楊志なら、武芸十八般、腕なら北京軍十万の中でも、屈指の者だが、いけません、ここへ来てからの日も浅い、第一心情いかんという点が、まだ充分には信用しかねる。……それで大いに迷っておるのさ」

「そんなことをいつたら、どんな人間でも疑えば限りがあり

ませんわ。それにもう日がないじゃございませんか。楊志を召して、お命じになつたら、どうですの」

「そなたさえ承知なら、楊志でよからう。いや、いくら熟考しても、結局は楊志だな。あの青面獸のほかにはあるまい」「じゃあ、すぐそれをお鳴らししてください」と、蔡夫人は、廊廂ろうびさしに吊つてある喚鐘かんしょうを指して、良人へ命じた。

梁は、この妻の父蔡大臣のお蔭で立身した者であるから、平常も夫人にはとんと頭が上がらない。唯々として、立つて喚鐘かんしょうを打ち鳴らした。と——すぐ中門外の衛兵が、姿をあらわして庭上に敬礼した。

「青面獸楊志に、すぐ参れと申せ」

「はっ」

衛兵が退がる。まもなく入れ代つて、階きざはしの前に来てぬかずにいたのは、これぞかの北京城の大演武場で十万のつわもの眼をそばだたしめた青面獸その人だった。

「楊志。——そのほうを見こんで、このたび、重大な使命をさずくるが、身命を賭して、やつてくれるかどうか」

「ご恩のあるお方の仰せ、いやとは申しませぬ。けれどこの楊志にできることか否か、その辺も伺つてみぬことには」

「わが夫人蔡氏の父蔡大臣の誕生祝いの品を護つて、東京までつつがなく送り届けてほしいのじゃ。もちろん、軍兵は望み次第に付けてやる」

「出発はいつでしょうか」

「ここ三日のうちとする」

「して、お荷物は」

「角な荷しほり十箇。それには、大名府の役署に命じて、十輛じゅうりょうの

太平車たいへいぐるまを出させる。また軍兵のほか、軍部から力者十人を選ばせて、一輛一人ずつを配して付ける。……さらに車輛一台ごとに立てる黄旗の文字には——献賀蔡大臣生辰綱——と書く。まずもつて、威風堂々と、山野の魔気を払うて行くがいいとおもう」

「どうも、せっかくですが」

「いやだと申すのか」

「なにとぞ、ほかの者に、お命じ給わりとう存じます。なんとすれば、去年は十万貫に値する高貴な品々を、ことごとく、途中賊難のため、掠奪りやくたつされたと伺つておりますので」

「だからこそ今年は、なんじを見込んで命じたのではないか。それもだ……」

と、梁はいささか昂奮して、唇を乾かし、眼に赤い濁りを見せて、説得にこれ努めた。

「余は汝を愛しておる。故にだ、どうかして、そちを出世してやりたく思う。それがわからんか」

「かたじけなくは存じますが」

「煮えきらんやつだな。——蔡大臣宛ての献上目録にさしそえて、べつにわしの直書一封のうちに、そちの立身の途をも推薦しておく考えなのだ。——途中つつがなく、生辰綱しんしんこうを送りすれば、それでもう汝の栄達のみちも開けるのではないか。なにを迷うか」

「しかし、長途の道中には、紫金山、二龍山、桃花山、傘蓋山、黄泥岡、白沙塢、野雲渡などという有名な野盗の巢やら賊の出没する難所があります。楊志も犬死にはいたしたくございませので」

「まだ、のみ込めんのか。軍兵はいくらでも召しつれて行けばいいのだぞ」

「いやいや、たとえ何百の兵でも、一朝、それ賊が現われたぞと聞けば、あらまし木ノ葉の如く逃げ散ってしまいましょう」

「なにを申す。ではまるで、生辰綱を送るなど、余に諫めて

いるようなものではないか」

「はい。まったくは、切にご諫止申しあげたいところですが、しかし今さら、お取り止めもありません。……どうも是非なき次第、楊志も観念して参ることにいたしましたよう」

「や。臍を固めて、行くと申すか」

「けれど条件がございます。——物々しき官用の太平車や旗などは廃し、お贈り物は、すべて人の担げるほどな行囊にあらため、護衛兵の力者もみなただの強役に仕立てなければいけません」

「まるで山東の行商隊だな」

「それです。それがしも一個の隊商の長に化け、なるべく野盗の眼を避けて、お引き上げた以上は、東京の蔡大臣がご門前まで、無事、おとどけ申したい存念にございますれば」

「まかせる。ただちに出立の準備をせい」

——準備期間の二日は経った。

するとまた、こんどは楊志のほうから、梁中書へ拜謁を願ひ出た。そしていうには、

「いけません。どうも拙者には、不向きな役です。東京行はご辞退申しあげまする」

「なぜまた、そんなことをごねり出すか」

「でもお約束が違うようです。——洩れ聞けば、ご予約の行囊のほか、またぞろ、夫人さまから先の大邸の大家族のかたがたへ、種々な贈り物がふえ、そのため執事の謝という人物とその他の家来二、三が付いてゆくことになったとか伺いますので」

「ははあ、足手まといだと申すのだな」

「のみならず、夫人直々の執事とか、家来などですと、途々、それがしの命令に服さぬ恐れが多分にあります。賊の出没に加え、難行千里、あらゆる難苦を覚悟せねば相成りませぬ」

「それはそうだ。もちろん、難行苦行だろう」

「一行の者に対しては、あえてムチを振るって克己させ、時には夜立ち、暁立ち。また折には草に伏し、熱砂を這い、もし服さぬ者は、これを斬るぐらいな権は持っていませんと、到底、列を曳きずつてはいけません。しかるに、夫人の執事や家来とあつては」

「いや、その者どもも、他の力者同様に、一切その命に絶対服従いたすように申しつける。もし、汝の命に服さず、楯をついたら、斬りすててもよろしい。……夫人にも、その由はよく申しておこうわい」

「ならば、行ってまいります。願わくは、ただ今のおことばの旨を、お墨付として、一札賜わりおきとう存じまする」

「よろしい。汝もまた、余に対して、重宝十一荷の預り状をしたためて差出せ」

「心得ました。この上は、明早朝に北京西門を出立つかまづりますれば……左様おふくみのほどを」

翌朝の中書官邸は、暁天もまだ暗いうちから騒めいていた。強力に化けた軍の護衛兵は、いずれも屈強な猛者ぞろいだ。それらがおのおの、一個ずつの重い行囊をかついで勢揃いしたさまはいかにも物々しくまたたのもしい。——梁中書も蔡夫人も、廊の階欄に立ち出てこれを見送っている。

夫妻は、念のためと、執事の謝を呼びつけて、くれぐれ、楊志の命に服すように、喧嘩せぬように、途中病まぬようになど、かさねがさね言いふくめた。

「ご案じくだされますな。てまえは一行中の最年長者。あんばいよく仲を取ってゆきます。楊志どの。どうぞよろしく」

夫妻の階前で、両名は手を握って、出立した。

同勢すべてで十七名だった。多くは一樣な強力姿だが、楊志と謝は隊商の長といった装い。山東笠を日除けにかぶり、青紗の袖無し、麻衣、脚絆、麻鞋の足ごしらえも軽快に、ただ腰なる一腰のみは、刀身のほども思わるる業刀と見えた。

はやくも朝霧の街へ出て、西の城門街の出口へかかる。楊志一人は、手に籐のムチを携えていたが、それを小脇に、山東笠のひさしへ手をかけて、城門の鼓楼を仰ぎ、

「梁中書の御使の者ども、都をさして、ただいま、ご城門を通ります」

と、呼ばわると、上の鼓楼で「おおいっ」という答えが響く。と同時に、門側の番卒隊が不時の開門なので、とくに総勢でそこに立ち現れ、

「お通なさい！」

と、巨大な鉄扉をギイと左右へ押し開いた。

時は五月も過ぎて早や大陸の砂は灼けていた。夏雲はぎら

ぎらと眸を射るばかり地平線を踏まえて高く、地熱は鞋の底をとおして、足の裏を火照らしてくる。

行囊を負う蟻のごとき列は、早くもポタポタと汗のしずくを地に見つつ喘ぎあるいた。日頃ひと口に、開封東京とやさしく呼び馴れてはいたが、いざ一歩一歩を踏み出してみた千里の輸送路となれば容易ではない。——いやいや、それらの炎日灼土の苦熱は、まだしも克服できようというものか。

やがての行くてに聳える雲の峰の彼方、手に唾して待つ稀代な七斗星のまたたきがあるうなどは、青面獣も知らず、喘ぎ喘ぎな強力たちも、ゆめにも思っではいなかった。

二十一 七人の棗商人、黄泥岡の一林に何やら笑いさ

ざめく事

強力すがたの兵十五、六人。それが日々、大陸の熱砂を這うごとく行く影は、炎日の労働蟻が蜿蜒と、物を運んで行く作業にも似て、憐れにもまた遅々として見えた。

おのおのが負う十一箇の行囊は、そのどれ一つといえ、軽そうなのはない。——すべて蔡大臣の誕生祝いに送られる値十萬貫もする貴金属やら珠玉で充たされている荷物なのだ。——彼らの流す毎日の汗も、その中の珠の一粒にすら値するものではなかった。

「なんだ、意気地のないやつらめ。行くてはまだ千里の彼方。今頃からヘタばってどうするか。歩け歩け。しぶるやつは尻を腫らすぞ」

宰領の青面獣楊志の手には、籐のムチが握られていた。

腰の業刀もだてではない。——梁中書から絶対の権を附与され、途中、もし命に反く者あらば斬りすててもかまわん、といわれてきたのだ。もう一名の付添い人、執事の謝といえど、こんどの旅では楊志にむかつて一切不満も愚痴も言いだせるものではなかった。

とまれ、北京の城門を出てから、はや十数日。この間、雨を見たのは、たった二回だけで、それも物凄い雷雨をとまなつた一瞬の大夕立だけでしかない。あとは来る日も来る日も、炎天の道中だった。

楊志はその晩、旅籠に着くと、兵の強力と、執事の謝、あわせて十六人へ、言い渡した。

「さあ、旅はこれからが本旅だ。——北京は遙か後になり、行くての都はまだまだ遠い。——風流にいえば千山万水だが、いよいよ彼方には二龍山、桃花山、傘蓋山、黄泥岡、白沙塢、野雲渡などという難所切所やら野盗の名所が、行く先々にひかえている。……そこで、こちら腹をすえなくてはならん。ただの荷運びだけが能ではないぞ」

不気味な警告を、こう浴びせて、
「だから、明日からは、寝坊してよろしい。朝は朝寝して、ゆっくり立つ。その心得で休養をとれ」

と、つけ加えた。

だが、兵たちは、うれしそうな顔でもなかった。その日旅の寝小屋で枕につくと、耳こすりで騒めき始めた。

「おい、用心しろよ。青瘡がまた、ヘンなことを言いだしたぜ。小便する間もオチオチしていらねえほど、歩け歩けと急かっている奴がよ」

「変だな。七月十五日、七月十五日と、都へ着く日を、呪文みたいなにいってるかと思うと、急に、朝寝の遅立ちとは」
「なんでもいいや。寝ている間だけがこち徒の極楽だ。なんとか生命だけ保って、開封東京に着きさえすれば、まさか帰りはこんなこともあるめえ。もうもう来世は金輪際、兵隊にはなるめえぜ」

翌日からは、朝は遅く、夕は早着き。日盛りの旅だけが、以後十数日もつづいた。

これだけなら、彼らのぼやきも減っていただろうが、楊志の思案は、野盗山賊の出現を避けるにあり、七月十五日までの期日に、余裕が出来たわけでもないから、日中の間に、それだけの足稼ぎを生みだすべく、前にもまして、苛烈なムチをふるったのはいうまでもない。

「なに、水が呑みたいと。我慢しろ、我慢しろ。水は汗を多くするばかりだ。口に梅の実を噛んでいると想え」

「そいつア無理だ。いくら梅の実を想ったって、唾は出ねえ」
「これでも出ないか」

楊志は、籐のムチで、風を切って見せた。

「きさまらは、毎夜、寝飽きるほど寝かしてあるじゃないか。贅沢をいうな」

「だって、こう休みなしじゃあ、息もつづきません。どこか木陰で、一ト息つかせておくんない。焦死にます」

「だまれ、どんな夏の旅だろうと、人間の乾物ができた例しはない」

「うへッ。もう眼がまわる。楊輸送使」

「なんだ」

「どうか、弁当でも解かせておくんなさい。もう足が前へ出ません。ふらふらして」

「ちッ。きさまらは、木陰を見るたび、きまつて何か弱音を訴え出しゃあがる。今日はもう幾日だと思っ」

「ほら、始まった。わかってますよ」

「わかっていたら、弁当などは、歩き歩き食べ、七月十五日が一日遅れても、蔡大臣のお誕生祝いには間に合わなくなる。千日の萱も一日で焼くというもんだ」

「もう欲も得もなくりました」

「じゃあ、死にたいか」

「情けないことを。これでも、女房子がありやこそ、塩気のない汗までポタポタ垂らしているんですぜ」

「ならば、四の五をいわずに歩け歩け。やがて都へ着いたら、たらふく、飲んで食って、逆立ちでも何でもやるがいいや」

「……ああ、雨でも降ってくれ！」

ところが、あいにくな早天つづき。大夏の太陽は火龍というもおろかである。満天すべて熱玻璃のごとく、今日も一片の雲さえ見あたらぬ。

道は、その日の午後、やっと一つの山の小道へかかったが、木々の葉は萎えて、風は死し、谷はあるが、水は涸れ、岩は干割れして、滴る清水の一滴も無い。

「おお、ここらはもう、太行山脈の一嶺だな」
空身の楊志にしてさえ、息がきれた。

岷々たる山容は、登るほど峻しくなり、雨の日に洗い流された道は、河底をなしている。万樹はあだかも刀槍を植えたように、虎豹の嘯きを思わせる。

なにげなく足をとめて、ここまでの旅、またこれからの道のりなどを考えていた楊志が、ふと気づくと、謝執事以下、十一梱の強力やほかの兵も一つの峰の背へ取っつくやいな、

「もう、だめだ。勝手にしろ」

「八ツ裂きにされても、うごけねえぞ」

「さあ、どうなとしてくれ」
とばかり、おのおのの荷を背から下ろして、ぐたと伸びるやら、仰向けに寝てしまふやら、ここへきてはもう自暴のやん八をきめこんでテコでも動かぬ態だった。

「あ。げで者めら」

楊志は振返って、彼らのやけくそな態度に気づくやいな、そこへ飛んでいって、例のごとくムチを鳴らした。

「だれの許しを得て休むのだ。こいつら、一寸の間も、眼が離せぬ」

「まあまあ」と、宥め役に立ったのは、梁家の執事の謝であった。

「なんぼなんでも、この酷熱に、昼休みも与えぬのは、余りにむごい。楊志どの。そうカンカンにお怒りなさるな」

「執事。貴公が休めとゆるしたのか」

「許すも許さぬもない、これへ登りつくなり、自然にへバツてしようたのじゃ。わしにせよ、これ以上の我慢は、口から臍腑を吐くような苦しさだ。まあ、半刻ぐらいここで休んだところで、まさかお誕生日に間に合わぬこともあるまいが」

「分別者のあんたからして、そう仰っしゃるなら、なんでこの楊志のみ、一同の怨嗟をうけつつ無理な道中を好もうか。

……したが、ここはどこかご存知か」

「されば、はや太行山脈の一嶺にかかつてきておる。ここさえ越えれば」

「なにを、暢気な」

「違うか」

「いやさ、あんたのいう通りだから、馬鹿馬鹿しくなるんだ。さつきから、あたりの地勢を見るに、こここそ、黄泥岡といって、世間に不気味がられている盗賊の出没場所。……こんなところで気をゆるしたら、魔の砂塵の一ト吹きと見舞われぬとも限るまいぞ」

すると、もう度胸をすえて、太々しくなっていた強力の兵たちが、

「あはははは。また楊輸送使のおかぶが始まったぜ。毎日毎日ああいつちゃあ嚇かされてきたもんだ。この真ツ昼間に、そんな幽霊が出るもんなら、おもしろえ。なにも経験だ、お目にかかつてみようじゃねえか」

「馬鹿野郎っ」

楊志は、怒りの一步を、そっちへ移して呶鳴りつけた。

「きさまらは、泣き言まじりの口癖にさえ、こんな苦役も、女房子のためだと吐きいていではないか。もし厄難に出あったらどうするか。褒美はおろか一命もおぼつかないぞ。

——このほうは宰領として、万が一にも、そのような不覚を踏ませてはと、しいて心を鬼にしておるのだ。わからんか。慈悲のムチが」

「へへん。……わかりませんねえ、慈悲のムチなんてえ文句は」

「こやつ！」

楊志が本来の形相を現わして、腰なる山刀を抜きかけると、執事の謝は仰天して、あわてて彼の前を阻めた。

「待った！ 楊君もいいが、どうもお若い。そのご短気は、みずから事を破るものだ」

「いや、お放しなさい。こいつらは、拙者がほんとに怒ったら、どんなものか知らんのだ。見せしめのため、どいつか一匹、素ツ首をぶち落して見せてくれる」

「そしたらその先、一人分の行囊は、いったい誰が、背負って歩くのか。わしは真ツ平ごめんじゃが」

「一箇の荷ぐらいいは、どうにでもなる。それよりは全体の士気を敵に保って行くほうが肝腎だ。老人は、黙ッていなさい」

「いや、見ていられん。血気いちずで、十五人もの心の束ねがなるものか。和もなくてはならぬ。いかんせん、楊君はご苦労知らずじゃ」

「ばかをいえ。拙者にはいささか流浪の経験もある。四川・広西・広東の旅もした」

「ただの旅なら、誰もするわ」

「なんの、世は今や、いずこも暗黒同様な末世だ。その穩やかならざる乱麻の世間に、流浪の艱苦もなめたつもりだ」

「おい、楊輸送使」

「なんです？」

「人なき山中だからいいようなものの、余りな放言は慎むがよい。梁中書様のご恩になり、北京府の禄を食みながら、いまが末世とは何事だ。泰平の世でないとは、なんたる言か。その舌を抜かれるなよ」

これには楊志もハツと答えに詰った。

日ごろ、胸にあるものは、何かの弾みには、我れともなく、つい口に出るものではある。——と、悔いられたが、もう追いつかない。せっかく、蔡大臣の生辰綱輸送の大役を果たしても、後日、謝の口からそんな讒訴を堂上の耳に入れられたらすべては水の泡だろう。——しまった、と臍を噛んだ容子が、突嗟だったが、楊志の面をやや弱いものにした。

——すると。

彼の眼惑いに、ふと鳥影のようなものが、遠くを過ぎ去った。すぐ先の、松林の蔭にである。

「あっ？ うさんな男が」

楊志は不意に、そこへ向って、こう叫んだ。

謝との問答で、後味わるくきめつけられた破目も、一切のその場の感情も、この一ト声で、消し飛んだ形だった。——楊志にとつては、いい機であったのかもわからない。何を見たのか、途端に、彼の姿はぱつと迅い足を見せて、彼方の松林のうちへ隠れこんだ一個の男の影を追ッかけていた。

松と松との木の間を、野兎のごとく逃げ走っていった男の影は見失ったが、その代りに、楊志は、思いがけない一トかたまりの旅商人の仲間に出会った。

彼らは、松林の涼やかな平地に陣どつて、桶を載せた七輛の江州車（手押し車）をあちこちに停め、老若七人、胡坐やら、寝転びやら、また木の根や車の梶に腰かけている者など、思い思いな恰好だった。そして何か戯れ口おもしろ気に、この日盛りの汗を拭きあっているものらしい。

「ヤッ？」

彼らは一せいに跳ね起きた。楊志の姿に、びっくりしたもののようである。

「何者だっ、きさまらは？」

馳け寄りざま、楊志が問うと、

「だれだい？ お前さんこそ」

と、先も鸚鵡返しにいう。

「いやさ、きさまらは、どこのどいつかと訊いておるんだ」

「ふん。こちらもお前さんはどこの馬の骨かと訊いてるんだよ。ははん……黄泥岡によく出ると聞いたがその悪者か」

「ふざけるな。きさまらこそ、それではないのか」

「えらい者に買いかぶられたなあ。あいにくこっちは、若いのが老いぼれやらの、しがな小商人だ。ところで、お前さんの方は？」

「わしもじつは開封の商人だ。胡北で仕入れた毛皮などの商品を、強力に担わせて、都へ行く途中だが、この附近は物騒と聞いて来た折も折、いま松林の蔭から、へんな男が、うさんな眼つきで、わし達を窺っていたので、さてはと、追ッかけて来たわけだが」

「はははは」

「アハハハ」

七人は、どよめき笑って、

「そいつア、とんだ鼯ごっこだ。こっちも、ここで涼ンでると北の方の麓から物凄い野郎ばかりが十六、七人も、何か担いでやってくるというわけさ。さあ大変だ、黄泥岡の名物がおいでなすつたぜと、胆を冷やして、仲間の一人が、まず様

子を探りにいったわけだ。……ところがよ、どうも、悪者でもなさそうだというんで、なアんだとばかり、涼み直していったわけさ」

「ふうむ」と、楊志もつい釣り込まれて、ニヤつきながら、「じゃあ、お互いは、商人同士だったわけだな。まあアそいつは倅せだった。して、おぬしたちは、何商売か」

「この桶をござらんせせい」

「あ。棗漬だね。棗商人かい」

「田舎じゃあ、珍しくもねえが、都へ持ち出すと通がツた呑み助が、酒のお肴には、これに限るなんていうものでね、仲間七人、申し合せて、濠州から出てきたんだが、イヤこの暑さじゃ、桶の棗も茹りそうだ。おたがい金儲けは楽じゃあないね」

「まったくだ。金がかたきの何とかさ」

「どうです旦那、お好きなら、ちよびり棗をあげやしょうか」

「いや、いらん。せつかくだが」

楊志はニガ笑いを見せながら、もとの自分たち仲間の屯のほうへ戻ってきた。

謝執事は、彼の姿を見ると、すぐ皮肉った。

「楊輸送使。——ご自慢の刀の斬れ味はどうでしたな」

「いや、賊かと思つたら、なんのこつた、つまらん小商人の仲間だった」

「へえ。あなたの口癖から推すと、この界限には真人間は現われぬはずなんだが」

「そうチクチク苛めッこはなしにしましょう。老人は執念ぶかいなあ」

「何さ何さ。それでこそ、われわれも先ず祝着と申すもの。どうじゃな。わしはつい食べ残しの弁当を解いてしまった。あんたも、どうせのことに、一卜涼みなさらんか」

「ままよ、きょうは雨に逢つたとしてしまえ。おうい、一同も休め、休んでよろしい」

これは少々楊志としてはまずかった。てれ隠しの気味がある。すでに兵どもは謝執事との狎れ合いで勝手休みをきめこんでいたのだから、楊志のムチもついに衆の結束と横着には、負けの恰好というしかなかった。

さらにまた、折も折だったといつてよい。どこからか、田舎唄が聞えてきた。男の声である。ひよい、ひよい、ひよい……と唄の節には、担い腰の足拍子が巧くのつていた。兵たちは皆、後ろの坂道を振り向いた。一人の男が、桶をかついで来るのが見える。……ふうんと、焼酎の匂いが彼らの鼻をついた。

「おツと、待ちなよ」

つい出てしまった言葉である。

男は、荷を下ろした。

「へい、なにか御用ですかい」

「焼酎らしいなあ、そいつは」

「お察しどおりで」

「どこへ持っていくんだい」

「山向うの村へね、あさっては、その夏祭でさ」

「売れないのか」

「売り物なりやこそ担いでいくんで。へい。値段によっちゃあ差上げますよ」

「いくらだ、一桶」
「五貫とお負けしておきましょう。ここはまだ半道だから、足賃なしに」

兵たちはコンコン首を集めあった。鼻のさきに餌を置かれた餓鬼の眼つきといった形である。喉が鳴る。鼻がピクつく。とうとう小銭の音をさせ始めた。懐中を合せて、買おうという相談になつたらしい。

さつきから、じろと睨んでいた楊志は、いきなり山刀を鞘ぐるみ腰から抜いて、ずかずかと立っていき、刀の鐙で、桶を叩いた。

「こら、きさまらは、これを買う気か。——買って呑む気か」

「銭はわたしたちのものでずせ」

「金はともかく、誰のゆるしを得たというのだ。ツケあがるな、こいつら」

「ツケあがるわけじゃありませんが、旦那も人間なら、お察しなすっておくんなさい。もう意地にも我慢にも……。これを見て飲まねえじゃあ、妄念が残って、腰も上がりませんや」

「ぶざけるな、がつがつと、哀れな餓鬼声を出しやがつて、よく耳の穴をほじつて聞けよ。道中売りの酒なぞは、ただの旅でも、滅多に意地汚ねえ涎など垂らすものではないわ。そんな浅ましい欲心のために、まんまと、しびれ薬で根こそぎ懐中を抜かれたなどの例が、どれほど多いか、知らぬのか。心得のない奴らだ」

すると、叱られた兵よりは、酒売りの男の方が、きつと、眼にカドを立てた容子だった。ふん……と鼻先で冷笑を見せたとと思うと、すぐ担荷の天秤へその肩を入れかけていた。

「おい、邪魔だよ、桶のそばを退いてくんないよ。くそおもしろくもねえ！ この炎天に、しびれ薬を売りにいく粹狂がどこにあるッてんだ、ばかばかしい」

二十二 生辰綱の智恵取りのこと。

並びに、楊志、死の谷を覗く事

酒売りの捨て科白は、もとより楊志への面アテだったが、兵たちの妄念を、一そう煽り立てたふうでもあった。

「待てよ。おい。せつかく銭を集めたのに」

「いやだ、いやだ。もう売らねえよ。あばよ」

「ま、そう怒らねえでもいいじゃねえか。ああ言っても、おれたちの宰領は、とんだ話のわかる人で、人情もろいところもあるのさ」

「勝手にしやがれ。人の売り物にケチをつけやがつて、話のわかるお人かい。これが市や村でのことなら、ただはおかねえところだぞ」

よほど腹が立ったらしい。次第に威猛高となつていた。——と、彼方の松林の蔭から、さっきの棗商人の連中が、どやどやと馳けよつてきた。そして口々に、

「なんだ、なんだ？」

と、いう弥次声。事こそあれと、どの眼も、好奇心みたいなものにかがやいている。

「おつと、あぶねえ。なにを怒ったんだよ酒屋さん。まア桶を下へおきねえな」

「おう、ゆうべ麓でお泊なすつた商人衆でございますね。」

まあ、聞いておくんさい。癩しかにさわるのなんのって」

「ほう。この衆たちとの口喧嘩くげんかい、おれたちはまたあっちで聞いて、そら、今度こそ、ほんものの泥棒が出やがったかと思つてさ、びっくりして飛んできたんだ。……が、口喧嘩ぐらいなら、よかったよ。よしねえ、よしねえ、喧嘩けんなんざあ」

「仰おほつしやるまでもありませんや。誰もいさかいなぞしたかねえが、あんまり人を舐なめたことを言やがるんで、つい業腹ごうはらが喚わめいたんですよ。……人の売り物に、しびれ薬が入れてあるなんて吐ぬかしやあがるんで」

「誰たれがよ、誰たれがそんな、べら棒べらぼうな因縁いんげんをつけたのさ」

「そこにシャチこ張あおとがらしっている、青唐辛子あおとうがらしみてえな人相ひとがらの旦那だんなですよ。親代々の正直酒屋まじやうで通とおっているあつしだが、こんなに気の腐くつた日はないね」

「いいじゃねえか、もう止せよ。そうムキにならなくっても、相手は黙もくつてしまったんだから、多分たぶん、言い過ぎだったと、腹はらじゃあ後悔くわいしていなさるに違ちがえねえよ。……それよりは、ちようど俺おれたちも、喉のどがひつついていたところだ、みんなに一杯いっぱいずつ飲のましてくれ」

「お断ことわりりだよ、まッぴらだ」

「なぜさ。おめえもまた、因業いんごうだな。無料ただで飲のませろつていうんじゃねえぜ」

「そんなことアわかッてら。でも元々もともと、こんなところで商あきないはしなくても、親おやからのお花客とくに、事は欠かかねえ酒売さかりだよ。ばかにしてやがる」

「冗談冗談いうなよ。なに俺おれたちがケチをつけたわけじゃねえ

ぜ。おめえもよほど、おかしな男おとこだ。さ、機嫌きげん直しに売うつてくれ。酒売さかりなんてえ商売しょうばいは、気合きあいものだろうじゃねえか」

「お前まへさん方かたから、機嫌きげんを直ただせなんていわれると、おらはまた、馬鹿ばか者ものだから、つい差さ上げたたくもなつてくるがね。だが、あいにく、器うつわがないや」

「よしきた。器うつわなら、あっちにある」

棗なつめ商人しやうじんの仲間ななの二人ふたりが、車くるまのほうへ馳はけていった。持もつてきたのは、二ツの椰子やしの実みの椀わんであった。一人は両ふたの掌てのひらのひらに、お手てのものものの棗なつめ漬つけをいっぱい盛もつてきた。

それを、桶かじのふたの上うへへ開あけて、

「ほい、肴さかなはここだよ」

七人ななは、酒桶さけかじを取り困こまんだ。かわるがわるに椰子やし椀わんに焼しやうちゆう酎ちゆうを汲ひみあげ、さも美味うまそうに飲のみはじめる。そしては棗なつめをポリポリつまむ。たちまち、一ト桶ひとかじの焼酎しやうちゆうは底そこになつてしまつた。

「ああ、こたえられねえ。こんな山路さんぢうで思おもいがけなくぶつかつたせいせいか、甘露あまみとも何なにとも言いいようがねえな。暑あつさもすツかり忘わすれたぜ」

「やいやい。機嫌きげんばかりよくしやがッて、焼酎しやうちゆうの値段ねだんもまだ訊きいていねえじゃねえか。酒屋さかさん、一ト桶ひとかじ干ほしたよ、いくらだい」

「一荷ひとか十貫じゅう貫かんさ。片桶ひとかじだから五貫ご貫かんだよ」

「よしきた。そら五貫ご貫かん文ぶん」

一人ひとりが銭ぜにを渡わたしていると、べつべつの一人ひとりが、

「——もう一ト椀わん、負おけときな」

と、片荷ひとかの桶かじの蓋ふたを取とつて、すばやく中なかへ椀わんを突つ込み、

一ト口がぶと飲みかけた。ひよいと、振り向いた酒売りは、「あつ、いけねえツたら！」

まだ半分残っている碗の酒を、いきなり、引ッたくろうとする。ところが、碗を持った小商人は、くるツと、巧く身を外し、そのまま松林のうちへ逃げこんで行った。それをまた、酒売り男も、片意地らしく、

「畜生ツ」

とばかり、追っかけていったものである。すると、後に残っていた連中はまた、その隙をいいことにして、これまた、も一つの椰子碗で、明き巢の桶にたかりだした。ふと、振り向いた酒売りは、さらに仰天した姿で、

「泥棒っ」

馳け戻るやいな、遮二無二に、碗を奪りあげた。そして、逃げる彼らの背へ向って、

「阿呆。親切ごかしの、屁ッたくれ商人め。野たれ死にでもしてしまえ」

と悪たい吐いた。

さつきから見物していた兵たちは、笑いも出ずに、ただ生唾をのんでいた。食い物の恨みは元々深刻なもの。いわんや、焦くがごとき暑熱に渴いていいる鼻先で、舌つづみを打たれたのでは堪るまい。——しいんと、陰気な沈黙におちて、彼方に腰かけている楊志の背を、いとも恨めしげに見ていたが、ついにもう我慢ならじと、声をそろえて、謝執事に訴えてきた。

「執事さん。ご恩にきまずぜ。ひとつ、楊輸送使へお絶りなすっておくんなさいな。——これからもまだ、山坂ですし、峠まで行ったところで、飲み水などありッこはねえ。どうか、

あの残りの片桶をわれわれどもが買って飲むことを、ゆるすと、いわせてくださいませんか。もう腹の虫がグウグウ鳴って、おさまりがつきません」

執事の謝も、内心、意欲はおなじものだった。しかし、おそれとは、同調顔もできないので、いかにも、彼らの哀訴を持って余したかのごとく、歩を楊志の前へ移してきた。そして、彼らの代弁にこれ努めた。厭なら、見て見ぬ振りしてしてくれと、いわぬばかりな口吻である。

「ちい。なんてえ土根性だろう」

楊志は、にがりきつたが、しかし、この老執事にも、兵どもにも、さっきの自分の失言を、行く先の都へ着いてから、尾ヒレを付けて吹聴されたりなどしたら始末がわるい。かたがた、これ以上の遺恨を含まれるのも、あとの道中に良策でないとは考えられる。

それもあつたし、また、さいぜんから眺めていたころでは、二た桶の焼酎にも、怪しまれる点はなかった。で、不承不承な面色だったが、

「……仕方がない。あんたまでが、そういうなら、今日かぎりのこととして、眼をつぶっていよう。その代り、渴を癒したら、元氣よく、ここを出発するように」

「や。ご承知くだされたか。さぞ兵どもも、雀躍りすることでしょう。一同よろこべ。おゆるしがあつたぞ、おゆるしが」なんのことはない、老執事の謝自身が、雀躍りの態だった。兵と酒桶のあるところへ、舞い戻るなり、歓声を揚げていた。

「いやだ、いやだ。おめえらには、売りたいくねえよ」

兵は歓声をわかったが、酒売りはまた、ごねだした。

「こんな、おもしろくもねえ道草を食ってるよりは、村へ行って、祭りの衆に、よろこんでもらったほうが、よっぽど増した。さあさあ退いてくんな、退いてくんな。きょうはろくな日じゃねえようだ」

「まだ怒ってるのかい。もう勘弁しなよ、謝るからさ」

「うるさいよ。お前さん方に謝ってもらおう筋はないんだ」

「依怙地だ、ひどく」

「ああ依怙地だよ。悪かったね」

「あれだ。……こんなに、銭を集めて、拝むように頼んでるのに、罪だぜ、このまま置いてきぼりは」

「離さねえのか。困ったな。ええい、もう、そんなに飲みたけれやあ、勝手にさらせ」

「そうはいかないよ、銭五貫、それ、ここへおくぜ」

「五貫じゃないよ」

「えっ、値上げか」

「ばかにするな。残りの桶は、さつきの棗商人が、幾椀か手込めにして、飲んだらしいから、減った分だけ、値引きするしかしようがないじゃないか。四貫でいいよ。一貫文だけ銭を引ッ込めなよ」

「なるほど、正直もんだな、おめえさんは。いや見上げたよ」

近くに転がっていた椰子椀を拾って、兵たちはさあ順番だと、桶のぐるりに真剣な顔を集めた。

——舌つづみが鳴る。喉がキュツという。礼讚、嘆声、随喜のよだれ。まさに亡者に囲まれた天泉の図であった。

「やい、やい。先のやつは、もういい加減にしる。執事さま

をお後に廻しておくやつがあるもんか」

「ほい、こいつは、どうも……さあ、執事さまも一杯おやんなすって」

「いかさま、これはよい焼酎だ。むむ美味しい。楊輸送使にも、一椀すすめてみよう」

しかし、楊志はいツかな飲もうとはしなかった。もともと、彼はそう飲み手ではない。だが、喉の渴きは、彼とて同じだった。そこでつい、もう桶も空となりかけたころとなって、

「ひと口、飲むか」

と、わずか半杯ほど飲んだ。

「ありがとう。……おかげで今日は、もとの麓へ舞い戻りとござい。ははは。じゃあ、皆さん、ごきげんよう」

酒売りの男は、愛想をいうと、空桶担って、もと来た坂道の方へ、すたすたと、足早に立去ってしまった。

このとき、やや離れた松林の一端には、さきの棗商人七名の顔が、まさに眼じろぎもせぬ七体の石像みたいに、じっと、こつちを見すましていたのである。

——と、遙か坂下の方で、もう姿の見えぬ酒売りの男の田舎唄が聞えていた。それが合図だったのだろう。とつぜん、七人は爆笑の声もひとつに手を打ち叩いた。

「どんなもんです！ この首尾のよさ」

「さすが今孔明の智多星呉用先生だ、先生が書いた筋書どおりよ」

「ざまアみる、悪官府の召使いどもめ」

「くたばれ、くたばれ。心おきなく」

「どりや、さっそく、お仕込みに、とりかかろうぜ」

たちまちに見る七名の影は、松林の下蔭から、それぞれが江州車（手押し車）の七輛を押し出し、なんの憚りもなく、楊志、執事以下、十七名の者が、現にいるところへ、どやどやと寄ってきた。

そしてすばやく、車の上の棗漬をみな谷底へぶち撒けだした。そして、それへ代るに、さきに強力（きんりき）の兵が、地へ下ろして並べておいた十一箇（じゅういちかん）の行囊（ぎょうぶ）を、一台に二箇、或いは三箇と積んでしまい、すっぽりと布覆（おおい）をかぶせるやいな、

「さあ、すんだ。あとは野となれ」

「あとは烏と野獣のお供えもの」

「おさらば、おさらば！」

まるで凱歌の調子である。そのはず、梁中書夫妻から蔡大臣へ贈らるべき金銀珠玉は、ここに道をかえてしまったのだ。それにしても、江州車七輛の布覆の下、十万貫の宝財は、そもどこへ運び去られていくのだろうか。

「あ？ ……あ…… ああ」

楊志は、みすみすそれを、眼に見ていた。しかも、どうにもならないのである。どぼんと、頭は空っぽの音がする。眼にはそれを知っても、視覚神経は、脳髄までも届いてゆかない。爪は、草の根をつかんでいたが、その手の甲へ、ダラダラ涎（よだれ）が垂れるだけだった。腰は鉛の如く重く、満身に悪寒だけが、走り抜ける。口が歪む、声は声のみで言葉となつて出てこない。

「執事は？ 兵どもは？」

かすかに頭の泡ツブが思考する。

いちど、俯伏させた額をあげて、どろんとした眼で見廻し

た。

どれもこれも、干瀉（ひがた）にのた打つ死魚の恰好だ。一人として、満足なさまはない。「ああ！ ああ！」と、ときどき、唾（つば）のような奇声と奇異な身うごきが四辺（あたり）を埋めているきりだった。

「む、むねん……」

空をつかんで、楊志は起つたが、とたんに、どたと仆れてしまった。昏々（こんこん）として、それ以後は意識の欠けらも彼になかった。——かくて一刻（ひととき）やら二刻（ふたとき）やら、ふたたび、ふと我れにかえったときは、太行山脈の一角に、七月二日の月が、魔の牙（まのきば）とも見える冴（さ）えを研いでいた。

かの七人の棗商人は、そも何者の化身（けしん）だったのか。もう、ここで説くまでもあるまいが、一応いっておくならば、それなん別人に非ずである。——東溪村の晁蓋（ちやうがい）、居候（いそうこう）の赤髮鬼（せつぱんき）、劉唐（りゅうとう）、同村の呉用先生および、その呉先生が一味に引き入れた石碣村（せつかくそん）の江の漁夫（げん）、阮の三兄弟（ごうさんしょう）とかの公孫勝（こうそんしょう）の一清（いっせい）、以上あわせての七人にほかならない。

いや、もう一人、番外の加盟者があった。

これがなかなかの役者だった。すなわち、酒売り男に扮して好演技を見せた男で、この黄泥岡（こうでいこう）の近村に住む白日鼠（はくじつそ）の白勝（はくしょう）という遊び人なのである。日頃、晁蓋（ちやうがい）に目をかけられていた縁から、一味の足溜り（あしだま）として、白日鼠の家が選ばれ、彼も一ト役買ってでたというわけ。

そこで、次には。——麻痺薬（しびれくすり）の使われた手順だが、これがまた、すこぶる手のこんだ筋書だった。

事の初め、まず七人が、一つの桶を、空にした。そして、

銭を払った。

その際に、べつの、も一ツの桶のフタを開け、無断で椀に半分飲んだのが、赤髮鬼の劉唐だ。

劉唐が逃げる、酒売りの役の白日鼠が追ッかける。その留守に、

残る組が、また無断で、あとの桶の分を、争ッて飲みかける。或いは、飲んでみせる。

酒屋の白日鼠、仰天して戻るやいな、絡み合いの争いと見せ、それを潜ッて、呉用先生が、すばやく、麻痺薬を椀に入れ、その手で、桶の酒を汲もうとする。——この瞬間、手品のごとく、毒はすでに桶じゅうの酒に、掻き廻されていたものだった。

あとは、同勢ワツと逃げる。奪った椀を、酒屋が投げつけて罵り散らす。これで計略の筋は終っていたもので、後世、名づけてこの一場の劇を“生辰綱の智恵取り”といったものだった。

「おや？ …… おれは？」

ふと我れに返り、自分の姿を見廻した青面獸楊志は、二日月の影を、凄い空に仰いで、

「そうだった。計られたのだ。計られじ、計られじ、と思いつつ、ついに俺も、不覚な罠に」

慚愧にたえぬもののように、両の手は、髪を根をつかんでいた。潸然として、無念の涙が頬をくだる。

「なんで生きて北京へ帰れよう。さらばとて、都にはなお容れられぬ身、そうだ、断崖から谷へ身を投げ、黄泥岡の鬼と

なって、世々の旅人に、こんな馬鹿者があつたと、語り草になるのが、せめてもの身の始末。それしか、とるべき道はない——

蹠跟と、彼は、鬼影を曳いて歩きだした。

ほか十六名の影は、寂として、まだ地に伏したままである。

彼が、いちはやく、気を取りもどし得たのは、あの毒酒を、彼のみは、椀の半分ほどしか飲んでいなかったためだろう。

——が、それも今や、死の岩頭に立った身には、何の僥倖と思われるはずもない。

「生れて、三十余年。これで死ぬのか。いったい何しに、生れてきたのか」

死の谷を見おろした刹那、楊志の胸には、過去三十年の自身の絵巻が、いならずまの如く振返られた。

父母の面影が映る。弟妹の声が聞える。武芸の師、読書の師、およそ、この身を育んでくれた天地間のもの、ありとあらゆる生命の補助者が、ひしと、彼の袂をつかまえて、「なぜ、死ぬのか」「死は易いが、生は再びないぞ」と、引き留めているような気がした。

「ああ、恐い。意味のない死は、こんなに恐いものか。やはり俺は死にたくないのだ。意味を見つけたいのだ、死の意味か、生の意味かを」

彼は急に、岩頭から後ろへ跳んだ。死神の口から遁れたように、以前のところへ戻ってみると、そこには醜い十六個の影が、まだ眼を白黒させたり口ばたに泡を吹いている。

「ばッ、ばか野郎っ」

満身の声が、ひとりでに衝いて出た。すると急に、気がか

らッとしてきて、

「ようし、おれは死なんぞ。こんなやつらと心中してたまるものかい。そんな安ッぽい一命じゃなかったはずだ。後日、今日の匪賊どもを捕えるのも一使命だし、あとの命は、どう使うか。そいつも、生きてからの先の勝負だ」

ふと気づけば、あたまに失くなっていた自分の一剣が地におちていた。拾い上げて、腰に横たえ、空を仰ぐと、夜鳥の一群が、斜めに落ちていくのが見える。その方向を天意が示す占と見て、楊志は、何処の地へ出る道とも知らず、やがてよろよろ麓の方へ降りていった。

その夜も、かなり更けてから、

黄泥岡の一端では、ようやく、執事だの強力の兵どもも、夜露の冷気に甦って、ごそごそ這い起き、

「さあ、どうしよう？」と、今さらな不覚を啣ちあっていた。

「楊は、逃げたな」

執事の謝は、身の不始末を棚に上げ、何よりそれを罵った。

「いま思うと、あいつは薄々、毒酒を感じていたのかも知れんぞ。いやいや、なんでもかでも、この場のことは、そういうことにしておもう。よいか者ども」

「こち徒の落度にやなりませんかね」

「有ていにいったら、みんな首だ。だから先を越して、夜明け次第に、まずこの地方の役署へ訴えを出しておく。よろしいか」

「へい、どんなふう」

「なにもかも、楊志の仕業と、彼奴におつかぶせてしまおうだ。黄泥岡の匪賊と気脈を通じ、ことば巧みに、われわれどもへ毒酒を飲ませ、あげくの果て生辰綱の宝はみな、横奪りして、消え失せましてござりますと。わかったらうな。どこで調べられても、口を合せて、押し通すのだぞ」

「わかりました。野郎には、遺恨骨髓、どうでも、そういうことにいたしましたよう」

「お前らは、生き証人、場合によつては、当地の役署に残されるかもしれん。しかし、わしは夜を日について、北京府に立ち帰り、かよう云々と、梁中書閣下にお告げする。当然、烈火のお憤りは知れたこと。ただちに、閣下から都の蔡大臣へ、お飛脚は飛ばし、また濟州奉行所へも、賊徒逮捕の厳令が下ッてくるに相違ない」

——とところで、一方の楊志はどうしたか。彼は自分の去った後において、こんな腹黒い相談が成っていたとは、夢にも知らない。

半ばまだ、ぼうとして、その夜は、どこをどう歩いたやら——。しかし、夜が明けてみれば、彼は黄泥岡を南へ降り、さらに道を南へと、あてどもなく歩いていった。

「さアて。しまった」

いったんは死ぬ気であったため、官の路銀、関手形、送り状、それらの一ト包みも、抛ったまま、身には一銭も持っていないかった。

「生きていれば、腹が減るものと、いま気がつくなんぞ、滑稽だな。ま、どうにかなるだろう。乞食まではしなくても」

部落へかかった。いよいよ腹の虫が泣きせびる。で、盲目

的に、

「ごめんよ」

とばかり、つい入ってしまったのだった。よくある田舎の飲屋である。愛相のいい女が出て来て註文を訊く。

肉を炒かせ、飯をあつらえた。小酒屋へ入って、飲まないのも悪いと考えてか、その間に、

「酒も少し……」

と、飲めるような顔でいった。女は世話女房ふうの女だが酌の仕方は馴れている。

飲めぬ口なので、青面獣が炎面獣のような火照りになりだした。肉を食い、飯をつめこみ、やおら野太刀を持ち直して腰をあげた。いささか、夜来の自失を取りもどし、足どり、眼づかい、ようやく本来の彼に立ち返っていた。

「あら、お客さん。お忘れじゃあ、困りますよ」

「なに。なにがよ」

「お勘定を、どうぞ」

「なるほど。そうだったな」

「ご冗談を」

「じつは、文無しだ。だが、おれも男だ、きつといつか来て払うよ」

「とんでもない、旅の人なぞに」

楊志は、耳もかささない。女は叫ぶ。そして、しつこく、どこまでもと、追いつがって来る姿を、

「うるさい」

と、一ト睨みに、ねめすえて、また、

「はははは」と、大声で独り笑った。

「おばさん、おばさん。この男一匹を、そうみじめに追い詰めるなよ。これでも、もとはしかるべき家柄に生まれ、ちよっぴり肩書などもあった者だよ。いまにきつと返しにくるから、今日のところは、貸しておきなよ」

すると、女の背後から、

「ふざけるな。うぬは、食い逃げの常習だろう。おおいっ、みんな来て、この浮浪人を、叩きのめせ」

と、若い男の声がした。

これが女の亭主かもしれない。刺叉を持って、火事場へでも出てきたような威勢である。彼の声にに応じて、近隣の朋輩だの百姓だの、いずれも得物を持ったのが、たちまち、楊志の前後をおっとり囲んで、口ぎたない罵声を浴びせかけた。

「おやおや。たいそう集まったぞ」

楊志の醉眼は、辺りを見て、事の大げさな展開に、われながら、あきれ顔だった。

「一杯の朝飯が、えらい騒ぎになったもんだな。これもまた、生きていく勘定のうちに、つい入れ忘れていたようだ。どれ、こうなったら仕方がない。体で勘定をつけてもらおうか」

二十三 二 俠、一 龍山下に出会い、その後の花和尚

魯智深がこと

「あっ、待て待て。——みんな後ろへ退いていろ」

女の亭主らしい男は、なに思ったか、急に大勢の村人をこう制して、相手の風態を、足の先から天っぺんまで見直して言った。

「おい、食い逃げの大将。——どこかでおめえは見たことがある気がするな」

「おう、名のつてもいいが」

「聞こうじゃねえか」

「名は騙ったことのねえ人間だ。あからさまにいうから聞け。青面獣の楊志という者だ」

「えっ、青面獣だって」

「おおさ、なんで急に変な面をするのか」

「……と、仰っしゃるなら、もしや以前は、開封東京の殿帥府にお勤めの」

「そうよ。その楊制使のなれの果てさ」

「やっ、こ、これはどうも……」と、男は手の刺叉も抛り出して「知らぬことじゃあございしましたが、なんとも、とんだご無礼をいたしました」

「おや、おや。変な風向きになったな」

と、楊志も古い以前の身素姓までいわれては、ちよつと赤面を覚えたのだろう。自然その真面目を見せずにいられたかった。

「して、そういうお前さんは？」

「てまえも、じつあ開封の町家の生まれで、親代々の肉問屋のせがれ、曹正という者でございます」

「そうかい。道理で田舎者にしちゃあ、齒切れのいい啖呵をきりなさるがと思つたよ」

「いやお恥かしゅう存じます。都にいたところは、近衛軍のご師範、林冲先生に弟子入りしてちよつぱり棒術の真似ごとなどとして、人さまから『操刀鬼の曹正』なんて綽名され、いい

気になっておりましたンでね。……その後、おやじに代つて山東へ商用に下り、資本をつかいはたして、つい極道へすべりこみ、今じゃあこんな百姓居酒屋の亭主。今あなたへ食つてかかったのが、つまりてまえの女房なんです」

「おや、そうだったのか。そいつアなんとも悪かつたな」

「ともかく、手前どもまでお引っ返しくださいませんか。このままじゃ女房にしても、後味が悪くつていけませんや」

曹正とその妻とが、楊志を誘つて、わが家の居酒屋へ入つてしまったので、騒ぎに集まつた近隣の者も、やがて何処ともなく潜んでしまった。

はからずも、楊志は、曹正夫婦の世話になつて、つい数日を、村酒屋の一間で過ごした。で、その間に、彼が黄泥岡で遭つた一代の大難をも、そして今は世に身のおき場もない窮地にあることなども、一切打ち明けていたのもいうまではあるまい。

「……ああ、そうでしたか。いや、値十萬貫もする『生辰綱』なんてものを、このガツガツと飢えている世に、北京から都まで、無事に送ろうなどという目企みからして、自体無理なはなしでござんすよ。まあ、ご心配なさいますな、どんなことをしても、夫婦でお匿い申しますから、当分はまあ、ここで養生でもなすつておいでなさいまし」

「ありがとう。だが、賊に奪われた落度は落度だし、北京の梁中書も、都の蔡大臣も、或いは、この楊志に、もっと悪い嫌疑をかけているかもしれん。なにしろ、天下のお尋ね者だ。——そのお尋ね者を匿つたといわれて、お宅へ禍いがかけては申しわけがない」

「ま。そんなご遠慮はなさらないで」

「いやいや、恩をアダで返したら、男が立たぬ。明日にでも、お別れしよう」

「といて、どこか行くあてがおありですか」

「こんな時にやあ、あの梁山泊が思い出されるがなあ」

「あそこなら、林冲先生もおいでになるとか」

「ところが、イヤな奴が一匹いる。王倫という頭領だ。小心者で邪推ぶかくて、ちとばかりな学識などをひけらかす野郎でな。どうも、そいつが気に食わんのだ」

「じゃあ、梁山泊を小っちゃくしたようなもんですが、二龍山の宝珠寺へ行ってみませんか」

「ふうむ、そんな恰好な隠れ家があるのか」

「そこにも、三、四百人は立て籠っておりましょう。山は青州の南です。頭の名を、金眼虎の鄧龍といいますかね」

楊志は、よろこんだ。――すでに黄泥岡で仮死状態にまで陥ちた毒も体から一掃されていた容子である。次の日、夫婦が情けの旅装いに、少々の路銀までもらって、青州へさして立っていった。

かくて、旅路の彼は、ほどなく一座の群を抜いた山を、青州の空の一角に仰いだ。「……これが、音に聞く二龍山だな」と、さらに麓へ迫り、その夕べ、どこか一夜の寝場所はないかと、吹き渡る松風の中を、あちこち歩き廻っていた。

すると、とある松の根がたから、突然、

「気をつけろッ。盲か、きさまは」

と、彼の背へ、どなりつけた者がある。

「おや、人間でもいたのか」

と、楊志は振り向いた。

見ると、むっくり起き上がった酒臭い大坊主が、いま楊志の足が、ふと躓いたらしい錫杖を拾い上げて大地にそれを突っ立てていた。

「やい、きりぎりす。なんとかいえ」

「なにっ」

「えらそうに、野太刀なぞ横たえやがって、なんで、いい気持でわが輩が寝ているところを、この大事な禅杖を足蹴にしなから澄ましていくか」

「枯れ木でも踏んだのかと思つたら、坊主の禅杖だったのか。天下の大道に、寝ている馬鹿もねえもんだ」

「ふざけるな。ここは二龍山の木戸の下、めったな人間が通る場所じゃない。あやまれ」

「あいにく、頭を下げるのは、大ッ嫌いな性分だ。ははん、この乞食坊主、難クセつけて、端た金でもセビろうっていうんだな」

「ほざいたな。乞食坊主かどうか、この錫杖を食らってみるろ」

とたんに、一颯の風が楊志のいるところをびゅっと通り抜けた。――もし寸前に身を跳び開いていなかったら、楊志の形はもうなかったにちがいない。

「――あッ」

と、楊志も腰の野太刀を噴射するように抜き払っていた。そしてすぐもう一度、

「……あっ？」と、驚きをあらたにしていた。

相手の大坊主が、せつなに、法衣の諸肌を脱ぎ、その肌一面の花の如き刺青が、ぼつと眼に映ったからだだった。

「やあ、花和尚。鉄杖を引け」

「怯んだか、腰抜け」

「そう毒づくなよ。まんざら、縁のない仲でもなかった」

「巧く言やがる。どこのどいつだ」

「おれもおぬしも、ともに開封東京にいた者同士よ。まずこの面の金印（額の刺青）を見てくれ。高俵一味の悪官僚のため、むじつの罪に貶されて、北京の卒に追いやられた楊志という者」

「じゃあなにか。都の天漢州橋へ、伝家の名刀を売りに立ち、あの雑鬧中で絡んできた無頼漢の牛二を、一刀両断にやッてのけた、当時評判だった、青面獣の楊志というのは」

「お。かくいう拙者だ。——そのころ、おぬしは郊外の大相国寺で、野菜畑の番人を勤めていた花和尚魯智深であろうかの」

「や、や。こいつア思いがけない出会いだ。どうして、わが輩をご存知か」

「その刺青は、都の名物と、三ツ児でさえも花和尚の名とも知っていたもの。……その花和尚がどうしてまた、こんなところに」

「いや話せば長いことになる。……どうだ、そこまで歩いてくれないか。あれに見える馬頭観音の祠に酒がおいてある。一つ聞いてもらおうし、そっちの身の上も聞きたいし……」

魯智深は先に歩きだした。折もよし、楊志も今夜の埒をさがしていたところ。夜もすがら、二人は祠の濡れ縁で語りあかした。

——以後の魯智深の境遇に、大変動がおこっていたのは、当然なはなし。

まず、彼から、そのいきさつを、こう語った。

さきに、兄弟の義を結んだ林冲が、あえなく滄州の大流刑地へ流されていったさい、彼が途中までついて行って、護送の端公（獄卒）を、逆に召使いのごとくこき使い、ついに彼らが林冲を途中で殺そうとした目的を遂げさせなかった始末は、やがて都へ帰った端公の口から、輪に輪をかけて、高大臣へ讒訴されていた。

で、たちどころに、「——花和尚召捕れ」の令がくだり、大相国寺の菜園は、数百の捕手で囲まれた。

この晩の騒動たるや大変だった。一箇の魯智深を逮捕するのに、開封東京の王城下は震駭して、都民も寝られなかったほどである。しかも当の智深は、菜園小屋を焼き払い、大相国寺の大屋根を踏み渡り、街中へ隠れ、また暁のころ、城門の警戒線に現われて、あまたの兵隊を手玉にとり、あッというまに鼓楼の藁から城壁を跳び渡って、それきりどこかへ姿を没してしまった。

「——それからまた、流浪の旅さ。より以前には、延安府で提轄（憲兵）をつとめていたころ、ふと持ち前の腕力をふるったのがもとで、五台山へ登って頭をまるめ、以後心を入れ代えますと、仏さまにも亡母にも誓ったけれど、どうもいけない。何がわが輩をこうさせるのか、元来、わが輩の持つ業悪なのか。おとなしく飲んで眠って、太平楽に構えていようと思うのだが、何かが来ては、それを突ツつき起してしまうらしい」

魯智深の述懐のあとで、楊志はいった。

「せっかく、まともに立ち返ろうとしている者を、突ツつき起す奴は、世の悪役人だ。いや、拙者の場合は、やや事情も違うが」

彼もまた、ここに至るまでの、逐一を打明けて、二龍山を目あてに落ちてきたわけを話した。

「そいつは、偶然な一致だったな」

と、智深は手を打って、

「じつはわが輩も、二龍山の宝珠寺こそ、世を忍ぶにはもってこいな場所と考え、山寨の頭、鄧龍に会わんものと、訪ねていった」

「じゃあもう、山寨にお住居なので」

「ところが、鄧龍のやつ、どうしても顔を見せん。ただ、麓で試合をしたうえ、おれに勝ったら、客分と敬まって、山寨へ迎えようと、手下に伝言させてきた。そこで、そいつを信じて降りて来たところが、卑怯にも、すぐ三つの砦門を鎖で戸閉してしまい、うんともすんともいってこない。……ぜひなく村から酒を買ってきて、ここで待つこと今日で四日目というわけだ。しかしどうやらこの勝負は、まんまと、こっちが一ぱい騙られたらしい」

「和尚は人がいい。口惜しくはないのか」

「なんとも業腹さ。そこでだ、三つの砦門を踏み潰してくれようかと、考えてみるが、こいつがまた、なんとも頑丈で、いくらわが輩にせよ、あんな関門とは取ツ組めん。また、取ツ組んでも馬鹿らしい」

「ならば、智をもつて、乗っ取るしかありませんまい。 生辰綱

の智恵取り”を食った拙者が、そんなことをいうのはおかしいが」

「思案があるなら聞かして欲しいな。このままじゃ、この麓から引き退がれん」

「いや、ここは一度引き退がって、いま拙者が話した居酒屋の曹正の家まで戻ろう。二龍山を教えたのも曹正だから、彼に計れば何かいい智恵が出るかもしれない」

花和尚を連れて、楊志は数日の後、また村の居酒屋曹正の店へ帰ってきた。

「三人寄れば文殊の智恵」

その晩、鼎座の小酒盛りの果てに、どういう妙計が成り立ったか、三名は声を合せて笑っていた。

二十四 目明し陣、五里霧中のこと。

次いで、刑事頭何濤の妻と弟の事

かつての名刹、二龍山の宝珠寺も、いまは賊の殿堂と化して、千僧の諷誦や梵鐘の声もなく、代りに、豹の皮をしいた榻の上に、赤鬼のごとき大男が昼寝していた。

「おや、なんだ！ 遠くの人声は。——もしや砦門のほうじゃねえか。やいっ、誰か見てこい」

眼をさまして、伽藍の奥から階段の上へ出てきた鄧龍は、虎のような口を開いて、そこらにいる手下の者へ、一ト声吠えた。

「おうっ」

と五、六人が起ちかけると、下の道から賊の小頭と数名が

登ってきて、

「おかしら、近郷の百姓どもが、こないだの大坊主をふん縛ッてまいりましたが、どうしたもんでございましょう」

と、階の下に並んで告げた。

「なんだと」——鄧龍は、意外な顔して「——おかしいじゃねえか、いつぞやの大坊主といえは、五台山を騒がせ、大相国寺の菜園を荒らし、おまけに開封東京から姿をくらましたお尋ね者の花和尚魯智深だろ。……だからていよくここも追ッ払ったが、しかし百姓なんぞの手に捕まるはずはねえ。よく肩に唾をつけて取次いでくるがいいや」

「ところがお頭、百姓どもに質してみると、まんざら嘘でもねえんです」

「どういふ仔細だ、嘘でもねえとは」

「野郎、ここを追い返されて、食うに困ったものとみえ、村の曹正っていう男のやっっている居酒屋へ、あれからのべつごねりに行っっていたらしいんで」

「それがどうしたてんだ」

「酔っ払っちゃあどこの家へも這入りこんで、宿を貸せの、小費いを出せの、文句をいえは、暴れ廻るし、いやもう手古ずり抜いたものとみえまさ。——そればかりか、梁山泊へ渡りをつけて、二龍山の鄧龍などは、いまにおれの手下に付けてみせる。なんて脅し文句を触れ歩いてたというから笑わせるじゃありませんか」

「野郎、そんな寝言をほざき廻ッていやがったのか」

「で、居酒屋の曹正と村名主が首を寄せて、一ト晩、あの大坊主を上座にすえ、ご機嫌をとると見せて、酒の中へ麻痺薬

をいれて飲ませたというんでさ。こいつア大出来じゃあござんせんか」

「ふむ。そいつアでかした。ふん縛ってきたのか」

「がんじ絡めに荒縄をかけたうえ、麻痺薬が醒めたところを、また寄ッてたかッて蹴るやら撲るやらしたもんでしよう。坊主頭も見られたさまじゃありません。そいつをまた、獵師が猪でもしよッ曳くように、大勢して、わいわい山まで持ってきたわけでござんす。自分たちの手で、息の根を止めるのは不気味だとみえ、お頭の鄧龍さまに、ご処分を願いますッて、口を揃えての嘆願なんで」

「そうか。いまの騒ぎはそれだったのか。よしッ、料理してやろう。これへ連れてこい。……が、待て待て、縄付きにしても嚴重に取り困んでこいよ」

やがてのこと。

石弩、針縄、逆茂木などで守られた柵門を三つも通って、一群の百姓と縄付きの大坊主が、大勢の賊に前後をかこまれて登って来た。——そして来るやいな、魯智深は、いきなり背を小突かれて、階の下に膝をついた。百姓たちも揃って、鄧龍の姿を仰いでぬかずいた。

「お頭でございますか。この大坊主のためにや、わしら村の者は、どんなに泣かされたか知れませんか。どうかご存分に、八ツ裂きにもしてやっておくんないまし」

「むむ。よくやった。きさまが居酒屋の曹正か」

「うんにや、ちげえますだ」と、その百姓は、クスンと鼻皺を寄せて、隣に控えていた、もひとりの百姓の顔を見た。これなん、百姓姿に化けた青面獣の楊志であったとは夢にも知

らず、鄧龍はジロとその巨眼を、曹正のほうへ移して。

「こらっ、なんだ、きさまの横に置いてある物は」

「はい、はい。これはこの坊主から奪り上げた禅杖と戒刀でございます」

「坊主の得物が。これへ持ってこい」

「へい、ただいま」

やっと持ち上げるような重さを見せながら、曹正はその二品を、階段の真下においた。いやそれはちょうど魯智深の鼻の先へ供えたようなものだった。

「たわけめ！」と、鄧龍はどなった。「——持って上がれと申すのだ。なんでそんなところにおくか」

すると、それまで首を垂れていた魯智深が、

「いや、そこでいい」

といったから、鄧龍は跳び上がった驚いた。

「なんだと、この曳かれ者が」

「鄧龍。おまえの首は、もう横を向く間もないぜ」

いったと思うと、魯智深は後ろに廻していた縄目をばらつと解いて、禅杖へ手を伸ばすやいな、猛吼一声、階を躍り上がった、のけ反る鄧龍の真眉間を打ちくだいていた。

縄目は偽結びにしてあったのだ。智深の行動とともに、楊志や曹正なども、慌てふためく賊の手下どもへ立ち向っていたのはいうまでもなく、また、彼らが手もなく懼伏してしまつたのは勿論だった。

ここに、宝珠寺の賊寨は、たちまちその主を代えてしまつた。——花和尚、青面獣の二人を新たな頭目として仰ぎ、四百の配下は、義を盟って、その晩、庫裡の酒をみな持ち出し

て、大盛宴を張つた。

曹正は、ほかの百姓をつれて、あくる日、村へ帰っていき、二龍山一帯は、その翠の色も里景色も、なんとなく革まった。弱者いじめな極悪非道は仲間掟としてしましめ、賊は賊でも、時の宋朝治下の紊れと闘う反骨と涙に生きる漢同士であろうと約したものである。

さて。——楊志の落ちつき先は、ひとまず二龍山宝珠寺と、ここに先途を見とどけることはできたが、なおまだ、黄泥岡事件の後始末は、なにも目鼻はついていない。

いや。この怪事件の詮議は、まだ五里霧中の序の口だ。——江州車七輛にのせて、風のごとく奪い去つた重宝十萬貫はどこへいったか。その犯人は何者か。天下騒然と、噂はみだれ飛んでいる。

「いまさら、なんとお詫びも、面目もございませんが、憎くき下郎は、お手飼いの青面獣楊志。——彼奴のために謀られて、途中、輸送に従っていた十六名の者、みな毒酒を呑まされて……かくのごとき始末にござりまする」

黄泥岡から、夜昼なしに、都へ舞い戻つた梁家の執事の謝は、下手人は、楊志と狎れ合いで、道に待ち伏せしていた七人の匪賊であると、主君の前に讒訴した。

仰天したのは梁中書である。

老いの涙を垂らしている謝執事の言に、嘘があろうとは思えない。怒髪天を衝く、とはまさにこれを耳にしたときの彼の形相と云つてよい。

「なに、なに。楊志が途中で賊と狎れ合い、きさまらに毒酒

をのませて、あの重宝を持ち逃げしたとな。……むむ忘恩の犬畜生め、よくもわしを裏切りおったな。きつと逮捕して、切り刻まずにおくべきや」

また、一方。

開封東京の大臣邸では、蔡大臣の誕生日となっても、梁家から祝賀品は、ついにその日になっても届かない。

「さあ、どうしたのか？」と、気が気でなく、朝野の賓客を集めた招宴も一こう榮えず、蔡大臣の不機嫌はなほだしいうちに終っていたが、やがてその夜も深更のこと。北京からの早飛脚だった。

「あつ!? また今年もか」

梁中書の詫び状と、また事態の顛末を報じてきた一状をも併せ読んで、蔡大臣は、身をつき抜ける憤怒とともに、自己の誕生日が、二年もつづいて、賊に呪われた不吉感に、身の毛をよだてた。

夜明けも待たず、彼は腹心の心ききたる家臣を呼んで、「黄泥岡は、濟州管下だな。すぐ濟州奉行所へ下つていけ。

そして下手人どもを召捕えるまでは、余の目付として、奉行所にとどまり、与力どもを督励しておれ」

と、厳命した。

目付役をうけたまわった家臣は、即夜、馬にムチを打って濟州へ急いだ。

来てみれば、土地の奉行所は、いまやごった返している。

それもそのはず、北京大名府からは、管領職の名をもって、矢つぎ早の犯人逮捕令、公文書、叱咤の伝令、また早馬と、夜も日もなく責め立てられていた折である。ところへ、

またもや、

「ただいま、蔡大臣閣下の御命により、直々のお目付役がお着きです」

と、報ぜられたので、奉行は、目を廻すどころではない。寝不足のうえにも畏怖を加えて、対座の間も、まったく錯乱のていだった。

「はるばるのご下向、なんとも恐れ入ります。偵察局、刑事部、目明しどもまで、全能力をあげて、はや事件の追求にかかり、必死を誓って、もし勤務に怠慢の者あらば、罷免、減俸などの罰則まで立てて事に当っておりますれば、日ならずして、目鼻もつくやと存じおります次第。……何とぞ、ここしばらくのご猶予をば」

「あいや、お奉行」と、目付は、きびしい顔をして言った。「——日ならずして、などという生ぬるさでは心もとな。蔡大臣が、この身を目付役として、差し向けられた一事でもおわかりだろう。黄泥岡に出没したと聞く七人の棗商人、一人の酒売り、また梁家の裏切り者、青面獸楊志。それらの悪徒を、一人のこらず、十日以内に、縛め捕って、東京へ押送せいとの厳達でおざるぞ」

「えっ。十日のご期限ですと」

「万が一にも、十日を過ぎるときは、お気のどくだが、お奉行自体に、沙門島（流刑の孤島）までお出かけ願う仕儀と相成るかもしれん。もとより此方もまた、のんびんくらりと、手ぶらで都へ帰る面もない。どの道、あなたと生死はともにする気でまいったから、左様ご承知おききたい」

奉行は青くなつた。

それ以前とて、やってはいたが、さあこうなると、一刻が気が気でない。

「刑事部屋の室長、何濤を呼べ」

即刻、役室へ移って、彼は自分にかかった重いものを、部下の精鋭に押しつけた。

「何濤。何をしておるんだ、毎日なにを」

「お奉行。お奉行には手前どもの働きが、まだ鈍いとしても仰っしゃるんですか」

「口ごたえいたすな。そのほう自身とて、寸刻たりとも、刑事部屋で悠長そうな顔していられる場合ではあるまいが」

「冗談いっちゃあ困ります。配下の目明し何百人を、夜昼なく、蜘蛛手に分けて、犯人のホシを嗅ぎ歩かせているんです。そのうえ刑事頭の自分がただ眼いろを変えて、ほっつき歩いても始まりますまい。こう腕ぐみに顔を埋めて、苦心しているのが、おわかりなののか」

「だまれ。それくらいな経験は、わが輩も舐めておる。進士の試験を通して、一郡の奉行となるまでには、あらゆる難に当り、なまやさしいことではなかった。どうでも、十日以内に、犯人全部を挙げてみせろ」

「そいつあご無理だ。神わざじゃあるめえし」

「いや是が非でも、蔡大臣のご厳命だ。お目付も来ておられる。もし、そのほうが十日以内に、犯人を検挙しえぬなら、わしの奉行職も減だが、きさまもただは措かんぞ。まず遠島だ」

「べら棒な。いくら大臣のお目付が督励にきたからって」

「そう申すのは、なおまだ、必死の捜査が足らん証拠だ。よ

しっ、この上命が、ただならんものであることを、その肉体に刻んで、寝る間も、忘れることのないようにしてつかわす。書記！ 刺青職人をこれへ呼びべい」

奉行もいささか逆上気味だ。——左右に命じて、やにわに、何濤の両腕を捉えさせ、その額に「〇州へ流罪」と、一字空けの流人彫を刺れさせたのだ。まるで、値段未定の半罪人の札を貼りつけたようなものである。

「才才痛え。永年、甘い汁を吸っていた報いか知らねえが、こうなると、奉行所勤めも辛いもんだな」

額の血を抑えながら、何濤は刑事頭の一室へ下がってきた。ふと見ると、黄昏れかけた向う側の目明し溜りでは、連日の奔走で、草臥れてはいるのだろうが、わいわいと馬鹿話に笑いどよめいている。何濤は、むかつとして、そのの扉口から呶鳴りつけた。

「やい、てめえたちはみんな本職を罷めて隠居の身分にでもなったのか」

「オヤ、室長。お顔をどうなすったんですえ？」

「見やがれ、おれの面体を」

「あつ、たいへんだ」

「他人事みていにいうない。いいか、十日以内に、黄泥岡の一件のかたをつけなけりゃあ、おれは遠島と言ひ渡されたんだ。なんでえ、てめえたちの暢気さは」

「へい、申しわけございません。といったって、こち徒も、足を棒にして、そこらじゅうを、クルクル嗅ぎ歩いちゃいるんです」

「それでゲラゲラ笑っていられるのか。べら棒め、真剣真味に苦勞してるなら、草の根を分けても、野の末、山の隅々まで、狩り立ててみる、常日ごろにや、やれ飲ませてくれの、家に病人があるから助けてくれのと、そんな時ばかり、人に男泣きを見せやがってよ」

「おいおいみんな。ひと休みしたら、また手分けして出かけようぜ。室長の額を見たら、ぐッと応えてしまったよ。今夜は一つ夜どおしだ。仕方がねえや、蟋蟀になった気で、当分の草の根を分けて歩くんだな」

——そんな声を背に聞き流して、何濤は気分が冴えないまま、その晩は、家へ帰ってしまった。

彼の妻は、晩酌の膳にも浮かない良人を見て、

「どうしたのよ、あなた。……そのお顔の刺青はさ」

「例の一件さ。刑事頭の女房が、そんなこと、クドクド訊かねえでもわからねえのか」

「と、察してはいますけれどさ。なんぼなんでも」

「是が非でも、十日以内に挙げろッてんだ。しかもまだ、下人どものホシは五里霧中、なあ女房、わが家の灯を、こうして見るのも、あと十日限りかも知れねえぜ」

「よしておくれよ、心ぼそい」

「だって仕方があるめえじゃねえか。お奉行だけの一量見でもなし、こんどのことあ、蔡大臣直々のご敵達ときていやがる。過ったなア、俺も一生の道を」

「……おや、誰か玄関へ。お客かしら？」

「なアに何清だろ。……弟の何清が、また博奕で摺って、不景気な面を見せにきたにちげえねえ。今夜は、俺は会いたく

ねえな」

「よござんす。わたしが、お酒でも飲ませて、上手に帰しておきますから」

廊を駆け出していった先で、彼女の愛相がいつもより弾んで聞えた。何濤の弟何清は訪ねてきた兄が風邪気味だと聞かされて、ぜひなく、嫂ひとりを相手に、美味くもなさそうに、出された杯を渋々手に取りはじめた。

「姉さん。いやに今夜あ、陰気じゃねえか。どうも姉さんの顔まで湿ッぽいや」

「だって清さん。おまえだって、ご存知のはずだろうに」

「なにがよ」

「うちの良人の心配事さ。あれ、あんな顔してるわ。兄弟効いのないおひとね」

「だって、知らねえもの。なに不自由なしの刑事頭でよ、しよっちゅう、裏口からは甘い収入があるし、世間さまにはこわ持てされ、そのうえ姉さんみてえな水もしたたる美人を女房に持ち、いったい何の心配事があるのか、おれには不思議さ」

「おふぎけでないよ。ちゃんと、ほんとは知ってるくせに。

黄泥岡の一件を、清さんが耳にしていはいはずないわ」

「あ。あれかあ」

「それごろんな」

「はははは」

「いやな笑い方をするわねえ。いい気味だとも思っていないのかえ」

「邪慳なことを言いなさんな。おれだって、兄貴あつての弟

だ。だがネ、兄貴も悪い弟を持ったもんで、ときどき、風邪も引きたくなるだろうな」

「まあ、へんだよ今夜の清さんは。なんでそんな嫌味をいうのさ」

「イヤしみじみと、時にヤア懺悔がしたくなるのさ。こうして、姉さんの、心ならずものお酌なんかしていただくと、なおさらのことだ」

「もう、してやらないからいい！ 変に絡んでばかりきてさ。」

——今日もお役署には、蔡大臣のお目付とかが来て、十日以内に挙げなければ、お奉行も臈、うちの良人も遠島だなんて、顔に金印（いれずみ）まで打たれて帰ってきたんだよ。お酒はいいが、悪ふざけは、やめてくださいよ」

「へえ、そいつあ初耳だな。そんなことなら、もちツと早く来れやよかつたが、またやくざな弟めが、いつものでんで、銭でもセビりにきやがったかと思われるのも辛いと思って、つい鬨を高くしていたが」

「ちよつと待つてよ。清さん、いまいったのは、何のこと？」

「なあに。こんなやくざな弟野郎でも、ひよんなことから、ひよんな役にも立つもんだということさ」

「じれつたいねえ、清さんてば。……もしやおまえ、黄泥岡の一件のことで、なにか、心当りでも持つてるんじゃないの」「まあねえ。どうせ兄貴があてにしているなあ、日ごろよく小費い銭を撒いている組下の目明しだろうから」

「だから、話せないとお言いなのかえ」

「でもないがね。兄貴が、よくよくのツびきならぬ破目とでもなりやあ、そりや俺だって、見ちゃいなさ。……だが、

兄貴は腕ツこきの目明し頭だ。てめえなぞ、出る幕じゃねえよと、鼻ツ先であしらわれるかも知れねえからな。……いや姉さん、どうもご馳走さまになりましたね、またそのうちに」「あつ、待つてよ。そう、せかせか帰らなくてもいいじゃないの。いま、うちの良人も呼んでくるからさ」

「だって、お風邪なんでしょう。へへへへ」

「あなた。あなた！」

妻に呼び立てられるまでもなく、何濤はさつきから、部屋境の廊で、耳をすましていたのである。それへ顔を見せるやいな、何濤の手を握りしめて言った。

「悪かった。まあ、気を悪くしないで、もう一杯飲み直してくれ」

「おう、兄さんか。酒はたくさんだよ。なるほど、ひどい顔になんなすったな」

「日ごろはつい、おめえの身持ちを案じるあまり、つれない顔も見せたらうが、この兄が一生の頼みだ。知っているなら打明けてくれ」

「ふん。黄泥岡の小泥棒のことですかい」

「小泥棒！ おめえ勘ちがいしちゃあいけねえぜ」

「だつてさ、兄さん。あんな者あ、知れきっていらあ」

「げツ。ほんとか」

何濤は、奥へ馳けこんで、手文庫の内から、銀子十両を持つてきて、弟の膳のそばへ、ぽんと置いた。

「少ないが、当座の褒美だ」

「兄さん、すまねえが、おれはツムジ曲がりだ。こう横を向くぜ」

「どうしてだ、弟。不足なのか」

「よしてくれ、鼻薬なんぞ嗅がされると、なお言いにくいや。やくざな弟、ろくでなしな弟。そいつが、たんだ一ぺん。こ

う兄貴に向って、ちよっぴり威張った顔がしてられるんだ。

こいつあ、銭金に代えられねえ」

「じゃあ、どうしたら、うんというんだ」

「ああいい気分だ。兄貴、嫂、二人を並べて、こう反ツくり返っている味は」

「じらすなよ、金はお上が出すご褒美。それでも不足というんなら、そうだ、頭を下げる。清、この兄貴が、頭をさげて、

こう頼む」

「むむ！ 教えてもいい」

「ありがたい。どこだ？ 賊の巢は」

「ここだよ」

何清は、自分のふところを、ほんと叩いた。

「ぬすツとどもは、みんな一ト束に、おれの鼻紙挟みに収まっている。逃げツこはねえ、安心しなよ、兄さん」

「えっ、おめえの鼻紙挟みだと」

「手品師じゃねえが、まずご一覽に入れやしよう、たねも仕掛けもございませんとね。……証拠はこれさ」

両手を深く懐に差し入れて、何清は、鼻紙挟みを取り出した。薄ベツたい革財布とともに、一冊の手帖が折畳んである。その手帖だけを、掌の上に残して。

「さて、これにはちよっと、いわく来歴の説明がなくツちゃおわかりになりますまいて。姉さん、その窓も後ろの扉も、みんな閉めておくんなさいな。壁にも耳、灯取り虫にも油断

はならねえ。……よござんすかい、じつアねえ兄さん、こういうわけだ」

「……もう二た月ほど前。あれやあ六月の半頃ですがね」

何清は、声を沈めて語り出した。

「ごぞんじの安楽村に、王っていう安宿があります。宿屋錠のご定法で、毎晩の泊り客には、行く先、職業、住所、年齢をちゃんと書かせる。——戸を卸して寝る時刻にや、そいつを帳場が書き写し、七日目ごとに、村名主に届けに行く。名主はまた、そいつを纏めて、月に一回、お役署へ届け出る。……ま、兄さんにや、こんな話は余計ごとだが、そういった手順でござんしょう」

「む、む」

「ところが、宿屋の王のおやじは、夏の初めごろから、病気で寝こんでしまつたし、若い雇人たちも、字盲ばかりときていやがる。……そんなところへ、ちようど安楽村の賭場で、すっからかんになったあつしが、銭無しだったが、ままよと思つて、泊りこんだものだ。……よござんすか。さア立つ日となつたが、払いはできねえや。そこでふてぶてしく腹を割つて、またの日に来て払うぜ、てえと、機嫌よく二つ返事さ。おかみが出てきて、その代りに、半月ばかり帳場の帳付けをしてくださいませんか。そのうちには、亭主も起きられましようからという相談。物好きたア思つたが、面白半分、つい二十日ほど、安宿の手代になって、泊り客の送り迎えをやっていたんでございますよ」

「へえ、おめえがねえ」

「するッてえと、忘れもしねえ、あれは七月に入ったばかりのこと」

「え。七月三日？」

「そうです。七人の棗売りが七輛の江州車（手押し車）を揃えて、ぞろぞろと、夕方の店さきに草鞋を脱いだじやございませんか」

「……………」

何濤の喉の肉が、ごくくと鳴った。

「——あつと、あつしゃあ、とたんにその中の一人に眼をみはった。いや、眼のやりばを反らして、いっそう旅籠の手代らしく、気をつけましたよ。というなア、七人のうちでも、どうやら頭だった無口な男に、見覚えがあつたんでさ。ちよつと思ひ出せなかつたが、寝てからよく考えてみると、もう数年も前に、やくざ仲間の者に連れられて、頼って行った先がある。——なんと、その時ちらと見た、その主人にちげえねえ。 郵城県は東溪村の大名主、たしか晁蓋という男でさあね」

「ふウむ、そして」

「はてな。夕方、なんと宿帳につけたかしらと、翌朝、念入りに調べてみると、七人みんなが、どれも李姓だ。李春、李長、李達、李周といったあんばいに。……それで国もとも濠州の同村、行く先は東京、商売は棗売り。つまり東京へ売り捌きに行くのである。……おかしいなあ、名主が交じって、とは思ったが、その朝はまア、ご機嫌ようと見送ったのさ。そして一日たった次の日だ、やくざの仲間が誘いにきて、行かねえかつてんで、ふところは淋しいが、村のばくち場を覗きに

いき、夜になったら、取られたやつと二人で、ぼんやり帰ってくる、村の三ツ又道を、妙な野郎が、二つの空桶を担いで素っ飛んできやがった」

「なるほど」

「連れの男が、オヤ今のは白日鼠の白勝らしい。おういっ白兄哥って、呼んだけれど、返事もしなけりやあ、振り返りもせず消えちまった。なんのこつた、人違いだぜと、こつちも笑って、そこでは連れの男と何気なく別れて帰って来たが、さてその次の日、黄泥岡のあの一件が、安楽村へも、ばつと聞えてきたじやあございませんか。——七人の棗売りと、一人の酒売りが、うまく狂言をかいて、あの道へさしかかった十七名の生辰綱輸送の兵に毒酒を食らわせて、十万貫の重宝を、一瞬に掻ッ攫つていってしまったという騒ぎ。いやもう、村じゅう寄ると触ると、四、五日はその話で夢中でさ。……ははアんと、こつちはその間に、宿帳の名前をズラと自分の手控えに書き写しておいたという次第でございますよ。さ、兄さん、証拠のこれは進上する。どうか手柄にしてください」

「おお、かたじけない。貰っておくぜ」

何濤は、狂喜した。すぐ何清を連れて、奉行所へ馳けつけていく。ただちに一室を閉じて、奉行との密談しばらく、二人はまたすぐ腕ききの捕手十名ほどを選びすぐつて、安楽村へ急行した。

村へついたのは、すでに夜半過ぎだ。遊び人白日鼠の家は、岡ツ引きには、日ごろからもう眼の中のものだった。トントントントンと叩いてみる。寝巻き姿の女房が顔を出す。あつと、逃げ込むのを追い込んで、

「白日鼠。早ええもんだな。もう黄泥岡から、お迎えときたぜ」

何濤が、一喝くられると、白日鼠は、夜具の中から転がりだして、

「だ、だん那。なにをとんでもねえこと仰っしゃって。あっしゃあ、ごらんの通り、この夏の暑気あたりで、うんうん、高い熱で唸って寝ている始末じゃござんせんか」

「そうかい。病人ならなおのこと。悪足掻きはしねえがいいぞ。お手当をしてやるから、素直にお縄をいただいで見物していろ」

たちまち、女房と二人を、後ろ手に縛しあげ、天井裏、床下と、手分けして家探しにかかる。贓品は彼の寝台の下、地下数尺の下から掘り出された。一つかみほどの、金銀宝石の入った麻袋だ。

がたがた骨慄いしている女房と、満面蒼白な白日鼠に目隠しをさせ、馬の背に乗せて引返した。奉行所の門に入って、白洲にひきすえると、夜は明けていた。——しかし二人とも、頑強に口は開かない。

一応、休息に入って、本格的な白洲開きになる。拷問は、半日もつづいた。女房のほうは耐えきれない。で、良人の白日鼠も、ついに口を割って、白状におよんだ。

「もう、こうなっちゃ意地も約束もございませぬ。申しあげます。へい……一件の主謀者は、東溪村の名主、晁蓋に相違ございませぬ。てまえは、むかしお世話になった縁故から、酒売りの一卜役を頼まれて、筋書どおりに、働いたまでございます。ほかのことも、ほかの六人の衆も、いったい誰と

誰なのやら、いっこうに存じませぬので」

「よしっ、それだけで充分だ、あとの六人なぞ、芋蔓でしょッ曳ける」

何濤は、奉行の手から一札の公文を授けられた。管轄ちがいの他県へ出るので、役署と役署の交渉が要る。

とって、そんな手つづきに手間どって、こっちの手配が漏れたら取り返しはつかぬ。——この間、何濤の苦心たるや容易ではなからう。それに、なお、犯人の面通し（容貌の鑑定）のためには、さきに生辰綱輸送の行に加わり、その後、証人として奉行所に居残っていた強力ごうりきの兵三名を現地へ同伴して行くなどの用意もあった。

「まずは、おれ一人で、鄆城つんじょうけん県へ急ぎ、県の役署と万端を打合せておく。大勢の捕手組その他は、面通しの者を帯同して、後からこい」

何濤は、部下にこう言い残して、その夜半にはもう単身で、馬を県外に飛ばしていた。

注

母の真ん中の縦棒が下につきぬけたもの ↓ 母
てへん十弁 ↓ 拵